

博士学位論文

江戸長唄の基礎的研究

平成二十六年六月

総合研究大学院大学文化科学研究科

国際日本研究専攻

漆 崎 ま り

〈目次〉

序章

一 本研究のテーマの前提

1

二 筆者のテーマとその先行研究について

2

三 筆者のテーマに対するアプローチの方法

6

凡例

9

第一章 江戸版長唄正本の書誌的研究

10

第一節 江戸版長唄正本に見る版行形態の変化

―享保期―寛政三年の中村座の場合―

11

はじめに

11

一 考察の対象とする異版について

13

二 比較方法

19

(一) 長唄正本の初期の版元

20

(二) 本屋儀兵衛版・無刊記版と上演時正本の本文の関係

21

(三) 胡麻点と文字譜

26

(四) 内題下の述者署名

28

(五) 筆耕

29

三 表紙の比較

29

(一) 表紙の流用関係

29

(二)大名題と座名の記載の仕方

四 本屋儀兵衛との相版化

五 沢村屋と版行形態の変化

まとめ

第二節 江戸版長唄正本に見る版行形態の変化

―享保期～寛政期の市村座の場合―

はじめに

一 市村座の長唄正本の版行形態―書誌データのまとめ―

(一)市村座上演の長唄の薄物の特徴

(二)演劇書における市村座の専属版元

(三)泉屋権四郎について

(四)市村座の長唄正本と異版

(五)泉屋版と本屋儀兵衛版・無刊記版の本文の比較

(i)胡麻点・文字譜について

(ii)内題下の作者、述者署名について

(iii)本文末の筆耕印について

(六)正本と本屋儀兵衛版・無刊記版の表紙の関係

(i)大名題と座名の表記について

(ii)絵師名について

(七)本屋儀兵衛との相版について

30 33 36 39 41 41 41 41 43 45 46 47 49 49 50 50 51 51 52

二 長唄正本における株板化

(一) 版元の交代

(二) 市村座版元としての市村茂兵衛の出現

(三) 寛政六年十一月桐座

(四) 寛政十年十一月の市村座の再々興

まとめ

53 53 53 56 59 59 59

第三節 江戸版長唄正本に見る版行形態の変化

はじめに
— 享保期・享和期の森田座・河原崎座の場合 —

一 演劇書における森田座・河原崎座の専属版元の記述

二 森田座・河原崎座の長唄の薄物

三 正本の流用について

(一) 正本と本屋儀兵衛版・無刊記版の本文の関係

(二) 正本と本屋儀兵衛版・無刊記版の表紙の関係

四 本屋儀兵衛との相版

五 小川半助による再版

まとめ

62 64 65 68 69 71 72 72 75

第二章 江戸歌舞伎における長唄の形成

78

第一節 長唄正本の刊行と長唄の形成

はじめに

一 長唄の形成を考える上での問題点

二 筆者の視点

三 坂田兵四郎の出自

四 坂田兵四郎と長唄正本

五 顔見世番付の肩書きについての補足事項

まとめ

表 1 長唄正本の初期の伝本（寛延期以前の作品について）

中村座

市村座

森田座・河原崎座

第二節 小歌から長唄への展開

はじめに

一 小歌方と小歌について

二 絵入狂言本と音曲正本の関係

三 上方版絵入狂言本の小歌詞章

四 上方版小歌正本としての一枚摺について

五 役者の歌う正本

まとめ

115 112 109 106 104 102 102 102 101 98 96 96 93 92 85 83 82 80 79 79

表 2	上方版・絵入狂言本における小歌・浄瑠璃の詞章	118
表 3	役者の歌・演奏による音曲正本	122

第三章 江戸版長唄正本における株板化の動き

―中村座を事例として―

はじめに

- 一 地本としての長唄の薄物
 - 二 正本と偽版
 - 三 相版化
 - 四 版元の交代
 - 五 「後版」グループ
 - 六 株版化の要因
 - 七 天保期の芝居町移転後
- まとめ

終章

- 本論各章のまとめと総括
- 今後の展望
- あとがき
- 〈初出〉

167 166 165 156 155

151 148 145 143 138 137 129 127 127 126

122 118

掲載図版一覧

中村座・都座	表と所蔵一覧	表 1	表 2	表 3	表 4	表 5	表 6	表 7	後版表	所蔵一覧	市村座・桐座	表と所蔵一覧	表 1	表 2	所蔵一覧	森田座・河原崎座	表と所蔵一覧	表 1	表 2	所蔵一覧
--------	--------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	--------	--------	-----	-----	------	----------	--------	-----	-----	------

236 233 232 227 226 219 211 199 198 191 190 184 180 179 178 177 174 169 168

序 章

一 本研究のテーマの前提

筆者の研究の目的は、江戸歌舞伎における長唄所作事の歴史を音曲の面から捉えることにある。この研究を進めるために長唄正本を中心資料に選び、伝本の調査を行ってきた。そして、もう一つの目的は、長唄正本を歌舞伎の音曲正本全体の歴史的展開の中に位置付けることである。この二つは不可分の関係にあると筆者は考える。本研究はこれらの基礎となる、最初の段階のものである。

江戸歌舞伎では所作事に新作が出ると、その音曲の詞章を載せた薄物と呼ばれる小冊子が芝居茶屋や絵草紙屋から頒布されていた。長唄の薄物は座の専属版元から版行され、浄瑠璃の薄物の場合は基本的に太夫や家元と専属関係を結ぶ版元から版行された。

新作の上演時に座や太夫・家元の専属版元から出ている薄物を、歌舞伎の音曲正本と筆者は狭義に捉えている。というのは、実際に伝本の調査を行って見ると、特に長唄の薄物には座の専属版元以外の版が多数存在しており、それらは正本と版行の経緯が異なると見られ、原作の意図の反映という点でも資料価値が一樣ではないと考えられるからだ。

歌舞伎作者であった三升屋二三治が著した『賀久屋寿々免』（弘化二年成立）・『作者年中行事』（嘉永元年成立）・『芝居秘伝集』（嘉永七年以降成立）には、正本が狂言作者の台帳の清書稿であると記されている。ここから所作事の部分を書抜いて版行したものが、音曲正本

と基本的には位置付けられよう。原作を忠実に表すのは、座や太夫・家元から直接稿本を得る専属版元である。

しかし、専属版元に限定せず、薄物の全体を正本と捉える見解もある。その場合は上演時の初版だけではなく、座の専属ではない版元の再版本や稽古本目的の版、また、絵表紙・字表紙など体裁の異なる本も入り、薄物の形態をとる歌舞伎の音曲本のすべてが含まれる。本研究ではこれを薄物と称し、正本の語は先に述べた狭義の意味で用いることとする。ただし、正本と薄物を対立させて用いるときに、薄物に正本を除いた意味合いを持たせている場合があることを断っておく。

二 筆者のテーマとその先行研究について

「江戸長唄の基礎的研究」と題する本研究では、次の三つのテーマにより章を立てている。

第一章 江戸版長唄正本の書誌的研究

第二章 江戸歌舞伎における長唄の形成

第三章 江戸版長唄正本における株板化の動き

— 中村座を事例として —

筆者は江戸歌舞伎で上演されたせりふや音曲を載せた薄物の伝本調査を二十年に亘り行ってきた。本研究では長唄を対象とし、第一章では伝本調査から得た書誌データをまずまとめようとする。

豊後系浄瑠璃では初版は共紙表紙の薄物の形態を取るが、初版が済

むとその後には青表紙と呼ばれる体裁で版行される。これに対し、長唄の場合は再版以後も共紙表紙の体裁をとり続け、表紙の大名題や役者名・演奏者名・役者絵といった記載内容もそのまま初版のものが受け継がれる。したがって、上演時正本と版面のよく似た異版が多く存在するのである。諸本の整理に当たっては上演時正本を選ぶ根拠を明らかにする必要がある。享保後期・寛政・享和期に上演された長唄作品の薄物について伝本の比較作業を行いながら、その版行上の特徴を三座に共通する点・三座に独自な点に分けてまとめることから始めている。

第二章では、第一章の書誌研究から得られた初版本のデータを基にして、これを長唄所作事の歴史的研究へ進めようとする。長唄所作事の形成を取り上げ、これを舞踊ではなく音曲の面から捉えようと試みる。

第三章においては、第一章でまとめた長唄の薄物の書誌データをさらに出版研究へと展開させ、長唄正本における版權の確立過程について考察する。

以下は、各章ごとに先行研究について簡単に触れる。

「第一章 江戸版長唄正本の書誌的研究」の先行研究

江戸歌舞伎では、名題役者の長せりふやつらねが人気を博し、その一方では、音曲を伴った花形役者の所作事もまた観客を引きつける一

つの見せ場となっていた。そのため、新作が出る度にせりふや音曲の詞章は役者名や演奏者名などの上演情報を添えた小冊子となり、宣伝用、あるいは観劇用に芝居茶屋や芝居町の絵草紙店から配られていた。せりふ正本・つらね正本・役者に対する誉め言葉を載せた正本、浄瑠璃正本・長唄正本などである。これらは、通常三丁程度の本文に絵入りの共紙表紙が付いた同じ体裁をとることから薄物とも呼ばれていた。

せりふやつらね、長唄は、座に属する役者や唄方・三味線方が演じるものであるから、それらの新作（すなわち初版本）は座の専属版元から版行された。河東節や豊後系浄瑠璃では、初版は座の専属版元から出されるが、特に豊後系浄瑠璃の場合は初版が済むと青表紙と呼ばれる稽古本の体裁に変わり、家元と提携した版元から版行される。ただし、初版から太夫や家元の専属版元が出す場合も見られ、こうした流動的な状態には座と家元の力関係が反映されていると考えられる。本研究は長唄を対象としているため、以下の記述は長唄について進めていく。

長唄正本や歌舞伎番付を実見調査し、その成果を年表のかたちで最初に表したのが、大正三年に刊行された東京音楽学校編『近世邦楽年表 江戸長唄附大薩摩浄瑠璃の部』である。また、長唄正本の複製書としては、大正六年の『長唄正本集』巻之一（川上邦基編、演劇図書同好会）があり、昭和六年には『古板長唄八種』（稀書複製会編、米山堂）、その後は木村捨三・山本桂一郎・和田畠之の編纂による『長

唄原本集成』(長唄原本集成刊行会編・発行、第一〜七巻と第十二巻・第十四巻)が昭和十一年から十二年(一九三六〜一九三七)にかけて刊行されている。『長唄原本集成』は享保十六年(一七三一)上演の『無間の鐘』から安永三年(一七七四)の『めりやす 思寝』までの約百三十作品の図版を原寸に近いかたちで収め、発行部数三百と稀少ながら、大正・昭和の代表的な囃子方である六代目六合新三郎の収集した長唄正本のコレクション(現・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館安田文庫旧蔵本)や、加賀文庫(現・東京都立中央図書館蔵)、松和文庫(現・明治大学図書館蔵)、古梓堂文庫蔵本(現在不明)を底本に用いて解題を加えている。また、守随憲治・秋葉芳美編『歌舞伎図説』(万葉閣、一九三一年)は、歌舞伎資料全体の中に音曲正本を位置付け、写真版を載せて解題を付している。近年では、赤間亮編『江戸の演劇書 歌舞伎篇』(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、一九九一年)が「せりふ・音曲正本の発生と展開」の項目を持ち、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館の所蔵する貴重書を載せて解題を付す。また、黒木文庫特別展実行委員会著・ロバート・キャンベル編『江戸の声―黒木文庫でみる音楽と演劇の世界―』(東京大学大学院総合文化研究科教養学部美術博物館、二〇〇六年)は東京大学教養学部黒木文庫と国立音楽大学附属図書館竹内文庫の貴重な音曲関係資料を図版掲載し、解題を付している。

これらの書は、長唄の主要作品を年代順に複製したり、歌舞伎資料、あるいは人形浄瑠璃をも含めた近世の劇場音楽の資料の中に長唄正本を位置付けているのだが、正本よりはるかに多く存在する再版本の存

在については殆ど触れていない。これらの書は上演時資料の掲載を目的とするため、再版本は正本(初版本)が伝存しない場合の代替物として扱っている。しかし、長唄の薄物の全体を把握する調査が徹底して行われてきていないのであるから、初版本の裏付けも不十分なままであると言えよう。

わずかに、岸辺成雄「京鹿子娘道成寺正本考」(『東洋音楽研究』第三十九・四十合併号、一九七六年)が、異版の存在に着目した論考であり、また、赤間亮『江戸の演劇書 歌舞伎篇』(前出書)の解説に上演後の稽古本の存在が指摘されているのみである。昭和五十六年(一九八一)に始まった長唄正本研究会による「長唄正本研究」(『邦楽と舞踊』、その後月刊誌『邦楽の友』に連載)では、個人が所蔵する薄物から新資料の発掘を行い、必要に応じて再版本も視野に入れて、作品研究を進めてきている。吉野雪子「長唄正本とその板元の動向についての一考察」(『音楽研究所年報』第八集、国立音楽大学音楽研究所、一九八九年)、同「長唄正本とその版元」(『演劇研究センタ―紀要』V、早稲田大学21世紀COEプログラム、二〇〇五年)は、国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫の薄物を中心に他の所蔵機関からも伝本の調査を補い、異版を視野に入れて長唄の薄物の版行システムを捉えた最初の論考となる。

「第二章 江戸歌舞伎における長唄の形成」の先行研究

江戸長唄の成立に関する通説は、『近世邦楽年表 江戸長唄附大薩摩浄瑠璃の部』（前出書）に掲載された江戸版顔見世番付の実見記録が基となつて作られている。その通説のあらましを以下に述べて見る。番付における「江戸長うた」の初見は、宝永元年（一七〇四）山村座の顔見世番付とされている。その頃の江戸の顔見世番付に記載される唄方の肩書きには「京長うた」・「大坂長うた」が混在しており、上方下りの唄方が多数出演していた。しかし、享保十二年（一七二七）以降は、江戸の顔見世番付における「長うた」の唄方の肩書きの地名が「江戸」で占められるようになる。つまり、長唄の唄方が江戸の出身者で占められるこの年をもつて江戸長唄の確立と見なすと言うのである。これは、吉川英史『日本音楽の歴史』（創元社、一九六五年）、町田佳声・植田隆之助『現代邦楽名鑑・長唄編』（邦楽と舞踊社、一九六六年）、竹内道敬「劇場音楽・長唄」（『講座日本の演劇4 近世の演劇』勉誠社、一九九五年）において指摘されている。

顔見世番付では、役者の場合は立役・若女方（形）・道外方などのように役柄が名前の上に付けて記される。一方、座に抱えられる演奏者は、長うた・小うた・三味線・大鼓・小鼓・笛などが名前の上に付くのだが、これを例えば長唄を演奏する役と捉えて良いであろうか。このように江戸版の顔見世番付の肩書きの記載に基づいて作られている従来の長唄の確立論を、筆者は長唄正本の側から捉え直して見ようと試みる。

江戸歌舞伎において、所作事に用いられる長唄がどのように形成されてきたのか、この問題を考察するには筆者は長唄正本を中心資料に

するべきと考える。長唄正本は上演情報とその所作事の内容を伝える資料であるからだ。ゆえに、初期の長唄の薄物を博搜し、これに資料的吟味を加えて長唄正本を選定し、番付類や役者評判記・絵入狂言本・歌謡集などの周辺資料と突き合わせる手順をとる。

また、長唄の一つの源流として上方の小歌にも着目する。この考察を進めるに当たっては先行研究として次の論考を参考にする。

松崎仁「歌舞伎における歌謡 万治・寛文・元禄期」「歌舞伎における歌謡 宝永・正徳・享保期」（『森話社、二〇〇四年』（再録））。

武井協三「野郎歌舞伎の小歌芸」（『若衆歌舞伎・野郎歌舞伎の研究』八木書店、二〇〇〇年）。

赤間亮『江戸の演劇書 歌舞伎篇』（八木書店、二〇〇三年）。

和田修「江戸板絵入狂言本における浄るり詞章」（『演劇学』第二十八号、一九八七年）。

「第三章 江戸版長唄正本における株板化の動き——中村座を事例として——」の先行研究

第一章で三座別にまとめた書誌データにより、長唄の薄物は三座でほぼ同様の版行の態勢を取っていることがわかってきた。薄物の版元研究については、4頁下段に吉野雪子による二つの論考を掲出している。これらの先行研究を踏まえつつも、筆者の場合は長唄の薄物を江戸の草紙（地本）の一品目と捉える立場を取っている点に違いがある。

各所蔵機関において自身で伝本の調査を進め、長唄正本が継続的に版行されている中に起きている変化を観察し、これを出版令との関係で捉え、地本における版權の確立過程の一例として検討しようとする。これについては、佐藤悟「地本論」(『読本研究新集』第一集所収、翰林書房、一九九八年)から多くの示唆を受けている。

三 筆者のテーマに対するアプローチの方法

冒頭に掲げた筆者のテーマに対するアプローチの方法は、先行研究のところですでに触れてきているので、重複する部分もあるが、以下に各章のテーマにしたがって簡単に述べる。

「第一章 江戸版長唄正本の書誌的研究」

筆者は以下の所蔵機関において、長唄の薄物の伝本調査を行っている。享保期の後半から明治期に亘り版行されてきた長唄の薄物は、数度の火災や震災を経てもなお夥しい数が伝存している。

上野学園大学日本音楽史研究所

上田市立上田図書館花月文庫

大阪大学忍頂寺文庫

国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫

国文学研究資料館

大東急記念文庫

天理大学附属天理図書館

東京芸術大学附属図書館

東京国立博物館

東京大学教養学部黒木文庫

東京大学文学部国文学研究室

東京大学総合図書館霞亭文庫

東京都立中央図書館加賀文庫・峰谷文庫

東洋文庫

松浦史料博物館

明治大学図書館松和文庫・抱谷文庫

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

また、次の海外の機関からは複写を入手している。

ケンブリッジ大学図書館

フランス国立図書館

ベルリン国立東洋美術館

このほかに、日吉小三八氏・稀音家義丸氏・抱谷文庫など個人の所蔵する本も含まれる。原本の調査にあたっては、原道生先生、鳥越文蔵先生、佐藤悟先生、竹内道敬先生、稀音家義丸先生、日吉小三八先生、配川美加さん他の方々より御高配を賜り、また、閲覧の際には各所蔵機関の係の方々に多くの労を執っていただき、伝本の煩雑な比較作業を行うことができた。心より感謝を申上げる次第である。

資料については、江戸版の長唄の薄物を中心に、詞章集や、せりふ

正本・浄瑠璃正本（青表紙本を除く）も長唄正本と同じ判型を取る劇場出版物であることから含めて調査を行ってきた。

冒頭の部分で、音曲正本は脚本の清書稿から所作事部分を書抜いて版行したものと基本的に筆者は位置付けたが、これについて少し付け加えたい。浄瑠璃所作事は舞踊劇とも呼ばれ、その詞章は狂言作者の担当であった。これに対し、長唄所作事の詞章は拍子舞や筋と絡む場合は狂言作者が担当したが、それ以外は囃子頭である立三味線が作詞・作曲を行う伝統にあったという。そのため、狂言作者が作成する手書きの台帳には長唄の本文は載らないことが多く、その場合には長唄正本がその所作事の内容を知る唯一の手がかりとなるのである。ゆえに、長唄所作事の原作のかたちを知る上でも、また、狂言の全体像を捉える上においても長唄正本は欠くことのできない重要な資料となるのである。ここに何よりも長唄の薄物の徹底的な伝本調査を行う意義があると言える。

薄物の伝本の整理に当たっては、作品ごとに伝本を突き合わせて同版・異版を識別し、版種に分けて整理した。その中から、初版本（座と専属関係にある版元から出された上演時正本）またはこれに替わる善本の選定を行う。

具体的な作業としては、伝本の間の同版・異版の関係、覆刻とその元版の関係、その中でも正本の流用関係を重点的に調べ、その結果を基礎台帳に記載する方法を取る。また、本文の異同や、共紙表紙に記載されている上演内容についても異同をとり、これも基礎台帳に記載する。そして、この基礎台帳から三座の版行態勢を捉えるために必要な

データを抜き出して表を作成する。さらにこの表には所蔵一覧を添えて、目録の役目も持たせる。また、書誌データを基に、中村座・市村座・森田座別に薄物の版行上の特徴を具体的に図版を掲げて説明する。

「第二章 江戸歌舞伎における長唄の形成」

第二章では江戸歌舞伎において所作事の地（伴奏）としての長唄がどのように形成されたのか、これをテーマとする。

先に述べたように、従来の研究において、長唄の成立論は顔見世番付の唄方の肩書きに基づいて作られてきた。筆者は大筋ではこれを受けつつ、長唄正本によってこの従来の見解を捉え直して見ようとする。長唄正本の表紙には所作場を演じる役者や役柄、演奏者、舞台面の絵が記入されており、本文の詞章からはその内容を知り得ることができ、そのため、より内容に即した捉え方ができると考えるからである。用いる長唄正本は、自身で薄物の伝本調査を行い、その中から吟味して専属版元による初版本に選んだものとなる。これを中心に役者評判記、絵入狂言本、顔見世番付、歌謡集も用いる。

これらの資料において、視点を以下のように設ける。

初期の長唄正本には坂田兵四郎が唄方を勤める作品が多いことから、坂田兵四郎に注目しその出自や活動をたどる。そして、長唄正本の版行理由や兵四郎がその後の長唄所作事において果たした役割につ

いて考えて見る。

坂田兵四郎は上方では小歌方であったと見られることから、江戸長唄の源流の一つを上方の小歌に求めて見る。絵入狂言本に掲載される小歌詞章を辿ると共に、小歌正本の存在についても伝本調査を行って見る。

小歌と長唄の關係に留意しながら、両者の違いについて考察する。

小歌は顔見世番付においては唄方の肩書きとして記載される。しかし、絵入狂言本、役者評判記、歌謡集などには小歌は役者の芸として登場してくる場合が圧倒的に多い。長唄が小歌から受け継いでいる面と、受け継がなかった面について考える。

「第三章 江戸版長唄正本における株板化の動き——中村座を事例として——」

第三章では、第一章でまとめた三座の長唄の薄物の書誌データを、出版研究に展開させる。第一章において版面の比較作業を行って、正本と異版の關係を表にあらわしているが、この表を用いて正本の版權の確立する過程を捉えようとする。

長唄の薄物は地本（江戸の草紙）の一品目に数えられ、享保期後半から明治期に亘って継続して版行されている。そのため、版行上の変化を観察することが可能であり、これは版行期間の限られる赤本や青本など他の地本にはない有利な点である。

版權の確立過程は初版だけではなく異版の存在に目を向けることによって捉えることができる。異版は上演時に正本を流用して作成されたと見られる偽版と、上演後に稽古本目的で作られた版に大別される。前者を地本に対する出版取締令と関連づけて考察することで、版權の確立過程を捉えようとし、その一方で、後者を今日の長唄譜本に繋がる存在と見なし、譜本史の観点からも版權の確立の意味を考えて見る。

この第三章では、薄物の異版の方に視点を置く。

凡例

原則として表記には通行の字体を用い、引用箇所では一般に通用されていない正字はこれを避けたところもある。

「」で括った部分は、筆者による補注である。

評判記の引用は、歌舞伎評判記研究会編『歌舞伎評判記集成 第1期』（岩波書店、一九七二～七七年）、役者評判記研究会編『歌舞伎評判記集成 第2期』（岩波書店、一九八七～九五年）によった。評判記の位付文字の白抜きについては区別しなかった。

所蔵機関の名称については、国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫は国立音楽大学附属図書館竹内文庫と、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館は早稲田大学演劇博物館と表記する場合がある。

なお、本論文で使用了図版については、その資料の所蔵機関と架蔵番号を236頁の「掲載図版一覧」のところに載せている。

第一章 江戸版長唄正本の書誌的研究

第一節 江戸版長唄正本に見る版行形態の変化

―享保期・寛政三年の中村座の場合―

はじめに

正徳四年（一七一四）以降、江戸では官許の常設芝居が三座となり、享保期を迎えると、上演情報伝える出版物も番付類・せりふ正本、所作事の場面の音曲本には長唄正本が加わり多様となってくる。これらの劇場出版物は、座側から上演情報を受けて、版元が興行ごとにそれを版行するのであるから、座と版元の間には本来専属的な関係が形成されやすいと言える。事実、江戸の演劇書や狂言作者の著作にはそうした関係を示す記述が残されており、以下にその箇所を書き出してみると、以下のようなになる。

『明和伎鑑』（明和六年（一七六九）十月刊）には、

三芝居番付板元

中村勘三郎芝居 役者附番付やくら下上り長哥せりふ等

高砂町横通り 村山源兵衛

三升屋二三治による著作では、

『紙屑籠』（天保十五年（一八四四）十月序文）

○三座番附の板元

中村勘三郎

せともの町

さかい丁

村山源兵衛

役者附／番附一式

中島伊右（左）衛門

相板元

さかい丁

沢村屋利兵衛

中村勘三郎休座のとき、都座の内、

絵草紙株沢村へ頼む、今に板元

～

古来より番附株は、其櫓によつて爰にしるす、外に無之、たゞし、都座、桐座も元櫓にしたがふ。

『賀久屋寿々免』三（弘化二年（一八四五）秋成立）

三芝居板元

中村座 役者附／番附

せともの町村山源兵衛

同 絵本おふむ石／長うた薄もの本 さかい町 沢村利兵衛

ここには中村座についてのみ抜き出したが、「三芝居板元」「三座板元」という表記自体に、三座と版元の専属的關係が表れている。そして、『明和伎鑑』では番付類・浄瑠璃正本・長唄正本・せりふ正本が「番付」のもとに括られている。

さらに、詳しく見ると、『明和伎鑑』では、村山源兵衛の扱う品が、中村座の役者附（顔見世番付）・辻番付、上るり（浄瑠璃）・長唄・せりふを載せた劇場出版物であるのだが、時代は下り、三升屋二三治の

記述になると、これらの劇場出版物の扱いは二つに分かれる。役者附・番付は村山源兵衛が、絵本おうむ石・長唄薄物は沢村利兵衛が新たに版元として挙がっている。また、そこに浄瑠璃本が入っていないのは、豊後系浄瑠璃の常磐津・富本・清元節各派では、家元と版元の提携関係の方が強くなったからであろうか。

これらの劇場出版物において、江戸の三座に専属する版元は、いつ頃から、どのような形で形成されてきたのだろうか。また、番付類と、せりふ（後に鸚鵡石）・長唄を扱う版元が分かれるようになったことには理由があるのだろうか。これらの問題を扱うには、その前にそれぞれの劇場出版物について、膨大な数の伝存の確認とその整理に取りかかる必要がある。よって、筆者は長唄を中心に、薄物形態の音曲本・せりふ本の書誌調査を行ってきた。ここではまず江戸三座の筆頭格である中村座を取り上げ、控え櫓の都座に興行権が移る寛政五年以前に上演された長唄作品について、伝本を整理しその書誌データをまとめてみたい。その際には、冒頭に掲げた、演劇書類から引いた劇場出版物に関する記述を手がかりとして進めていく。

長唄正本は、古くは『長唄正本集』巻之一（川上邦基編、演劇図書同好会、一九一七年）、『古板長唄八種』（稀書複製会編、米山堂、一九一七年）、『歌舞伎図説』（守随憲治・秋葉芳美編、万葉閣、一九三一年）、『長唄原本集成』巻一〜七・十二・十四（長唄原本集成刊行会編、一九三六〜一九三八年）に、また、近年では『図説江戸の演劇書 歌舞伎編』（赤間亮、八木書店、二〇〇三年）、『江戸の声―黒木文庫でみる音楽と演劇の世界―』（黒木文庫特別実行委員会著、ロバ―

トジャンベル編、東京大学大学院総合文化研究科教養学部美術博物館、二〇〇六年）において、複製あるいは写真掲載されている。

しかし、筆者が実際に伝本の調査を行うと、薄物の形態をとる長唄本には同じような版面をもつ異版が非常に多く存在することがわかった。しかし、長唄正本を扱う従来のこれらの書において、異版の存在が取り上げられることはなく、異版の全体像は明らかにされていない。

筆者は長唄の薄物の版面の複雑な様相について、すでに別稿にまとめている。冒頭に引用した演劇書の記述内容と伝本の状態を照合すれば、中村座の版元として名が挙がっている村山源兵衛、沢村屋利兵衛・沢村利兵衛を版元とする薄物は確かに存在しており、それらの版を上演時の正本と見なすことは確かに可能である。だが、それ以外にも多くの版元が長唄の薄物を版行しており、それらの版面は互いに非常に似通っている状況がある。しかも、表紙にはいずれも初演時の大名人が記入されてあるため、単純に版の先後関係を決めることはできないのである。

よって、長唄の薄物の全体像を捉えた上で、劇場出版物としての特徴やその版行の仕組みを明らかにしていく必要があるだろう。先行研究を踏まえつつも、正本だけではなく異版にも重きを置いて捉えて見たいのである。異版の状況は複雑である。実際にそれらの版の中には、とりわけ正本に酷似する版が存在し、それらは正本を版下に流用していると推測され、興味を引く。このような伝本の状況を具体的に説明して見よう。

一 考察の対象とする異版について

長唄正本には異版が非常に多く存在し、人気曲などは、複数の版元によって異版が十数種出ている。しかも、その異版の有り様も複雑である。明和二年（一七六五）十一月中村座初演の『姿の鏡関寺小町』を例にとり、具体的に説明してみる。14～17頁の①～⑩に『姿の鏡関寺小町』諸本の表紙と本文の最初の半丁を掲げた。

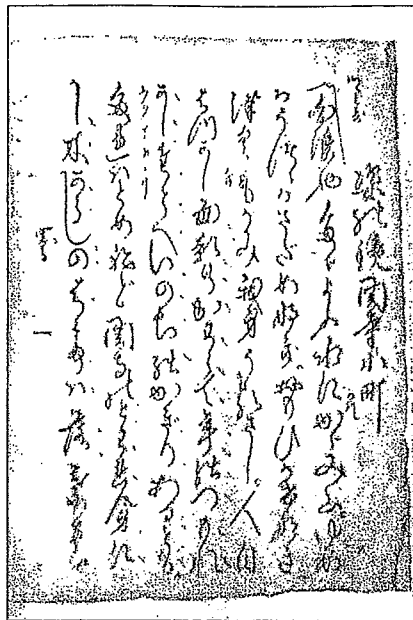
長唄の薄物の表紙には曲名・狂言名題・座名の他にも、役者名や演奏者名、舞台面の絵など多くの上演情報が載せられている。本文は、長唄の唄方と三味線方が担当する音曲の詞章で、長唄が中心となるが大薩摩節や唄浄瑠璃などをも含まれる。表紙は半丁、本文は三～五丁程度で、版元名は奥書に入ることもあるが、通常は右側の演奏者連名の下に記載されている。14頁①でみると、表紙の左側上部に曲名があり、右側の囲い枠内に演奏者連名が記載され、さらにその枠の左側上部に狂言全体の大名題がある。中央上部には役者紋が入り、下に舞台面の役者絵が描かれる。長唄の薄物の表紙は大体このように定型化している。

14～17頁に掲げた諸本を見比べると、①～⑩の中で、①②③の版は他の版に比べて表紙・本文ともに非常に似通っていることに気が付くであろう。表紙については、①～④の版について、演奏者連名の入る枠が子持野であることや役者絵に共通するものを感じるが、特に①と②の表紙は、版元名部分以外は酷似する。③の表紙には①の「神楽謡雨乞小町 第壹番目」が省略され、鏡の中の顔も描かれない。本文に

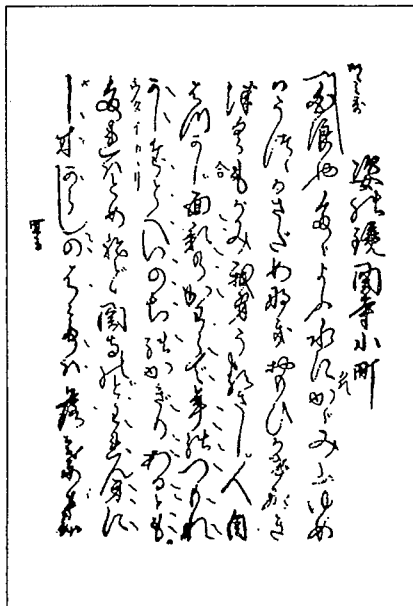
ついては、①～③は八行で胡麻点・文字譜が詞章の右に付されているが、④以下は六行で、特に⑥以下は大字になっている。やはり②の本文が①と酷似する。また、③の本文は①と用字が所々異なっているが、行送りは同じであるため、①を参考にして作られた可能性がある。④の本文は中字となり書体も異なるが、表紙の方はおそらく①の村山版を参考にして作っているであろう。（なお、この版元清水治兵衛は他に伝本も少なく、正本を流用した版作りを継続的に行っている版元ではないことから、170頁の表1の明和二年十一月「姿の鏡関寺小町」には清水治兵衛の欄を設けていない。）

「姿の鏡関寺小町」は明和二年十一月中村座上演であるから、冒頭に引用した『明和伎鑑』中の「三芝居版元」の記述が対応しており、中村座の版元は村山源兵衛となっているので①の村山源兵衛版が上演時の正本となる。この村山版を版下に使って、②の本屋儀兵衛版と③の無刊記版（版元名が記載されていない版）が作られていると推測される。このように伝本の版面を細かく調査すると、②や③のような①と酷似する版は本屋儀兵衛版・無刊記版に限られていることがわかってきた。しかも、これらの版は正本に並行して継続して出ているのである。

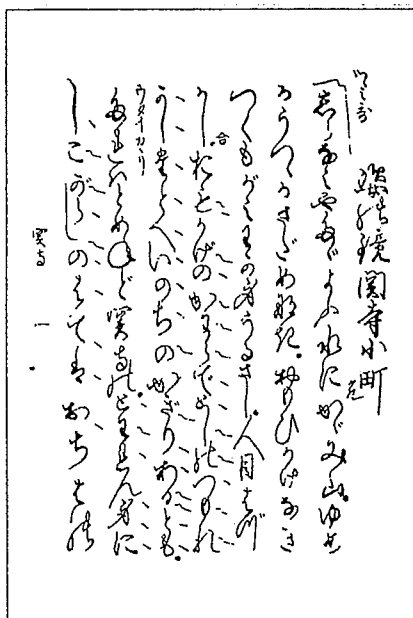
そこで問題となるのは、②の本屋義兵衛版・③の無刊記版は村山源兵衛の了解のもとに出ているのか、あるいは無断版行であるのかという点である。浄瑠璃正本の奥付には、「太夫直之章句」を写した正本であることを証する極め書きが載せられるが、これと共に「重板」や「類板」の存在を非難する文言が記されることもある。だが、これま



① (明治大学図書館蔵 松和文庫本)

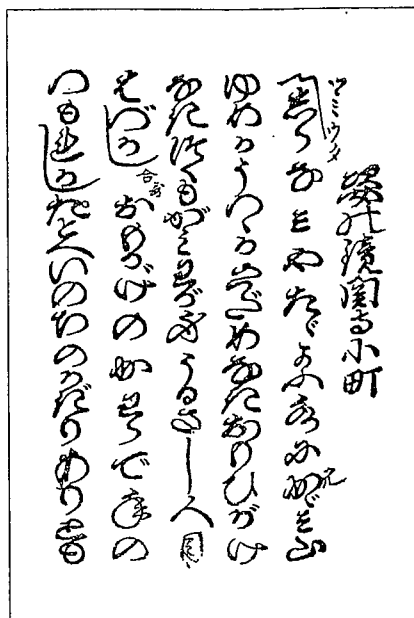


② (東京芸術大学附属図書館蔵)

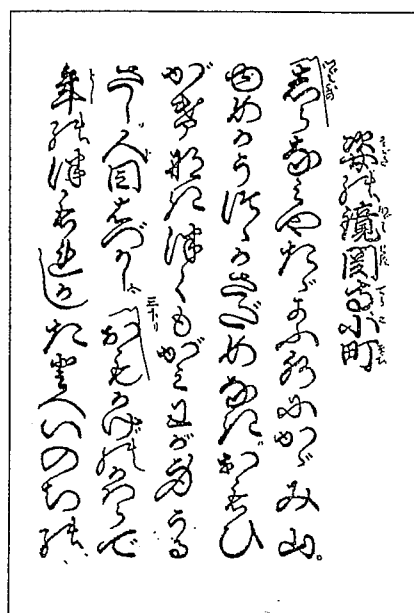


③ (東京芸術大学附属図書館蔵)

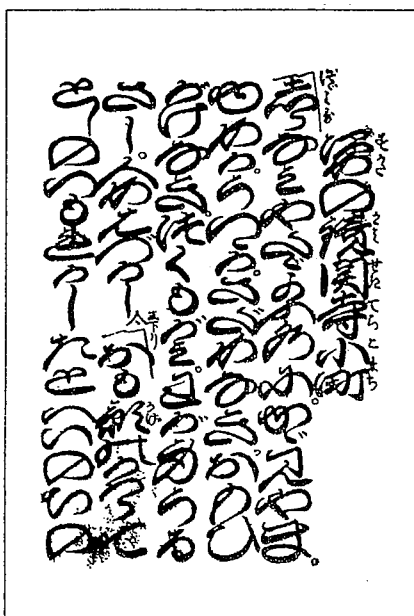




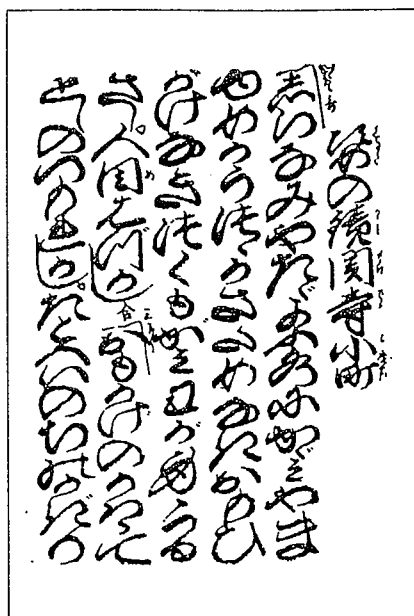
④ (国立音大附属図書館蔵 竹内文庫本)



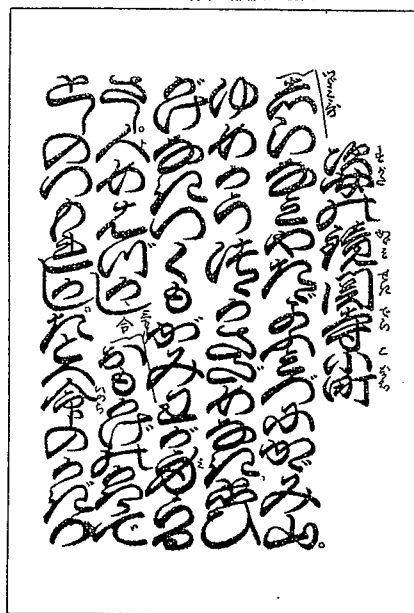
⑤ (明治大学図書館蔵 松和文庫本)



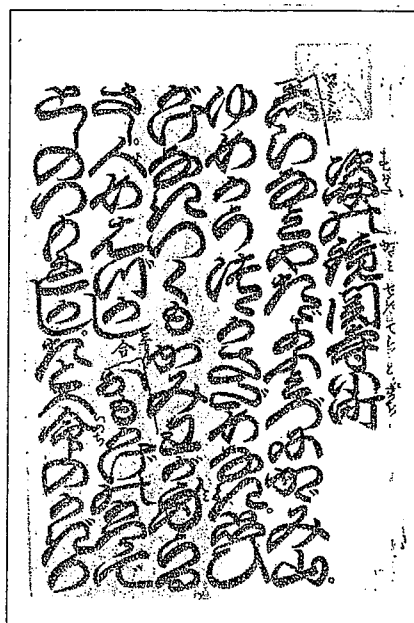
⑥ (東京芸術大学附属図書館)



⑦ (東京芸術大学附属図書館蔵)



⑧ (国立音大附属図書館蔵 竹内文庫本)



⑨ (稀音家義丸氏蔵)

での調査の範囲では、「重板」や「類板」の存在を示す文言は、村山源兵衛版は元より、他座の長唄正本からも見つかつてはいない。

そこで、長唄正本と同時期に版行されている江戸歌舞伎の浄瑠璃正本に重版・類版に関する記載を探したところ、江戸浄瑠璃の太夫、十寸見河東の正本に「類板」に関する記載が見つかった。河東節の専属版元は小松屋で、中村座上演の正本が、享保二年（一七一七）の『松の内』から伝存する。

参考として、長唄正本に先立って版行されている、享保七年（一七二二）正月、中村座上演の河東節正本「式三献神楽獅子」を、17頁に載せた。中段の小松屋版が正本である。下段に、伊賀屋版の表紙と本文を対応させて載せている。小松屋版の表紙の演奏者連名枠内の下半分に類版に関する文言が載っている。だが、かなり摩滅しているので、国立音楽大学附属図書館竹内文庫の覆刻本により補って読むと、以下のようになる。

河東直伝之正本ハ小松や／よりほかに無之候所ニ此ころ／ういはん／相ミへ申候／河東／正め／いの本にハ／如此の判形ヲ致令板行者也／「能と」御吟味被成御求被下候

河東節正本は小松屋が正本版元であるが、近頃類版が出回っているの
で、小松屋版には太夫河東の判を入れ正本の証しとしてしていると述べて
いる。17頁下段の伊賀屋版は、中段の小松屋版を版下に流用して作ら
れており、ここに述べられている類版である可能性がある。整版の場

合は、他の本を版下に取り、木版刷りの技法により簡単に複製を作ることが出来る。この河東節における伊賀屋版の場合と同様の手法で、長唄の薄物の本屋儀兵衛版や無刊記版も作られており、本屋儀兵衛版や無刊記版は村山と相版を組んでいないことから見ても無断版行物である可能性が高い。享保期の江戸における歌舞伎の音曲本は、丁数が少ないこともあり、版元の間で互いに版を流用することが公然と行われていた様子が窺われる。

一方、④と⑩の版は①の村山版に対してどのように位置付けられるであろうか。長唄の薄物の多くには刊年の記載がないため、大名題の上演年月を手掛かりとするのである。初版を①として、②と③が①に追隨して上演時内に出されたものであることは推測できるが、④と⑩については刊年を特定することは難しい。⑨や⑩の役者絵は一見して時代様式が下るように感じられ、表紙に記載される大名題の上演年を単純に刊行の時期と見なすことはできない。再演時の版行であるとすれば、なぜ初演時の大名題を表紙に記入しているのだろうか。

このように異版は非常に版種が多く、また版元も多岐に亘るため、諸本の整理を行うにあたっては、まず上演時正本と本屋儀兵衛版・無刊記版の関係を糸口にして進めていく方針を取った。正本と本屋儀兵衛版・無刊記版を比較する際には、本文と表紙に分けて版面を詳しく調べていった。通常、同版・異版は、本文によって区別するのであるが、共紙表紙の体裁を取る薄物では、表紙にも正本の部分的・全体的流用が見られる。表紙には座側から提供される上演情報が入り、絵師により役者絵も描かれているので、流用の際にそれらがど

のように扱かれているのか調べて見たい。

二 比較方法

その薄物を長唄と筆者が判断するのは、表紙の唄方の肩書きが「長唄」と記載されてあることに拠った。24頁の下段に掲載した『衣かつき思破車』を見ると、表紙の右側の枠内の上段「富士田吉次」の肩書きが「長歌」とある。しかし、長唄の肩書きがない薄物も存在する。鼓歌・唄浄瑠璃などの場合である。14頁に掲げた『姿の鏡関寺小町』では富士田吉治（富士田吉次のこと）の肩書きは「鞍歌（唄）（つつみうた）」であるが、これは鼓を用いた独吟を指し、この唄方は他の薄物で長唄の肩書きを取る囃子方の人物であるから長唄の薄物になる。なお、大薩摩浄瑠璃太夫が唄方である場合、三味線を囃子方の者が勤めているときは長唄の薄物に入れた。

ここでは正本と本屋儀兵衛版・無刊記版の本文の関係を取り上げる。各作品毎に版の流用関係や記載内容の異同を調べ、これを上演順に並べて173頁の表1にあらわした。表1の最上段には、正本に記載されている大名題から取った上演年月を載せ、二段目には書名（曲名または所作名題でもある）を載せている。三段目は中村座の提携あるいは専属版元から出ている版（正本）について記載する欄で、版元名と住所は表紙から引いている。また、奥書がある場合はこれも載せている。本文の内題下に述者名、巻末に筆耕がある場合はこれも記載し、胡麻点

・文字譜が有るときは「胡・譜有」と記している。上演時の正本が二種伝存する場合には、四段目に版元2として載せている。これは専属版元が形成される前の、まだ座と提携する版元が複数有る状態を指す。版元1と版元2は、本屋儀兵衛版や無刊記版の元版となる場合がある。五段目は江戸橋四日市本屋儀兵衛版。六段目以下は無刊記版の欄で、無刊記版が数種ある場合はⅠ種Ⅱ種と分類している。本屋儀兵衛版と無刊記版の欄にそれぞれ正本の流用状態を記載する。正本を版下にとって被彫りしている場合には、本文の奥書・述者・筆耕・胡麻点・文字譜を残しているか、あるいはが削除しているのか調べて記載している。なお、いわゆる「版本写し」と呼ばれる写本について状態の良いものは表1に入れ、その場合は「透写」と記載している。

正本と本屋儀兵衛・無刊記版の本文の版面を比較するに当たっては、拙稿「河東節正本の版行に関する一考察―江戸歌舞伎における初期の音曲正本と位置付けて―」（前出）で用いた方法をとる。

A1 元版をそのまま版下に用いて被せ彫りしている。

A2 全体として元版を版下にして被せ彫りしているが、漢字や仮名を意図的に入れ替えている個所がある。

A3 元版を参考にして版下を作り直している。元版を透き写して版下を作成しているものから、意匠上の関連性が認められる程度に元版を利用しているものまで、元版を版下を利用する度合いには幅がある。

B 別版。元版の用字や行送りと関係なく、中字や大字で版下を作製している。

なお、169頁の表1と表6で分類した正本・本屋儀兵衛版・無刊記版については、伝本の所在と架蔵番号を191頁の「所蔵一覧」「中村座・都座の長唄の簿物」に載せている。ただし、伝本の数が多い場合は欠本や破本、後印の粗悪な本は記載しなかった。

(一) 長唄正本の初期の版元

169頁表1の版元1・版元2の欄には、上演時に中村座と提携あるいは専属関係にある版元の名を正本の表紙から取り、奥書のあるときはそれも書き出している。享保十六年（一七三一）から宝暦六年（一七五六）までは元濱丁伊賀屋版が多い。だが、伊賀屋は中村座版元と正本に記載していないので、専属関係が成立しているわけではないようである。伊賀屋は市村座の長唄正本も同じ時期に版行している。次に掲げるのは、市村座上演の古い伊賀屋版長唄正本である。

享保18・正 栄分見曾我第二番目『色里踊口説あれみさしやさんせ節』
(1733)

享保18・7 相栄鳴神不動第二番目『大踊りこんこりき節』

元文4・11 瑞樹太平記第二番目大詰『小山田太郎物狂せりふ』
(1739)

この時期には『小山田太郎物狂せりふ』のように、音曲詞章とせりふが混じる正本も存在する。せりふ正本の方が長唄正本より先に版行されている。参考として、伊賀屋版のせりふ正本『江戸町づくしせりふ』の表紙と本文の最初の半丁を次に掲げる。享保十四年（一七二九）正月に中村座で「扇恵方曾我」の第二番目に演じられた市川團十郎のせ

りふである。

参考図 伊賀屋版せりふ正本 抱谷文庫本



共紙表紙に記載される外題や大名題・座名・役者名・役者絵の入る位置が長唄正本と同じであり、簿物の体裁がせりふ正本においてすでに定まっていることがわかる。なお、このほかにも伊賀屋が版行する中村座のせりふ正本には次のものがある。

享保19・春 七種磐曾我『竹尽ほめことば』
(1734)

享保19・春 右同 『江戸五人男せりふ』

一方、表1の享保十六年と十七年に長唄正本を出している中嶋屋は、『紙屑籠』では番付の相版元と記されているが、伝存からは中村座の番付版元である。この中嶋屋も、中村座だけではなく市村座・森田座のせりふ正本・長唄正本を版行していることが伝本で確認できる。

表1で、次の長唄正本は泉屋権四郎版である。

元文 6 (1741) 2 菜花曙曾我『高野道行歌祭文』

宝暦 8 (1758) 11 木毎花相生鉢樹第一番目『寿相生羽衣』

宝暦 11 (1761) 3 間山女敵討第二番目『髪梳名とり草』

この泉屋権四郎は、市村座で享保十九年(一七三四)三月に上演された長唄正本『江戸桜五人男掛合文七節』の奥書に「市村座新きやうげんはんもと よこ山丁壺丁目しんみち いづみやごん四郎」と記載している、すでに市村座の専属版元となっている。いづれも伊賀屋版や中村座の専属版元になる村山源兵衛版が出ていないため、何らかの事情により泉屋が長唄正本の版行を引き受けたものと推測される。

村山源兵衛は『明和伎鑑』に中村座の顔見世番付・辻番付・浄瑠璃・長唄・せりふの版元と記されているが、伝本における中村座のせりふ正本の初出は、享保二十年(一七三五)正月上演の大名題「名山累曾我」が入る『厄払い豆まきのせりふ』である。そして、

次に表1で宝暦九年(一七五九)一月の『舞扇子姥桜』からは、村山源兵衛が上演時正本の版元となる。この村山が中村座の専属版元であることを正本に表すのは宝暦十二年(一七六二)三月上演の長唄正本『芳野草』からである。その奥書には「中村座はんもと むら山源

兵衛」と記載しているが、明和八年頃の正本にはこの奥書を頻繁にいれるようになっていたことがわかる。

表1によれば、中村座に正本を独占的に版行する版元が形成される時期は市村座に比べ三十年近く後になる。それまでの間は長唄正本を出す版元は鱗形屋、伊賀屋、中嶋屋など複数存在しており、それらの版元は他の座とも提携していた様子が見て取れる。

(二) 本屋儀兵衛版・無刊記版と上演時正本の本文の関係

江戸橋四日市の本屋儀兵衛については、『画入読本外題作者画工書肆名目集』に「貸本屋世利本渡世の者二而手広にいたし候者名前」として、石渡利助、上総屋儀兵衛の次に「南鍋町 宇多閣 本屋儀兵衛」と名が挙がっている、文化年間(一八〇四〜一八一七)には貸本屋を大きく営んでいたらしい。また、文化五年(一八〇八)には読本『近江縣物語』を耕書堂薦屋重三郎・瑞玉堂大和田安兵衛・螢雪堂三河屋宗兵衛と相版で刊行している。同書の第五巻の後表紙見返しには、この四人の版元名があり、その上部に「東都書林」と記載されているが、『割印帳』によると文化四卯年(一八〇七)十一月十二日に「板元売出 大和田安兵衛」と記載され、書物問屋で出願している。

だが、本屋儀兵衛は、先の『画入読本外題作者画工書肆名目集』において「右十八人の者共より書物問屋共え上方直荷物(并二)江戸板共改を受す売捌申間敷旨之取極一札取置申候」と書かれているその十八人のうちに入っていることから、江戸書物問屋には加入していないと

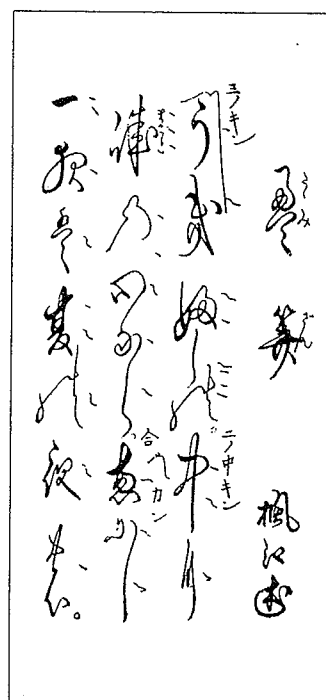
見られる。長唄正本を出している宝暦期（一七五一〜）から天明二年（一七八二）にかけて、江戸橋四日市でどのような業態の版元であったのか不明であるが、芝居町の入り口に立地し芝居関係の出版物を扱っていたらしい。江戸橋広小路には床見世の古本屋が軒を連ねていたと言う。おそらく、本屋儀兵衛は芝居の売れ筋商品に敏感に反応した商いをしていたと推測される。

無刊記版は、本論文では版元名の記載がない版を指す。無刊記版は複数の版種が出ており、伝本中では、最多で六種が確認できた。

169〜173頁の表1で、伊賀屋版や村山源兵衛版に対する、本屋儀兵衛版・無刊記版の本文の版面の関係をみていくことにしよう。先に掲げた版面の識別方法により、版元1（あるいは版元2）を元版とした場合の、本屋儀兵衛版・無刊記版の本文の版面の関係をA1・A2・A3・別版の関係で表してある。また、本屋儀兵衛版と無刊記版の間の本文の版面関係についても必要に応じて記載している。なお、「英執着獅子」上下二冊本については、上冊・下冊が別々に各所蔵機関に多く存在しており、上冊と下冊の組み合わせが原装と確認できない場合もあったので、分けて表示した。

表1の明和五年（一七六八）九月上演「畳算」を例にとり、本文初丁表の内題と詞章の始めの三行部分をそれぞれ掲げて、A1とA2について説明しよう。

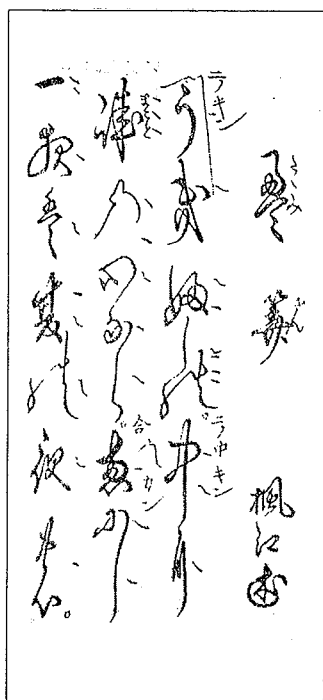
次に掲げる村山源兵衛版（東京芸術大学附属図書館本）は、上演時正本である。「楓江述」と内題下にあり、楓江は富士田吉治の俳名である。胡麻点と文字譜も添えられている。



村山源兵衛版（東京芸術大学附属図書館蔵）

なお、本屋儀兵衛版はこの曲には伝本が見つからない。

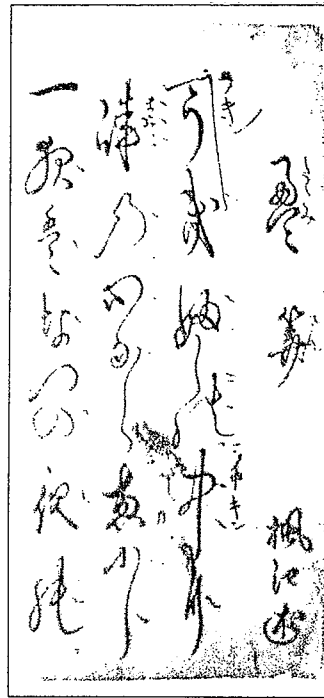
次に掲げた無刊記版I種（松浦史料博物館本）は、一見、前の村山版と同版にも見えるが、最初の文字譜が明らかに「二ノキン」となっており、筆の入り方・抜く部分に彫りの違いが見つかるので、村山版を版下とし、おそらく別の彫り手によって被せ彫りされたと思われる。意図的な版下の改変はないので、A1とした。



無刊記版I種（松浦史料博物館蔵）

次の無刊記版II種（明治大学附属図書館蔵松和文庫本）では、最初の文字譜は村山版と同じ「三ノキン」になっている。だが、村山版・無刊記版I種のどちらとも彫りが異なると見られる。そして、本文の

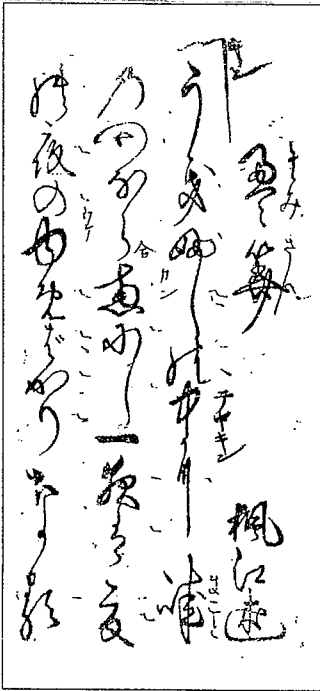
三行目の四字目と五字目「なつの」の部分に漢字から仮名表記に変わっており、さらに一文字おいた「の」も、変体仮名「農」を「能」に変えており、村山版を版下にしながら部分的に意図的な改変を加えていることが読み取れる。ゆえにA2とした。



無刊記版II種 (明治大学図書館蔵 松和文庫本)

A3の例については図1の③で述べたのでそちらを見て欲しい。

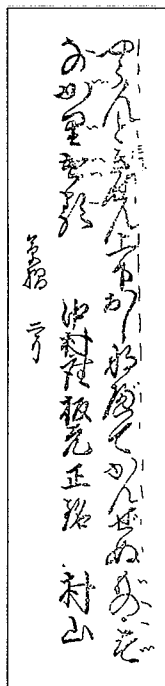
次に掲げる無刊記版III種(早稲田大学演劇博物館蔵安田文庫本)は、これまでの版が五行であったのに対し六行となっており、一行に入る文字数も増えている。書体や用字に村山版の影響を指摘できなくもないが、全体的に見て別版とした。



無刊記版III種 (早稲田大学演劇博物館蔵 安田文庫本)

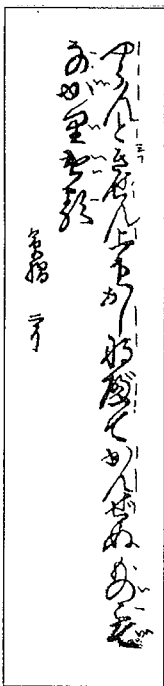
無刊記版IV・V・VI種については、特に掲出しないが別版の本文であり、無刊記版I〜VIの間では同版・被彫りの関係はなかった。A1は重板、A2とA3も版下の一部または全体を作り変えているが、実質的に重版であろう。

村山源兵衛が中村座の専属版元であることを奥書に記した版には、『春調娘七種』『紅白勢丹前』『梅笑粧くさずり』『(狂乱)雲井の里言葉』がある。これらには無刊記版I種が伝存し、いずれも本文の版面がA1の関係にあるが、村山版にある「中村座板元 村山源兵衛」等の奥書は除かれている。例として安永元年一月上演「梅笑粧くさずり」の本文末の二行を掲げる。元版となるのが、次に掲げる村山源兵衛版(東京国立博物館本)である。



村山源兵衛版元版 (東京国立博物館蔵)

次の無刊記版I種(東京芸術大学附属図書館蔵)はA1の関係になる。



無刊記版I種 A1 (東京芸術大学附属図書館蔵)

本屋儀兵衛版においても無刊記版と同様にA1・A2の手法が多くとられているのだが、『京鹿子娘道成寺』の表紙に「正銘/板元 江

戸橋四日市本屋儀兵衛」と記入されてあることが気になる。不正出版の位置づけに相反する表記となるからである。本屋儀兵衛が単独で「正銘板元」と表記するものは、管見によればこの一冊だけである。「京鹿子娘道成寺」は宝暦三年二月の上演作品で、これは村山源兵衛が中村座の専属版元になる前の時代であるから、本屋儀兵衛は薄物にそのように記載できたのかも知れない。破損しているが表紙を次に掲げる。国立音楽大学付属図書館竹内文庫本である。



また、正本と無刊記版が同版と見られる例も存在する。明和四年（一七六七）八月上演の正本『衣かつぎ思破車』に対し、無刊記版Ⅰ種は表紙・本文ともに同版の後印本と見られるが、無刊記版Ⅰ種では、表紙の版元名が板木から削除されており、囃子方連名枠の下部にその削り残しの跡が残っている。なぜ版元名を板木から削ったのか不明で、特殊な存在である。表紙を次に掲げるが、どちらの版も早稲田大学演劇博物館安田文庫旧蔵本である。

『衣かつぎ思破車』表紙

早稲田大学演劇博物館蔵 特ノ11-1212-117



早稲田大学演劇博物館蔵 特ノ11-1212-93D



アの村山源兵衛版では本文初丁裏の九行目の中ほどに「三人へおせやれ
おのこ」とあって、次に「哥へ二丁だち三挺立 おしてかつ手八臺見附
ケ箱崎くづれ橋 だんな すつぺりおひさしや そこて花どれ／＼勘五兵

と第二丁表の最初の四行部分



イ 早稲田大学演劇博物館蔵本 同ジ箇所を掲載

[illegible]

の部分

[illegible]

聲傳く、觀摩屋、獨り、今、獨り、此、を、是、に、也、如、き、也、
 い、は、總、て、之、を、一、に、之、を、一、に、之、を、一、に、之、を、一、に、
 觀摩屋、獨り、今、獨り、此、を、是、に、也、如、き、也、
 觀摩屋、獨り、今、獨り、此、を、是、に、也、如、き、也、

あり、続いて仲蔵のせりふ「サへ椎の木じやしつちやつほう半分じやはらつほうおつとあぶない首尾の松」になるが、イの村山版ではこの哥の部分の約二行分が無い。

イの「サへおせやれおのこ」の「のこ」以下、第二丁表の最初の二行までを改刻しているように窺えるが、微妙なところである。したがって、版の先後関係についてはここでは判断せず紹介のみにとどめた。なお、イの村山版には、表紙の版元名部分を削除した同版本も存在する。早稲田大学演劇博物館本である。

表1に戻り、村山源兵衛が中村座の専属版元となり、上演時正本を版行するかたちになっても、伊賀屋を版下に流用したのと同様に、村山版を版下に利用した版が現れている。上演時正本を出す専属版元の権利が侵害されていることが読み取れる。江戸では寛政二年十月に地本問屋仲間の行事改めが導入されるが、その前にあって、事実上の重版が横行する状況を表1に見て取ることができる。ただし、村山源兵衛の専属版元としての権利は、上演時の初版に限るものであったと推測される。例外について先に掲げたが、基本的には村山源兵衛による再版の伝本が存在せず、初版を原版として保有し再版する形跡がないと見なせる。これは、長唄正本の版行の権利が、番付と同様の一過性の出版物と見なされていたからであろう。

(三) 胡麻点と文字譜

「ウタヒ」「哥」「上るり」「ヲトリ」の指定を「カン」・「ハル」・「ウ

ク」などと同レベルの文字譜と見なせるのか、という問題についてはここでは扱わず、一応文字譜と扱い、表1に「譜有」（文字譜有の略）と記載している。ただし、冒頭の「三下り」・「二上り」、中間部の「合」のみの場合は、「譜無」（文字譜無し）とした。正本の本文をA1・A2の関係で流用する際に、本屋儀兵衛版・無刊記版で胡麻点や文字譜を削除する例は、表1においてほとんど見られない。胡麻点を除いている例として、明和七年（一七七〇）八月上演の『めりやす 星明』無刊記版I種がある。村山版（胡・譜有）の本文をA2で流用しているが、胡麻点を除いている。

胡麻点や文字譜は音曲正本の重要な要素であるが、流用の際に削除されていないのは、薄物の版行に作曲者である唄方や三味線方の権限があまり反映されていないことを示している。だが、長唄にとって胡麻点・文字譜が重要ではなかったわけではないようである。差障りがおきて胡麻点と文字譜を版本から削除したと推測できる例があるからだ。長唄の詞章集『常盤友』（刊一冊）について、東京女子大学図書館本と国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫本を取り上げる。両書はいずれも奥付が次のようになっている。

書寫 竹酔堂鼎峨

彫工 小川氏勘助

明和三歳丙戌夏／五月十有五日

書肆 日本橋南三丁目／吉文字屋治郎兵衛

弘所

書肆 本白銀町通三丁目／和泉屋庄次郎

東京女子大学本『常盤友』（明和三年（一七六六）五月刊 初版本）

順							所収 曲名	
20	ますかがみ	あり	なし	富士田吉治	錦屋惣治	市	座	胡麻点と文字譜 女子大 竹内文庫
26	秋七種	あり	なし	富士田吉治	錦屋惣治	市		
27	ねこのつま	あり	なし	中村兵蔵	杵屋作十郎	中	中	
28	親子草	あり	なし	松尾五郎治	杵屋作十郎	中		
29	おもひ川	あり	なし	富士田吉治	錦屋惣治	市	市	
30	雪咲心の花	あり	なし	富士田吉治	錦屋惣治	市		
31	ふたつ文字	あり	なし	富士田吉治	杵屋六三郎	中	市	
32	あさがほ	あり	なし	富士田吉治	錦屋惣治	市		
50	綱手車	あり	なし	富士田吉治	錦屋惣治	市	市	
51	百夜車	あり	なし	富士田吉治	錦屋惣治	市		
56	旅の初ざくら	あり	なし	松島庄五郎	杵屋作十郎	中		

「思川」の冒頭部分を以下に掲出する。

国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫本

○井ノ口
五月廿二日
五月廿三日
五月廿四日
五月廿五日
五月廿六日
五月廿七日
五月廿八日
五月廿九日
五月三十日

[illegible]

『常盤友』は『割印帳』に、

明和三五月十五日 常盤の友 賣出し板元 吉文字屋治郎兵衛

墨付百十一丁 めりやす本

と記載されており、書物問屋から版行されている。『義太夫本公訴一件』には江戸の芝居書が地本問屋の支配であることが記されており、長唄正本は地本問屋の扱いであった。吉文字屋が詞章本を版行した際に、本文ではなく胡麻点の部分に地本問屋側から差し支えが出たため削除した可能性が考えられる。

(四) 内題下の述者署名

長唄の作詞や作曲は誰が担当していたのか、これに関する記述を江戸の演劇書から拾ってみる。享和三年（一八〇三）正月刊の『三座例遺誌』には、次のように書かれている。

淨留理の文句独吟のめり安ハ狂言作者より作りて渡す。長うた

所作の文句ハ囃子町の立三味線これを作る也

然れとも狂言にかゝりたる所作又拍子舞等ハ作者是をつくる¹⁰

狂言作者である中村重助も『芝居乗合話』二（寛政十二年（一八〇〇）成立か）で同様の事を述べている。

立三味線のものハ、新唄のこしらへもの、めりやすの節付する。¹¹

また、三升屋二三治は『賀久屋寿々免』四（前出書）中に

所作事の時は、たて三味線、文句より節を付て、たて歌、その外連中集めて、けいこに及ぶ。各歌の文句、本に書取て、舞台に用

ゆる¹²

と記し、また『作者年中行事 式之巻』（嘉永元年成立）には、

一、長歌三立目の所作、大ざつま上るりは急ぐゆへ、はやしの頭へ渡す。文句作者より渡すを、近來三味線の者、文句書人有て節を付る。昔のしよさとはかはりたる事。その上、本にはやしの名を頭したるは、その昔の楓江ならでなし。楓江は長歌の銘人。〇はやしの式法は爰にしろさず。文句の事は作者にかゝりたる事ゆへ、あらましを述る¹³

大薩摩節淨瑠璃の作詞も、近來は立三味線が作っていると記されている。しかし、長唄正本の作詞は基本的に筋と絡む場面は狂言作者が作り、それ以外は立三味線が担当していたようである。富士田吉治（楓江）は唄方でありながら多くの長唄の作詞や節付けを行い、正本の内題下に署名を残しているが、これは破格のことであった様子が窺える。作詞・作曲者の署名が、本屋儀兵衛版・無刊記版においてはどのようになされているか、表1で見えてみよう。安永六年（一七七七）三月までの上演作品について、正本の内題下の述者を挙げると、狂言作者では鈍通与三兵衛・初代増山金八、囃方からは唄方の富士田吉治（楓江）・三味線方の二代目杵屋六三郎・八代目杵屋喜三郎（喜立・機流）の署名が見られる。

表1で見ると、本屋儀兵衛版や無刊記版では、正本の本文をA1・A2のやり方で流用した場合、内題下の述者名は大体削除しているようである。A1で述者をそのまま残した版は、「ちごさくら」の無刊記I種、「畳算」の無刊記版I種、「須磨友千鳥」の無刊記版I種であ

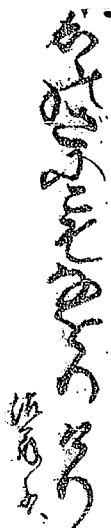
った。また、A2で述者を除いていないのは「畳算」無刊記版Ⅱ種のみである。これらはすべて署名が「楓江述」である。「畳算」は22・23頁に図版を掲げているので、そちらで確認して欲しい。

「鈍通与三兵衛」の署名については、「琴の段 朧月」「早咲賤女乱拍子」の無刊記版Ⅰ種で述者名は削除されている。

(五) 筆耕

整版は木版摺の技法をとるので、版下筆者（筆耕）は出版物の商品価値に関わる存在であろう。享保十九年（一七三四）二月上演の伊賀屋版『相生獅子』の本文末には、「沾翁書」と筆耕名がある。¹⁴

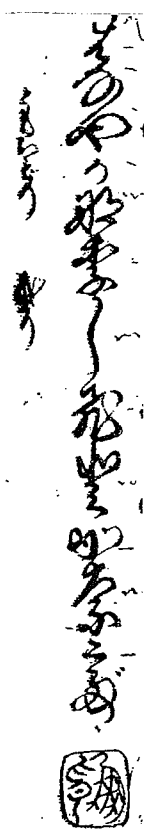
伊賀屋版 早稲田大学演劇博物館安田文庫本 特ノ11-1212-1D



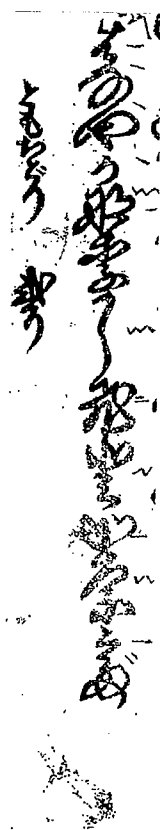
この署名は、寛延三年（一七五〇）十一月市村座上演の「佐々木三郎藤戸日記第一番目」上演のせりふ正本『あら行かけあいせりふ』泉屋権四郎版（芸大蔵）の本文末にもある。

「鼎岬印」については、長唄詞章集『常盤友』の奥書にも「書寫竹辭堂鼎岬」とあるが、これは草双紙作者の米山鼎岬である。本屋儀兵衛版・無刊記版で、正本をA1・A2のやり方で版下にとる場合、筆耕名は除かれている。例として、明和七年（一七七〇）十一月上演の「狂乱 須磨友千鳥」の村山版と無刊記Ⅰ種の本文末部分を掲げる。

村山版 早稲田大学演劇博物館安田文庫本 特ノ11-1212-16C



無刊記版Ⅰ種 早稲田大学演劇博物館安田文庫本 特ノ11-1212-100H



三 表紙の比較

(一) 表紙の流用関係

長唄正本は共紙表紙の体裁をとり、表紙には書名と版元名・住所のほか、所作場に関するさまざまな情報が摺り込まれている。外題は所作場の音曲名であるが、所作事の名題でもある。その所作事が組み込まれる狂言の名題（大名題）と番目、座名、所作を演じる役者の名と紋、役名および舞台面における姿絵、演奏者名が表紙の定位置に入り、絵師名・振付者名・述者名・狂言作者名も記されたりする。書物の表紙というより、むしろ番付に近い存在と言える。

このような内容が記載される表紙も、整版のため本文の場合と同様

に、正本の表紙を流用して、本屋儀兵衛版と無刊記版で版下にとる手法が見られる。版面の識別方法として、本文に準じて次のように分け、表7に表した。

A 1 正本の表紙全体を版下に取っている。ただし、元版の版元名と住所は除かれている。

A 2 正本の表紙を版下としているが、配置を変えるなど、部分的に手を加えている。例えば役者絵の着物の柄を簡略にしたり、版元名や座名の配置を変えている場合などがある。

A 3 版下を書き直しているのだが、正本を模倣して作られたと見なせるもの。

B 別版。正本との意匠的な関連が認められない。

表紙の場合は、全体を版下にとる場合や、外題や絵などを部分的に流用している場合があり、複雑である。絵の部分は役者名・役名と共に版下に流用されることが多いため、特にこれを区別して絵のA1～A3とした。14・15頁「姿の鏡関寺小町」の図版で確認すると、①村山版の表紙が元版となり、②の本屋儀兵衛版はそのまま版下に取っている。A1、③の無刊記版は版下に取り際に大名題の部分を書き替えているのでA2、④の清水版は表紙が似ているが、書体が異なるので村山版の表紙を参考にして版下を書き直したA3となる。

このような識別の方法により、正本と本屋儀兵衛・無為刊記版の表紙の版面関係を表したのが、表7である。表7の五段目以下で「表紙(絵) A1～B」と記載したのが元版との関係を示す。ただ、表7で

は正本と、本屋儀兵衛版・無刊記版のいずれかが伝存する場合にのみ関係の記載が行える。したがって、元版が存在せず、本屋儀兵衛版や無刊記版が伝存する場合は、正本との版面の関係は「不明」となる。

表1と表7を照合すると、表紙の版面がA1の関係であっても、本文もA1の関係であるとは限らず、また、絵部分を版下に利用する場合は、衣装の模様を簡略化されることが多い。また絵師名が記入されている場合は、これを削除している。

(二) 大名題と座名の記載の仕方

正本の表紙をA1・A2の手法で流用する本屋儀兵衛版や無刊記版では、元版の版元名・住所は必ず削除される。だが、それ以外にもよく削除が加えられる箇所がある。大名題・番目と座名の部分である。

14頁の①②③の表紙を再度見ていただきたい。②では版元名部分が「江戸橋四日市／本屋儀兵衛板」となっているほか、座名が「中村」とあって、「座」の文字が除かれている。③には版元名が無いが、座名が「中村」となっており、大名題と番目も削除され、その代わりに出だしの文句が入る。次頁に掲げた「早咲賤女乱拍子」では、①村山版の表紙に対し、②無刊記版I種では座名を削除し、絵の部分を左にずらして右側に演奏者連名を入れている。③無刊記版II種は絵だけを流用し文字部分を書き直している。座名は「中村」とある。また、無刊記版では大名題の「第壱番目」を入れている。このように、大名題と座名は、本屋儀兵衛版と無刊記版で省略されることが多いのである。



- ③ 無刊記版Ⅱ種
(早稲田大学演劇博物館蔵 安田文庫本)
- ② 無刊記版Ⅰ種
(明治大学図書館蔵 松和文庫本)
- ① 村山源兵衛版
(抱谷文庫蔵 表紙汚れ有)

184頁の表7では、本屋儀兵衛版・無刊記版の二行目に「大名題・番目」、三行目には「座名」の表記を抜き出してある。正本には通常大名題・番目と座名が揃う。¹⁵ 正本のみが伝存する場合は、表記の比較ができないので表7に載せていない。

表7で見ると、本屋儀兵衛版・無刊記版には、大名題の「番目」を除く表記が多く見られ、座名に関しては「中村」「中むら」のごとく「座」の文字を載せない傾向にあることがわかる。こうした表記の違いは何を意味するのだろうか。座名は江戸では官許の興行権を有する者を示す。大名題は狂言全体の名題である。

これに関して、次の記述を引いてみたい。『享保撰要類集』（徳川幕府引継書第一集、国立国会図書館蔵）の中に享保六丑年閏七月に町奉行中山出雲守と大岡越前守より有馬兵庫頭へ差上げた文書の控に、次のような方針が出されている。

一 狂言本并浄瑠璃本

右芝居にて狂言ニいたし候事浄瑠璃座ニ而あやつりにいたし候事を其儘致板行候儀は不苦候事

一 慰本

右狂言ニも不致義を狂言之様ニ作り成シ無筋事を草紙ニ綴り二三冊あるひハ四五冊物ニいたし近來京都より差下シ江戸にても綴申候此等之類向後無用ニいたし若京都より差出シ候歟新規ニ致板行候ハ奉行所江可訴出事¹⁶

右之通書物屋并絵双紙屋江可申聞哉 以上

この後半の慰本に関する記述は長唄正本の範囲外となるので、こ

では扱わない。前半部分の、芝居上演されたものは、何故そのまま版行して良いのかという点について、『京阪書籍商史』から大坂の浄瑠璃本に関する次の記載を参考とする。

浄瑠璃本は一般の書籍類と異り、奉行所の開板免許を要しなかった。これは操芝居に於ての浄瑠璃が上演するときには、其の前に豫め官許を得たのであるから、其の浄瑠璃本を出版するに當り、其の免許を反覆する必要がなかったからである。¹⁷

また、祐田善雄『浄瑠璃史論考』においても浄瑠璃本の開板順序として、これと同様の指摘がなされている。

新作浄瑠璃が書き上がると、座元より町奉行へ書き本を届け出て字句の検閲を受ける。上演許可が下りると座元から本屋仲間へ原稿が渡される。彫板をして摺本が作られると奉行所へ献本するが、これを上げ本と言う。これらの手続きを済ませると、仲間行事株帳面に記入されて板株の権利が発生する。上げ本料や白板歩銀を納めると、行事から添章が下附されて、一般に販売することが認められる。(以下略)

以上の順序で出版したから、上演許可を得た浄瑠璃本は、出版の審査を省略して上げ本を納めるだけで出版が許可されたが、一見板元に有利と思われる簡便主義の扱いは、板元が興行者と特別に密接な利害関係を持つ場合には好都合であったが、そうでない者には誠に厄介で、局外者が割り込むことのできない組織になっていた。¹⁸

すなわち、上演時にすでに上演許可を得ている内容を版行する際には、

検閲の必要がなかったと言うことである。江戸の歌舞伎の音曲本に対しては、地本問屋仲間の行事による新本改めは行われていなかったようであるから、改版手続きもなかったと見られる。¹⁹

歌舞伎の興行に際し、事前に狂言台帳(正本)などの検閲を行っていたことを伝える記事は、時代が下るが存在する。『東都劇場沿革誌』中村座の部十二代の部分には、遠山左衛門尉から阿部遠江守に江戸北町奉行が御役替となった折、猿若町の狂言座・操座芝居興行の見分について問われ、天保十四年(一八四三)三月に名主から差上げた文書が載り、その中に次のように出てくる。

一猿若町壱丁目狂言座勘三郎、同町式丁目同羽左衛門、同町操座吉右衛門、同孫三郎、右四座芝居興行相はじめ候以前、前広二正本并看板名題、番付、絵双紙等迄、下絵を以相伺、同済の上狂言稽古致し、右狂言相始メ前日衣装私共見分致品書を以奉伺、尤私共見極がたき品有之候節は、右衣装之内品数不定持参御見分を受、相済候得ば翌日より興行相始候手續にて、是迄御掛北後番所へ申上来候。²⁰

ここには、座元が脚本の清書稿や、看板・番付・絵本番付に下絵を付け、前もって伺いを立てていたことが記されている。こうした上演前の検閲がいつから行われていたのかは、明かではないが、おそらく、寛政六年(一七九四)の『三芝居狂言座取締方議定証文』の提出以降、厳格になったと推測する。ここに出てくる絵双紙は絵本番付を指すが、音曲正本も入っていた可能性がある。また、『三座例遺誌』(享和三年刊、前出書)には、顔見世番付を町奉行や町役人に提出していたこと

が記されている。以下に、その部分を抜き出す。

一、十月十五日、十六日ごろより役者附を出す。先づ最初に役者中江座元より是を配り、扱、茶屋／＼より客人江配りて、夫より町中江売出す也。但、此役者附町御奉行所并諸かゝり御役人方、町年寄組合名主肝煎方江者、座元より差上る也、依て千枚程は板元にて役摺とて太夫元江運上に出スよし、

これに続く記述では、顔見世番付を奉行所に提出していたことが書かれている。

一、「十月」廿日ころより狂言番付を出す。但、入替やくしや付の出る時にかはる事なし。尤、狂言番付ハ常にも両町御奉行所へさし上る也。

また、『作者年中行事 式之巻』（嘉永元年成立、前出書）の次の記述によれば、中村座では狂言の台帳を一年五度の節供には提出していたことが記されている。

〔九月晦日カ〕

同日役割番附出来して、町内町中を売歩行事。手廻しの早年也

一、此日は御町掛りの御役人様方御出役ゆへ、顔見勢の名題役割帳を自身番へ出す。

但、寄初の書物を御覧二入る事。

一、又、沓丁目ばかりは外に一通り認させて出す事。

一、役者衣装、何枚／＼と書て名主様へ出す。二丁目三丁目にはなしといふ。

一、正本。五節句とも伺に出す。沓丁目の例としるべし。年中

同じ。

中村座を「猿若町」沓丁目と表していることから、この記事は芝居町が天保十二年（一八四一）から十三年（一八四二）にかけて移転した後の内容となる。衣装が華美にならないよう、また、上演内容についても芝居町内部で自主的に吟味を行った上で、役者名や狂言の内容を事前に町役人に届け出ていることがわかる。

上演許可を得ている狂言の名題や、上演権者を表す座名は、今よりも重みのあるものであったと推測される。したがって、座の許し無く、出版物に狂言名題や座名を載せることには、憚りがあつたのではないだろう。長唄正本では、上演時正本を出すという座の専属版元の権利は無断版行物の存在によって侵害されていると言える。しかし、上演権者の存在によって、大名題と座名の表記に正本との差別化が図られている点に、この時期の劇場出版物の特殊な商慣習を捉えることができる。

中村座の専属版元が形成されると、村山源兵衛は初版を独占的に版行する権利を得る。すると、その専属版元の権益に不正参入しようとする版元が現れ、村山版を版下に用いた事実上の重版が出回るがそれを止めさせる手立のない状態が宝暦三年（一七五三）から安永六年（一七七七）に亘って続いている。このような状況を、表1と表7の本屋儀兵衛版・無刊記版に読み取ることができる。

四 本屋儀兵衛との相版化

174頁の表2に戻って、続きの安永六年（一七七七）から天明期（一七八一〜一七八八）に亘る版元の動向を見ていく。安永六年十一月上演の『めりやす 時雨月』から安永七年（一七七八）二月の『めりやす 男文字』にかけては、正本の表紙の版元欄に「板元村山源兵衛」と並んで「本屋儀兵衛」が「賣所」として記されるようになる。次にその図版を掲げる。

『めりやす時雨月』表紙 国立音楽大学附属図書館竹内文庫本



そして安永七年七月『其紅葉懺悔物語』からは、村山源兵衛と本屋儀兵衛が相板元として連記され、さらに安永七年十一月の『めりやす 花夕部』・安永八年（一七七九）九月の『相の山』では両者の版元名

の下中央に「正」と加わり、本屋儀兵衛は正本版元に加わる。安永八年正月の『初夢姿富士』の奥書には「中村座正本板元」、安永八年八月の『華筵千種の丹前』の表紙では版元欄に「正本板元」と両版元名の上中央に記入されるのである。次にその図版を掲げる。

『華筵千種の丹前』表紙 国立音楽大学附属図書館竹内文庫本



注意すべき点として、本屋儀兵衛が村山源兵衛と相版を組むと、本屋儀兵衛版だけではなく無刊記版もまた版行されなくなっていることがある。ゆえに、無刊記版は本屋儀兵衛が版行しているとも推測できる。これまで、実質的に重版を出して村山の初版を出す権利を侵害してきた本屋儀兵衛に対し、村山源兵衛は相版を組むことによって弁済

措置が取れるようになったと見られる。村山と本屋儀兵衛の相版になつてから、長唄正本の書体や絵が変わつたように感じられるので、おそらく本屋儀兵衛が出資するだけではなく、版を製作しているのではないかと推測する。

しかし、177頁の表3に見て取れるように、村山源兵衛は、天明二年（一七八二）十一月から松本屋万吉と相版を組むようになる。すると、長唄正本の書体や絵の雰囲気もまた変わるため、これも松本屋側で版を製作しているのではないかと思われる。

『琴柱のかり』表紙 松浦史料博物館本



一方、村山源兵衛との相版から外れた本屋儀兵衛は、天明二年（一七八二）十一月上演の『雪花月』を再び単独で版行しているが、この版は村山源兵衛・松本屋万吉相版とは別版である。そして、この本屋

儀兵衛版では、表紙の座名が「中村」となっており、やはり「座」の文字は載せられていない。次に掲げるのは、早稲田大学演劇博物館安田文庫本の表紙部分である。



松本屋万吉は天明期〜寛政期に市村座・桐座・森田座の番付類をも出しているが、本屋儀兵衛はその後、長唄正本や番付の版行には携わっていない。

このように、村山源兵衛が本屋儀兵衛を相版元に組み入れたことは、寛政二年（一七九〇）に地本草紙問屋仲間の行事改め導入の触れが出る前の段階に、同業者間で何らかの申合せができたことを窺わせる。また、本屋儀兵衛が貸本業者であつたとすれば、本屋儀兵衛が長唄正本の版行から手を引くのは、出版取締りの対象が地本草紙問屋・貸本屋に向けられていくことに連動した動きと受け取れようか。

五 沢村屋と版行形態の変化

178頁の表4で続きを見ていくと、天明六年（一七八六）十一月上演の『狂乱岸姫松』で村山源兵衛は沢村庄五郎と相版を組むようになる。翌天明七年二月上演の『重荷の塩柴』では、両版元の中央上部に「正銘」と記されるようになる。次に『狂乱岸姫松』の表紙を掲げる。東京芸術大学附属図書館蔵の透写本である。



寛政三年（一七九一）正月上演の『めりやす うわ帯』では、「沢村庄五郎」から「沢村屋利兵衛」に版元名が変わる。そして、同年の正月上演の『対面花春駒』では、「村山源兵衛」の文字が「沢村屋利兵衛」より小さく扱われ、さらに同年五月上演の『五月菊名大津絵』においては、これまで中村座の専属版元であった村山源兵衛の名が版元

欄から消え、沢村屋利兵衛が単独で正本上に版元として記されるようになる。次に『めりやす うわ帯』早稲田大学演劇博物館安田文庫本の表紙を掲げる。



村山源兵衛は、引き続き中村座の番付は版行しているようであるから、長唄正本の版行の権利（株）を沢村屋に譲渡したと推測される。²¹

表4では本屋儀兵衛版は出ていないが、それよりも特筆すべき点として、『八朔梅月の霜月』や『対面花春駒』のような人気曲は、沢村屋利兵衛が再版を出すようになっていたことが挙げられる。しかも、奥書には初版の刊行年月を入れ「沢村蔵板」と記して、沢村屋が原版の所有者であることを明記している。先にも述べたが、伊賀屋や村山源兵衛が長唄正本の再版本を出している形跡が基本的に見られないため、村山源兵衛の中村座の専属版元として長唄正本を版行する権利は

初版に対するものであったと考えられるが、ここに至って長唄正本の版行形態に変化が起きているのである。寛政元年（一七八九）七月上演の『八朔梅月の霜月』で示そう。初版は村山と沢村庄五郎の相版と見られる。次の図版は、早稲田大学演劇博物館安田文庫本の表紙と本文終丁裏である。沢村庄五郎は、まだ蔵版していないと推測される。



八朔梅月の霜月
 村山三郎
 沢村庄五郎
 大谷屋
 左馬助

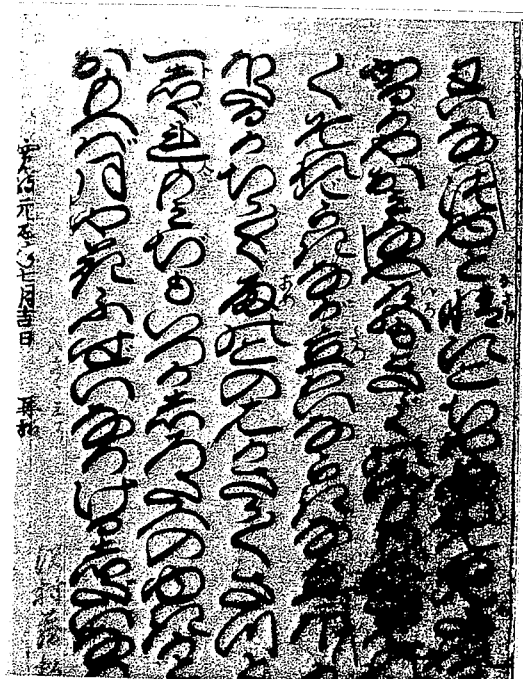
次の図版は、村山・沢村相板の同版後印本であるが、表紙の版元名部分が削除されている。版元間に蔵版をめぐる問題が起きたのである。国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫本である。



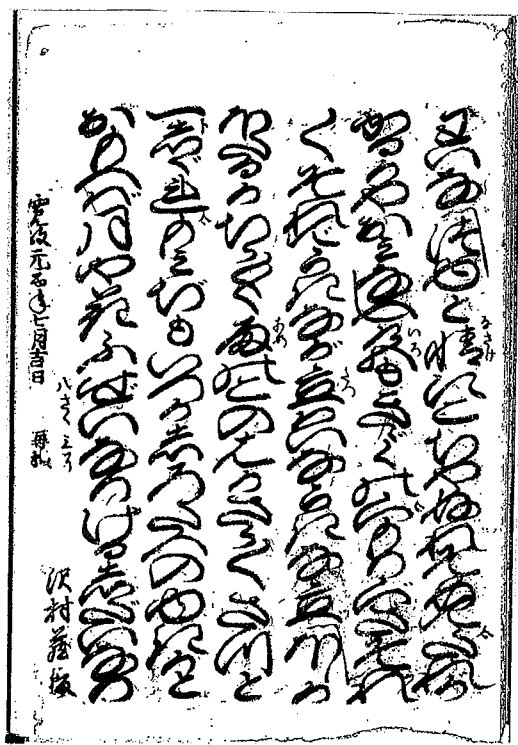
八朔梅月の霜月
 村山三郎
 沢村庄五郎
 大谷屋
 左馬助

次に掲げるのは、二種の沢村屋利兵衛版である。どちらも再版本であるが、初演時に蔵版者が設定されていることを、巻末に記している。

沢村屋利兵衛版Ⅰ種 明治大学図書館松和文庫本



沢村屋利兵衛版Ⅱ種 早稲田大学演劇博物館安田文庫本



最後に掲げるのは、沢村屋利兵衛と森田屋金蔵の相版である。沢村

屋以外の版元が「八朔梅月の霜月」を版行する際には、蔵版者である沢村屋と相版を組むかたちが取られている。次に国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫本の表紙を掲げる。



沢村庄五郎については138頁第三章「四 版元の交代」のところで取り上げているが、沢村屋利兵衛と同一人物である可能性が高い。『東都劇場沿革誌料』上巻「役者名目商店のこと」には、沢村屋利兵衛が堺町の家主であり、天明頃に沢村屋宗十郎の油店を継いで、絵双紙株を取得したことが書かれている。これは伝本の状況と一致する。

まとめ

以上、中村座の長唄正本について上演順に、その版行上の特徴を図版を用いて具体的に説明してきた。異版については、正本の流用関係が認められる本屋儀兵衛版と無刊記版を重点的に取り上げた。だが、15〜17頁の『姿の鏡関寺小町』④⑩で示したように、それら以外にも異版は多く存在している。本屋儀兵衛版と無刊記版は正本が出た直後にこれを模倣して版行されたと考えられる。一方、④⑩のような版は、表紙に初演時の大名題と役者名・座名・演奏者連名などが記入されているが、書体や絵には明らかに時代様式の違いが読み取れ、版元にも座との専属関係は認められない。これらの薄物は版行の時期や目的が異なると考えられるため、他座と合わせて別に取り上げることにした。

1 『日本庶民文化史料集成』第六巻 歌舞伎（三一書房、一九七九年）。

2 『続燕石十種』第三巻（中央公論社、一九八〇年）。沢村屋利兵衛と和泉屋権四郎・福地茂兵衛・富士屋小十郎の記載位置に誤りがあると思われる。

3 前掲注1。

4 『明和妓鑑』の「三芝居番附板元」によると、市村座では役者附と浄瑠璃・長唄・せりふを扱う版元がすでに分かれているようである。森田座では中村座と同様に金井半兵衛が一括して扱っている。

5 拙稿「長唄正本における諸本整理上の問題点（その一）」（『北海道東海大学紀要』十五号、二〇〇三年）。

6 このほかに⑩の同版である森田屋金蔵・山本平吉相版本、森田屋金蔵・岩戸屋万吉相版本が東京芸術大学附属図書館にある（768.52/N22とN15）。字表紙本も国立音楽大学附属図書館竹内文庫にある。

7 拙稿「河東節正本の版行に関する一考察―江戸歌舞伎における初期の音曲正本と位置付けて―」（『北海道東海大学紀要』第十九号、二〇〇六年）において伝本の版面の比較を行っている。

8 廣瀬千紗子「江戸歌舞伎せりふ正本目録稿」（『演劇研究会会報』第三十八号、演劇研究会編・発行、二〇一二年）を参考とし、自身で伝本調査を行った。

9 松本隆信「画入読本外題作者画工書肆名目集」（『国文学論叢 第一輯 西鶴と資料』至文堂、一九五七年）。

10 前掲注1。

11 前掲注1。

12 前掲注1。

13 前掲注1。

14 長唄正本における筆耕については、木村捨三「長唄正本の筆耕に就いて」（『日本書誌学大系三十一『木村仙秀集』五巻、青裳堂書店、一九八四年）の論考がある。

15 村山源兵衛版で、表紙に座名や大名題の一部を欠く正本には次のものがあつた。

座名を欠く正本

『琴歌 雪の夜』松浦史料博物館本

大名題に付く何番目の部分がない正本

『渡初鵲丹前』早稲田大学演劇博物館本 特へ11-1212-12F

『紅白姿色競』松浦史料博物館本

『再咲花娘道成寺』早稲田大学演劇博物館本 特へ11-1212-22M

『色増袖』松本屋万吉との相版 松浦史料博物館本

16 この慰本の条については、長唄正本の奥書にも対応すると見られる記述があり、市村座の長唄正本であるがここに記す。享保十九年春上演の『やつし西行富士見五郎』泉屋権四郎版（早稲田大学演劇博物館蔵）である。

▲此ころせけんより。きやうけんニもいたし不申候。まきらわしきせりふ／あまた相見へ申候間。此うへ何ニよらず。まへ／＼より。御ぞんじのはん元／よく／＼御あらためなされ御もとめくだされへく候

17 蒔田稲城『京阪書籍商史』（出版タイムス社、一九二八年）。

18 祐田善雄『浄瑠璃史論考』（中央公論社、一九七五年）。

19 「義太夫本公訴一件」（『日本庶民文化史料集成』第七巻 人形浄瑠璃、三一書房、一九八三年）。

20 関根只誠纂録・関根直正校訂・国立劇場芸能調査室編『東都劇場沿革誌料』下〔歌舞伎資料選書6〕（国立劇場芸能調査室、一九八四年）。

21 中村座上演のせりふ正本においても、長唄正本と同様に村山源兵衛と本屋儀兵衛の相版化、沢村屋利兵衛への版元の移行が起きている。

第二節 江戸版長唄正本に見る版行形態の変化

―享保・寛政期の市村座の場合―

はじめに

中村座に続き、ここでは市村座の長唄の薄物について、書誌的データをまとめ、版行上の特徴を述べていく。中村座の場合、享保期には座と提携して長唄正本を出す版元が複数存在していたが、宝暦十二年以降になると村山源兵衛が座の専属版元になり上演時正本の版行を独占するかたちになる。

すると、村山版に酷似する版も現れる。そのような版は、中村座の場合には本屋儀兵衛版と無刊記版に限られていた。よって、第一節では中村座の上演作品について村山源兵衛版と本屋儀兵衛版・無刊記版を集めそれらの版面を比較した。すると、本屋儀兵衛版・無刊記版には村山版をそのまま、あるいは部分的に版下に用いている版が見つかり、それらが長期間に亘って出続けている状況が明らかになった。本屋儀兵衛は村山と相版を組んでおらず、無刊記版も版元名を載せず出版行しているのであるから、これらは専属版元の独占的権利に不正参入しようとする無断版行物と推測される。

本屋儀兵衛版と無刊記版は、村山にとって版行にかかる経費の回収を著しく妨げる存在であるにも関わらず、それらの版行を差し止める

ことができない状態が続いている。

ところが、安永六年（一七七七）十一月から、村山は本屋儀兵衛と相版を組み、損失を回避する方策が立つようになっていく。さらに寛政元年（一七八九）頃には、中村座の専属版元が沢村屋利兵衛に入れ代わり、正本上に「蔵版」と明記し、原版を所有して上演時だけではなく再版をも行うかたちに版行形態が変化する。

こうした、中村座の長唄正本に捉えられた版行上の特徴は、市村座の場合にも起きていることなのであろうか。以下に、中村座の場合と同様に、市村座上演の長唄の薄物を集め、書誌データを取りながら検討して見たい。

一 市村座の長唄正本の版行形態

―書誌データのまとめ―

（一）市村座上演の長唄の薄物の特徴

市村座で上演された長唄の薄物は、中村座に比べ曲数が多く、また、当たった作品も多かったと見えて版種も非常に多い。市村座は長唄所作事に力を入れ、多用する傾向にあったと言えよう。薄物を出す版元も数が多く、明和五年（一七六八）十一月上演の『教草吉原雀』などは特に流行った曲と見えて、版元の異なる絵表紙正本が各所蔵機関に存在する。それらの版を整理して掲げると、以下のようになる。

①泉屋権四郎版・上下二冊本

②無刊記版（ⅠⅤⅦ七種存在）上下二冊本と上下一冊本が有る

③葺屋町かし通り 富士屋小十郎版（三種）各上下一冊本

④葺屋町南側 富士屋小十郎版 上下一冊本

⑤富士屋小十郎／大伝馬町二丁目 伊賀屋勘右衛門相版

上下一冊本

⑥新和泉町北側 伊賀屋勘右衛門版 上下一冊本

⑦富士屋小十郎／伊賀屋勘右衛門／墨丁の相版

上下一冊本 「芳蜜画」

⑧神田平永町 森田屋金蔵版（四種）各上下一冊本

⑨堀江町四丁目 多田屋利兵衛版 上下一冊本

⑩小傳馬町三丁目 蔦屋重三郎版 上下一冊本

⑪通油町北側 浜松屋幸助版 上下一冊本

⑫よし町角 山本平吉／芝神明前 和泉屋市兵衛相版

上下一冊本

⑬堺町 沢村屋利兵衛／岩戸屋久兵衛相版 上下一冊本

⑭堺町 沢村屋利兵衛版（二種）上下一冊本

うち、1種に「巳の二月再板 二代目豊久画」とあり。

⑮原板 沢村屋利兵衛／求板 丸屋鉄次郎版 上下一冊本

「文久四年再刻」、「明治十七年再々刻」

図版は掲げないが、十二（無刊記版を加えると十三）の版元が『教草吉原雀』の薄物の版行に携わり、①Ⅴ⑮の異版が存在するのである。

これらの表紙には初演時の大名題・座名・役名・役者名・演奏者連

名が等しく記入されている。だが、⑦⑩⑫⑬などは、役者絵に江戸時代後期の様式が認められ、大名題の示す上演年月（明和五年十一月）がそのまま刊年になるとは認めがたい。また、このなかで、②の特にⅠⅤⅦの版種は①と表紙・本文が酷似しており版面の流用関係が認められる。さらに、②無刊記版のⅠⅤⅦの版においては、大名題や座名の表記が不完全か、あるいは無かったりする。以上のことは市村座に限らず、中村座の薄物についても共通する内容である。

「教草吉原雀」の①Ⅴ⑮の版は、すべてが初演時に宣伝・観劇を目的として版行されているのではないと考えられる。伝本の状態から推測できる版行の目的をいくつか挙げて見る。

- ・市村座において新規に上演される（初演される）長唄を、座と専属関係を結んで正本として版行する版元

- ・右の正本が出ると直ちにこれを無断で版下に流用、あるいは模倣し、上演時の需要に不正参入する版元

- ・上演後に稽古本として版行する版元（座に板木趣意金のようなものを支払っている可能性もある）

それでは版元にはどのような者達が考えられるであろうか。

- 地本問屋（芝居専門の小規模な出版工房）

- 大手の地本問屋（流通上の売所であるが、売れ筋商品を熟知することから版行も行った）

- 貸本屋・版木屋

- 芝居町付近にあって、茶屋・雑貨屋等を営み、芝居関係の出版物も販売する。株を取得して版行をも行うようになる。

「教草吉原雀」を版行している、伊賀屋勘右衛門、萬屋重三郎は『義太夫本公訴一件』¹に、地本問屋仲間の月行事として登場してくる。岩戸屋久兵衛は岩戸屋源八の分家であろうか。また、多田屋利兵衛は「貸本渡世」、浜松屋幸助は「板木職之者」として「仲間規定不相弁」と書かれているが、安永期に義太夫抜本を江戸で版行する者として名が挙がっている。同書には義太夫抜本は稽古本目的の版行物であると書かれている。とすれば、江戸で義太夫抜本を版行しているこれらの版元が手掛ける長唄の薄物もまた、稽古本目的で版行されていた可能性があるだろう。

三升屋二三治の『紙屑籠』に次のような記述がある。

作者、豊後太夫、はやし方歌三味線は、給金はとれど、頼み人にて、芝居の内の物にてはあらず、作者は文人、はやし太夫は芸人ゆえ、市中に住居して、けるこの師匠をする²

常磐津・富本・清元などの豊後系浄瑠璃の太夫や長唄の唄方・三味線方の者達は町方に住み、素人相手に教授を行っていた様子が述べられている。したがって、上演後に稽古本の需要があったと推測される。ゆえに、多くの版元が薄物の版行を行っているのである。『乱菊枕慈童』、『鶯娘』、『初咲法楽舞』、『其面影二人枕久』、『冬牡丹五色丹前』や『隈取安宅松』も版種が非常に多い市村座の長唄曲である。

(二) 演劇書における市村座の専属版元

夥しい数の伝本を整理して行くにあたり、初版本(上演時正本)の手掛かりを演劇書の記述に求めて見ると、劇場出版物の版元に関して、市村座との専属関係を示す内容が次のように出てくる。

『明和伎鑑』(明和六年(一七六九)十月刊)

三芝居番付板元

市村羽左衛門芝居

役者附番付

さかい町 中嶋や伊左衛門

同

やくら下上り

たちはな町

長寄せりふ

いつみや権四郎³

三升屋二三治が書き残しているものでは、次の記述がある。

『紙屑籠』(天保十五年(一八四四)十月序文)

○三座番附の板元

市村羽左衛門

和泉屋権四郎 古昔の板元

さかい丁板元付 ふきや丁

福地茂兵衛 富士屋小十郎相板元

ふきや丁がし

山本重五郎

(中略)

古来より番附株は、其櫓によって爰にしろす、外に無し之、たゞし、都座、桐座も元櫓にしたがふ⁴

『賀久屋寿々免』三（弘化二年（一八四五）秋成立）

三芝居板元

市村座 番附絵付おふむ石／長うた薄もの 山本重五郎
同 役者附 福地茂兵衛

（中略）

福地茂兵衛、山本重五郎ハ、名前株持主ゆゑ、住所外名前故相
糺さす。爰にしるすのみ。両家とも猿若町二丁目、茶屋也。

近年三座とも板下、今の清水正七認る。中頃迄、山本重五郎・
高麗屋金三郎、番附を書し事。

『明和伎鑑』の記述によれば、市村座の劇場出版物は中村座と異なり、
番付を扱う版元と、浄瑠璃・長唄・せりふ正本を扱う版元が早くから
分かれていたようである。

『明和伎鑑』と三升屋二三治の記述を合わせると、市村座専属の長
唄薄物の版元は、泉屋（和泉屋）権四郎が古く、後に福地茂兵衛・山
本重五郎・富士屋小十郎に代わっている。『紙屑籠』における「さか
い丁板元付／福地茂兵衛」部分は誤記と判断される。福地茂兵衛は市
村座の座元の親族であるから、葺屋町板元付になるはずである。また、
『賀久屋寿々免』では福地茂兵衛と山本重五郎の住所が猿若町になっ
ているので、芝居町が猿若町へ移転した天保十二年（一八四一）〜十
三年（一八四二）以降のことを表していることになる。

これらの版元が、市村座の長唄正本（上演時正本）を版行していた
と考えられる。これを手がかりに、各所蔵機関に伝わる市村座の長唄

の薄物を集め、その中から和泉屋（泉屋）権四郎・福地茂兵衛・富士
屋小十郎・山本重五郎が版行するものを上演順に並べて作成したの
が、199頁の表1である。上演年月は表紙に記載されている大名題から
取って、表1の最上段に載せている。二段目は正本の外題（曲名）であ
る。三段目には正本の版元名・住所や奥書などを載せている。

表1の最初の二作品、享保十八年（一七三三）一月上演の『色里踊
口説あれみさしやんせ節』と次の『大踊こんこりき節』の伊賀屋版
は、坂田兵四郎の名が載っているため長唄正本と見なしたが、正本に
「長唄」の記載はなく、切場の総踊りに用いられた音頭唄の正本であ
る。伝本において、享保十九年（一七三四）から長唄正本の版元は泉
屋権四郎になっており、『明和伎鑑』や『紙屑籠』の「和泉屋権四郎
古昔の板元」部分の記載が裏付けられる。

長唄正本と同じ薄物の判型をとり、版元も共通する劇場出版物に、
役者のせりふやつらねを載せた正本がある。東洋文庫蔵のせりふ正本
『魚屋布袋市右衛門／大谷廣治／掛合せりふ地口魚盡』第五巻の奥書
には「宝暦六歳子ノ三月十一日ヨリ」と上演予告が入り、続いて次の
ような文言が記入されている。

浄るり／せりふ／長うた／市村座はんもと／右之外狂言などい
づけ、やくら下、一まいすりのゑ外方一切出シ不申候

すなわち、「歌舞伎の」浄瑠璃正本、せりふ正本、長唄正本、役割番
付・辻番付・一枚絵などの市村座の劇場出版物は、泉屋が独占版行し
ていると書かれている。「外より一切出し申さず」の部分は、言外に
無断版行物の存在を示しているように感じられる。

中村座の長唄正本では見られなかった点として、泉屋自身による再版が六例見られ、これについては表1の4段目の版元2の欄に記載している。そのうち、次の2例では誤刻の訂正を行っている。

宝暦六年（一七五六）三月上演の「両州隅田川名所盡」の場合、版元1の泉屋版では、演奏者連名の上部の「長哥」とあるべきところが、「哥哥」となっており、これを版元2で「長哥」に直している。

宝暦十二年（一七六二）四月上演の「柳雛諸鳥轉」の瀬川菊之丞の傘踊りの正本では、版元1の泉屋版の表紙の右側の傘の下に「うしろめん瀬川菊之丞／所作相つとめ候」とあるが、版元2の泉屋版では誤りの部分「うしろめん」を削除して訂正し、覆刻している。この例について、次に図版を掲出する。

泉屋権四郎版 フランス国立図書館本の表紙（破損有り）



泉屋権四郎覆刻版 早稲田大学演劇博物館安田文庫本の表紙



泉屋が再版を行う例はこのように存在するが、その数は少なく、目的も誤刻の訂正や、上演時における当たった作品の増刷りと見なされ、原版を所有して再版を行う態度は読み取れない。やはり中村座の場合と同様、泉屋権四郎の版行の独占的権利は上演時（初版）に対するものであったと考えられる。ゆえに、演劇書において泉屋は「番付板元」と称されているのではないだろうか。

（三）泉屋権四郎について

初期の長唄正本には、「せりふ入ながうた」と表紙に記載されるものがあり、せりふ正本と長唄正本が分離していない傾向も見られる。

よって、長唄正本を中心としながらせりふ正本をも視野に入れて、市村座の専属版元である泉屋の動向を199頁表1でたどってみよう。

市村座の専属版元として泉屋権四郎が現れるのは、長唄正本よりせりふ正本の方が先になる。管見によれば、抱谷文庫蔵の「せりふ集」に所収される次の版が古いものになろうか。

『藤戸物語掛合せりふ／衣川紅の潮』一冊 版元卸／和泉屋権四郎

(享保十六年(一七三二)の盆狂言「大角力藤戸源氏」第二番目に上演)

『市川團十郎同名盡のせりふ』一冊 横山丁一丁目新道／泉屋権四郎

／版元卸 (享保十八年(一七三三)正月上演「栄分身曾我」

第一番目に上演)

泉屋権四郎は、菊岡沾涼の『本朝世事談綺』巻之五に次のように書かれている。

紅絵、浅草御門同朋町和泉屋権四郎と云者、版行のうき世絵役者絵を、紅彩色にして、享保のはじめごろよりこれを売。幼童の翫びとして、京師、大坂諸国にわたる。これ又江戸一ツの産と成て江戸絵と云。

武藤純子が作成した「絵師別役者絵一覧」によれば、泉屋権四郎は享保三年頃から鳥居清忠・奥村利信・奥村源六・勝川輝重等の役者絵を細判紅絵・漆絵で版行している。同じ頃に鱗形屋・伊賀屋、中嶋屋・小松屋・江見屋・井筒屋の版元の名も見えており、これらの版元は河東節や長唄などの江戸歌舞伎の音曲本を扱う版元と大体一致するようである。泉屋権四郎は市村座の劇場出版物や役者絵を専門に扱う出

版工房であったと見られる。

表1で享保十九年(一七三四)三月の『やつし西行富士見五郎』と『江戸桜五人男掛合文七節』、寛保二年(一七四二)一月の『思いの緋桜』などの初期の長唄正本の奥書には浄瑠璃正本の奥書に倣った極め書き「松島庄五郎／坂田兵四郎直傳之正本也」が入っているが、延享五年(一八四八)四月の「菜の花小蝶の袂」からは「市村座板元」として泉屋の版元名と住所だけが記入されるようになる。

市村座のせりふ正本においても、享保元文期(一七一六～一七四〇)には中嶋屋・伊賀屋・泉屋の名が見られるが、寛保期(一七四一)になると泉屋権四郎の独占版行になっている。中村座では、村山源兵衛が「中村座板元」と正本に記すのは宝暦十二年(一七六二)以降であるから、市村座においては泉屋の専属関係はより早く形成されている。泉屋権四郎は数度移転しており、それを年代的に追うとおおよそ次のようになる。

江戸浅草見付御門前同朋町	享保十三年二月刊『役者評判一の富』
横山町一丁目新道	享保十八年二月刊『役者ぢぐち車』
橘町四丁目	元文四年二月上演せりふ正本『市川海老蔵』
橘町二丁目	延享四年四月上演長唄正本(表1)
本所松坂町一丁目	安永二年三月上演長唄正本(表1)

(四) 市村座の長唄正本と異版

ここまで、市村座の専属版元と長唄正本を中心に述べてきた。だが、42頁で「教草吉原雀」の伝本を例にとつて示したように、長唄の薄物は泉屋よりも、それ以外の版元が手掛けた版の方がはるかに多い。当たった曲は、多くの版元が版次を重ねて出しているのである。それらは、上演時正本とその異版群として捉えることができる。異版の表紙には初演時の上演情報（大名題・座名・役名と役者名・演奏者連名・役者絵）が等しく記入されており、正本と似た体裁を備えている点に特徴がある。これは中村座の場合と同じである。そして、その異版群の中には、特に正本と版面が酷似する版がやはり存在する。

明和元年（一七六四）十一月上演の「花錦嫩丹前」は正本の流用について説明するのに適している。この例により正本版元である泉屋権四郎版と、本屋儀兵衛版・無刊記版ⅠⅡⅣの関係を見てみよう。

- ① 橋町二丁目 泉屋権四郎版 上下二冊本
- ② 江戸橋四日市 本屋儀兵衛版 上下二冊本
- ③ 無刊記版Ⅰ種 「上下」一冊本
- ④ 無刊記版Ⅱ種 上下一冊本
- ⑤ 無刊記版Ⅲ種 「上下」一冊本
- ⑥ 無刊記版Ⅳ種 上下一冊本

これらの版種において、①の泉屋権四郎版が上演時に版行された初版となる。この①と、②の本屋儀兵衛版・③④⑤⑥の無刊記版は、版面が酷似しており、正本版元の泉屋版を版下に流用して作成されていると考えられる。このような手法を取る版は、市村座の場合においても本屋儀兵衛版と無刊記版にのみ見られることがわかった。

そこで、中村座の場合と同様に、市村座の長唄正本と本屋儀兵衛版・無刊記版について版の流用関係を捉えるために、伝本を、本文と表紙の場合に分けてそれらの版面を比較して見た。その結果を本文について表したのが199頁の表1、表紙について表したのは211頁の表2である。

表1で最上段の上演年月は長唄正本の表紙に記載されている大名題（狂言名題）から取り、二段目には外題を泉屋版・本屋儀兵衛版・無刊記版に共通する表記で載せている。三段目の版元1が初版（正本）の版元であり、版元名・住所と奥書を載せている。初版（泉屋版）が二種ある場合は版元2として四段目に載せた。版元1・2は、本屋儀兵衛版・無刊記版で版下に使われる場合は、それらの元版となる。

また、表1に掲げた版種の伝本の所在と所蔵番号は、220頁の「所蔵一覧 市村座の簿物形態の長唄本」に載せてある。ただし、摩滅や破損して状態の良くない版は載せない場合がある。また、版本と透写本両方が伝存する場合は、版本を優先して載せた。

表には、簿物の表紙に「長唄」の記載がなくとも長唄を演奏する唄方や三味線方の名が記入されている場合は加えている。したがって、音曲のジャンルとしては大薩摩節、歌説経、踊り口説、浄瑠璃を含んでいる。ただし、役者が歌っている音曲正本は含めなかった。

（五）泉屋版と本屋儀兵衛版・無刊記版の本文の比較

本屋儀兵衛版については表1の五段目に、無刊記版についてはその下の六段目に、泉屋版との版面の関係を表している。本文について版面の流用関係を表す際は、前節の中村座の場合と同じ方法を用いている。以下に再度それを掲げる。

A 1 元版をそのまま版下に用いて被せ彫りしている。

A 2 全体として元版を版下にして被せ彫りしているが、漢字や

仮名を意図的に入れ替えている箇所がある。

A 3 元版を参考にして版下を作り直している。

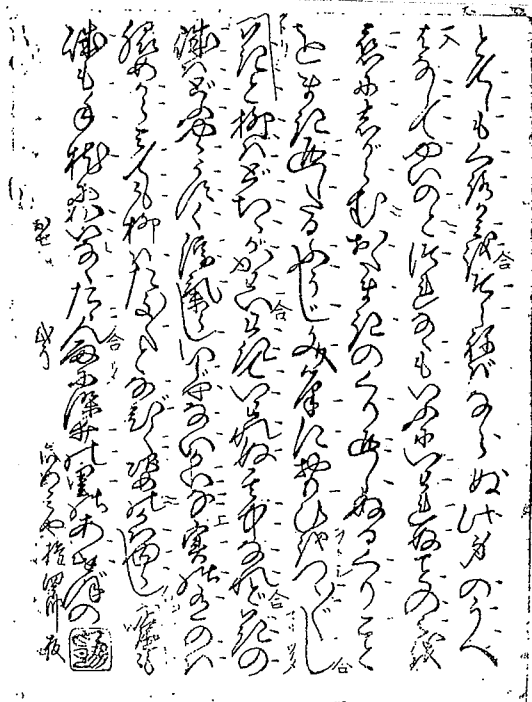
B (別版) 元版の意匠と関係なく版下を作成している。

ただし、A 3とB (別版) は明確に区別できない場合も出てくる。

A 1・A 2・A 3及び別版の具体例については、第一節の中村座のところで図版を用いて示したものと変わらないため、ここで再度説明は行わない。特殊な例を次に挙げよう。

下の図版は、安永二年(一七七三)三月、「江戸春名所曾我」四番続の第一番目四立目に上演された長唄所作事『初昔文の仲立』の正本である。次頁に掲げた無刊記版I種の本文は、泉屋権四郎版の本文を版下に用いて被せ彫りしたと推測される。その際に漢字を仮名に変えたり、変体仮名を変えたりしていないので「A 1」と判断できるのだが、終丁裏の末行において、泉屋版にある角形の「鼎嶽印」を削除し、その跡の不自然な空白をなくすために最後の6文字「里のあけぼの」を書き直して彫っている。したがって泉屋版に対するこの無刊記版I種の本文は、「A 2」となり、表1 206頁に記載してある。なお、無刊記版I種では巻末の「いつミや権四郎板」も除かれている。

泉屋権四郎版の表紙と本文終丁裏 抱谷文庫蔵本



衛版 「作者与風亭／富士田楓江述」を内題下に欠く

安永七年二月上演『(道行)力竹箱根鶯』無刊記版Ⅰ種 「中重述」
を内題下に欠く

安永九年九月上演『山姥四季英』無刊記版Ⅰ種 「杵屋林鷺述」
を内題下に欠く

内題下署名をそのまま残す例としては、次のものがある。

明和二年正月上演『夜鶴綱手車』無刊記版Ⅰ種 「金井三笑述」

明和六年十一月『隈取安宅松』無刊記版Ⅰ種 「富士田楓江直傳」

明和七年正月上演『廓盃』無刊記版Ⅰ・Ⅱ種 「楓江述」

同年正月上演『かほよ鳥』本屋儀兵衛版・無刊記版

「作者与風亭／富士田楓江章指」

明和七年八月『関東小六後雛形』本屋儀兵衛版 「与風亭述」

(iii) 本文末の筆耕印について

筆耕の署名または筆耕印の刻入は本文末にあり、次のものが見られる。

「沾翁」 寛延四年三月上演『鳴神上人北山桜』泉屋版のみ

「丈阿」 宝暦十年六月上演『仮枕』

鼎峨印 明和七年十一月上演『翁草霜舞女』

泉屋権四郎版を版下に流用する本屋儀兵衛版・無刊記版においては、これらの筆耕名・筆耕印は、次の一例を除いてすべて削除されていた。

安永三年(一七七四)三月上演の『花信風折帽子』無刊記版Ⅰ種の

本文は、泉屋版に対してA1の關係にあるが、本文末の「鼎峨印」を残している。

(六) 正本と本屋儀兵衛版・無刊記版の表紙の關係

長唄正本の絵表紙についても、本屋儀兵衛版と無刊記版において泉屋権四郎版を版下に利用している例が多く見つかる。中村座の長唄正本の場合と同様の識別方法により、元版との關係を211頁の表2に記載している。

表紙A1 泉屋版を元版とし、表紙をそのまま版下に行している場合。元版の版元名・住所は除かれている。

表紙A2 泉屋版の表紙を元版とするが、部分的に手を加えたり、省略をしている場合。

表紙A3 版下を書き直しているのであるが、元版を模倣して作り直したと認められる場合。

B(別版) 元版の表紙と意匠的關係性が直接認められないと判断される場合。

以上は表紙の全体を版下にとる場合であるが、正本の外題・囃子方連名・絵などの部分を切り取り、書き直した版下に貼って表紙を作るやり方も認められる。特に絵、あるいは絵の輪郭を元版からとっている場合を、表紙の全体を版下にとる場合と區別して、絵A1(絵全体を版下にとる)、絵A2(絵の輪郭または一部をとる)、絵A3と表して、表2に載せてある。

市村座の正本と本屋儀兵衛版・無刊記版における表紙の流用関係については、中村座の場合と同様であるため、ここに具体例を掲げることとは行わない。泉屋版の表紙の一部を切り取り、配置を換えて版下に用いていると見られる例を次に掲げる。48頁下段と49頁上段に掲げた「初昔文の仲立」の表紙を見て欲しい。49頁に掲載した無刊記版I種の表紙は、その前頁の泉屋権四郎版を版下に用いていると見られるが、その際に演奏者連名枠の下段にある泉屋の版元名と住所を除き、空欄となった部分に、泉屋版の座名「市村座」の「市村」部分を切り取って入れている。また、大名題「江戸春名所曾我四番續第一番目四立目」部分が無刊記版I種では削除されている。ゆえに、216頁表2の安永二年三月の無刊記版I種のところには「表紙A2」と記載してある。

このように正本を版下に流用する際、元版にわざわざ手を加えていることは、本屋儀兵衛版や無刊記版が無断版行物であることを示しており、重版行為の指摘に対する工作と受け取れる。

(i) 大名題と座名の表記について

211頁の表2を見ると、泉屋版とA1・A2の関係にある本屋儀兵衛や無刊記版の表紙においては、大名題や座名が不完全に表記されており、これは中村座の場合と同じである。また、座名も、「市村」「市むら」のように「座」を除いた表記が多く見られる。

(ii) 絵師名について

市村座の長唄正本に記載される絵師の署名には、次のものがある。
泉屋権四郎版

「鳥居清經画」

明和四〇五年（一七六七〜一七六八）上演の正本に記載がある。
『塩衣須磨佛』・『六出花吾妻丹前』・『初恋心竹馬』・
『振袖京早咲』・『魁都童』・『揚屋入曲輪誰袖』

「清經画」

安永三〇七年（一七七四〜一七七八）上演の正本に記載がある。
『風流錦誰袖』・『初霜楓姿絵』・『（めりやす）夕時雨』・
『温泉山路鶯』・『（めりやす）鳥もがな』・『家桜朧双陰』・
『濡衣波玉橋』・『帰る雁』・『（めりやす）貞と顔』・
『（めりやす）きせ綿』・『蝶花若草摺』・『（めりやす）言の葉』・
『霞立雲舞振』・『道行恋弦掛』・『闌の笛』・『（めりやす）雪の梅』・
『（道行）力竹箱根鶯』・『双面濡春雨』・『さし茂草』

「鳥居清英画」

安永三〇五年（一七七四〜一七七六）上演の正本に記載がある。
『（めりやす）夜半の鐘』・『（琴唄）琴とはば』・『梅丹前模様』・
『月額秋花鎗』・『誰袖賤花賣』・『佛須磨狩衣』・
『（めりやす）廓灸する』・『鉢扣紅葉袖』

「豊章画」

安永七年（一七七八）の上演正本。
『大津繪姿花』・『（女竹男竹）分身五郎』

「豊好画」

安永七年の上演正本。

『家橘花男道成寺』・『花橘栄丹前』・『都娘菊の寿』

葺屋町かし通り 富士屋小十郎版

「清元画」

天明八年（一七八八）の上演正本。

『（追善）藤しのだ吾妻紫』・『（琴唄）紅葉のゑん』

市村茂兵衛他の相版

「春旭画」

天明九年（一七八九）正月上演正本。

『（めりやす）袖の海』

以上の中から、『大津絵姿花』（松浦史料博物館蔵本）の表紙を次に掲げる。「豊章画」は北川豊章で、喜多川歌麿の最初の号である。



正本の絵部分が流用された場合の絵師名の扱いを調べるため、表2には絵師名も書き出している。表2を見ると、絵師の署名がある泉屋版をA1・A2（絵A1・絵A2）の関係で流用している本屋儀兵衛版・無刊記版で絵師名は、安永六年（一七七七）十一月上演の『（めりやす）雪の梅』無刊記版I種が「清経画」を残している以外、すべて削除されている。

（七）本屋儀兵衛との相版について

中村座の長唄正本では安永六年（一七七七）年十一月から天明二年（一七八二）十月にかけて、村山源兵衛が本屋儀兵衛と相版を組むようになる。しかし、市村座の専属版元泉屋権四郎が本屋儀兵衛と相版を組む例は表1で次の二冊のみである。

205 頁の明和六年（一七六九）七月上演の『鞠子弓稚遊』上下一冊本。

これは再版と見られ、泉屋権四郎単独の初版が別に存在する。

208 頁の安永九年（一七八〇）十一月上演の『菊紅葉色中同士』

透写本一冊。これも再版の可能性あり。泉屋権四郎単独版がある。

泉屋権四郎の場合は本屋儀兵衛との相版が少なく、相版に「正銘版元」と載る例も見ないので、本屋儀兵衛と相版を組む形態に移行していない。ただ、無刊記版が安永六年（一七七七）まで継続して出ているが、その後は極めて少なくなっている。よって、安永六年十一月の顔見世興行頃に、あるいは版元間で重版に対する申し合わせができた可能性

がある。しかし別の見方をすれば、安永期後半から天明期前半の市村座の長唄正本には、重版を作るほどの需要がなかったとも考え得るのだ。安永八年（一七七九）四月の『相生獅子』、天明元年（一七八一）四月の『教草吉原雀』は大名題の違う再演正本であり、何か新作を出せない事情があったとも推測されるのである。

ア 明和五年十一月上演『教草吉原雀』の表紙（早稲田大学演劇博物館本）



イ 天明元年四月上演『教草吉原雀』の表紙（明治大学図書館本）



アが「男山弓勢競」第二番目に上演された長唄正本であり、イは「劇場花万代曾我」の第一番目三立目に上演された長唄正本である。大名題の異なる同曲の正本は珍しいので掲載した。

中村座の専属版元村山源兵衛は天明二年（一七八二）十一月から相版元を松本屋万吉に替える。一方、市村座ではその頃に借財が膨らみ資金繰りが悪化したため、帳元・役者間に不和や騒動が度々起きて興行が安定しなくなる。天明三年（一七八三）十月の類焼も重なり、ついに天明四年（一七八四）には櫓交代となるが、その間の事情については後で考察することにして、ここでは長唄正本のその後の版行について見ていくことにする。

二 長唄正本における株板化

（一）版元の交代

ここでは、天明四年（一七八四）十一月に桐座に興行権が移り、天明八年（一七八八）十一月に再び市村座に興行権が戻るまでの期間を見ていく。

表1 208頁では、天明四年十一月桐座上演の「狂乱雲井袖」から長唄正本の版元は富士屋小十郎になり、市村座の専属版元が入れ替わる。次に、その正本の表紙を掲げる。右側の演奏者連名梓の下段に版元名が「ふきや町／富士屋小十郎／かし通り」と入っている。



富士屋小十郎については、『増補戯場一覧』（八文字屋自笑、寛政十二年八月刊）の「冬の巻」に「江戸ふきや町」図が掲載されており、桐座の向い側に、通りに面して「△ふじや」と書き込まれている。図の説明書きに「水茶屋△印」とあるから、この「ふじや」は水茶屋のようである。これが、河岸通りから南側へ移転した時期の富士屋小十郎の可能性がある。

富士屋は、文化五年に長唄寄せ本『東風流』を版行している。その奥付には「長唄／めりやす 本問屋 江戸葺屋町 富士屋小十郎蔵」とある。この本問屋が地本問屋を指すのか不明である。伝本の状態から、富士屋は長唄本だけを扱う版元であったと見られ、稽古本の目的で三座の上演作品の薄物を多数版行してきている。おそらく、富士屋は葺屋町で水茶屋を営みながら、需要に応じて売れ筋曲の版を外注に

出すなどして製作し、長唄本の版行実績を積んできたと推測される。座と専属関係を結んで、上演正本の版行に参入する機会を窺っていたのであろう。櫓が控えの桐座に替わる折に富士屋小十郎は専属版元に入ったと考えられる。

だが、長唄正本は、単に版元が泉屋権四郎から富士屋小十郎に入れ代わっただけではない。表1の208頁を見ると、上演時正本は葺屋町河岸通りの富士屋小十郎から版行されているが、再版も葺屋町南側住所の富士屋から出ていることに注意したい。さらに、伊賀屋や森田屋も再版を出しているのだが、その際には富士屋との相版のかたちが見られることがわかる。本屋儀兵衛版・無刊記版が版行されなくなっていることも指摘できるであろう。

次の55・56頁に「拍子舞写絵雲井弓」について四種の図版を掲げ、具体的に説明しよう。この作品は天明六年十一月、桐座において「雪伊豆幡揚」第一番目四立目に上演された長唄曲である。表1で、版元1の欄が上演時正本である葺屋町かし通りの富士屋版、再版I種と再版II種は葺屋町南側の富士屋版、そして再版III種は富士屋と伊賀屋の相版である。つまり伝本は上演時正本と再版三種類に整理できる。

以下に各本の表紙と本文終丁裏を載せる。再版の表紙はいずれも初版を踏襲しているが、版下を書き直している。また、エの表紙はウの覆刻である。本文はア／エすべて異なっているが、アの上演時正本が四種の中では中字である。イとウの版は、富士屋が葺屋町南側に移転してからの再版本である。エの富士屋と神田鍋町伊賀屋の相版は、本

文末に「天保九戌戌正月 再板」と刊記があるが、表紙には初演時の
 大名題が記入されている。本文は四種の中では最も大字である。

『拍子舞 写絵雲井弓』表紙と本文終丁裏

ア 上演時正本 富士屋小十郎版

国立音楽大学附属図書館竹内文庫本



イ 富士屋小十郎再版

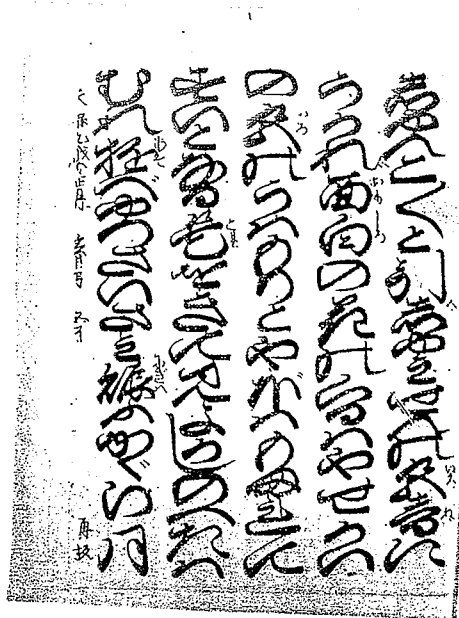
国立音楽大学附属図書館竹内文庫本



ウ 富士屋小十郎再版

国立音楽大学附属図書館竹内文庫本





富士屋版には、中村座の場合のような蔵版の表記が正本上にあるわけではない。だが、富士屋は、原版を所有して再版を行っていると捉えられ、事実上株板化が起きていると判断できる。

中村座の長唄正本においては、株板化の現象の要因を、寛政二年（一七九〇）の出版令と関連づけて捉えることが可能である。しかし、市村座ではより早い段階の天明四年（一七八四）に株板化が起きているので、寛政二年の地本問屋仲間行事による新本改め制度の導入と関連させて捉えるには、理由付けられない面がある。市村座の版行形態の変化は、桐座への興行権の移譲に伴って起きていると考えられよう。

（二）市村座版元としての市村茂兵衛の出現

桐座の仮興行は五カ年の約定で済み、市村座は天明八年（一七八八）十一月から櫓再興となる。表1 209頁において市村座の長唄正本の版元は、さらに市村茂兵衛・葺屋町 山本重五郎・富士屋小十郎の相版となる。長唄正本の版元欄は、市村茂兵衛を筆頭に、山本重五郎と富士屋小十郎の文字をやや小さく併記するかたちになっている。富士屋小十郎は天明四年（一七八四）十一月の桐座仮興行の時から引き続き版元に名前を連ねている。

次頁に天明八年（一七八八）十一月、市村座の櫓再興時に上演された長唄正本『寿万歳』の表紙を載せる。



表紙の右側の演奏者連名枠の下段に、市村茂兵衛の名が他の二名より少し大きく記載されている。三升屋二三治の『賀久屋寿々面』巻三における芝居版元の記述を再度引くと、以下ようになる。

三芝居板元

市村座 番附絵付おふむ石／長うた薄もの 山本重五郎
同 役者附 福地茂兵衛

(中略)

福地茂兵衛、山本重五郎ハ、名前株持主ゆゑ、住所外名前故相糺さす。爰にしるすのみ。両家とも猿若街二丁目、茶屋也。

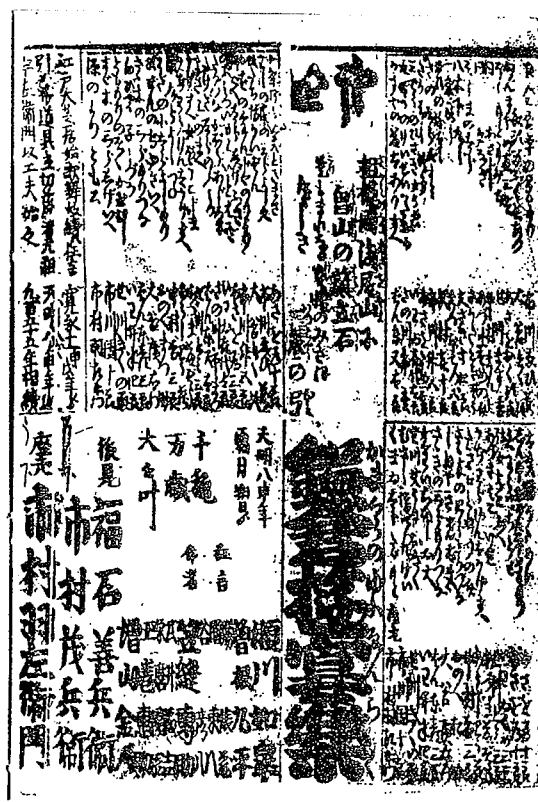
近年三座とも版下、今の清水正七認る。中頃迄、山本重五郎・

高麗屋金三郎、番附を書し事。(この引用部分は44頁に前出)

ここに書かれる福地茂兵衛は、表1209・210頁所収の市村座上演の長唄正本と照合すれば、市村茂兵衛である可能性が高いであろう¹⁰。

市村茂兵衛は、天明八年(一七八八)十一月の紋番附の終丁裏に座の後見として書かれている。次にその紋番付けの終丁部分を載せる。

『劇場年浪草』所収 東京芸術大学附属図書館蔵



この市村茂兵衛は、「天明撰用類集 二十八上」の「天明八申年四月廿日」の条に次のように出てくる。

葺屋町狂言座

羽左衛門芝居再興之儀ニ付奉伺候書付／書面何之通可申渡
旨被仰渡／奉畏候

山科信濃守

申五月四日

柳生主膳正

葺屋町権六店

狂言座

羽左衛門

同町壮右衛門店

羽左衛門伯父

善兵衛

深川元町喜右衛門店

同人従弟

茂兵衛¹¹

最後に記載される茂兵衛は、羽左衛門の従兄弟であるようだ。

『東都劇場沿革誌料』下「市村座の部」¹²によれば、座元十代目市村羽左衛門は九代目羽左衛門の子で、後に二代亀蔵と改め、休座中の天明五年巳年九月に相続して羽左衛門と改め、天明八年市村座再興時に名弘めをしている。だが、寛政五年（一七九三）八月に市村座は大借財のため休座し十代目羽左衛門は退き十月には隠居して、十一代目には親類の福地茂兵衛の子を養子とし、寛政十二年（一八〇〇）閏四月に相続させている。したがって、福地（市村）茂兵衛は座元に近い有力な親族であることがわかる。

山本重五郎については、年代が下るが『歌舞伎年表』第六巻の嘉永五年（一八五二）の項に掲載されている「嘉永五年子十月、中村、市村、河原崎三座より役者共へ貸金高調書」に「羽左衛門座附／茶屋

惣代 重五郎」と書かれている。また、『猿若街細鑑』（嘉永六年丑年正月刻）に市村座の隣の三軒目に「山本重五郎はん元」と記されており、天保二、三年に芝居町が猿若町へ移転した際にも同行している。市村（福地）善兵衛・茂兵衛親子も茶屋を営んでいたことについては、『戯妓諸人録』（『東都劇場沿革誌料』下「市村座の部」十一代目寛政十二—文政三）に次のように記載がある。

何分名物の第一なり、何分を福地善兵衛と云ふ、亀蔵、羽左衛門が兄弟にして原庭に住居す、市村家第一の親類にして七代目団十郎妻の親なり、彦三郎家付の親類、張元雄引受人して度々興行せり、大の念仏家にて遊行寺杯の世話役にて菊屋善兵衛といふ、式丁目に料理茶屋弁当の株有て、今も善兵衛にて跡々家業相続して繁昌せり、

三茂兵衛 喜の字屋茂兵衛、市村茂兵衛、帳元今一人は失念せり、何れも名高き人物也¹³

因みに、市村家の七代目から十六代目までの屋号は菊屋である。

福地茂兵衛と山本重五郎は『賀久屋寿々免』に「名前株持主ゆゑ」と書かれてあることから、版行の実務には携わらず、版行の権利（絵草紙株または番附株）のみ有していたと考えられる。

版元が原版を所持し再版を行う版行形態は、天明四年十一月の桐座興行時にすでに起きているが、天明八年（一七八八）の市村座再興時から、市村座の長唄正本に、座元に近い親族が版元に名を出すようになっていく。ただ、中村座の場合と違って蔵版者を正本に記載することはほとんどなく、市村座の長唄正本に一例見つかるとのみである¹⁴。

(三) 寛政六年十一月桐座

寛政四年（一七九二）十一月の顔見世興行「菊伊達大門」は大評判であったが、実際に市ヶ谷で起きた盗賊事件を新狂言に仕組んだ廉で吟味を受けて停止命令が出たという。そのため、家作代が滞り訴訟を起こされ、翌寛政五年（一七九三）二月に示談が整う。さらに七月に「妹背山婦女庭訓」が出るが、借財のため八月五日に急に舞納め、休座となる。地代金ほか借金が滞ったためで、再び訴訟を起こされ、十一月には地面明け渡しを命じられ、五年間の桐座仮興行が認められる。この間の長唄正本は伝存しない。

表1 209頁の桐座を見ると、長唄正本は富士屋小十郎と山本重五郎の相版で出ており、市村茂兵衛の名が抜けるが、桐座の関係者の名は版元に挙がっていない。参考として、『紙屑籠』の「三座元御礼」に次のような記述がある。

昔より、三座元、御町奉行所、御町年寄、御三家樽奈良屋北村、年始五節句には、麻上下にて、太夫御礼に出る式礼なり、御奉行様御役替りには、御目見へ仰付られる、町名主同前なり、但、仮櫓座元は無之事、勘三郎、羽左衛門、勘弥、此三人に限る事¹⁵

これによると、桐座の座元が表立つことはしなかった様子が窺われ、正本にも葺屋町を運営する茶屋の力が反映されている。

なお、寛政九年（一七九七）正月上演の「（めりやす）五大力」には、三種の再版が出ている。

(四) 寛政十年十一月の市村座の再々興

表1 210頁で寛政十年（一七九八）十一月に市村座が再々興された箇所を見ると、正本版元は市村茂兵衛・富士屋小十郎・山本重五郎の相版となっており、天明八年（一七八八）時と変わりが無い。寛政十一年（一七九九）正月上演の「（狂乱）雪吹の雛形」では、伊賀屋との相版による再版も出ている。

まとめ

以上、市村座の長唄正本について書誌データをまとめ、考察を加えてきた。ここで中村座の長唄正本の版行形態と共通する点、または、異なる点について整理してみる。

泉屋権四郎は、役者絵、せりふ・つらね正本・音曲正本、役者評判記など、絵入りの芝居関係の出版物を専門とする地本問屋であったと考えられる。泉屋権四郎が市村座の専属版元になるのは寛延期で、中村座よりも早い。泉屋は市村座で新規の長唄が上演される際に、正本の版行を独占的に行っていることが伝本でも確認できる。

市村座に専属版元が形成されると、その特権的利益に不正参加しようとする出版物も現れる。本屋儀兵衛版と無刊記版である。こうした出版物は興行時の需要に乗じて迅速に作られるものであるから、泉屋版を版下に用いて版を彫る手っ取り早い手法がとられ、安永末頃まで

継続して出ている。事実上の重版である本屋儀兵衛版や無刊記版には、座名から「座」の文字を除いたり大名題を省く表記が多く見られる。座名や大名題を正式に載せないのは、それらが無断版行物で公許の興行権を持つ座元を憚ったからではないかと推測される。表1 202頁あたりから長唄正本に「市村座版元」のほかに「正板元」「正板所」「正銘板元」と記される例が見られるのは、公然と出回る不正出版物に対する泉屋のせめてもの対校策であったと考えらよう。こうした本屋儀兵衛版・無刊記版による正本の流用は、中村座の場合にも等しく起きている。

泉屋権四郎が本屋儀兵衛と相版を組む例は、伝本で二冊のみであった。よって、泉屋権四郎は重版対策として本屋儀兵衛との相版はとらず、この点には中村座との違いがある。

しかし、天明期になると市村座では借財がかさみ、地代の滞りから訴訟を起こされ、土地の明け渡しを命じられる事態となる。天明四年（一七八四）十一月には桐座へ興行権が移り、これに伴い、長唄正本の版元も泉屋権四郎から富士屋小十郎へと交代する。

富士屋小十郎は水茶屋でもあったらしいが、伝本によると、上演後の長唄の薄物を版行してきている版元である。市村座が泉屋という地問屋筋の版元から、芝居町内部者と見られる富士屋へ版元を切り替えたのは、芝居町内部に長唄正本の版行利益を取り込む目的があったためではないだろうか。表1では、富士屋が桐座の専属版元になると、本屋儀兵衛版・無刊記版が出なくなっている。そして、人気曲は富士屋が再版を出し、伊賀屋や森田屋が版行する場合は富士屋と相版を組

むかたちが取られている。したがって、桐座の長唄正本自体に富士屋小十郎を蔵版者とする記載は見つからなくとも、実質的に株板化していると考えられる。

天明八年十一月に市村座が再興されると、上演時の長唄正本は、座元の後見で有力な親族でもある市村茂兵衛と、座付きの芝居茶屋山本重五郎、及び版行の実務を担当したと推測される富士屋小十郎の相版で出るようになる。市村茂兵衛が主たる蔵版者と推測でき、茶屋惣代として配布の取り次ぎ・販売を統括する山本重五郎は出資者あるいは債権者代表の意味合いで版元に名を連ねていた可能性がある。これにより市村座の長唄正本は蔵版者を版元として記載するかたちになったと言える。

1 江戸の義太夫抜本が、大坂方の所有する丸本株に差支えるとして、天保三、四年にかけて争われた訴訟記録。その江戸抜本版元側の手控えである。

2 『続燕石十種』第三卷（中央公論社 一九八〇年）。

3 『日本庶民文化史料集成』第六巻歌舞伎（三一書房、一九七九年）。

4 前掲注2。「沢村屋利兵衛」と「和泉屋権四郎／福地茂兵衛 富士屋小十郎」の記載位置に誤りがあると認められる。

5 前掲注3。

6 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第二期十二巻、吉川弘文館、

一九七四年)。

7 武藤純子『初期浮世絵と歌舞伎』(笠間書院、二〇〇五年) 所収。

8 ①から⑥の各本の所蔵は、表1と対応させて「所蔵一覧」「市村座・桐座の長唄薄物」の「花錦嫩丹前」のところに記載してある。

9 前掲注3。

10 天明八年・寛政元年・寛政三年の新役者附は「板元 市村茂兵衛」とあり、座元の前に「後見 市村茂兵衛」としても名が載る。寛政十年の新役者附は「板元 福地茂兵衛」となっている。いずれも賣出所が「ふきや町 山本重五郎」である。すべて早稲田大学演劇博物館蔵の顔見世番付(新役者附)である。

11 吉田節子編『続江戸歌舞伎法令集成』(おうふう、一九九七年)。

12 『東都劇場沿革誌料』下 歌舞伎選書6 (国立劇場芸能調査室編・発行、一九八四年)。福地家は市村家には重縁ある家柄とも書かれている。

13 前掲注12

14 管見によれば、桐座の長唄正本に蔵版の文字が刻まれている例は見ない。また、市村座の長唄正本で「蔵板」と記されているものは、次の一冊のみである。

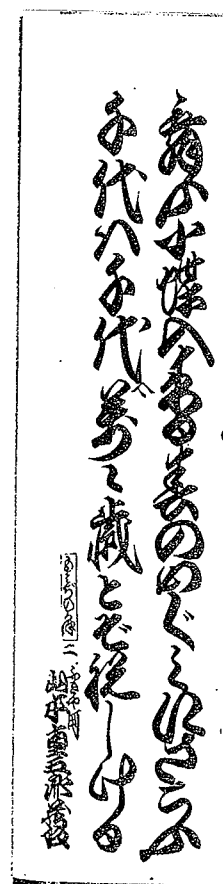
天保九年(一八三八)十一月上演の『浪爰須磨濡衣』一冊

本文再終丁末に「ふきや町 山本重五郎蔵板」とある。

その部分の図版を次に掲げる。

早稲田大学演劇博物館蔵 特々-11-1212-54G

15 前掲注2。



第三節 江戸版長唄正本に見る版行形態の変化

―享保・享和期の森田座・河原崎座の場合―

はじめに

中村座、市村座に続き、この第三節では森田座とその控え櫓である河原崎座で上演された長唄の薄物について伝本の調査を行い、それらの書誌データをまとめ、これを基に版行形態について考察する。

中村座・市村座（各控櫓を含む）の場合において、長唄正本と本屋儀兵衛版と無刊記版の関係を糸口にして捉えられた正本の株板化の現象が、森田座・河原崎座の薄物においても同様に起きているのか、要するに、長唄正本は江戸の三座で共通した版行の仕組みをとっているのか検討する。また、森田座・河原崎座の場合に特殊な点があるとするば、それは何に起因するのか考えてみたい。

すでに得られた版行上の特徴として、次のことが指摘できる。

(1) 新作の長唄正本は、当初は役者絵や番付を扱う複数の版元により出されていたが、中村座では宝暦期、市村座ではより早く享保期の終わり頃から座と専属関係を結ぶ版元が形成され、上演時の版行を独占するようになる。この専属版元は、正本では奥書に「中村座板元」「市村座板元」として表記される。

(2) 長唄正本の異版の中には、特に正本の版面に酷似する版が存在

する。それらは、正本を版下に流用して作られていると見られ、本屋儀兵衛版と無刊記版に限られる。これらの版は正本の版元（中村座・市村座の専属版元）と相版のかたちを取っていないため、無断版行物（重板）である可能性が高く、安永中期頃まで継続してに版行されている。

(3) 長唄正本は、整版（木版）の技法で作られており、丁数も少ないため、複製は容易に作成できる。本屋儀兵衛版・無刊記版が正本を版下に流用する場合、元版の版元名は必ず削除される。正本には詞章以外に次の内容が記載されている。

・ 上演情報

座名、狂言名題（大名題とも言う）、

役名・役者名、演奏者連名など

・ 作詞者・作曲者（内題下の署名から取る）

・ 胡麻点（墨譜）や節付名（文字譜とも言う）

・ 役者絵と絵師名

・ 筆耕者（本文末の印・署名による）

・ 版元名、住所、刊記、奥書など

これらが、正本が流用される際にどのように扱われているか調べてみた。すると、音曲正本にとって重要な要素である胡麻点や文字譜が本屋儀兵衛版・無刊記版で削除されることは殆どなく、一方、絵師名や筆耕者の印は除かれ傾向にある。作者名は特別削除の対象にはなっていない。だが、座名や大名題、本文の表記について、次のような特徴的な違いが見つかった。

本屋儀兵衛版や無刊記版の本文では、正本の文字遣いを意図的に変えている場合がある。部分的に漢字を仮名に変え、また、変体仮名を変える細工するのは、正本の流用が重板行為であることを認識しているからであろう。正本の版元は重板を差し止める手段が無いのである。

本屋儀兵衛版や無刊記版には、座名を削除したり、あるいは「座」の文字を除いて「中村」「市村」とする例が多く見つかり、また、大主題を削除するか不完全に表記する傾向がある。特に公許の櫓主である座元の名を無断で載せることには憚りがあつたと考えられる。正本を流用され版元の出版の権利は侵害されているのだが、興行権者に対する障りがあつて正本との間に一応差別化が図られていたと思われる。

(4) 中村座の長唄正本では、安永期から座の専属版元が本屋儀兵衛と相版を組むようになり、ようやく重板に対する弁済措置をとれるようになっていく。

(5) 天明期には、中村座・市村座の専属版元が入れ代わっており、版行形態も再版・再々版を出すかたちに変化する。それ以前は、長唄正本の版行の権利は、新作の上演時に限られていたと推測される。というのは、専属版元による再版本が伝存しないからである。長唄正本もそれまでは番付と同様の一過報道的な劇場出版物と見なされていたと考えられる。

しかし、天明期に入ると、中村座の正本に「蔵板」と記され明らかに株板化している。音曲正本は観劇用パンフレットとして

出されても、上演後に稽古本としての需要があり、再版性の高い出版商品へと成長していく。それに伴い、座側も経営の悪化から薄物の出版益を取り込むかたちに切り替えたため、版元の交代が起きていると見られる。ゆえに、版元もそれまでの地本問屋系統の者から、中村座では堺町の家主の一人が絵草紙株を取得して専属版元になり、市村座では座の後見を務める親族や芝居茶屋が専属版元になる。

以上の点が、森田座・河原崎座の長唄正本についてもあてはまるのか、検討していく。

なお、木挽町五丁目に位置する森田座・河原崎座は、中村座・市村座に比べて集客には本来不利な立地条件にあつた。そのため経営が安定せず、森田座と河原崎座の関係も控櫓というより、もっと緊密な関係にあつたようである。両座のとりくみ関係の『歌舞伎法令集成』や『撰寫録』をもとに辿ってみよう。

森田座は万治三年（一六六〇）御免許芝居取り立て。河原崎座は明暦二年（一六五六）能座として櫓御免新芝居取り立てとそれぞれ書かれているが、寛文八年（一六六八）五月には町奉行嶋田出雲守に依頼して、森田勘弥座と便宜上合併して一座となる。元禄二年（一六八九）には両座分離の義を甲斐庄飛騨守へ出願、双方示談してこれまで通一座にて興行すべしと命ぜられるが、このときより片方の座が休座するともう片方へ名代料や、休座の者へ身継りあう渡世金支払われる取極めとなる。しかし、当初から経営が安定せず、芝居地代の滞りによ

る訴訟が度々おきている。

中村座の長唄正本の伝本上の最古が享保十六年（一七三一）、市村座のものが享保十八年（一七三三）であるが、その頃の森田座では享保十九年（一七三四）に地代訴訟が起きて土地明け渡しとなり、翌二十年正月からは河原崎座に興行権が移る。このように、中村座・市村座に比べると、かなり早い時期に逼迫した経営上の問題を抱えていることがわかる。十年後の延享元年（一七四四）には河原崎座で地代の未払いと借金がかさみ、芝居が続き難くなって六月に訴訟を起こされて芝居は中止となり、地代の代わりに芝居家作は地主へ明け渡すよう命じられている。しかし、元櫓の森田勘弥の借金については示談がまとまり、再興願が通って、顔見世興行から森田座再興となる。その後天明八年（一七八八）九月まで四十五年間、森田座の興行は続く。だが、天明四年（一七八四）には類焼を受け、翌年の芝居普請が遅れたため役者も無人となり、その上、上方から呼んだ役者が遅延してついに興行中止となり、金主から再び訴訟を起こされている。（天明期には市村座においても桐座への興行権の移譲が起きている。）

森田座・河原崎座の長唄正本は伝本が少なく、特に享保・宝暦中期のものがほとんど見つからないことは、こうした事情によるものと考えられる。森田座・河原崎座の場合は薄物の伝本自体が少ないため、十分な書誌データは得られず、したがって中村座・市村座から得られた版行上の内容を照らし合わせる程度の考察に止まらざるを得ない。しかしその一方で、不安定な経営を抱える故に、座の内部者が早くから長唄正本の版行に関与しており、その点では中村座・市村座を先取

りしている面もある。この点についても取り上げて見たい。

また、この第三節で扱う長唄の上演年の下限を寛政期ではなく享和期としたのは、版元小川半助が享和二・三年（一八〇二～一八〇三）頃に長谷川町から田所町へ移転しているためで、これにより、小川半助版の再版・再々版の先後関係を明かにできる。

一 演劇書における森田座・河原崎座の専属版元の記述

ここにおいても、江戸の演劇書の中に座の専属版元に関する記述を求め、以下にその箇所を書き出して見る。

『明和伎鑑』（明和六年（一七六九）十月刊）には

三芝居番付板元

森田勘弥芝居 役者附番付やくら下

上るり長哥せりふ等 木挽町五丁目 金井半兵衛

三升屋二三治による著述では、

『紙屑籠』（天保十五年（一八四四）十月序文）

○三座番附の板元

森田勘弥

田所丁 小川半助

河原崎権之助

同 芝神明前丸屋甚八 役者附／ばかり

古来より番附株は、其櫓によつて爰にしるす、外に無
之、たゞし、都座、桐座も元櫓にしたがふ、

『賀久屋寿々免』三（弘化二年（一八四五）秋成立）

三芝居板元

森田座 番付絵本役者附 田所町

うすものおふむ石 小川半助

河原崎座とも

河原崎座 役者附 芝神明前

丸屋甚八

三升屋二三治の記述では、森田座は河原崎座の元櫓と書かれてはおらず、両座は並んで記載されてある。中村座と市村座の控え櫓は『紙屑籠』の「三座番附の板元」に「たゞし、都座、桐座も元櫓にしたがふ」と触れられるのみで、中村座や市村座と列記されてはいない。ここに森田座と河原崎座の関係を読み取ることができる。

『明和伎鑑』の頃には森田座の顔見世番付や辻番付、浄瑠璃正本・長唄正本・せりふ正本などの薄物金井半兵衛が版元であったと書かれている。後に三升屋二三治の頃になると、森田座・河原崎座の絵本番付や顔見世番付、薄物や鸚鵡石は版元が小川半助に代わり、河原崎座の顔見世番付に限っては丸屋甚八が版元であると記されている。

二 森田座・河原崎座の長唄の薄物

書誌調査の結果から、森田座・河原崎座上演の長唄の薄物の版行上の特徴を、中村座・市村座の場合と比較しながら考察する。先にも述べたとおり、森田座・河原崎座の長唄正本は伝本が非常に少ない。作品数（曲数）が少ないだけではなく、流行った曲があまりなかったと見えて異版も少ないのである。享保後期～寛政期（一七二五～一八〇〇）に上演された作品の中で異版が比較的多く存在するのは、次の二曲である。いずれも初版は見つかっていない。

宝暦十三年（一七六三）十一月上演「寒梅簾乱咲」

（初版は未見である）

無刊記版が二種

森田屋金蔵版

森田屋金蔵・岩戸屋二軒との相版

山本平吉・和泉屋市兵衛相版

明和九年（一七七二）七月上演の「舞扇名取月」

（初版は未見である）

本屋儀兵衛版

無刊記版が二種

清水治兵衛版

富士屋小十郎版

森田屋金蔵版

森田座・河原崎座の薄物の伝本も、中村座・市村座の場合に準じて、次のように分けて捉えることができる。

正本（座の専属版元から版行される上演時正本）

本屋儀兵衛版・無刊記版（正本が出ると、直ちにこれを模倣して版行したもの。座の専属版元である金井半兵衛の版を流用して作られている場合が多い。）

上演後年月を経て版行されたもの。主に稽古本目的の版と見られる。金井半兵衛以外の版元が出している。

この第三節においても森田座・河原崎座上演の長唄の薄物の伝本を博搜し、その中に演劇書に書かれる専属版元の版を集め、これを上演順に並べて表にあらわした。また、異版群の中で特に本屋儀兵衛版と無刊記版を抜き出し、表で正本の下にこれらの版の欄を設け整理していった。それが227頁の表1である。表の構成内容は、中村座・市村座の場合と同じである。

まず専属版元の動向を捉えておこう。表1の版元1の欄を見ていくと版元の動きが追える。河原崎座・森田座の長唄正本においても初期の版元に「元浜町いがや」が出てくることは、中村座・市村座の場合と同じである。元浜町の伊賀屋は特定の座に属していないことがわかる。

宝暦十一年（一七六一）と十二年（一七六二）上演の正本は泉屋権四郎が出している。泉屋権四郎は享保十九年（一七三四）から市村座の専属版元になっているのだが、森田座の宝暦十二年（一七六二）の三作品の正本の奥書に森田座版元と記し、森田座の専属版元に入っ

ている。しかし、その期間は二・三年と短い。

森田座の次の版元には、宝暦十四年（一七六四）上演の『鐘尔桜黄昏姿』から金井半兵衛が登場してくる。金井半兵衛は、やや年代が下るが享和三年（一八〇三）刊『芝居年中行事』において、役割看板に関するところに次のように書かれている。

看板の画組ハ狂言方より下絵を出す。（中略）看板の書詰て過ぬよふに書をよしとす。一流也。当時中村座のハ仕切場勘六、俳名を勘亭といふ。世に勘亭流と称す。また中戸屋新八。市村座のハ金井半九郎、則金井三笑の子也。河原崎座のハ金井半兵衛とて何れも当時の能書也。

この記述は寛政二年（一七九〇）十一月に森田座から櫓が河原崎座に移った後の時期に相当する。最後の部分の金井半兵衛は河原崎座の狂言方か、あるいは仕切場の人物かこの文脈でははっきりしないが、能書家と書かれているので長唄正本の草稿（書き抜き）や版下も書いていたのかも知れない。

初代中村仲蔵の『秀鶴日記』には、安永年間の三座内の出来事が記されており、そこから座頭・作者・帳元・櫓主（座元）・金主の間の駆け引きや軋轢といった芝居内部の事情を窺うことができる。この書に次のような記載がある。

壬七月三日、相談の上にて、今の半兵衛を帳元に取立申し、森田座は一人も役者なし。

この半兵衛を金井半兵衛とみて良いであろうか。『歌舞伎年表』ではこの記事を安永七年（一七七八）のこととしている。この半兵衛は、

かなりやり手の人物として描かれている。

表1 227頁で明和七年（一七七〇）の『馴初思の矢の根』と『面影葵上』は版元が金井新兵衛となっているがこの人物についても『秀鶴日記』安永九年（一七八〇）のところに、次のように出てくる人物であろうか。

一、爰に人形座中の芝居表方手代頭、新兵衛と申者あり。去る／＼年団十郎参り申候顔見世より、森田座へ勤め表かたおく役、はらいかた手代に済み申候一年勤め候、きりやうあるものなり。

半兵衛が六十両を着服したことが知れて、金主側から新兵衛に帳元を替える話が出たため、それに対する新兵衛の言い分が次のよう語られる。

今まで帳元度々かはり申候て、わたくしなく勤め候得ば、はじめもちいていれさせ候てよきほどにいとま遣し申候、前々々長七、六郎兵衛、弥兵衛帳元いたし申候所に、又々半兵衛いれ申候なり。

以前から帳元の入れ替えが度々あったらしく、経営が少し上向いたところで、なぜか半兵衛がまた帳元に返り咲く様子が窺える。それでも、その後新兵衛は森田座の帳元となったもよう、『歌舞伎年表』ではそれを安永九年（一七八〇）のこととしている。

表1では明和九年（一七七二）から再び半兵衛が長唄正本の版元になつており、天明二年（一七八二）三月上演の『京偶昔絵姿』正本まで続く。金井半兵衛や新兵衛というのは、金井三笑の門下と見てよい

のであろうか、ともかく安永期には帳元を勤める者が、明和期に長唄正本の版元として名を出している可能性がある。

長唄の作詞は囃子頭の職掌とされるが、狂言の筋に関わる場合には狂言作者が担当していたと『三座例遺志』に記されている。したがって、狂言作者の配下にあつて仕切り場に詰め、かつ能書家である者が新作の長唄の清書稿を作成したり、彫師や摺師を雇う版元との対応にあたったと考えられる。したがって、そこに長唄正本の株を入手する才覚が働いても不思議はない。けれども、宝暦期と言えば、松島庄五郎、松尾五郎次、坂田仙四郎、富士田吉次といった唄方が輩出して長唄の盛期を迎えていた頃である。おそらく長唄正本の版行部数も飛躍的に伸びていたと思われるが、中村座・市村座ではこの時期に帳元が長唄正本の版元に名を出すことは起きていない。それまで数度にわたる地代訴訟と借金との示談交渉を経てきている森田座では、金策に携わる帳元が長唄正本の出版益をとりこむ方策をすでにとっていたのであろう。

市村座の専属版元でもある泉屋権四郎を、森田座でも一旦は専属版元に入れるのだが、二、三年で帳元、あるいはそれに準じる座の内部者が版元を兼ねるかたちに切り替えたと思われる。そうした権益に目敏いところは、『秀鶴日記』における半兵衛像と合致する。だが、金井半兵衛は版元に名を出しても、版行の実務はおそらく相版元あるいは売所として版元欄に記載される伊勢屋吉十郎・大坂屋喜右衛門・上村吉右衛門等地本問屋が担当したと推測される。

浅草の伊勢屋吉十郎は長唄詞章集『女里弥寿豊年蔵』を宝暦七年（一

七五七）正月に版行しており、河東節正本・詞章集、細見を出している版元である。

表1で、明和七年（一七七〇）正月上演の『馴初思の矢の根』から版元は、「木挽町三丁目 金井新兵衛」単独になっている。しかし、明和九年（一七七二）正月から版元は再び金井半兵衛になり、芝神明前の上村吉右衛門を売所とする。

上村吉右衛門は屋号を江見屋といい、享保初期から紅絵・丹絵・漆絵などの役者絵細判を出している版元で、河東節などの江戸浄瑠璃正本や赤本も版行している。

江見屋は、表1 228頁の安永二年（一七七三）十一月上演『乱菊稚釣狐』の奥書に「森田座正銘賣所 芝神明前 江見屋正」と記し、同月の『色見艸相生丹前』では表紙では賣所としながらも奥書には「森田座正本所 江見屋正」と入れている。安永三年（一七七四）八月上演の『めりやす露配』では表紙に「正」と載せ、さらに、安永四年（一七七五）正月上演の『めりやす わか艸』では、表紙の表記を売所から相版元に変えていることから、上村の立場が次第に強くなっていることが窺われる。おそらく金井半兵衛は森田座の上演情報を提供し、上村が版行業務を引き受けていたのであろう。安永五年（一七七六）正月上演の『名大磯細見風流』正本では表紙は相版で「正」を載せた表記であるが、奥書には「森田座長唄正銘板元金井半兵衛」として金井半兵衛の立場を上位に示している。だが、七月上演の『色見草月盃』の奥書では江見屋が「森田座正本板元売所」となっており、多少の揺れは見られながらも、表記の上では江見屋が金井半兵衛と対等の相版

元であることを主張していく状態が読み取れる。江見屋は座に情報提供料を出し、版行の経費も負担していたのではないだろうか。

江見屋は錦絵の多色摺りと見当の創案をした版元である。宝暦十一（十二年）の版元泉屋権四郎も紅絵の創案を行ってきた。これらの版元は役者絵や芝居絵を中心に、それを上演情報と共に番付類やせりふ正本・音曲正本に取り込む地本の製作工房兼版元といった存在であろう。森田座においても寛政期前にはこうした版元の手によって長唄正本が版行されていたのである。

三 正本の流用について

次に表1の本屋儀兵衛版と無刊記版の欄を227頁から見ていくことにする。宝暦（安永期（一七五一〜一七八〇）に森田座で上演された長唄については、正本と並行して本屋儀兵衛版と無刊記版がやはり出ている。中村座や市村座の場合ほど連続して版行されているわけではないが、それに近い状況は見てとれるであろう。森田座の場合においても正本に酷似する版は、本屋儀兵衛版と無刊記版にしか見つからない。したがって、ここでも正本の版面を版下に流用する際に、本屋儀兵衛版・無刊記版では正本上のさまざまな記載内容がどのように扱われているのか、本文と表紙に分けて調べて見る。

(一) 正本と本屋儀兵衛版・無刊記版の本文の関係

初版(上演時正本)と本屋儀兵衛版・無刊記版の本文の版面を比較し、227頁の表1に記載する。森田座の場合においても、上演時正本を版下に流用する手法は本屋儀兵衛と無刊記版にのみ見られる。

表1の本屋儀兵衛版と無刊記版の欄に版面の関係を、中村座・市村座の場合と同じ方法によって表している。

A1 元版をそのまま版下に用いて被せ彫りしている。

A2 全体として元版を版下にして被せ彫りしているのだが、

漢字や仮名を意図的に入れ替えている箇所がある。

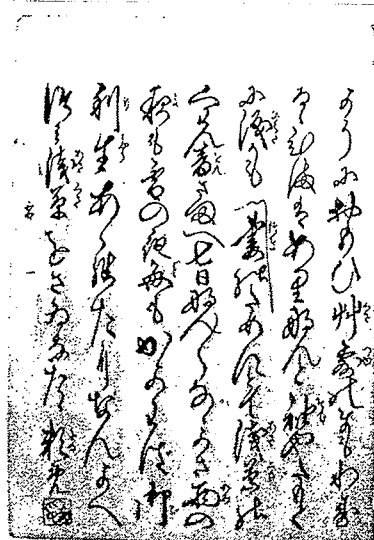
A3 元版を参考にして版下を作り直している。元版との関係が意匠的に認められる場合である。

別版 元版にとらわれることなく版下を作っている。

森田座・河原崎座の場合には、版面の関係を比較できるケースが十例ほどになるが、それでもA1が五例存在する。そのうち、明和八年(一七七七)九月上演の「菊八重七人化粧」本屋儀兵衛版は、磯田屋版を被せ彫りしたものであるが、磯田屋の薄物はこの一冊しか残らず、正本版元ではないようである。

以下に掲げる図版は、安永元年(一七七二)十一月上演の「雪花縁狩衣」の表紙と本文初丁表・終丁裏である。この下の金井半兵衛・上村吉右衛門相版と、次頁上段の江戸橋四日市本屋儀兵衛版を比較すると、本屋儀兵衛版の本文は金井半兵衛相版を元版としたA1の關係にある。また、本文末の筆耕印(米山鼎峨の印)が除かれている。

金井半兵衛・上村吉右衛門相版 東京芸術大学附属図書館本





おのゝろのあみだ
 用ひしあはれまはるゝあはれ
 一、あはれまはるゝあはれ
 二、あはれまはるゝあはれ
 三、あはれまはるゝあはれ
 四、あはれまはるゝあはれ
 五、あはれまはるゝあはれ
 六、あはれまはるゝあはれ
 七、あはれまはるゝあはれ
 八、あはれまはるゝあはれ
 九、あはれまはるゝあはれ
 十、あはれまはるゝあはれ

おのゝろのあみだ
 用ひしあはれまはるゝあはれ
 一、あはれまはるゝあはれ
 二、あはれまはるゝあはれ
 三、あはれまはるゝあはれ
 四、あはれまはるゝあはれ
 五、あはれまはるゝあはれ
 六、あはれまはるゝあはれ
 七、あはれまはるゝあはれ
 八、あはれまはるゝあはれ
 九、あはれまはるゝあはれ
 十、あはれまはるゝあはれ

無刊記版Ⅱ種の本文は金井半兵衛相版を版下に用いているが、次の文字について違いが見つかる。

初丁表の最初の行の最後の二文字「禮耳」↓「礼尔」

最終行の三字目「幾」↓「起」

終丁裏三行目の八字目「瀬」↓「勢」

金井半兵衛版を版下に使う際に、意図的に文字を入れ替えているので、この無刊記版Ⅱ種は元版に対しA2とし、表1 229頁に記載してある。中村座・市村座の場合と同様の手法を取っており、音曲本の重要な要素である胡麻点と文字譜がそのまま流用されている。

筆耕者は本文末に「鼎峨」と入る。表1でA1の本屋儀兵衛版・無刊記版において筆耕者名は除かれている。なお、安永五年（一七七六）七月上演の『色見草月盞』金井半兵衛・上村吉右衛門相版の本文末には、「正本清書（印）」と鼎峨印が入っている。

（二）正本と本屋儀兵衛版・無刊記版の表紙の関係

絵表紙についても、金井半兵衛版と本屋儀兵衛版・無刊記版がどのような関係にあるのか調べ、232頁の表2にあらわしている。表紙の版面の識別方法は、中村座・市村座の場合と同じである。

表紙A1 金井半兵衛版を元版とし、表紙をそのまま版下に用いている。ただし、元版の版元名・住所は除かれる。

表紙A2 金井半兵衛版を元版とするが、部分的に改変したり省略を加えている。

表紙A3 版下を作り直しているのだが、元版である金井半兵衛版との意匠的關係が明かなもの。

表紙別版 金井半兵衛版の意匠にとらわれることなく版下を作り直している。

このように表紙全体を元版から流用する場合のほかに、絵あるいは絵の輪郭だけをとる場合もありその場合は絵A1とA3と表記している。表紙から特に大名題と座名、絵師名を抜き出して、正本と本屋儀兵衛版・無刊記版の表記を比較している。なお、表2は、本屋儀兵衛版、あるいは無刊記版の伝存する場合を掲出している。本屋儀兵衛版と無刊記版の欄の一行目には初版の版面との關係を載せ、二行目には大名題、三行目には座名を載せている。表2を見ると、表紙には金井半兵衛版をそのまま版下に用いるより、A2の手法が多い。大名題は削除するか、何番目部分を省略しており、座名では「座」を除き「森田」とする例が多いのは、中村座・市村座の場合と同じである。69・70頁に掲載した『雪花縁狩衣』の表紙においても、本屋儀兵衛版では、「第壹番目」と「座」の文字を削除し、振り付け者と絵師の名、四段目の演奏者連名も除かれている。

四 本屋儀兵衛との相版

表1で、安永七年（一七七八）から金井半兵衛は本屋儀兵衛と相版を組むようになる。中村座の長唄正本においては安永六年（一七七

七）十一月のめりやす正本から、村山源兵衛が本屋儀兵衛と相版を組んでおり、ほぼ時期が一致する。しかし、森田座の場合は、金井半兵衛版に並行して本屋儀兵衛版や無刊記版がそれほど出ているわけではない。おそらく偽版を出すほどの需要が無かったであろう。上村が正本の版行から手を引いたため、本屋儀兵衛を相版元にした可能性がある。と言うのは、この相版元の交代が、『歌舞伎年表』に「〔森田座は安永六年十一月の〕顔見世興行不入につき、〔翌年の〕春狂言出来かね、正月休み。二月十五日初日」と書かれている時期と重なるからである。

その後、中村仲蔵を座頭に迎えて一旦繁昌するが、やがて仲蔵と帳元半兵衛、金主の間で内紛がおき、経営が思わしくなくなる。さらに森田座は天明四年（一七八四）十二月二十六日に類焼をうけ、翌年二月に再築にかかり六月二十六日に櫓を上げるが、普請が遅れ役者も無人となり、ついに普請中止となり、金主から訴訟を起こされる。それが天明六年（一七八六）五月にまで及んでいる。寛政元年（一七八九）三月には地代の滞りにより、木挽町五丁目の家主等から再び地立の出入りを起こされ、十一月には山村信濃守から土地明け渡しを命じられる。こうした事情が、相版元を替える原因になっていると思われる。なお、安永七年七月上演の『待夜枝折傘』の相版元千本藤七は、役者評判記を出している版元である。

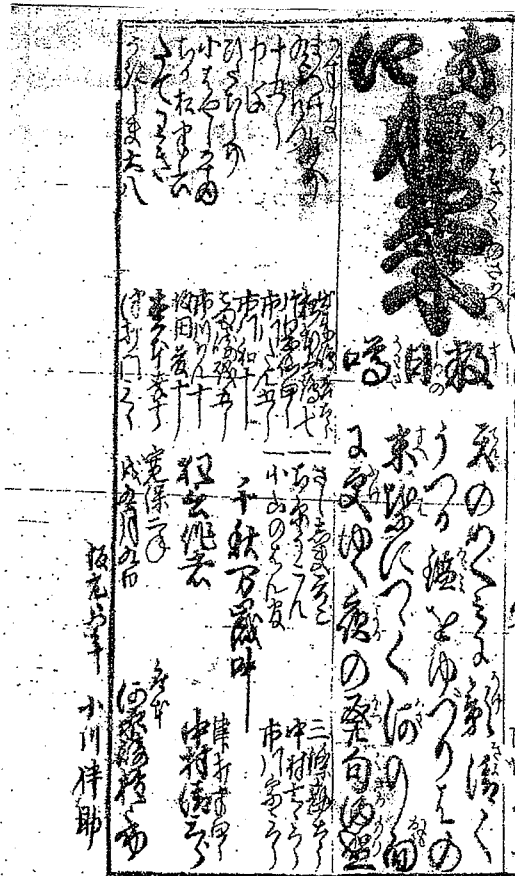
五 小川半助による再版

寛政元年に森田座が休座となり、五カ年の約定により河原崎座の仮興行と決まったところに、寛政二年（一七九〇）に森田勘弥が葺屋町河岸通にての芝居引き移し興行を願い出たために揉め事となり、ようやく示談が行き届き、遅れて十一月から河原崎座の顔見世興行となる。

長唄正本の伝存状態にもこうした事情が反映されて、表1 230頁で天明二年（一七八二）三月森田座上演の長唄正本「京偶昔繪姿」から伝本が途切れ、次は寛政三年（一七九一）十一月河原崎座上演「初舞台花の丹前」となる。河原崎座興行となつてから、専属版元も長谷川町小川半助に替わることは、65頁の三升屋二三治の記述と一致する。

小川半助の最古の記録は管見によれば元文四年（一七三九）の河原崎座顔見世番付で、「新和泉丁 はんもと 小川伴助」とある。次が寛保二年（一七四二）九月河原崎座上演の「忠信いろは文字」の役割番付である。次にその役割番付の終丁裏の後半部分を掲出する。

国立国会図書館蔵『享保天明江戸三芝居紋番附』に所収



左側の枠外に「板元いつみ丁 小川伴助」とあり、寛政三年の長唄正本より約五十年前に河原崎座の番付を出していることがわかる。

金井半兵衛から小川半助に版元が替わる寛政初期には、中村座においても堺町の家主のひとりである沢村屋利兵衛に、市村座においては座元の後見をつとめる親族市村茂兵衛に、長唄正本の版元が交代する。小川半助がどのような版元であるのか、また、河原崎座との関係については不明である。

表1 230頁から寛政期以降を見ていくと、本屋儀兵衛版や無刊記版が消え、寛政四年（一七九二）十一月上演の「花車岩井扇」や寛政五年（一七九三）八月上演の「月顔最中名取種」のようなヒット曲では、座の専属版元小川半助が初版以外に再版をも出していることがわかる。「花車岩井扇」では小川半助による再版が七種確認できる。一方、金井半兵衛には再版の伝本が存在せず、寛政期の河原崎座の長唄正本には、版行の形態に変化が起きている。

「月顔最中名取種」を例にとり具体的に示そう。「月顔最中名取種」は、「姫小松子日の遊」の第一番目三立目に上演された長唄曲であり、伝本は表1 231頁に記載したように四種に分類できる。以下に各本の表紙と本文終丁裏部分を載せる。アが初版で、寛政五年八月の上演時正本となる。版元は「はせ川丁 小川半助」である。イとウとエは、小川半助が田所町に移転してから出された再版である。特にエの本文末には、「弘化三年ノ八月 再板」と刊記が入るが、表紙には初演時の大名題や役者名・演奏者名が載っている。

『月顔最中名取種』表紙と本文終丁裏

ア 上演時正本 小川半助版

国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫本



イ 小川半助再版 明治大学図書館本



ウ 小川半助再版

国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫本



国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫本



猿若町三丁目
小川半助
弘化三年再版

森田座では他座よりも早く、明和期から座の内部者金井半兵衛が版元となっていた。だが、再版を出している形跡がないことから、版行の権利は初版のみ、あるいは上演時に関するものであったと考えられる。しかし、寛政期に現れる小川半助は再版を行っている。なお、小川半助が正本に蔵版者として表記される例は、管見によれば安政三年十一月森田座上演の正本『めりやす時雨の紅葉』と『唄上るり縁糸調笛竹』のみである¹¹。だが、事実上原版を所有して再版を行うかたちを取っている。

以後、寛政十年（一七九八）に再び森田座へ興行権が戻るが、寛政十二年（一八〇〇）にはまた河原崎座に移る。ただ、版元は小川半助に定まっているようである。なお、小川半助は享和二・三年（一八〇二・一八〇三）頃に田所町に移転している。また、明治三年六月守田座上演の「好声音紫紀花」に取材した役者絵『左団次の頼光』¹²には「小川半助 猿若町三丁目」と刻入されている。

まとめ

ここで、森田座・河原崎座上演の長唄正本とその異版について検討してきた結果を、62と63頁に挙げた(1)～(5)に照らし振り返ってみよう。森田座においても、当初は伊賀屋が上演時の簿物を版行しているが、宝暦十二年には泉屋権四郎が「森田座はんもと」と正本の奥書に記して、座の専属版元が形成される。他座と同様の過程である。しかし、

宝暦十四年から金井半兵衛が版元になり、伊勢屋・大坂屋・江見屋などの地本問屋と相版を組み、天明二年上演作品までの正本を残している。金井半兵衛は安永五年一月上演の「名大磯細見風流」正本の奥書に「森田座長唄正銘板元金井半兵衛」と載せる以外には、座の専属版元と表記をしていない。これは、金井半兵衛が森田座の内部者であるためと推測される。一方、相版元の江見屋（上村吉右衛門）が森田座正銘賣所、森田座正本などと載せるのは、座の外部にあって、正本の版行を請け負う泉屋同様の地本問屋であるからであろう。

このように座の専属版元が形成されると、伝本は少ないが本屋儀兵衛版と無刊記版も版行されており、それらの中には金井版を版下に流用した例がやはり見られる。

天明四年（一七八四）に森田座が休座し、寛政二年（一七九〇）に河原崎座に興行権が移ると、正本の版元も小川半助に替わる。小川半助は初版だけではなく再版・再々版を出していることが伝本で確認できるので、原版を所有して版行を行うかたち、すなわち株板化が起きていると判断できる。ただ、小川半助が蔵版者として表記される正本は安政期の森田座上演作品二冊だけであった。

このように見てくると、三座の長唄正本は、専属版元の形成から株板化と、おおむね同様の過程を取って版行されてきていることがわかる。そのような中で、金井半兵衛が明和く天明期に長唄正本の版元に入っていることには先駆的な意味がある。『芝居年中行事』によれば金井半兵衛は森田座の仕切場の役にあつたらしく、能書家と記されている。こうした座の裏方が上演情報を把握し、番付株を取得して正本

の版行に関わるかたちは合理的であろう。森田座では出版の権益を取り込むことに敏であつたと言える。しかし、金井半兵衛は再版本を出していないため、座との専属関係は成立しているが、その版行の権利は初版に関するものであつたと見られる。番付と同じ一過報道的な劇場出版物であつたわけだ。原版を所有して再版を行うようになるのは、寛政期以降、小川半助版になってからである。

1 吉田節子編（おうふう、一九九七年）。

2 吉田節子『日本大学法学部図書館蔵 撰寫録翻刻』（自家版、二〇〇七年）。

3 河原崎座は始めから森田座の控櫓であつたわけではない。享保二十年の河原崎座への興行権移譲は、桐大内蔵・都伝内三者との鬭取りによって決まったことが記されている。これについては、加藤征治「江戸における芝居町支配と仮櫓」（『比較都市史研究』二十八号、二〇〇九年）の論考がある。

4 『芝居年中行事』歌舞伎の文献7（国立劇場芸能調査部編・発行、一九七六年）。

5 吉田映二『歌舞伎絵の研究』（緑園書房、一九六三年）。

6 前掲注5。

7 前掲注5。

8 曲廬庵主人著『三座例遺志』（享和三年刊）に「長うた所作の文句

12 静岡県立中央図書館蔵「上村翁旧蔵浮世絵集(25)」に所収。

10 前掲注 5 所載の図版による。

架蔵番号 特ノ11-1212-65C

はんもと 小川半助蔵板」

架蔵番号 768.52/N/10 所収

板元 田所丁小川半助／蔵板

ちやうやちやのふゆめのかぞへ
 幾す他のふゆめとちやうや
 ものふゆめをふゆめと
 焼くふゆめをふゆめと
 ふゆめをふゆめと
 ふゆめをふゆめと

易政三
辰年
顏見世狂言

格元田所丁 小川半助

第二章 江戸歌舞伎における長唄の形成

第一節 長唄正本の刊行と長唄の形成

はじめに

今日にまで伝えられ、上演される機会も多い長唄を地（伴奏）とする歌舞伎舞踊曲には、「鶯娘」・「京鹿子娘道成寺」・「藤娘」・「鏡獅子」など、数々の名作品がある。それらの作品の成立事情や、その伝承過程での変遷については比較的多くの研究が為されてきている。

しかし、より遡って、そもそも江戸歌舞伎において、長唄がどのように形成されてきたのか、という問題については、おおよその道筋は付けられているものの、やはり十分な裏付けをもって解き明かされているとは言えないであろう。音曲の確かな記録媒体を持たなかった時代にあつて、残された文字資料や絵画資料も限られる中から長唄の形成史を描く事になるため、断片的な分析とならざるを得ないのである。

長唄所作事が登場してくる享保期（一七一六―一七三五）は、歌舞伎の歴史において、上方では元禄歌舞伎が終焉を迎え、代わって浄瑠璃興行が隆盛となり、「歌舞伎は無きがごとし」と言われる時期であった。だが、その一方で、江戸の歌舞伎は、新たな展開を孕んだ、過渡的な様相を示す時代に入っていたようである。郡司正勝刪定集の第一巻『かぶき門』『豊後系浄瑠璃と所作事の展開』には、次のような指摘がある。

歌舞伎劇壇は、元禄の創造時代から、正徳・享保期に入つて、一種の停滞を生ずる（以下略）。しかし、そのなかで、ある新鮮な動向をみせはじめたものがある。それは劇場音楽と所作事の新生、再創造である。

また、土田衛「VI享保期の歌舞伎」（岩波講座歌舞伎・文楽、第二巻『歌舞伎の歴史I』）においても、享保期は江戸の歌舞伎の新たな展開と仕込みの時期であつたと位置付け、

上方歌舞伎のよい所を移入し、劇場音楽を豊かなものにして、舞踊劇への道をつけ、その他いろいろな新しい試みをする事になった。

と述べている。確かに、享保期（一七一六―一七三五）を前後して、江戸の歌舞伎界では音曲面にいくつかの大きな動きがある。

初世都太夫一中が正徳五年（一七一五）十一月に江戸に下り、市村座の顔見世興行「萬歳女鉢木」で道行「笠物狂い」を出語りし、大当たりをとっている。その折の芸評が、評判記『役者我身宝』（正徳六年（一七一六）刊）江戸の巻に以下のように載っている。

大坂に上るり太夫あまたあれど御当地へ下られし事なく、殊にあらごとを第一といたす。当地で坂田藤十郎がけいせいいかひのごとき、やはらかなる上るりにて大あてなさるゝは、名人にあらずや。それゆへ評判にのせました。

荒事を好む江戸の観客にも、一中の和事風の語り物が大好評であつたことを、異例の扱いで評しているのである。

また、その一方で、生粋の江戸の浄瑠璃である河東節の祖十寸見河

東も、享保二年（一七一七）二月に市村座の狂言「傾城富士高値」に出演し「松の内」を語っている。その正本が伝存し、管見によれば河東節正本の初出となる。十寸見河東とその一門、二代目半太夫の作品には、享保期の大名題と座名の入る正本が比較的多く残っており、歌舞伎出勤の様子を知ることができる³。

そして、一中の分流であり、江戸豊後系浄瑠璃（常磐津節・富本節・清元節）の祖となった宮古路豊後掾が、名古屋で新作心中浄瑠璃「睦月連理戀」語って成功を収め、享保十九年（一七三四）秋には中村座へ下ってこれを語り圧倒的人気を博している⁴。

このように江戸歌舞伎では、荒事を好む本来の風土の中に和事趣味を受け入れる土壌が育ちかけ、浄瑠璃の心中物を好むまでに変わりつつある様子を窺うことができる。そのような中で、長唄は江戸歌舞伎の所作事の地（伴奏）として、どのように登場してきたのであろうか。本節では、顔見世番付を主体にして作られてきた従来の江戸長唄の成立論に、書誌研究から得た筆者の長唄正本の視点を加え、「江戸長唄の形成」と捉える立場をとって考察したいと思う。

なお、「うた」の文字について、原資料ではうた・哥・歌・唄が混用されているが、原資料から引用する場合を除き、本章では番付や役者評判記・絵入狂言本等に出てくる「長うた」は長唄と表記し、「小うた」は小歌と表記する。また、座に抱えられる小歌・長唄・唄浄瑠璃の歌い手は「唄方」と総称し、唄方・三味線方・お囃子を総称する場合は「地方^{じかた}」と呼ぶ。また便宜上、長唄・小歌の唄方を長唄方・小歌方と表記することがある。小歌方は役者評判記に見出せるが、長唄

方は筆者の造語であることを断っておく。

一 長唄の形成を考える上での問題点

江戸長唄の成立を扱った先行研究には、次のものがある。

高野辰之『新訂増補 日本歌謡史』（春秋社、一九二八年）

吉川英史『日本音楽の歴史』（創元社、一九六五年）

町田佳声・植田隆之助『現代邦楽名鑑・長唄編』（邦楽と舞踊社、一九六六年）

竹内道敬『劇場音楽 長唄』（『講座日本の演劇4 近世の演劇』勉強社、一九九五年）

また、江戸長唄の成立に関する研究史をまとめた論考として、

鹿倉秀典「『江戸長唄』研究序説―楓江と左交」（『日本文芸思潮史論叢』ぺりかん社、二〇〇六年）

がある。

これまでのところ、長唄の成立に関する通説は、『近世邦楽年表』長唄編における顔見世番付の実見記録が基となつて作られていると思われる。初期の江戸の顔見世番付には「京長うた」「大坂長うた」あるいは「京三味線」の肩書きが記載されており、上方の唄方が江戸に下り出演していた。番付上の「江戸長うた」の初見は、宝永元年（一七〇四）江戸山村座の顔見世番付とされる。それが次第に江戸出身者で占められるようになり、享保十二年（一七二七）以降は江戸育ちの

唄方だけになった。よって、この年をもって、江戸長唄の確立と見なすというのである。

顔見世番付では、役者の場合は「立役」「若女方」「道外」などの役柄が名前の上に付けて記される。座に抱えられる演奏者は、「小うた」「長うた」「うた浄瑠璃」のほか、「三味線」、「大鼓」「小鼓」「笛」「太鼓」などが名前の上に肩書きとして記される。これらを例えば「長うたを歌う役」「三味線を弾く役」「笛を吹く役」として、座における一つの役目を表していると捉えて良いであろうか。

山村座の顔見世番付に「江戸長うた」が現れる宝永元年（一七〇一）頃には元禄歌舞伎の終りを迎え、江戸版の絵入狂言本も正徳期（一七一〇）に入ると出版されなくなる。また、『近世邦楽年表』所載の宝永七年（一七二〇）と八年（一七二一）の森田座顔見世番付には、「京長うた」「大坂長うた」もまだ見つかる。

「長うた」という肩書きは、いつから存在するのだろうか。他の資料にも長唄の肩書きを求め、以下に少し書き出してみよう。

『長歌古今集』（天和二年（一六八二）正月、わしや新版）は、江戸の吉原で流行した歌い物の詞章を収めた歌謡集である。『長歌古今集』所載の「貴船道行」「今川花見車（今川忍び車）」は、『古今役者物語』（延宝六年（一六七八）、江戸本問屋板）にも舞台図入りで収められており、江戸歌舞伎の芝居歌を多く含むと言われる書でもある。その中に「はうた　ながうた次左衛門」と題する曲がある。これは、長うたの唄方の次左衛門が歌った端歌曲ということであろうか。

『撰陽奇観』卷之十八の『（ねのとしかほみせ）大和屋甚兵衛役者付』は貞享元年（一六八四）度の大坂の顔見世番付とされるが、その下段の右端に「長うた」の肩書きと「ゑと権左衛門」の名が見つかる。権左衛門は江戸から上った者であろうか。

やや年代は下るが、『松平大和守日記』元禄四年（一六九一）十一月二十二日の条に、松平直矩の五十歳の祝賀に江戸の藩邸で操の座敷興行を催したことが記されている。その出演者の中に、長うたの肩書きを取る者が含まれており、以下のようにある。

狂言太夫次郎三郎、上るり太夫式部、長うた次右衛門、同七郎兵衛、

このように、「長うた」の肩書きは、野郎歌舞伎の時代からすでに存在していたらしいが、その記載例は少ない。これらの長うたの唄方が歌っていた内容について、長唄正本の最古の伝本が享保十六年（一七三一）となるため、『長歌古今集』所収曲などにまず求めようとする、非常につかみ所の無いものになってしまう。その所収曲の多くは芝居歌であると言われているが、歌い物と言っても浄瑠璃の道行や景事を内容に含んでおり、また、一曲が小歌に比して長いとも言いつれないので、特徴がつかめないのである。長唄の唄方は座付きの音曲担当者であるため、浄瑠璃太夫のように個人芸に代表させて様子を単純に捉えることができない面もある。

長唄の祖系を地歌の長歌物に関連づける見解が存在する。地歌の長歌は、小歌の組歌とは異なり、一貫したストーリー性を有することが特徴であると言われている。江戸に進出した検校の長歌物が、江戸長

唄の成立に關与していると見る説もある。これらの説は示唆を与えるものではあるが、筆者は判断し得る十分な材料を持ち合わせていない。

享保十二年以前の顔見世番付においては長唄の肩書きは少数派であり、これに対し、圧倒的に多く見られる肩書きは小歌なのである。

江戸歌舞伎において長唄の形成を考えると、資料上にあまり現れることのない時代の長唄の唄方（以下で長唄方と表記することがある）が、すでに小歌の唄方（同じく以下小歌方と表記）と明確に異なる様式を有していたとは、『長歌古今集』を読む限りでも考え難い。

推測するに、小歌方と長唄方の歌は、内容的には重なっていたと思われる。ただ、小歌は役者評判記に「一ふしの小うた」とよく出てくるように、短い挿入歌として本来用いられたのではないだろうか。適当な例ではないかも知れないが、『宝永／延宝はやりこうた』（国立国会図書館蔵、写本）に所収される「高安通ひ」には、シテと地（地謡）の歌う箇所が交互に指定されている。長文であっても、役者と唄方が短いフレーズを交互に歌ったり、あるいは、せりふと歌が交わされるかたちであったと思われる。これに対し、長うたはまとまった量の詞章を通して歌ったのではないだろうか。

『近世邦楽年表』所載の享保十二年（一七二七）頃の顔見世番付を見ると、唄方は「江戸長うた」の肩書きで占められるようになっており、その一方で「小うた」の肩書きは少なくなっていく。これを、小歌が衰退することによって、それまで少数の長唄方で歌われていた長唄が表面に浮上してきたと考えるよりも、歌舞伎の唄方として頻出する小歌方の歌う内容が次第に広がりを持ち、長うたと変わらないもの

となつて、そのうちのいくつかの要素がさらに享保後期に長唄へ展開していった、と考える方が実態に即しているように思われるのである。大方の研究書においても、小歌は長唄に吸収されたとの見解をとっているようである。

歌舞伎の小歌は風流踊系の小歌の組歌を元としていたが、若衆・野郎歌舞伎の時代に狂言系の小謡が流入し、また、役者は唄方・三味線方・囃子方を伴つて遊里や座敷芝居にも出入りしていたため、地歌や流行歌との交渉もあり、一方では歌舞伎の戯曲的発達に伴い、能や説経・祭文・古浄瑠璃などから戯曲的展開を吸収してきている。そして、歌舞伎における小歌は、非常に柔軟に様々な要素を摂取してきた結果、享保期には多面的に開かれた豊かな土壌を有するに至り、そこから新たな展開をも生み出せるようになっていたと推測される。

二 筆者の視点

先に掲げた通説においては、江戸の顔見世番付で、長唄方の肩書きが江戸の出身者で占められる享保十二年の段階を、江戸長唄の確立と見なしていた。しかし、番付上の肩書きについて、「江戸長うた」の地名部分を、高野辰之は出身地とは必ずしもとらず、『日本歌謡史』（前出書）の中で少しニュアンスを変えて次のように述べている。

此の頃の芝居番附を見ると、京長唄・京小唄・大阪小唄・江戸長唄・江戸小唄の目があつて、これに謡ひ手一二名づつを

挙げてあるが、此の京唄・大阪唄なるものはおそらく上方劇に用いた歌で、（以下略）

つまり、京や大坂での当たり作品をその唄共々、江戸の歌舞伎で用いていたことを指しているのではないかと思われる。興味深い指摘である。とすれば、江戸の歌舞伎には京や大坂の芝居歌が持ち込まれていたのだが、享保十二年以降は上方に頼らずとも江戸独自の歌で芝居ができるようになった、ということを経る江戸の顔見世番付の表記は示しているのだろうか。

筆者は高野説を踏まえつつ、顔見世番付の肩書き部分の解釈を主体に作られている従来の長唄の確立論（通説）を、長唄正本によつてさらに内容面からも補い捉え直して見ようとする。長唄正本の表紙にはその長唄作品の上演時の大主題と番目・役者名・演奏者連名・役者の舞台絵といった上演情報掲載せられおり、本文の詞章はその内容を伝えてくれる。したがって、このアプローチは長唄正本からのみ行えるのである。

先にいくつか例を引いた通り、長唄の唄方は古くから存在していたのである。それが、享保十二年の江戸版顔見世番付から「江戸」と冠する長唄の唄方で占められていくのはなぜだろうか。この点を長唄正本と照らし合わせ、少し詳しく検討して見たい。

ただ、現存する最古の江戸版長唄正本は、享保十二年より少し遅れて、享保十六年の中村座上演作品からとなる。だがその前に、長唄正本がなぜ創刊されたのか、この問題について考えておく必要がある。長唄正本の創刊という新たな企画を立てた興行においては、所作事の

音曲面に何かそれまでと違う意図が組み込まれた可能性があるからだ。ことによると、顔見世番付上の肩書きの記載が江戸に変わったことも、この問題と繋がっているのかも知れない。中村座が長唄正本の創刊を企画した理由とは何であったのだろうか。

三 坂田兵四郎の出自

96頁の表1は、伝存する初期の長唄正本をあらわしたものである。中村座と市村座に分け、享保十六年（一七三一）の最古の伝本から寛延期以前（一七四八）のものまでを上演順に並べている。表の横軸の四列目の唄方のところに、正本に記載されている演奏者連名の中から唄方部分を抜き出している。唄方の動向を調べるため、三味線方や囃子方についてはあえて記載していない。

この唄方の部分を下に見ていくと、三座を通じて立唄（唄方の筆頭者）は坂田兵四郎、松嶋庄五郎、次いで吉住小三郎が勤めていることがわかる。初期の長唄正本は坂田兵四郎か松嶋庄五郎、あるいはこの二人の競演を眼目として、版行されていると言ってもよいのではないだろうか。さらに言うと、長唄正本は坂田兵四郎の存在によつて、創刊されたとも推測し得る。もちろん、長唄正本がいつ刊行され始めたのか、この答えは、必ずしも伝本に反映されているとは限らない。今日に残る正本の伝存状態には偏りが生じている可能性もあるからである。このことを踏まえつつ、伝本から得たデータを一つの目安にして、

坂田兵四郎を長唄正本創刊のキーマンとして提示して見たい。

だが、長唄正本を手取る人の関心は、歌い手にあるばかりではなく、むしろ踊り手の花形役者にある。しかし、初期の長唄正本には唄本としての意識がより強く反映しているようである。表1の横軸の六列目「正本の奥書」の欄を見ると、いくつかの版に「右ハ坂田兵四郎（松嶋庄五郎）直伝を以令板行候」、またはこれに類似した文言が入る。こうした奥書は浄瑠璃正本の様式に倣ったもので、太夫自身の本文や節付けであることを保証する極め書きと呼ばれている。太夫の詞章や節付けを正當に伝えていることは、音曲本の重要な要素であった。浄瑠璃本の極め書きに近い奥書を備えていることは、長唄正本が音曲を主目的に作られたことを示している。しかし宝暦期になると、このような奥書は長唄正本では見られなくなっていく。

初期の長唄正本の表紙を飾った歌い手とは、どのような人達であったのだろうか。坂田兵四郎と松嶋庄五郎の出自については、植田隆之助『現代邦楽名鑑・長唄編』において、『新撰古今役者大全』と『飛鳥川』から関係する部分がすでに引かれてあるが、ここに再度書き出して見る。

坂田兵四郎については、『新撰古今役者大全』（寛延三年（一七五〇）刊、京都、八文字屋八左衛門版）第三巻の「坂田藤十郎」の項に、次のように記されている。

故藤十郎いもとむこ（妹婿）ひいらぎや兵四郎といふあり。その子ハ藤十郎甥ゆへ苗字をゆづり置れたるを以、その子成人して坂田兵四郎とて小歌の名人なりしが、去年巳ノ六月身まかり、

清信宗樹信士と号す。

さらに、同書の巻六においても、「坂田ノ系」（坂田藤十郎の系図）のところに以下のように書かれている。

実ハ終木や兵四郎子

藤十郎甥にて子分

○坂田藤十郎——坂田兵四郎

小歌、江戸にて死ス¹⁰

興味を引くのは坂田兵四郎が、元禄歌舞伎の上方の名優、坂田藤十郎の甥と記されていることである。しかも、坂田藤十郎の「子分」と記載されているので、藤十郎の義子となり、内弟子生活を送っていたと推測される。

同書の第一巻「拍子方〔囃子方〕」の部分においても、兵四郎について次のように記している。

小歌は、はやしかたの部に入ル。拍子方〔囃子方〕にハ今とても京の忠二郎・江戸の兵四郎をはじめ上手あれバ、¹¹

すなわち、坂田兵四郎は京から江戸に下ったと見られるが、江戸で名人の誉れを取ったものようである。坂田兵四郎が江戸に下るまでの足跡を辿りたいが、伝存する上方の番付では、享保十四年（一七二九）の役割番付以外にその名を見つけることができず、また、役者評判記に唄方の記述はほとんど載って来ないのである。

因みに補足すると、坂田藤十郎は息子の坂田兵七郎¹²をも弟子としていたようで、二人は藤十郎の和事芸を継ぐため修行していたと推測される。宝永四年（一七〇七）二の替狂言「江州石山寺誓の湖」で、病

後の藤十郎は自身の得意芸「やつし事」の象徴である紙子を大和山甚左衛門へ譲り、宝永六年（一七〇九）に没する。折しも上方では元禄歌舞伎が下火となって浄瑠璃興行の全盛時代へと替わる。藤十郎亡き後の上方の歌舞伎界に、兵四郎は閉塞感を感じていたのかもしれない。藤十郎の死後二十年余を経て、兵四郎は停滞する上方歌舞伎界から江戸の中村座に呼ばれる。そして、藤十郎の芸脈を継ぐ兵四郎は、その後江戸で和事の活路を見出すことになるのである。

一方、松島庄五郎については、柴村盛方の随筆『飛鳥川』（文化七年（一八一〇）、八十九歳の自序）に次のように書かれている。

長歌といふはやる、松島庄五郎坂田兵四郎と云上手有り、庄五郎は四谷せんざい〔前栽〕場の呼込役とぞ（イテ）声すぐれてよき故、人の勧めにて唄うたひになる。¹³

『飛鳥川』は後代の資料であるため、この記述をそのままに受け取ることにはできないが、松島庄五郎は江戸青物市場の呼び込みから、唄方に入ったと書かれている。よほど美声で唄がうまかったのであるう。

江戸の者であろうか、芝居内部の育ちではなかったように窺える。『近世邦楽年表』（前出書）によれば、松島庄五郎は享保十一年（一七二六）市村座の顔見世番付が初出となる。享保十一年の市村座、享保十二年と十三年の中村座の顔見世番付のいずれにも、「長唄」の肩書きで「松嶋庄五郎」の名があるが、小歌方としての経歴は見つからない。

こうして見ると二人の出自は対照的で、それだけに個性の異なるスター歌手の競演は面白く、観客を引きつけたであろうと想像される。

また、吉住小三郎についても、『三味線始祖杵屋家系図』¹⁴に「生国泉

州堺住吉社家ナリ 故ニ住吉ヲ返シテ吉住ト号ス」と書かれており、やはり江戸に下った唄方であるようだ。

96頁表1の唄方部分を見ると、享保十六年（一七三一）以降も主要な唄方はまだ上方出身者に依存していたことがわかるであろう。

坂田兵四郎が京・八文字屋の『新撰古今役者大全』では小歌の名人、小歌方と記載されているのに対し、表1に掲げた江戸版の長唄正本においては長唄方の肩書きをとり、『飛鳥川』の著者で幕府の右筆を勤めた柴村盛方も兵四郎を長唄の上手と評していることに注意したい。

四 坂田兵四郎と長唄正本

資料上での坂田兵四郎の初出は、享保十四年（一七二九）七月京、佐野川万菊座の盆興行「けいせい一双首」の役割番付となる。次頁にその番付を掲載する。次頁図1の役割番付の三升目の最後の一行に、「大切ニミヤコ大おとり仕候」とあり、隣の四升目の冒頭部分は次のように記載されている。

しぐみおどりもくろく

音頭 杉本三千三〔若衆形上〕 中村京十郎

萩野松代〔萬菊座色子〕 吉田小八

坂田兵四郎

括弧内は、役者評判記『役者二和櫻』（享保十四年（一七二九）三月刊）から筆者が補った。下の三人が唄方であろう。



このように、「けいせい一雙首」三番続きの大切の「都大踊り」に兵四郎は出演している。この番付は、土田衛『考証元禄歌舞伎』中の「都風流大踊考」にも掲載され、同書に拠れば、「都風流大踊」は享保から明和（一七一六～一七七二）を全盛期とし、盆興行に限って一日の大切に演じられた踊りであり、上方歌舞伎界の重要な年中行事であったと言う。江戸に下る前年、京で兵四郎は番付に名を出し、活動していたことがわかる。

そして、享保十五年（一七三〇）の顔見世興行から、瀬川菊之丞¹⁵が江戸中村座に初下りし、これに坂田兵四郎も同行したと推測される。翌十六年（一七三一）の初春狂言「傾情福引名古屋」で瀬川菊之丞は傾城葛城を勤め、二月から加わった所作事「無間の鐘」「無間の鐘新道成寺」で大当たりをとる。歌舞伎評判記『二の替藝品定』（享保十六年三月刊）では菊之丞は若女形「上上吉」となっており、

當二月朔日より同じ狂言の次に、手水鉢を無間の鐘になぞらへてのしこなし大々當り。江戸中の大評判。

と書かれている。『役者春子満』（享保十七年（一七三二）正月刊）には「五月晦日迄、大当り」とあるため、この興行は五月まで続いたようだ。

この大ヒットした所作事の音曲正本の表紙が写真版として今日に残り、そこに坂田兵四郎が長唄の唄方として記載されているのである。表1では、【中村座】の最初の二冊『傾城無間鐘 哥の出端』と『無間鐘 新道成寺所作』がその正本に当たる。この「傾城無間の鐘」の長唄正本を、次頁に掲げる。

図2 『傾情無間の鐘 哥の出端』の表紙



これは『江戸時代音楽通解』¹⁶に掲載された表紙であるが、版元は三鱗の商標により鱗形屋と知れる。表紙の外題「けいせいむけんのかね」の下に「哥の出は」とあることから、菊之丞の登場に用いられた長唄と見られる。表紙の右下部分に演奏者連名が次のようにある。

琴三味線きねや文次郎

長哥 坂田兵四郎

三味線 きねや太十郎

この長唄正本の同版本を透写したと見られる本が、早稲田大学演劇博物館安田文庫旧蔵本の中にあるので、本文を知ることができる。その本文には、「菊之丞へ」の指定が記載されていないことから、菊之丞が歌いながら登場したのか不明である。役者評判記にも、菊之丞の歌

を評する記述はない。詞章はいとしい男がある身での傾城勤めのつらい心情を述べた内容で、傾城葛城の出を印象付けるための唄で、手水鉢を打ち金がばらばらと落ちて来る無間の鐘の所作部分に対応しているのではないと思われる。

この作品に続き、菊之丞は「傾情福引名護屋」の第三番目において、江戸における道成寺所作の嚆矢とされる「無間の鐘新道成寺」を演じている。これには長唄正本が中嶋屋版と伊賀屋版の二種伝存する。各本の表紙と本文の初丁の半丁分を次頁図3に掲げる。この中嶋屋版と伊賀屋版には、坂田兵四郎の肩書き部分に異同がある。図3—①の中嶋屋版では演奏者が「小うた 坂田兵四郎」とあるのに対し、図3—②の伊賀屋版では「長うた 坂田兵四郎」となっているのである。この二冊は本文の版面がよく似ている。だが、伊賀屋版の表紙の外題には最後に「しよさ」がなく、本文にも十行目下から二文字目「我」↓「われ」など意図的に用字を変えている箇所が見つかることから、伊賀屋版は、表紙は中嶋屋版を参考にして作成し、本文は中嶋屋版を版下に流用し被せ彫りしていると推測される。つまり、中嶋屋版が最初に出て、これを元に伊賀屋版が作成されていると考えられるのである。

鱗形屋は江戸大手の地本問屋であり、伊賀屋は役者絵細版や河東節など薄物の音曲本を広く扱う版元である。一方、中嶋屋というのは江戸歌舞伎の絵入狂言本や番付を古くから専門に出版してきており、座との提携が認められる版元であるため、中嶋屋が「小うた」と正本に記したのも単なる誤記とは受け取れない。中嶋屋は、江戸に下った坂田兵四郎を小歌方と捉えていた可能性がある。

図3-① 堺町 中嶋屋版 『江戸時代音楽通解』に掲載

外題「むけんの鐘新だうせうじしよさ」

小うた 坂田兵四郎／さミせん きねや喜三郎



表紙

むけんの鐘新だうせうじしよさ
 中嶋屋版
 小うた 坂田兵四郎／さミせん きねや喜三郎

(本文) 初丁 裏

図3-② 元浜町伊賀屋版 早稲田大学演劇博物館安田文庫旧蔵本

外題「むけんの鐘新だうせうし」

長うた 坂田兵四郎／さミせん きねや喜三郎



むけんの鐘新だうせうし
 伊賀屋版
 長うた 坂田兵四郎／さミせん きねや喜三郎

そして、瀬川菊之丞の「無間の鐘」の所作はこの時が初演ではなかった。『役者全書三』に「無間の鐘」について次のように記した記事がある。

一、今専とする無間の根元ハ享保十三年春、京市山助五郎座にて古瀬川菊之丞、庄屋六右衛門おすまといふ役にて勤しハ、手水鉢を鐘になぞらへて打しが始也。同十五戌年江戸中村座へ初下りにて、翌年春〇「傾城福引名古屋」といふ狂言に、けいせいかわらきにてつとめ、古今たぐいなき大当り。¹⁷

このように、菊之丞は、享保十三年に京、市山助五郎座二の替狂言「けいせい満蔵鑑」で「無間の鐘」の所作を演じている。絵入狂言本「けいせい満蔵鑑」に載る挿絵には「金山 むけんのかねを願念しててうず鉢ヲ打つ 菊之丞大あたり／上より小判ばら／とおつる」と添え書きされてある。歌舞伎評判記『役者色紙子』（享保十三年（一七二八）三月刊）京之巻に、その芸評が次のように載る。

わけて此度のあたりは、むけんのかねのだん、ひとり狂言の所あつぱれ、お上手が見へました。

このように、瀬川菊之丞の無間の鐘の所作は、京の初演ですでに当たりを取っていたのであるから、これを江戸で再演する際には、所作にすでに付いていた音曲も共に移入したと考えられる。ゆえに、坂田兵四郎も下ってきたのであろう。

「無間の鐘」に続いて、瀬川菊之丞が「傾情福引名護屋」の第三番目に演じた「無間の鐘新道成寺」は、別名を「傾城道成寺」とも言い、江戸における道成寺所作の嚆矢と言われる演目であるが、道成寺舞

踊としては、延宝年中（一六七三～一六八〇）に二世玉川千之丞が演じ、元禄期（一六八八～一七〇三）には榊山小四郎、初世水木辰之助の鐘入りの所作が名高く、古い上方の女方舞踊の系譜を引く作品である。長唄正本を見ると、傾城事を表す上方風の小歌が付いているように思われる。

瀬川菊之丞と坂田兵四郎以外に、上方出身と見なし得る役者の江戸下りを表1から抜き出し、以下に表した。役者の移動の年代については『歌舞伎評判記集成』の「役者移動索引」から取り、江戸下り前後の役者評判記における役柄と位付けを記載している。以下に掲げる役者は、表1に従って、中村座、市村座、河原崎座の上演順に書き出している。なお、表1においては以下の役者を太字で示し、それぞれの役者が江戸下りに際して演じた当たり芸について、表1の「役者評判記の記載」欄に書き出してある。

表1の【中村座】

〈評判記の刊年〉 〈評判記上の記載〉

染川多三太 享保15年1月刊 大坂嵐座色子

↓享保17年1月刊 江戸中村座色子

（表1では、享保16年3月に中村座へ出ているため、享保15か16年の顔見世興行から、江戸下りしたと見られる。）

佐渡島長五郎 享保16年3月刊 大坂座元、立役上上

↓享保17年1刊 江戸中村座、立役上上吉

(享保16年の顔見世興行から江戸下り)

辰岡久菊

元文3年3月刊 京中村若太夫座、若女形上上吉

↓元文4年1月刊 江戸中村座、若女形上上吉

(元文3年の顔見世興行から江戸下り)

山本京蔵

元文2年1月刊 京水木竹之助座、若女形上上

↓元文3年1月刊 江戸中村座、若女形上上

(元文2年の顔見世興行から江戸下り)

佐野川市松

元文5年3月刊 京座元、若女形若衆形惣巻軸

↓元文6年2月刊 江戸中村座へ出る

若衆形巻軸上上吉

(元文6年2月に江戸下り)

寛延4年1月刊 江戸市村座、若衆方上上吉

嵐玉柏

寛保2年3月刊 京中村桑太郎座、若女形上

↓寛保3年1月刊 江戸市村座、若女形上上

(寛保2年の顔見世興行から江戸下り)

中村桑太郎

寛延1年1月刊 京座元、若女形上上吉

↓寛延2年1月刊 江戸中村座、若女形上上吉

(寛延1年の顔見世興行から江戸下り)

表1の【市村座】

瀬川菊次郎

享保16年3月刊 京榊山座、若女形上上

↓享保17年1月刊 江戸市村座、若女形上上士

(享保16年の顔見世興行から江戸下り)

市山伝五郎

元文5年1月刊 大坂佐野川花妻座、実悪上上吉

↓元文6年1月刊 江戸市村座、立役上上吉

(元文5年の顔見世興行から江戸下り)

尾上菊五郎

寛保2年3月刊 大坂佐渡島長五郎座、

若女形上上吉

↓寛保3年1月 江戸市村座、若女形上上吉

(寛保2年の顔見世興行から江戸下り)

表1の【河原崎座】

坂東豊三郎

元文3年3月刊 京中村若太夫座、若女形上上吉

↓元文4年1月刊 江戸河原崎座、若女形上上吉

(元文3年の顔見世興行から江戸下り)

こうして見ると、若女形の実力者が多数江戸下りしていることがわかる。このほか、沢村宗十郎が享保三年、坂東彦三郎が享保十二年(一七二七)の顔見世興行から江戸に下り、また、萩野伊三郎も延享元年(一七四四)の顔見世興行に再度江戸へ下っている。

演目については、享保十八年（一七三三）七月市村座上演の「大踊りこんこりき節」は坂田兵四郎が勤めており、先に指摘した、享保十四年（一七二九）京、佐野川万菊座の番付における都大踊りの音頭が想起される。『歌舞伎事始』巻之三「七月芝居風流踊」に、

元来七月芝居のおどりハ、京よりはじめたり。今に相続す。江戸の芝居にハおどりなし。大坂ハ京にならびておどりあり。よつて大坂にも、都大踊りといひ伝へたり。¹⁸

とあり、土田論考の指摘によつても、京から入ったことは明かである。

享保十七年（一七三二）中村座で佐渡島長五郎が演じた「後面」の所作事は、享保六年（一七二一）正月刊の『役者若咲酒』大坂の巻に「立役上上 佐渡島長五郎（大坂）桐野谷座／狐の所作見ごと」とでているのが古い記録であろうか。『歌舞伎事始』には、その創作の過程が次のように記されている。

▲佐渡島長五郎

狐の所作事ハ、ある時つれ／＼の折節雨降けるに、大豆の入たる盆へ軒づたひの雨のしたぐり墮る音、拍子を感じ雨だれ拍子を工夫して、狐の風俗にうつし、早替りを思ひつき、前に黒き物を身に覆て、後に狐の面をかけ、後へ手を廻し、秘術を尽す。くるりと廻前の黒きものを上ると、伯藏主とかはる。見る人心をまどハし皆人感にたへ、いづともなく誰が名付るとも知れずうしろ面と呼びける

江戸では三味線方の杵屋喜三郎が改作したと伝えられる。松嶋庄五郎が長唄を勤めているが、これは上方の女方ではなく、立役の佐渡島長五

郎の滑稽味を帯びた所作との組み合わせにより可能になったと考えられる。

表1で、中村座の延享五年（一七四八）『小妻重山吹海道』・寛延元年の『室咲き京人形』の正本には、表紙絵に女方による鍵踊が描かれており、『小妻重山吹海道』の詞章には水木辰之助の鍵踊の一部が使われている。

中村座、寛延二年（一七四九）の市川海老蔵による『無間の鐘』は瀬川菊之丞のパロディー作品となる。市村座では、座元や若太夫が積極的に江戸下りの役者と共演し、長唄についても坂田兵四郎と松嶋庄五郎の競演を組む方針をとっている。

このように、上方で当たった役者の所作事は江戸で再演され、その上演に際して長唄正本の版行が組まれて、その多くを坂田兵四郎・吉住小三郎が勤めていることが表1から読み取れる。

坂田兵四郎は番付の記載で確認できなくとも、京では小歌方であった可能性が高い。『歌舞伎事始』（宝暦十二年（一七六二）正月刊、江戸鱗形孫兵衛・京八文字屋八左衛門相版）の第五巻「古人小歌の作者」の部には「花の香 坂田兵四郎作」と記載されており、坂田兵四郎が小歌を作っていたことや、坂田兵四郎が京、八文字屋の『新撰古今役者大全』では小歌の名人、小歌方と記載されていることもこれを裏付けていよう。

そして、坂田兵四郎は享保十五年に江戸に下ってから、中村座や市村座の正本には長唄の肩書きで表記されるのだが、実態的には上方の小歌か、あるいは、きわめて上方の小歌色の強い歌をうたっていたと

推測される。

しかし、このような長唄正本から読み取れる上方芸の移植の状態は、顔見世番付から作られている従来の通説「江戸版顔見世番付で享保十二年（一七二七）以降、長唄方は「江戸」の肩書きで占められ、江戸出身者で賄えるようになり、この年をもって江戸長唄の確立と見なす」という内容と、実態的にかなり食い違っていることが指摘できよう。

中村座は坂田兵四郎を江戸に呼び、上方下りの役者の所作にすでに付いていた上方の小歌、あるいは小歌色の強い歌を、江戸の歌舞伎界で長唄として売り出した。これに伴い、新企画として長唄の肩書きを掲げた音曲正本を版行し、その後長唄所作事は隆盛となっていくたのである。このように長唄正本の版行の機縁を捉えるならば、享保十二年の時点で顔見世番付の肩書き表記を「江戸長唄」に変えていることも、座側が唄による所作事に目を付け始め、これを江戸の歌舞伎の新たな演目に据えようとし出した現れと考えられないだろうか。

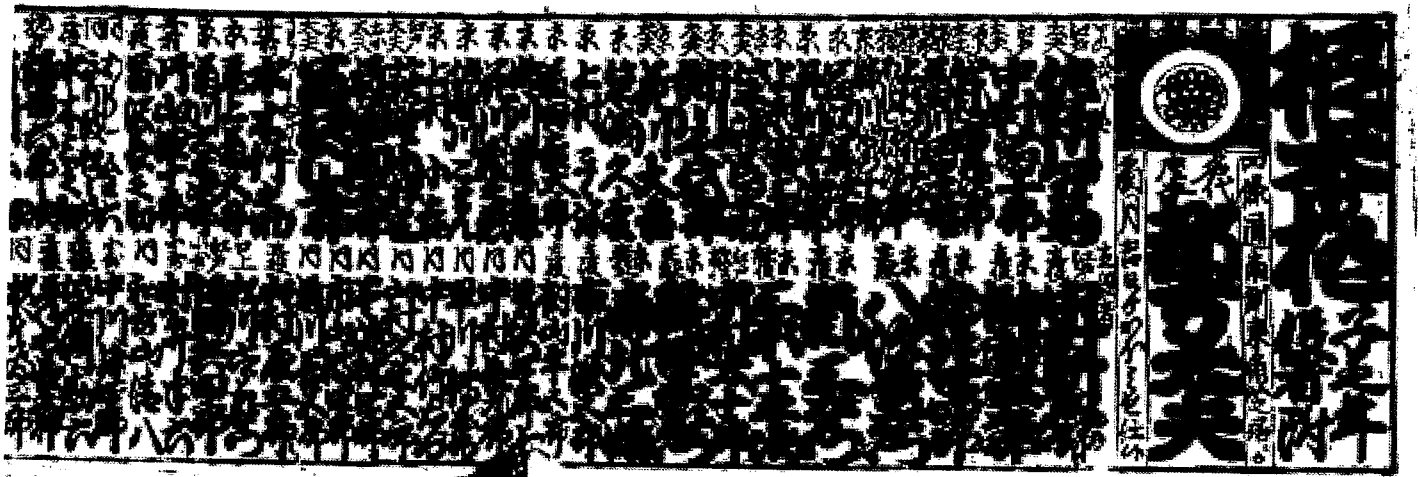
五 顔見世番付の肩書きについての補足事項

坂田兵四郎は、享保十六年（一七三二）年の顔見世興行から、一旦京に戻ったと見られる。都万太夫座の子年顔見世番付²⁰の下段に「江戸／小哥 坂田兵四郎」と記載されている。図4にその番付を掲げた。

図4 都万太夫座子之年顔見世番付

東京大学総合図書館蔵『「古歌舞伎番付」』所収。

図4



↑ 坂田兵四郎

この時坂田兵四郎は、おそらく佐野川萬菊・中村富十郎・中村新五郎等とともに京に上ったと見られる。兵四郎は元々、京から江戸に下ってきたのであるが、享保十六年に京に戻った折の都万太夫座の番付に兵四郎が「江戸」と肩書きされているのはなぜであろう。同番付の役人付の冒頭部分には、

江戸／太夫 佐野川萬菊 江戸／立役 中村新五郎

江戸／太夫 中村富十郎

とあり、上方出身でこの時江戸下りした役者も同様に「江戸」の肩書きで記載しているようである。このうちの中村新五郎について、『役者春子満』（享保十七年（一七三二）正月刊）京之巻に、

是迄御江戸へ御下りの立役衆の中には、稀なる大當りしての御歸京・比類なき御手柄・珍重／＼

佐野川萬菊については、

盆から十月迄當づめて、御江戸に名を残しての・上首尾のおぼり・

と書かれてあるから、これらの上方出身の役者や兵四郎の肩書に「江戸」を名乗らせているのは、江戸歌舞伎での成功を受けた、凱旋公演の意味合いを持たせているのであろう。番付は宣伝を目的として作成されているので、肩書きの地名は必ずしも出身地を固定的に表わしているわけではないことがわかる。²¹

また、坂田兵四郎を長唄方ではなく、小歌方と記載しているのは、当時の京の番付では唄方が小歌で占められていたから、その例に倣ったものと推測される。兵四郎の江戸における長唄は、都万太夫座や版

元の泉屋又兵衛側にとっては、おそらく、江戸で当たりを取った小歌と見なし得るものであったのだろう。

まとめ

元禄歌舞伎において江戸の観客は、外記節や薩摩浄瑠璃を地に用いた荒事の所作を好んできた。しかし、次第にその傾向も薄れ、享保期に入ると上方の和事を受け入れる土壌が江戸にも生まれ、荒事と融合させる時代に入っていくのである。上方の和事芸は、主に女方の江戸下りによってもたらされ、その所作事に付いた音曲もまた、江戸歌舞伎に入ってきたと考えられる。

中村座が所作事の達人である菊之丞と、上方の小歌方を呼び、正本と共に売り出す企画を組めたのは、坂田兵四郎であったからだと考えられる。坂田兵四郎は、江戸の歌舞伎界と観客に上方の小歌を受け入れさせ、根付かせるだけの十分な力量と、背景をも持ち合わせていた。なぜならば、上方の元禄歌舞伎の名優、坂田藤十郎の威光を備えた人物であったからである。

瀬川菊之丞が演じた傾城葛城の所作と、坂田兵四郎の歌う『傾城無間鐘 哥の出端』『無間鐘 新道成寺所作』は、おそらく上方の傾城事の趣をよく表現していたのであろう。兵四郎は和事の真髓を体得していた。それゆえに大ヒットした。坂田兵四郎だからこそ、長唄正本は創刊され、継続的版行に至ったと思われる。それは、長唄が江戸歌

舞伎の所作事として、揺るぎない地位を得た証でもある。

坂田兵四郎は、上方の所作事の移入に際して歌の面から和事を正當に伝えたからこそ、江戸で名人の誉れを取り、新たな長唄所作事の時代を江戸に築く起点ともなり得たのではないだろうか。

それでは、中村座は長唄の正本を版行するというアイディアをどうやって得たのであろうか。これもまた、上方の小歌経由で入ってきたとは考えられないだろうか。したがって、次の第二節では小歌詞章の版行事情について検討して見ることにする。

1 (白水社、一九九三年)。

2 (岩波書店、一九九八年)。

3 拙稿「河東節正本の版行に関する一考察―江戸歌舞伎における初期の音曲正本と位置付けて―」(北海道東海大学紀要 第十九号)。

4 安田文吉「『睦月連理懋』小考(『伝承文化の展望』三弥井書店、二〇〇三年)。「睦月連理懋」の中村座上演を、享保十九年秋と推定している。

5 『近世邦楽年表 江戸長唄附大薩摩浄瑠璃之部』(東京音楽学校編、六合館書店、一九一四年)。

6 顔見世番付で、座に属する唄方に付される小歌や歌浄瑠璃等の名称を、他の論考に倣って本論文でも「肩書き」と呼ぶ。

7 今日に残る、「せりふ入り長唄」と記載のある長唄正本がその面影を伝えているのではないかと考えている。

8 『新撰古今役者大全』に坂田兵四郎は「去年巳ノ六月身まかり」と出てくることから、寛延二年(一七四九)に没したと推測される。ゆえに、表1の範囲を延享四年(一七四七)以前とした。

9 『日本庶民文化史料集成』第六巻 歌舞伎(三一書房、一九七九年)所収。

10 前掲注10。

11 前掲注10。

12 『野郎立役舞台大鑑』(貞享五年(一六八八)正月刊)の「若衆方の部」には、「中 坂田長哥」と前名で記されている。容姿の美しさが際立っていたが、表情に乏しく笑みがないと評されている。ところが、『役者三世相』(宝永二年(一七〇五)四月刊)では「巻軸 若衆 坂田兵七郎」とあり、京布袋屋の名代で座元を務めている。

13 『新燕石十種第一』(広谷国書刊行会、一九二七年)。

14 東京芸術大学附属図書館蔵本による。

15 役者評判記『役者若見取』(享保十六年(一七三一)正月刊)江戸之巻に、「瀬川菊之丞 是まで上手の女形の・下り衆多き中に・此君の顔見世のはづみやう。あやめ殿下り以来おぼへぬ」とある。なお、瀬川菊之丞の事跡については、佐藤知乃『近世中期歌舞伎の諸相』(和泉書院、二〇一三年)に詳しい。

16 町田博三・渥美清太郎他編(古曲保存会、一九二〇年)。

17 前掲注10。

18 前掲注10。

19 江戸で長唄正本が版行され出すと、小歌は消えたであろうか。筆者

が江戸版の中村座の顔見世番付を見る限りにおいては、次のものに「江戸小歌」の肩書きをまだ見出すことができる。

享保二十年、中村座 山村耕花・町田博三編『芝居錦絵集成』

(精華社、一九一九年) 所収

元文三年、中村座 粕谷宏紀・歌舞伎年表研究会編『日本大学総合学術情報センター所蔵歌舞伎番付集

成』(八木書店、二〇〇四年)

延享四年、中村座 早稲田大学演劇博物館蔵

寛延元年、中村座 国立国会図書館蔵

「江戸小歌」の肩書きは、「江戸長唄」に比して少なくなる傾向にあるが、このように享保期を過ぎてもなお存在している。

20 東京大学総合図書館霞亭文庫蔵「〔古歌舞伎番付〕」所収。子年とは、享保十六年十一月から、享保十七年十月の期間の座組を指していると思われる。

21 顔見世番付に記載される肩書きの地名は、あくまでも興行上の宣伝効果を図った記載であることを念頭に置いて扱うべきであると筆者は考える。

表1 長唄正本の初期の伝本（寛延期以前の作品について）

【中村座】

上演年	外 題	狂言名題／番目	役名・役者名	唄方	顔見世番付	正本の奥書	評判記の記載	備 考
享保 16・2	傾城無間鐘 哥の出端 (図版) (透写本)	傾情福引名護屋 二番目	瀬川菊之丞	長哥 坂田兵四郎			當二月朔日より同じ狂言の次、 に四年以前京市山助五郎座の二 の替にせられた。手水鉢を無間 の鐘になぞらへてのしこなし 大々當り。 『二の替藝品定』	
享保 16・2	無間鐘 新道成寺所作	傾情福引名護屋 第三番目	瀬川菊之丞	(中嶋屋版) 小うた 坂田兵四郎 (伊賀屋版・異同有り) 長うた 坂田兵四郎				
享保 16・3	踊り口説 重言尽 日待揃 橋尽	妻迎難曾我 第一番目	音頭 染川多三太 染川常八 染川吉弥 荻野嶋之助	音頭 坂田兵四郎 同 吉住小三郎			[音頭の4人は中村座色子]	役者と共演
享保 17・1	後面 (図版)	初暦商曾我 第二番目	佐渡島長五郎 相勤申候	長うた 松島庄五郎		表紙のみ掲載 につき不明	立役上上吉 佐渡島長五郎 [顔見世] お江戸初下り。此度 は所作當りにて。 『役者春子満』	
享保 19・1	相生獅子	忝今様曾我 第三番目 夕霞浅間嶽	瀬川菊之丞 乱曲の所作 相勤申候	長哥 吉住小三郎			去春のとぎれの小まん。夕霧 の狂言がよかったとて。 『役者初子読』 七年以前には名残狂言に。く ずの葉とならんして。乱曲の 所作で当さんした 『役者柱伊達』寛保二	
元文 3・11	置天錠口舌時雨 (図版)	梅館因幡松 第二番目	沢村宗十郎 中村七三郎 辰岡久菊	長うた 坂田兵四郎	江戸場々 (日大蔵)	表紙のみ掲載 につき不明	行平が所へ。出入の塩うり 六兵衛宗十郎殿見て。むかし のおつとなれば肝つぶし。次に 三人女郎床くせつの仕内。 去とはよふござんす 『役者大極舞』	
元文 4・4	鳥羽の恋塚	奥州秀衡旭陣幕 第二番目	辰岡久菊 沢村宗十郎 中村七三郎 山本京蔵 (表紙絵で三味線弾く)	長哥 坂田兵四郎 (三味線杵屋喜三郎)		右ハ坂田兵四郎 直伝を以令板行 候	若女形上上吉 辰岡久菊 極上上吉 沢村宗十郎 上上吉 中村七三郎 若女形上上十 『役者大極舞』	

元文 4・7	大津絵踊口説	初昔都言葉 第一番目	沢村宗十郎 中村七三郎 荻野伊三郎	長うた 坂田兵四郎 同 松川正治郎				
元文 6・2	高野道行歌祭文	菜花曙曾我 第三番目	瀧中秀松 下り 佐野川市松	哥 吉住小三郎 哥 早川新二郎			中村座色子 『役者懐中曆』 若衆巻軸上上吉 二月十 五日中村へ 『役者二追玉』	
寛保 4・2	百千鳥娘道成寺	サレバ末廣曾我 第二番目	瀬川菊之丞 相勤申候 〔文覚〕 〔弁慶〕	長哥 吉住小三郎 早川新二郎 松嶋源三郎 松川藤四郎	江戸長歌 同 哥 江戸長うたカ (演博蔵)		極上上吉 『役者夫美孫』	
延享 5・1	小妻重山吹海道	饒鰐鑑曾我 第二番目	瀬川菊之丞 嵐玉柏 嵐音八 掛合所作相勤申候	長哥 〔吉住小三郎カ〕 中山小十郎 吉住五郎治カ 吉住重郎治	江戸哥上るり 江戸小うた (演博蔵)			役者と掛合 本文中に 「玉柏小うたひにて」 「音八投節」 「狂言/庄五郎」と は松島庄五郎カ 後半に鑑踊の詞章有
寛延 1・11	(上册)室咲き 京人形 鑑踊所作 (下冊)道行所作 の段	女文字平家物語 第二番目	京四条舞子おむく 中村桑太郎	〔綴じ目〕 〔吉住小三郎カ〕 中村門治郎 中山小十郎 吉住五郎治	江戸長哥 京 長うた 江戸小哥 江戸小哥カ (国会蔵)		上上吉 中村桑太郎『役者花双六』	本文中に 「鑑踊り所作」 「猩々の所作」 表紙絵花笠踊
寛延 2・1	無間鐘	男文字曾我物語 第一番目	市川海老蔵	長哥 吉住小三郎 吉住五郎治			手水鉢をむけんの鐘になぞらへ。 7、金がほしい。此前中村勘三郎 芝居で。瀬川菊之丞といふ女形。 夫のためにむけんのかねのかはりに 手水鉢を打。一心つうじ金を得 たり。われもそれにならひ。手水 鉢を打んとの仕内。『役者花双六』	
寛延 2・3	一奏現在道成寺	男文字曾我物語 第三番目	中村桑太郎 所作事相勤申候	長哥 吉住小三郎 同 中村門治郎 同 中山小十郎他 同 吉住五郎治 同 吉住重次郎				
寛延 2・11	参考 顔見世番付				江戸長哥 早川新次郎 江戸長哥 吉住小三郎 江戸小哥 中村門次郎 江戸小哥 吉住五郎次 (演博蔵)			

【市村座】

上演年	外 題	狂言名題／番目	役名・役者名	唄方	顔見世番付	正本の奥書	評判記の記載	備 考
享保 18・1	(色里踊口説) あれみさ しやんせ節	栄分身曾我 二番目	(総踊り)	(紋)坂田兵四郎 うたひ申候				
享保 18・7	(大踊)こん こりき節	相栄山鳴神不動 二番目	(総踊り)	(紋)坂田兵四郎 うたひ申候				
享保 19・3	やつし西行 富士見五郎	七種生若曾我 第一番目	大磯虎 瀬川菊次郎	掛合長哥 松島庄五郎 坂田兵四郎		右此本ハ松島庄 五郎／坂田兵四 四郎直伝之以板 行仕候者也		
享保 19・3	江戸桜五人男 掛合文七節	磐扇隅田川 第二番目	雷庄五郎 市川團十郎 雁金文七 市村竹之丞 案の平兵衛 坂東彦三郎 布袋市右衛門 大谷廣次 極印千右衛門 坂田半五郎	長うた 坂田兵四郎 長うた 松島庄五郎		(紋)左同 (紋)左同 直伝の正本也 市村座新狂言板元 泉屋権四郎		兵四郎・庄五郎 の掛合
享保 20・1							松嶋庄五郎殿、坂田兵四郎殿。 兩人かけ合の長哥にて、椀久所作 の所へはおり大小にて、片身は男 の身ぶり、片身は女にて、男女の 仕分け 『役者初子読』(瀬川菊之丞の項)	
元文 4・7	曾我踊口説 ／狩場大踊	初鬻通曾我 第四番目 重解脱の蓮場		音頭 松嶋藤十郎 中山小八郎				歌舞伎図説 354 表紙のみ掲載
元文 4・11	小山田太郎物狂 せりふ	瑞樹太平記 第二番目大詰	市村宇左衛門 所作相勤申候	長哥／鼓哥 坂田兵四郎 松嶋庄五郎	番付になし 江戸長歌 (演博蔵)		巻頭上上吉 市村宇左衛門 『役者恵宝参』	
元文 5・4	(梅若丸道行 の段) 孤東柳	姿視隅田川 第三番目	人買善右衛門 中嶋三甫右衛門 梅若丸 大和川花世	哥説経 松嶋庄五郎 (内題) は説経		右此本ハ松嶋庄 五郎直伝之正本 也		
元文 5・6	文月弓矢誉	阿弥陀池妹背鏡 第三番目	葛城綱太磨 市村満蔵 鼓哥の 所作相勤申候	長哥 坂田兵四郎 松嶋庄五郎				

元文 5・11	(大坂土産) 丹前鍵踊	吉例今川状 第一番目	今川 市村宇左衛門 才藏 市山伝五郎	掛合せりふ入長哥 坂田兵四郎 松嶋庄五郎		立役上上吉 市山伝五郎 此人京都祇園町の人〜当顔見せ おざゝのまへの家老。さゝの 才藏と成。主人げんはくを打し は。今川と心得。ぞうり取とな り鍵踊の所作大出来。 『役者懐中曆』	
寛保 2・1	姿花五色桜	富士見里栄曾我 第一番目	(上册) 市村宇左衛門 瀬川菊之丞 相勤申候	長唄 坂田兵四郎 松嶋庄五郎		太夫元 惣巻軸上上吉 市村羽左衛門	透写本・表紙存
	五人男の出端 文七節掛合せ りふ		(中册) 市村宇左衛門 大和川房五郎 岩井そめ松 佐野川千蔵 坂田伊三姿	哥 坂田兵四郎 松嶋庄五郎		市村座色子 大和川房五郎 市村座色子 岩井染松 若女形上上 佐野川千蔵 『役者和歌水』	透写本
寛保 2・1	思いの緋桜 (新鏡無間)	富士見里栄曾我 第二番目	(傾城高岡) 瀬川菊之丞	長哥 坂田兵四郎 松嶋庄五郎	右此正本ハ坂田 兵四郎／松嶋庄 五郎直伝ヲ以板行 仕候 市村座板元	(去春はお家の石橋をなされ。 いつもと申ながら。きび獅子に 牡丹の大当り 『役者和歌水』)	透写本
寛保 2・11	今様吼かい 信田妻	振袖信田妻 第二番目	葛の葉(大坂下り) 尾上菊五郎 所作事相勤申候	長哥 坂田兵四郎 松嶋庄五郎 松嶋藤十郎	江戸最 ^た 締 ^た 江戸最 ^た 締 ^た 江戸長うた (演博蔵)	若女方上上吉 尾上菊五郎 阿部の童子を取かへさん為 来りしと物語の内。夜光の 玉の霊徳にて姿を顕し。信田 の所作大出来々『役者和歌水』	透写本
寛保 4・1	高尾さんげ の段	七種生若曾我 第三番目	高尾面影 市村満蔵 罷出所作事相勤 申候	長哥 坂田兵四郎 松嶋庄五郎 松嶋藤十郎		若太夫 上上吉 市村満蔵 『役者子住算』	
延享 2・1	釣狐鑑乱曲	初曆寿曾我 第三番目	曾我五郎 市村亀蔵 小林朝日奈 市村宇左衛門	長哥 坂田兵四郎 松嶋庄五郎	江戸最 ^た 締 ^た 江戸最 ^た 締 ^た (霞・演・ 日大蔵)	上上吉 市村亀蔵 『役者三叶和』延享三	透写本 本文冒頭に 「鼓哥」
延享 2・7	東雲妹背の八声	初曆寿曾我後日 里通富士見西行 第二番目	淀屋長五郎 市村亀蔵 せりふ入り 八潮前 尾上菊五郎	長哥 坂田兵四郎 松嶋庄五郎 同 藤十郎	江戸最 ^た 締 ^た 江戸最 ^た 締 ^た 江戸長うた (同上蔵)		透写本

延享 2・11	掛合鼓哥	婦楠靚粧鑑 第一番目	勾当内侍 尾上菊五郎 松浦五郎 萩野伊三郎	長哥 坂田兵四郎 松嶋庄五郎	囃 囃 (邦楽年表)		立役上上吉 萩野伊三郎 一の宮の御息所にれんぼしはる ばると御跡をしたひ来る仕内カ 『役者三叶和』	透写本
延享 5・1	菜の花小蝶 の袂	紋尽名護屋曾我 第三番目	(上冊) 山本岩之丞 十四才 にて所作事相勤申候	長哥 松嶋庄五郎 山下重右衛門	囃 長唄		子役 山本岩之丞	
			(下冊) 後ろ面信田所作 生島又蔵 中村八十吉	松嶋藤十郎 松嶋庄次郎	同 長唄 (邦楽年表)		敵役上 生島又蔵 『延享五年三都評判記』	
寛延 1・8	子宝木の葉の 絹	三大そめ鼎問答 第三番目	金時 市村亀蔵 山姥 市村宇左衛門 呼小鳥 山本岩之丞 三人あい所作	長哥 松嶋庄五郎 山下重右衛門 松嶋藤十郎 外囃子不残 罷出申候	同上 (邦楽年表)			
寛延 1・11	放下僧/小切子 所作の段 (上冊)	放下僧弓勢鉢木 第二番目	関東小六 市村亀蔵 所作事ひとり芸 相勤申候	(上冊) 鼓哥 松嶋庄五郎 松嶋藤十郎 松嶋庄次郎	江戸囃 江戸長うた 江戸長うた			
	室の闌魁丹前	同上	小六 市村亀蔵 早咲 嵐富之助 兩人所作事相勤 申候	(下冊) 長哥 同〔綴じ目〕 同 庄次郎 同 庄三郎 同 重五郎	江戸長うた 江戸長うた 江戸長うた (霞・日大蔵)		思ひがけなくおまんに惚れられ。 早咲姫のしつとにこまり。此所 にて丹前所作事 若女形上上吉 嵐富之助 すさまじきしつとの心おこり。 おまんを取殺さんとの段にて。 丹前の所作 『役者大雛形』	
寛延 2・1	浦山吹東人形	幌衣熊谷桜 第二番目	佐野川市松 市村亀蔵 兩人所作事相勤申候	長哥 〔松嶋庄五郎〕 松嶋藤十郎 松嶋庄次郎 松嶋庄三郎 松嶋十五郎	同上		若衆形上上吉 佐野川市松 京育ち 『役者花双六』	本文冒頭に 「鼓歌/庄五郎」

寛延 4・1	朧月面影花	初花隅田川 第一番目	市村亀蔵 鼓哥の所作 相勤申候	長哥 松嶋庄五郎 同 藤十郎 同 庄次郎 同 庄三郎	撮唄 長唄 同 同			本文に 「鼓哥」「哥」
--------	-------	---------------	-----------------------	--	--------------------	--	--	----------------

【森田座・河原崎座】

上演年	外 題	狂言名題／番目	役名・役者名	唄方	顔見世番付	正本の奥書	評判記の記載	備 考
元文 4・11 河	無間の鐘石 の帯	傾城蝦夷錦 第二番目	坂東豊三郎 相勤申候	長哥 吉住小三郎	なし (日大蔵)			
寛延 4・春 森	菜花小蝶袂	祐経扇系図 第三番目	山本岩之丞 後ろ芸所作相 勤申候	長哥 松川藤十郎 吉住市十郎 坂田善三郎 松嶋五郎三	なしか 江戸長歌 江戸長歌 江戸長歌か (日大蔵)			再演

第二節 小歌から長唄への展開

はじめに

坂田兵四郎の江戸下りには、長唄正本の創刊という出版事業が組まれたと推測する。それは、これまで上方から下って来た小歌方（多くは女方の江戸下りに同行してきたであろう）とは、一線を画す江戸の座側の扱いであったと言えるであろう。

長唄の詞章を版行するアイディアは、どこから得たのだろうか。そもそも長唄以前に、新作の小歌は上演時に版行されていたのであろうか。

本節では、長唄正本の系譜を小歌正本に求めて考察して見たい。小歌正本と長唄正本を比較することができれば、江戸長唄の本質をより明確に捉えられると考えるからである。

一 小歌方と小歌について

『歌舞伎事始』巻の五には、「古人小歌の作者」の部を設け、小歌四十四作品の曲名とその作者を記している。また、「古人小歌謡」の部は、「小歌うたひ」「三味線方」「鳴物囃子方」に分かれ、「小歌う

たひ」として寛文の頃より名の知られる三十三名を載せている。ここに掲載される作品のいくつかは、『落葉集』（元禄十七年（一七〇四）刊）などの歌謡集にも所収されており、絵入狂言本にも見出すことができるのだが、それらの正本を筆者は目にしていない。

『歌舞伎事始』の「小歌うたひ」の中に「五郎兵衛」と二名あるうちの一人は、おそらく若山五郎兵衛であろう。この唄方は『舞曲扇林』（初代河原崎権之助著、元禄二・三年頃成立）や『（新板）役者絵づくし』（元禄初年（一六八八）刊）二の巻の出囃子図に描かれている。より古くは、延宝二年（一六七四）八月刊の野郎評判記『新野郎花垣』にも「こうした五郎兵衛」と添え書きして描かれる。また、元禄七年（一六九四）刊の役者評判記『やくしや雷』は、「惣役者目録」に小歌方・三味線方を載せる珍しい例であるが、この「小歌方の分」においてもその名が記載されている。

『声曲類纂』（齊藤月岑編、弘化四年（一八四七）刊）では、この若山五郎兵衛について次のように記している。

貞享・元禄の頃一派を語り出して若山節と号し、世に賞せらる。また小唄を能して、上手の聞えあり。

譚海に云、芝居にて狂言のあひしらいに一口つゝうたふは、若山節と云もの也。説経節・上るり節、さま／＼なる節を交えてうたふなりと云々。

これによると、五郎兵衛は小歌を得意とし、その他にも説経・浄瑠璃など様々の節を芝居の場面に合わせて短く歌っていたようである。『松の葉』（元禄十六年刊）第四巻の「吾妻浄瑠璃」に所収される「草摺

引」も「若山五郎兵衛ぶし」と記されている。つまり、若山五郎兵衛のような小歌方の才人は、それぞれのジャンルの代表曲のさわりの部分を習得しており、さらにそれを若山節と言われるだけの、自分の節回しによって歌うことができたのであろうと想像する。五郎兵衛より少し後、元禄十年代に活躍した上方の古今新左衛門についても、同様のことが言えるのではないだろうか。

赤間亮『図説江戸の演劇書―歌舞伎篇』（八木書店、二〇〇三年）では、現存する顔見世番付には、特に正徳期（一七一五）までの版に複製品の多いことが指摘されている。同書が挙げる、興行時に版行された最古の部類の顔見世番付から、唄方の肩書きを見てみよう。

上方版 天和元年（一六八二）大坂太左衛門座。

「小哥」「地うたひ」と、唄方の肩書きが記載されている。

江戸版 元禄九年（一六九六）森田座 正本屋小兵衛版。

「小うた」「せつきやう」とある。

江戸版 正徳二年（一七一二）市村座、中嶋屋版（演博蔵）

「江戸哥上るり」「江戸うた」「江戸小うた」とある。

すでに唄方は小歌方の他に、能の系統の地謡、古浄瑠璃系の説経・歌浄瑠璃に分かれていることがわかる。本職の説経・浄瑠璃太夫を座に抱えられない場合は、座付きの音曲担当者である唄方がその代わりを勤めていたことも十分想像できる。

筆者が自身で顔見世番付の調査を行った限りでは、座に抱えられる唄方の肩書きは古くは基本的に小歌方であったと考えられる。特に上方版の顔見世番付はほぼ小歌一色である。これに対し、江戸の顔見世

番付では浄瑠璃太夫が左右に箱書きされ、唄には「小歌」の他に「歌浄瑠璃」の肩書きが見られる。江戸歌舞伎では古浄瑠璃を多く用いて、唄方もこれを摂取する傾向にあったことが読み取れる。

役者評判記や絵入狂言本・歌謡集には、歌説経・歌祭文・歌浄瑠璃・浄瑠璃小歌という言葉がよく見出される。おそらく、歌舞伎の唄方や役者の歌う説経・祭文・古浄瑠璃は、本職の浄瑠璃太夫や説経太夫の語りとは区別されていたのではないだろうか。ゆえに歌説経・歌祭文・歌浄瑠璃、または浄瑠璃小歌と称され、それらも含めて広く小歌と見なされることもあったと窺える。さらに、小歌方・三味線方は、子供（若い役者）の抱え主でもあったというから、仕込まれる役者の歌う小歌もまた、同様に見なされていたと考えて良いであろう。

歌舞伎の小歌は、本来は風流踊系の小歌を主流とするが、若衆歌舞伎時代に狂言系の小謡が加わり、元禄歌舞伎に至っては法師系の三味線組歌や俗謡・流行歌のみならず、能、説経・祭文・古浄瑠璃から叙事的内容を獲得して、かなりの広がりを見せていたと推測される。『松の葉』『松の落葉』などの歌謡集に収録される芝居歌は長編化し、ストーリー性を有するものもあり、本文だけではどのジャンルの曲か見分けが付かない。

歌謡集は上演後の編纂物であるため、歌舞伎における小歌の実態を把握するには、座の上演時出版物である小歌正本から検討したいところである。しかし、小歌と記載され、長唄正本と同様の薄物の体裁を取る正本を、『無間の鐘新道成寺』以外に筆者はこれまで目にはしていない。

そこで、まず絵入狂言本をもとに、小歌について調べていくことにする。絵入狂言本の江戸版は、元禄十年（一六九七）から宝永八年（一七一）までの伝本が残っている。上方版については、元禄一年（一六八八）を最古の伝本とし、江戸版より長く享保年中（一七一六～一七三五）まで刊行が続いている。絵入狂言本は歌舞伎の筋書本であり、上演台帳とは見なせないものであるが、絵入り狂言本の並本は、芝居の観劇時に劇場で売られていたとも考えられており、元禄歌舞伎の内容を知る上で最も重要な手がかりとなる。

二 絵入狂言本と音曲正本の関係

長唄正本は、半紙判二つ折りの書型をとり、二～三丁程度の本文と共紙表紙からなる簡素な小冊子である。この体裁は、せりふ正本と共通する。せりふ正本の方が古くから版行されているが、絵表紙の体裁を取るのには享保期に入ってからのことである。

一方、江戸歌舞伎の音曲正本としては、河東節正本が享保初年の上演作品から伝存し、長唄正本に先行するかたちになる。だが、河東節は十寸見河東を祖とし、江戸半太夫から独立して一派を立てた江戸浄瑠璃であるため、座付きの音曲担当者とは異なる。

座付きの唄方としての長唄に先行する存在は、小歌方なのである。上演に際し、新作の小歌の詞章は版行されていたのであろうか。

和田修は「江戸板絵入狂言本における浄るり詞章」¹¹において、音曲

詞章を載せる江戸版の狂言本を、次のように列記している。

踊歌の正本を含む狂言本

『梶久浮世十界』 貞享三年（一六八六）正月、中村座

もづや十兵衛版

浄瑠璃詞章を載せる絵入狂言本

『五頭大伴魔取』 元禄十二年（一六九九）九月、山村座

『傾城浅間嶽』 元禄十三年（一七〇〇）一月、山村座

『艶冠女将門』 元禄十三年（一七〇〇）七月、山村座

『傾城三鱗形』 元禄十四年（一七〇一）三月、山村座

『愛護十二段』 元禄十四年（一七〇一）三月、山村座

『大職冠二度珠取』 元禄十四年（一七〇一）五月、山村座

『紅梅隅田川』 元禄十五年（一七〇二）三月、山村座

『信田三種神祇』 宝永二年（一七〇六）七月以降カ、山村座

（『信田三種神祇』が写本で伝わる以外は、

いずれもゑさうしや三左衛門版である。）

この中の『五頭大伴魔取』『艶冠女将門』『信田三種神祇』が、薄物の音曲正本のみを取り合わせて版行した狂言本となる。これは、狂言本より先に、浄瑠璃や小歌の薄物正本が出版されていて、狂言本の作成時にそれらを寄せ本にして版行した可能性を示していると言う。

また、『梶久浮世十界』も同様に、上演時におそらく別々に版行されていたと推測されるせりふ正本と踊歌の正本を、後に取り合わせ、寄せ本に仕立てた狂言本であると指摘している。『梶久浮世十界』は小型本であるため他の狂言本とは判型を異にするが、本文初丁裏の役

者付けの下段に、小歌方の連名が次のように記載されてある。

小うた 鈴木権左衛門

同 瀧井平三郎

同 柏崎権兵衛

同 本木一郎右衛門

したがって、この踊歌は小歌方が勤めたことが明らかとなり、小歌の薄物正本が江戸で版行されていたひとつの証となるであろう。

しかし、『枕久浮世十界』以外の『五頭大伴魔取』から『紅梅隅田川』までの七作品のすべてが、虎屋喜元・源太夫、豊嶋小源太による浄瑠璃太夫の詞章である。

小歌正本や浄瑠璃正本の寄せ本の形をとるこれらの本は、絵入狂言本の伝本の中では例外的な存在といつて良い。通常の筋書き本の形態をとる絵入狂言本において、小歌の詞章が挿入されている例は一体に少なく、小歌の指定（「此所小うたあり」と本文に書かれているが詞章を伴わないケース）さえも、江戸版には少ないことが指摘できる。

ここに各作品の本文における音曲指定の箇所を一々掲出することはしないが、古浄瑠璃に関する指定のうち「此間豊島浄瑠璃」「小源太浄瑠璃にて愁嘆あり」とある場合などは、浄瑠璃太夫の出語りを示していると思われる。だが、単に「此内浄瑠璃」「此内髪梳き浄瑠璃」

「此内草摺曳浄瑠璃」「出端あり 土佐浄瑠璃あり 団十郎仕候」「此内清若嘆きの説経あり」「此間薩摩外記上るりにて」とある場合などは、唄浄瑠璃方や小歌方、あるいは役者が歌っている可能性もある。

『頼政萬年曆』（元禄十三年（一七〇〇）十一月山村座）の第三番目

の終わりに「此所ミな哥上るりにて」と出てくるが、歌浄瑠璃の指定の場合には唄方が担当したと推測される。

これらの浄瑠璃指定に対し、歌の場合は「ぬめり歌あり」「投節うたひけり」「哥にて病人のおもひ入有」「此内小勝半三胡弓と三味線合せつれ節」と見つかる程度で、その指定の数は格段に少ないと言える。『参会名護屋』（元禄十年正月中村座）の奥書には次のようにある。

右此本ハ座中惣子共立役拍子方不残上るりせつきやうせりふことはしよさ直之書正本を写一字一句一点無相違令板行者也座中の若衆方・若女方・立役・囃子方の浄瑠璃や説経、せりふ言葉・所作を残らず載せて版行したと書かれてあるが、この中に「小歌」の語は含まれていない。

その一方で、役者評判記の江戸の巻には、役者の小歌芸を評する記述が多数見つかるのである。これについては、松崎仁「歌舞伎における歌謡（一）万治・寛文・元禄期、（二）宝永・正徳・享保期」（『舞台の光と影』森話社、二〇〇四年）の論考に詳しい。享保五年（一七二〇）二月刊の役者評判記『役者三名物』江戸の巻に、道行に用いられた小歌について、次のような記事が出てくる。

上上道外 西國兵五郎

当曾我に「一富士礼拝曾我」團三郎のお役、夢中の富士見西行、道行小哥大出来、切二祐経猪にのりし、其尻ニのつて、五郎團十郎殿ニさし上らるゝ所。大当り／＼¹²

道化方の滑稽な所作を伴う道行であったと推測できるが、小歌を用い

て当たりをとることもあったようである。

江戸版の狂言本においては、小歌よりも、浄瑠璃や説経を重用する傾向があるのは、荒事の劇的展開に古浄瑠璃が欠かせないものであったからだと考えられる。¹³ 古浄瑠璃正本の版行は古く、江戸版金平浄瑠璃正本は承応・明暦・万治期に遡れるというから、江戸歌舞伎に用いられる浄瑠璃詞章の版行も古浄瑠璃正本の系列に列なるものと見なせよう。

一方、小歌の詞章は江戸版絵入狂言本では扱われる例も少なかったが、上方版の絵入狂言本においてはどのように扱われているのである。次に、上方版の狂言本における小歌の詞章について検討して見る。

三 上方版絵入狂言本の小歌詞章

京・大坂版の絵入狂言本には、江戸版に伝わるような、すでに別々に版行されていた音曲正本を取り合わせて、寄せ本にした造りの本は伝存しない。だが、上方版の絵入狂言本には、並本と呼ばれる上中下一冊本のほかに、江戸版にはない「上本」と呼ばれる上下二冊本の体裁を取る本が存在する。¹⁴ 上本は並本の刊行後に版元の特殊事情によって版行されたと考えられており、せりふや小歌の詞章を省かずに載せている点に並本との大きな違いがある。伝本から上本の版行は元禄十年（一六九七）から宝永三年（一七〇六）までの時期と見られている。限られた期間ではあるが、この上本から狂言における音曲の使用箇所

や使われ方、そして詞章を知ることができるのである。

また、並本であっても、本文中の音曲が使われる箇所に、「この所浄瑠璃有り」と指定が書き加えられている場合もある。だが、この指定には詞章を伴う場合と伴わない場合がある。

前節の和田論文では、江戸版の狂言本について音曲の指定を分類しているが、上方版の狂言本についても同様の分類が可能である。ここでは、和田論文の分類を参考にしながら、少し詳しく次のように分けた。（以下傍点筆者）

①ある場面に音曲が用いられる事を、ことばで指定する

『大隈川源左衛門』 八ゑぎくしやうだいなく、「そのやう

なこはい事を いふて下だされまするな」と、つかなき
小うたをはりあげてうたひ。

『大織冠』 あやめさもんうた有／しばらくしかた有

『金岡筆』 安兵衛は 上るりをかたり／もどる。

『仏母摩耶山開帳』 かもんは「よしないやつがうせてやか

ましい」と。さみせん取出し。うたをうたひある所へ

『好色伝授』 みさき「久しう聞かん程に弾いてやらうぞや。」

くというてさみせんこしらへてひく。かづまうたをうた

ふ。たがいの心をこうたにてしらせ めつかいにて、し

うたん有。うたい引しまいて

②音曲を具体的に指定しないが音曲を伴ったと推測される場合

『大織冠』 あまは上村たつや梅田もんや まひ有

『金岡筆』 所へ廿あまりのだて男く下人にたるを持せ宮ぬ

に参り。酒をのみ まひをまふでなぐさみける

『鹿嶋の要石』 かずへのかみはふうりうのだて男。小姓さ
もん・さだうよも市供につれ。かしまちかく一ふりふつ
で出すがた。世にもまれ成ふうぞく也

『福寿丸』 挿絵部分に「かもん、きくの花持まふ」「手だ
ての花いくさ／ひやうしまひ」、竹島幸左衛門の舞姿図

以上は、舞や出端の所作に音曲が伴われていたと推測される場
面である。なお、『福寿丸』の「花軍」は『落葉集』第二巻「中
興当流所作」に詞章が記載されている。

③音曲詞章が本文中に挿入されているが、抄記されていると見ら
れる場合

『金岡筆』 安兵衛「さあその所がいきませぬ。さる／＼
まんなこゑ」と。小うたにまぎらかす。

『娘親の敵討』（『水木辰之介錢振舞』に版木使用）

思ひしらずや世の中の情けは人のためならず／かずまハ
しれう（おふぢ）もろ共立上りうたふつまふつ¹⁵

『丹波与作手綱帯』「与作丹波の馬方すれど、今ハ世に出て
刀指しじや。しゃんと差せ与作。」と我が身の事をうた
ひつゝ、機嫌よろしくお国入り。

④音曲詞章を載せている↓表2に掲載

・音曲詞章を省かずに載せる絵入り狂言本の上本。その題簽に
は「せりふ残らず小歌入り」と記載がある。

・役人替名の上段に音曲詞章を載せる絵入り狂言本の並本。

絵入り狂言本とは、芝居の筋書きを読み物風に書き表して版行したもの
である。ゆえに狂言の作者と絵入り狂言本の執筆者が一致するとは限ら
ない。③では、音曲の詞章の冒頭の部分だけを抜き出し、残りの詞章
はおそらく狂言本の執筆者によって大幅に省略されたり、短く改変さ
れている。とは言え、金子吉左衛門の日記が発見され、絵入り狂言本の
作成に狂言作者が関与していることが明らかとなった¹⁶。したがって、
絵入り狂言本の音曲詞章は後の編纂物である歌謡集とは異なり、信頼度
を有する上演時資料である点では、音曲正本に近い存在と言える。

①②③は並本に見られる。

④については、118頁の表2にまとめた。上方の絵入り狂言本では元禄
十二年（一六九九）正月刊の『傾城仏の原』から、表紙見返しにある
役人替名の上段あるいは下段に切場の総踊りや音頭の詞章を載せるか
たちが定型化し、享保六年（一七二一）の『傾城来満舎』まで受け継
がれていく¹⁷。④の詞章は、上本や並本に載せるために座元や作者、座
と提携する版元が意図的に選んだ曲と見なせる。ここに、音曲正本と
の共通性がある程度見て取ることができようか。

また、③の場合であっても長文の場合は、表2に掲出してある。な
お、表2の外題の欄で、括弧内に狂言の作者名を入れてあるが、これ
は狂言本の執筆者ではないことを断っておく。表2では小歌に限定せ
ず、長文で載せられているすべての音曲詞章を取り上げている。

表2の、横軸の七列目「演技者」の欄には、音曲の使われる場面を
演じる役者名とその役名を載せている。同じ欄の「歌い手」について
は明らかとなる場合、あるいは推測できる場合にのみ記入した。その

根拠として役者評判記から音曲場面に対応する記事を抜き出し、表2の右端の欄に載せている。

表2の目的は、正徳期（一七一六年）までの上方版絵入狂言本から、曲名あるいは音曲の指定と、その詞章を抜き出して分析することにある。曲名の欄を下に見ていくと、江戸版の絵入狂言本に比べて、上方版では小歌（あるいは歌）の詞章を載せることが主流であったことがわかる。ただし、その中で唄方が歌っていることが明かであるのは、元禄十六年の『唐崎八景屏風』のみで、葛山四郎兵衛が小歌を歌っている。

岩井左源太・山下亀之丞などは役者評判記で小歌芸を誉められており、萩野長太夫も役者評判記に半太夫節の弾き語りの記述が見つかることから、小歌も歌えたのではないかと推測する。また、若女方の怨霊事のように曲芸的な要素が所作に加わる場合は唄方が歌ったのではないかと想像するが、役者と唄方が交互に歌った可能性もある。

表2 119頁で元禄十二年の『傾城花筏』は歌浄瑠璃とあって異色な存在であるが、これは江戸から上った役者、葛山岡右衛門が得意の江戸浄瑠璃を京で披露したのである。『歌舞伎事始』巻ノ五「古人小歌の作者」の中に、

傾城花いかだ 葛山岡右衛門／葛山四郎兵衛兩人作

と先の葛山との合作と書かれてあり、小歌と見なされている。しかし、絵入狂言本では「葛山岡右衛門哥上る」と題して、その詞章が掲載されているのである。

葛山岡右衛門は、元禄十一年（一六九八）十一月刊の『三國役者舞

台鏡』に「江戸立役中ノ上」と記され、この年の顔見世から京へ上っている。小柄であったが、中村七三郎似で器量が良かったという。『役者ともぐい評判』（元禄十年（一六九七）刊）に、

江戸土佐半太が一ふしを、ひきがたりにさせてきつたや

とあり、土佐節・半太夫節の江戸浄瑠璃を得意とする役者である。『役者万年曆』（元禄十四年（一七〇一）三月刊）の江戸の巻には次のように評が載る。

去顔みせより此かた、年明ての初狂言。つづいて二のかはりまでもとりわけ、江戸小歌のつよい所に、此かわひらしい聲して、うたわるゝてい、まなぶ人おとし。

傍点部分の「江戸小歌」は土佐・半太夫浄瑠璃を指していると見られる。第一節でも指摘したように、唄方や役者がうたう浄瑠璃は小歌と見なされ、本職の浄瑠璃太夫の語りとは区別する意識のあったことが裏付けられよう。

なお、「花筏」の歌浄瑠璃は半太夫節で語った模様である。『役者口三味線』京ノ巻（元禄十二年（一六九九）三月刊）と『口三味線返答役者舌鼓』京ノ巻（同年六月刊）に、

第一此人かほみせ男也。しやみせんひかせ、土佐ぶしをかたらせては、はんなりとして、見物の氣をとらるゝ事、京大坂とてもおなじ事

と書かれ、前年の顔見世興行では土佐節を語って好評を得ている。しかし、『新大成系の調』で「花筏」は「半太夫の部」に所収されている。¹⁹⁾

葉山岡右衛門のように江戸から上った役者の場合を除いて表2を見ると、小歌の詞章を版行する伝統は、やはり上方にあったと捉えて良いであろう。

四 上方版小歌正本としての一枚摺について

上方では歌舞伎の上演に際し、新作の小歌の詞章を単独に版行することは行われていなかったのであろうか。『落葉集』（元禄十七年（一七〇四）、井筒屋庄兵衛・萬木治兵衛版）の第二巻「中興当流所作之部」や第三巻「中興当流丹前出端之部」には、「花軍 竹島幸左衛門」のように曲名に役者名が添えられており、第五巻「古今踊音頭之部」には薦山四郎兵衛や古今新左衛門の作が含まれていることから、これらの詞章は絵入狂言本経由ではなく、上演時の劇場出版物である音曲正本を直接出典としているのではないかと考えられるのである。

小歌正本の存在を窺わせる資料の一つに、絵入狂言本『けいせい七堂伽藍』（八文字屋八左衛門版）がある。これについては、すでに「けいせい七堂伽藍」の解題²⁰（正木ゆみ執筆）において言及されている。そのあらましを筆者の調査を加えてまとめると、以下ようになる。（なお、この作品は表2 118頁の二番目に掲げている。）

「けいせい七堂伽藍」は元禄十年（一六九七）に、京都都万太夫座の二の替に上演された三番続きの狂言である。その絵入狂言本は上中下三巻一冊の体裁を取り、正木ゆみは最古の正本『面向不背玉』に先

駆ける存在として位置付ける。と言うのは、『けいせい七堂伽藍』は通常の歌舞伎の筋書き本の様式を取っているが、その本文の中に独立した歌謡詞章一丁分を二箇所に取り合わせて作られている。それらの歌謡丁は、上巻の第十丁表裏の「村上竹之丞 木屋りいろさとなよせ」と、下巻の最終丁の裏半丁の「けいせいおどり」である。筋書き部分は一丁約四十五字で半丁に十二行が収められている。だが、歌謡の丁は字体が少し大きく、一行が二十六・七字程度、半丁に十二行で収められている。また、歌謡の丁には版外に丁付けが無く、この点でも歌謡丁は筋書きの本文から独立しており、すでに版行されていた歌謡丁が狂言本作成時に取り合わされた可能性を示している。（「けいせい七堂伽藍」以外の絵入狂言本の正本では、歌謡の詞章は筋書き本文の中に収められており、独立した丁ではない。）

つまり、『けいせい七堂伽藍』の場合においては、絵入狂言本上本の版行以前に、二曲の音曲詞章が一枚刷りのかたちで先に版行されていた可能性を指摘できるのである。

さらに、同書下巻の「けいせいおどり」は、国立国会図書館蔵『新板ぎおんおどりとくどき』（八文字屋八左衛門版）に覆刻（詞章の冒頭の二行に改刻あり）して再収録されている。この『新板ぎおんおどりとくどき』は、京都の祇園などで流行していた当時の都踊りの歌謡を寄せた本である。したがって、この例から「けいせいおどり」の一丁は、新作の上演時に一枚摺としてまず版行され、次に絵入狂言本に取り合わせられ、その後、おそらく上演時より時を隔てて編まれた都踊りの歌謡集に覆刻して載せられたと推測できるのである。

このように、上方では、一丁に収められた音曲詞章が、番付などの一枚摺と合綴して寄せ本となって今日に伝わる例がいくつか存在する。『元禄歌舞伎小唄番付盡』にも次の音曲の一枚摺が含まれている。

「(おさハ半三郎) 身なげ心中たゝき」

「娘髪結ちん／＼ぶし」

「おはらぶし はやり哥けいせひ大はし／音羽しばる」

(以上の三葉は、いずれも正本屋傳七版である。)

「古今ふしかけあい 古今新左衛門／藤井八十郎」(無刊記版)

「三のかはり 上の太子道行」(和泉屋又兵衛版)

大阪大学文学部忍頂寺文庫所蔵の『(新板／小歌揃)音曲浮名笠』(無刊記版)も同様に十九曲の小歌を所収する寄せ本であるが、その中の、

「二ツ井筒 あらし小六二のかわり哥」

「里の梅 榊山四郎太郎二のかわり哥」

「花の雪 瀬川座とけつ哥」

「きぬ／＼うた 榊山座」

「十三鐘 榊山座」

には役者名や座名が記載されているので、歌舞伎との関係が指摘できる。だが、大名題が記入されておらず、これらが歌舞伎の上演時に版行されたものであるとは断定できない。遊里の歌曲集として後に作られた本である可能性もあるからである。また、寄せ本の外題には小唄盡・小歌揃と表記されているが、一枚摺自体には小歌の文字は入っておらず、小歌方の名が記載されることも見ない。これらの小歌の一枚摺は、大名題や座名、役名・役者名といった上演記録を満足に載せて

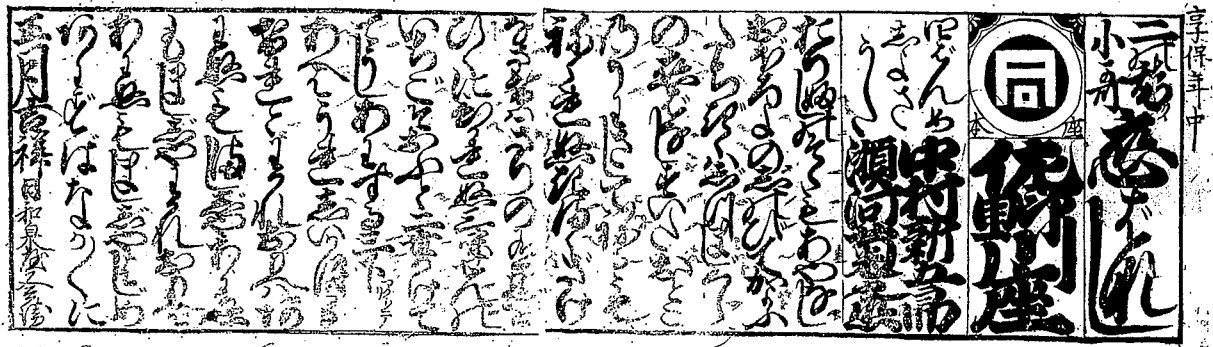
おらず、版元により座との専属関係も指摘できないため、上演時正本としては疑いを残す。

これらに対し、より明確に上演時に版行されたと見られる小歌詞章を、天理大学附属天理図書館の所蔵する番付集の中に見つけることができた。一枚摺『二の替り／小歌 恋ばなし』である。次頁図5にその図版を掲げ、下に翻字を載せる。

この曲は、中村新五郎と瀬川菊之丞が佐野川萬菊座に同座していることから、享保十四年(一七二九)正月上演の「けいせい誘見山」の第四番目に演じられた所作事の歌であることがわかる。横長の役割番付と同じ体裁をとっていて、見立て番付と捉えられる向きもあるが、座名があることや、番付類と共に伝来していることから、筆者は上演に際し版行された一枚摺の小歌正本である可能性が高いと考えている。因みに『元禄歌舞伎小唄番付盡』に所収される「三のかはり 上の太子道行」(和泉屋又兵衛版)も横長の役割番付の体裁を備えた歌謡詞章である。この形態の一枚摺はまだ確認できる例が少ないが、上方歌舞伎において上演時に小歌が版行されていたことを示すものとして、資料的価値は高いと思われる。

表2を見ると、上方版の絵入狂言本においては小歌の詞章が数多く掲載されていることがわかる。また、事例はまだ少ないが、小歌詞章の一枚摺の存在も明らかとなった。これが上方版小歌正本であると今後認められるならば、小歌の詞章を版行する伝統は上方の方にあり、上方の小歌と共に、その詞章を版行するアイデアも江戸に入ってきた可能性はより高くなるであろう。

図5 『二の替り／小哥 恋ばなし』一枚摺 天理大学附属天理図書館蔵



〔翻刻〕 (読み易くするため、適宜一字明きを設けた)

二の替り／小哥 恋ばなし	
(紋) 座／本	佐野川座
四ばんめ／しよさ／うた 中村新五郎 瀬河菊之丞	
おりふしの そらもあやなし おぼろよの しのびてかよふ たちぎゝハ じつまじくら の 恋ばなし すいたおとこ のうわきして ねるも ねられぬ きまゝざけ なさけハぎりの有恋を ひくにひかれぬ三味せんの いちこそおふと 二世かけて てうしあわする三下りアイノテ あへはうれしいかほする けれと わかれおもへハ あ わぬもましじや あわぬ もましじや わかれおもへば あわぬもましじや はじめ あわずば なか／＼に 正月吉祥日 和泉屋又兵衛	

そして、江戸では享保期にすでに定型化していたせりふ正本の判式にこれを入れ換えて版行したものが、初期の長唄正本と考えられる。江戸歌舞伎に用いられていた古浄瑠璃系の詞章も、狂言作者の本文に創り変えられて行くことでせりふ正本と同じ判式を取り、それらは同一規格の劇場出版物として上演時に頒布されることになったのである。

しかし、絵入狂言本や一枚摺りに記されている小歌の詞章には、見過ごすことのできない重要な面がある。それは、小歌を歌っていたのは小歌方だけではなかったと言うことである。顔見世番付においては小歌方が唄方の肩書きの大勢を占めているのに、絵入狂言本や一枚摺、役者評判記、歌謡集においては、小歌は役者の芸として出てくること、が圧倒的に多いのである。小歌が主流の時代にあつては、座に属する唄方と役者の役割がまだ未分化であるか、あるいはその隔てがゆるやかであつたと考えられる。歌や楽器演奏は役者の芸の一つとして観客の前に披露されており、浄瑠璃太夫の出語りに匹敵する小歌方の存在は、特に江戸ではまだ薄かつたように思われる。

それでは坂田兵四郎という歌い手が江戸に登場し、松嶋庄五郎、吉住小三郎という唄方のスターも現れて長唄正本が版行されていくと、小歌の持っていた役者が歌うという側面はどのようになっていたのだろうか。次に検討してみよう。

五 役者の歌う正本

小歌は番付を見る限りでは唄方の肩書きであるのだが、役者評判記には役者の小歌芸を批評する記事が多数見つかるので、小歌は役者も舞台で歌っていたのである。絵入狂言本・一枚摺・歌謡集では小歌の題に花形役者の名が添えられていることがある。役者評判記に歌の評が一度でも載っている者であれば、その曲も歌っている可能性がある。これに対し、小歌方がそれらに記されることは「若山五郎兵衛」など数例に限られ、役者に比べて極めて少ない。これは上方・江戸を問わずに言えることなのである。なぜであろうか。

小歌方の立場を考える上で興味深い資料がある。『許多脚色帖』一（早稲田大学演劇博物館蔵）に貼り込まれている「役者給金附」の一葉で、「子ノ年（貞享元年（一六八四））あらし與次兵衛座／役者きうぶんづけ 太夫本ふところ／日記」である。これには、若女方を筆頭に道外・子役、小歌から囃子、端役から楽屋番に至るまでそれぞれの給金が記されている。その上段の若女方の七番目に、次のような記載がある。

吉川多門／九拾両歌ニ／廿両²¹百十両

若女方の役柄のほかに、歌に対して二十両の加算が付いているのである。多門は『古今四場居色競百人一首』（元禄六年（一六九三）正月巻）に「小哥口せき諸げいのをもしろさゑもいわれず」とあるから、小歌に優れていたようである。その一方で、小歌方の給金は、

小唄 永谷長右衛門（三十両） 同四人（五十両）

とあるので、多門の加算額には小歌方の永谷長右衛門に次ぐ値が付い

ているのである。もともと、この資料は給金附といっても見立番付²²であるから座の実際の給金を記しているわけではないであろう。それでも、役柄を勤めることと歌うことが、一応給金の上で分けて評価されていることを示している。また、給金の上で唄方の地位が座の中であまり高くないことも窺われ、歌のうまい子は唄方よりもむしろ役者になつていく傾向があつたと推測される。ゆえに、小歌方で役者に比肩するスターは生まれ難い構造があつたのではないだろうか。

そのような伝統の中で、歌舞伎の唄方から浄瑠璃太夫にも匹敵するようなスターを登場させる、という新たな企画のもとに、坂田兵四郎を擁して中村座が興行にのぞみ大成功を収めたことは、大きな転換点となつたに違いない。そして、そのような唄方の出現が、その後の所作を活気付ける大きな要素になつたことは間違いないであろう。花形役者の名ぜりふ、浄瑠璃太夫の出語り、それらと同格の唄方が確保されることにより、同一規格のもとに歌舞伎の薄物正本という商品が出揃つたのである。

江戸版の顔見世番付では宝暦期を境に、小歌の肩書きは見られなくなり、代わつて長唄が大勢を占めるようになる。では、享保後期に唄方のスターによる長唄正本が江戸で創刊されると、小歌が持つていた「役者が歌う」側面はどうなつたのであろうか。

役者の歌う江戸版の正本もまた版行されている。122頁の表3には管見に及んだ、役者が、あるいは、役者と唄方が歌う（語る）詞章を載せた正本を掲げている。役者が歌う（語る）場合には、弾き語りを演じるなど、楽器演奏を伴う場合がある。

表3 122頁の中村座で最初に掲げた伝本は珍しい正本で、長唄正本の創刊期より古く、おそらく宝永五年（一七〇八）の版行と推定できる。「八百屋お七歌祭文」と題する古今節で、歌うのは若女方の霧浪音之助である。所作の中心はこの時若女方上上吉の嵐喜代三郎である。『役者友吟味』（宝永四年（一七〇七）三月刊）大坂の部によれば、嵐座は宝永三年の顔見世興行に「女大臣職人鏡」を打ち、その切狂言の「お七歌祭文」で喜代三郎が八百屋お七を演じて当たりを取っている。喜代三郎は、翌年、宝永四年の顔見世興行から江戸中村座に下り、宝永五年（一七〇八）の正月狂言「傾城嵐曾我」において、江戸における八百屋お七の初演を勤める。

一方、霧浪音之助は宝永四年（一七〇七）の『役者友吟味』京の巻では若衆方中で、都万太夫座の抱えである。そして、『役者稽古三味線』（宝永五年（一七〇八）閏正月刊）江戸の巻によると、宝永五年正月に江戸中村座に若女方中として下り、喜代三郎のワキ役を勤めて歌つたのがこの正本であろう。音之助の歌う古今節とは、「三国一流小歌の名人」と呼ばれる小歌を得意とした上方の道化方の古今新左衛門に因む称である。

補足すると、古今新左衛門の歌は『はやり哥古今集』に編まれ、元禄十二年（一六九九）に大坂正本や九左衛門から版行されている。『口三味線返答役者舌鼓』（元禄十二年六月刊）ではこの書について次のように言及している。

新左殿の小哥の始終ハふし付万事みさいに「微細」に書しるし、はやり哥古今集と名付、先月より一冊の上本に致、うり

ひろげますげな。是をお買いなさるゝと古今ぶしの様子がし
れます。(傍点筆者)

『はやり哥古今集』には、歌説経・江戸小歌浄瑠璃・歌念仏や永閑節
浄瑠璃・口説などの曲が所収されている。だが、右の評判記の記載に
ある通り、それらは小歌と見なされていたようである。したがって、
『八百屋お七歌祭文』正本も、古今節による歌祭文と表紙に記載され
るが、役者の歌う上方の小歌が江戸で上演されて、薄物が版行され
たと見られる。ただ、土佐屋が番付や絵入狂言本を扱う版元としてその
名を聞かないので、上演時正本ではない可能性もある。なお、「傾城
嵐曾我」は絵入狂言本の並本が京都大学文学部国語学・国文学研究室
に伝わるが、本文に小歌の指定はなかった。

図6 『八百屋お七歌祭文』土佐屋版の表紙

抱谷文庫蔵



図7 『嵐玉柏上るり・沢村小傳次哥』伊賀屋版の表紙

フランス国立図書館蔵



122頁表3に戻り、二段目の『踊口説重言尽／日待揃橋尽』以下に列
挙した役者の歌う正本は、長唄正本と同時期に版行されているもので
ある。表の横軸の右端「役者評判記」の欄には、歌い手の役者に関す
る情報を役者評判記から引いて記載している。

嵐音八、松嶋茂平次といった道化方、尾上菊五郎、沢村小傳次、
嵐玉柏、坂田市太郎などの若女方や色子がいる中で、佐野川千蔵の存
在が目を引く。

しかし、それよりもここで特記すべきことは、これらの役者の歌う
正本の表記において、役者は長唄を歌っていないことである。坂田兵
四郎を起点として、長唄は唄方の独占芸になった可能性があるだろう。

もつとも、小歌が主流であった時代から、長唄は唄方が歌うものであった可能性もなくはない。役者評判記や絵入狂言本に長唄を歌う役者の記載例を見かけないからである。しかし、享保中期の江戸版顔見世番付における江戸長唄の肩書きの占有、そして長唄正本の版行という営為には、長唄を所作事の新機軸に据えて江戸で展開させようとする積極的な座の方針を読み取ることができる。

佐野川千蔵は、上方より下った佐野川万菊の弟子筋とも記録されている。享保二十年（一七三五）市村座の色子に始まり、元文四年（一七三九）正月刊の『役者大極舞』では若衆方上、寛保二年（一七四二）正月刊の『役者柱伊達』では若女方に転じて上上、寛延四年正月刊の『役者枕言葉』の上上士を最高位とする。『役者懷相性』（宝暦四年（一七五四）正月刊）江戸の巻に、

此子の祖は都太夫和中とて、一中ぶしのめいじん也

とあるので、都和中が親方で一中節と三味線を仕込まれていたと見られる。佐野川千蔵は浄瑠璃の弾き語りを得意としていたが、後に長唄の唄方に転向して富士田吉治と名乗り、宝暦から明和期にかけて、長唄所作事の全盛期を担う人物となるのである。これに対し、表3では役者の歌う正本は伝本も少なく、宝暦期中頃には版行されなくなっている様子が見て取れる。

ゆえに、佐野川千蔵が唄方に転向するという象徴的な出来事をもって、役者の歌の芸は歌舞伎において主たる役割を終え、役者と唄方の役割は完全に分化したと捉えられよう。

まとめ

本節では、上方版の小歌正本として天理図書館の一枚摺を提示し、また、役者の歌う正本を新出の資料として用いている。

ここで再び96頁の表1に戻り、顔見世番付の肩書きについて少し補足したい。表1の横軸の四列目には長唄正本における唄方の表記を載せ、五列目「顔見世番付」の欄にはこれに対応する顔見世番付上の唄方の表記を載せて、長唄正本と顔見世番付の唄方の肩書きを比較して見た。顔見世番付は、基本的に顔見世興行の座組を表すと言われている。ゆえに、顔見世番付と、顔見世興行のある十一月に版行された正本を照合したいのだが、残念なことに、両者の揃う例はきわめて少ない。そのような中からも、次の点を指摘しておきたい。

長唄正本では唄方の連名者すべてに同じ肩書きが付されている。これに対し、顔見世番付では同じ人物でも肩書きがそれぞれ異なっていることが指摘できよう。特に97頁の中村座で寛保四年二月と延享五年一月と寛延一年十一月のところを見ると、長唄正本では立唄の位置に書かれる吉住小三郎が顔見世番付では「江戸哥上るり」の肩書きである。また、正本では二枚目の早川新二郎は顔見世番付では「江戸長歌」、中山小十郎は顔見世番付では「江戸小うた」と記載されている。99頁以下では、坂田兵四郎と松嶋庄五郎について、長唄正本で「長哥」とあるのに顔見世番付では「長うた／鼓哥」の肩書きが付されている。顔見世番付では、鼓唄↓唄浄瑠璃↓長唄↓小歌の順に、肩書きが位付けの意味合いを帯びており、それは箱書きの大きさにでも表されている。

る。つまり、長唄が唄方の独占芸となるに及んで、唄方にも格付けがより明確に導入されていることが窺える。

江戸歌舞伎の所作事の地に、長唄という唄方の独占芸が形成され、と、長唄と所作の分化が促され、双方に技術的な深まりをもたらしたと推測される。その結果、作品もいろいろな趣向を凝らし複雑になっていった。花形役者の踊り手と共に、唄方のスターが次々に登場し、変化物のような役柄の踊りわけのおもしろさに、長唄・常磐津・富本・清元という音曲ジャンルの対比の妙を加えた作品も生まれたのである。さらには、掛合物の如く、音曲を前面に出した作品も企画されるようになる。

このように考えると、坂田兵四郎の江戸下りは、後の江戸歌舞伎における所作事の繁栄を方向付ける重要な起点になったと言える。

1 『日本庶民文化史料集成』第六巻歌舞伎（前掲）に所収。

2 「許多脚色帖」『日本庶民文化史料集成』第十四巻、芸能記録三（三一書房、一九七五年）所収。

3 『演劇研究』第十六号（早稲田大学演劇博物館、一九九二年）所収。

4 「江戸顔見世番付諸版一覧」（『近世文芸 研究と評論』第三十四号、一九八八年）をもとに、国立国会図書館、東京大学総合図書館霞亨文庫・国語研究室、天理大学図書館・日本大学図書館、ボストン美術館・早稲田大学演劇博物館蔵の顔見世番付を当たった。

5 前島美保「上方歌舞伎囃子方の諸相―近世前中期の顔見世番付に基づいて―」（『東洋音楽研究』第七五号、東洋音楽学会、二〇一〇年）においても同様の指摘がある。

6 江戸歌舞伎における小歌方の浄瑠璃撰取については、和田修「野郎かぶきの歌謡と浄瑠璃」（『芸能史研究』一〇四号、一九八九年）の論考がある。

7 武井協三「野郎歌舞伎の小歌芸」（『若衆歌舞伎・野郎歌舞伎の研究』八木書店、二〇〇〇年）に指摘されている。野郎評判記『野郎虫』（万治三年刊）に「小嶋品之介 小哥四郎兵衛内」、「赤烏帽子」（寛文三年刊）に「下村左源太 はやし五郎兵衛内」「坂井掃部 はやし九郎兵衛内」等の表記が見られることによる。

8 鳥越文蔵『元禄歌舞伎攷』（八木書店、一九九一年）「絵入狂言本研究」による。

9 広瀬千紗子「享保以降せりふ本目録稿」（『演劇研究会会報』第十号、一九八四年。「同・補遺」「同」第十一号、一九八五年。筆者も長唄正本と合わせて、調査を行ってきた。

10 拙稿「河東節正本の版行に関する一考察―江戸歌舞伎における初期の音曲正本と位置付けて―」（『北海道東海大学紀要 人文社会科学』第十九号、二〇〇六年）参照。

11 「江戸板絵入狂言本における浄るり詞章」（『演劇学』第二十八号）。

12 『歌舞伎評判記集成』第一期第七巻（岩波書店、一九七五年）。

13 安田文吉「常磐津節成立以前」（『常磐津節の基礎的研究』（和泉書院、一九九二年）においても、同様の指摘がある。

14 絵入狂言本の性格・書誌的形態そのほかについて、鳥越文蔵『元

禄歌舞伎攷』（八木書店、一九九一年）から多くの教示を得ている。

15 『松の葉』第三巻「三下り所収の「かづま」に詞章の記載有り。

16 和田修「資料翻刻 金子吉左衛門関係元禄歌舞伎資料二点」（『歌舞伎の狂言』八木書店、一九九二年）に指摘がある。金子吉左衛門と絵入狂言本の版元八文字屋八左衛門は交渉があり、「鐘ヲトリノ哥」などの上本に載せる詞章を八文字方へ遣わしている。

17 林久美子「絵入浄瑠璃本と絵入狂言本」（『近世前期浄瑠璃の基礎的研究——正本の出版と演劇界の動向——』和泉書院、一九九五年）において、「仏の原」頃から絵入狂言本に見返しに歌を載せる形式について指摘がある。

18 『歌系図』（天明二年（一七八二）刊）では、「葉山岡右衛門と鳶山四郎兵衛両調、津打次兵衛作」とある。

19 『翻刻絵入狂言本集』（般庵野間光辰先生花甲記念会、一九七三年）上冊の解題では、半太夫節としている。

20 『歌舞伎浄瑠璃稀本集成』下巻（八木書店、二〇〇二年）に影印、翻刻・解題正木ゆみ。

21 『日本庶民文化史料集成』第十四巻（三一書房、一九八八年）所載の「許多脚色帖」一の四十五図。

22 荻田清『上方板歌舞関係一枚摺考』（清文堂出版、一九九九年）によれば、この『太夫本ふところ日記』は広義の見立番付、狭義には見立物類の分類に入るとしている。

23 竹内道敬「富士田吉治研究」（『近世邦楽考』南窓社、一九九八年）

に詳しい。

表2 上方版・絵入狂言本における小歌・浄瑠璃の詞章

上演年	座	体裁	外題	曲名	詞章の記載箇所	演技者	歌い手	版元	役者評判記の記載
元禄3・4カ5	京・都万太夫	並本	金岡筆	〔人形まはし 上るりかたる〕 〔説経の冒頭句「あ らいたはしや〜」〕	第二〔中巻〕の 本文中 約55字×3行余	安兵衛 山下半左 衛門		八文字屋	立役上上吉
元禄10二ノ替	京・都万太夫	上本 上中下 巻一冊	けいせい七堂 伽藍 (近松作)	木鐺り色里名よせ 傾城踊り歌	上巻のうちの一丁 (歌謡の独立丁) 約26字×24行 下巻末の一丁カ(欠本) (歌謡の独立丁) 『新板祇園踊口 説』国会本に再録) 約7字×24行カ	宇治橋 花菊 其外の女郎衆 石つきのつなを 持給へば	あやの介 村上竹之丞 『扇を開き声を あげ。音頭を 取〜』	八文字屋カ	村上竹之丞 京若衆方上 折ノ小哥をうたはるノ 『三国役者舞台鏡』
元禄10三ノ替	京・早雲 座元山下半左 衛門	上本 上下二冊 (霞亭本)	面向不背玉 (白石彦兵衛 作)	「幸左衛門道行舞」 冒頭「謡」の指定	下冊中巻の本文中の 約10行分	鎌足 竹島幸左衛門		八文字屋	〔拍子ききにて拍子舞上手也 『三国役者舞台鏡』〕
元禄11・1	京・早雲 座元山下半左 衛門	上本	けいせい浅間 嶽	「小哥二上り」の指定	上巻本文中の約6行	傾城奥州 岩井左源太 岩井左源太カ			第一小哥よし。小哥よき故。 『役者談合衛』 狂言本の本文に他にも指定あり 上巻「江戸ろうさい」25字 上巻「小うた」約1行 上巻「小うた」(怨霊事)1行余 中巻「なげぶし」約半行 下巻「哥」27字
元禄11二ノ替	京・都万太夫 座元坂田藤十郎	上本 下一冊 中・下巻	傾城江戸桜 (近松作)	「小うた」の指定 切ノ鐺踊りの哥	中巻の本文中2行半 「廓通いの小哥ぶし〜」 詞章は中巻の挿絵丁 の上段12字×13行 指定は下巻の切に ある「鐺踊に出立〜」	高尾 水木辰之助(若衆姿) 善三 金子吉左衛門(奴姿) 傾城高尾 水木辰之助 傾城吉田 霧浪千寿 おとめ兄弟 善三 同上		八文字屋	
元禄12・1	京・都万太夫 座元坂田藤十郎	並本 上本 上一冊 上巻	けいせい仏 の原 (近松作)	傾城奥州嫉妬の歌 小うた「しげき 思ひは秋ぎりの〜」 小うた二上り小ふし 「いつのもまにか は秋風の〜」	表紙見返しの役人替名 の上段約24字×18行 上巻本文中3行余 上巻本文中7行半 胡麻点・節付有り	奥州 岩井左源太 奥州 岩井左源太 奥州 岩井左源太	左源太 左源太の 弾歌いカ 左源太	山本九兵衛 筆写本 (早大蔵)	当年も傾城奥州と仰がれ給ひ。 〜ことさら一ふしの小哥をきい はいかな荒戎もころりとなつて 三味線小哥義太夫節の名人とか や 『役者口三味線』

元禄 12・春	京・布袋屋 座元山下半左衛門	並本	傾城花筏	哥浄瑠璃	表紙見返しの役人替名上段 13 字× 16 行	煙草屋長作 葉山岡右衛門	八文字屋	あづま出には器量良く～三味線弾かせ。土佐節を語らせては。～見物の氣を取らるゝ～此度花筏に煙草屋長作と成。きてうが子の様子を語らるゝ。節博士。さりとは聞き事 『役者口三味線』『新大成系の調』では半太夫節
				〔流行歌〕伊勢の串田の真ん中ほどで	第一番目本文中の 1 行分余	唄方		
元禄 12・11	坂・亀屋 座元山下半左衛門	並本	京ひながた	大小節 踊りの小哥	初丁表の役人替名下段 17 字× 17 行	三番目の切 総踊り	八文字屋	
元禄 13・1	京・早雲 座元 大和屋 甚兵衛	並本	けいせい善のつな	井筒のうた	役人替名の上段 約 20 字× 17 行 胡麻点部分的にあり	傾城三五 芳沢あやめ	不明 許多脚色 帖一所載	ね耳に水くさい いとまの状とは。はらたちやねたましやと恨の一念井筒にあらはれ 『役者万年曆』
元禄 14・二/替	京・夷屋松太夫 座元山下半左衛門	並本	けいせいなら見やげ	切〔末広がり〕うた	表紙見返しの上段 約 11 字× 16 行	三番目の切 素踊り	正本屋九兵衛	
元禄 14・10	京・早雲 座元 大和屋 甚兵衛	並本	今様能狂言	「小うた」の指定	第三花子の本中に 4 箇所続いて有り	花子 水木辰之介	八文字屋	〔原作 狂言「花子」の小謡〕
元禄 15・1	京・都万太夫 座元 古今新左衛門	上本	けいせい壬生大念仏 (近松作)	「小哥」の指定	上巻の本文中の 6 行	妾おみよの怨霊事 嵐喜世三郎	八文字屋	後にぬいの丞にころされ。一念たらいの中より出ての所作事大きによし 此度四番目に素紙子にてあげやへ来らるゝさま。姿はおちぶて見ゆれ共。さすがむかしの大臣そなはりてよし 此人の小哥三ヶ津に又類なし 『役者二挺三味線』 百姓船頭下男。又はあげ屋の亭主。此類のやつし得物也。～一流かはった古今節 『役者一挺鼓』
				「小哥」の指定	中巻の本文中の約 2 行	高遠民弥 坂田藤十郎 紙子姿の出		
				「古今ふし」「ふし」の指定	下巻の本中の約 5 行 〔説経に近い詞章〕	渡し守徳右衛門 古今新左衛門		
元禄 15	京・都万太夫 古今新左衛門	並本	女郎来迎柱 (近松作)	切 古今節小哥	見返しの役人替名の上段約 20 字× 14 行	三番目の切 門番太郎右衛門 古今新左衛門 「跡より小哥うたひ来り」	八文字屋	中之上々 古今新左衛門 小哥は三ヶ津に有まじ。一流かはった古今節。聞人感にたへ侍る 『役者一挺鼓』
元禄 16・4	京・都万太夫	並本	河原心中	心中小うた 三勝節	表紙見返しの役人替名の下段約 55 字× 18 行 キ・上など文字譜付き	おなつ 山本哥門 平野屋清十郎 中村四郎五郎	正本屋喜右衛門	

元禄 16・5カ	京・早雲 座元大和屋藤吉	並本	唐崎八景屏風 (近松作)	唐崎心中道行 ／葛山小哥 八景の小哥 葛山節	表紙見返しの広告 の上段 21 字×16 行 初丁表の役人替名の 上段 23 字×16 行	葛山四郎 兵衛 葛山四郎 兵衛	八文字屋	
元禄 17・二/替	京・都万太夫 座元 都万太夫	並本	けいせい白山 禅定	上之内 怨霊の哥	本文初丁表の役人 替名上段 約 25 字×18 行	くに二郎おくまさ姫 鈴木辰三郎	正本屋 九兵衛	中/上々 鈴木辰三郎 一のかはり白山の狂言のまさ 姫大によ。『役者舞扇子』
宝永 3・1	京・都万太夫	並本	鳥辺山心中 傾城安養世界 切狂言	道行	表紙見返しの役人 替名下段 40 字×12 行	源五兵衛 小野川宇源次 おまん 瀧井半之助	八文字屋	
宝永 4・2 /替	京・早雲 山下亀之丞	上本 せりふ 残らず 小哥入	江州石山寺誓湖	出端の小哥 亀之丞小うた	上冊の本文中 3 行 上冊の本文中 1.5 行	傾城高橋 山下亀之丞 亀之丞 同上「高橋声張上げ」 亀之丞 百太郎 大和山甚左衛門の三味線 下亀之丞の怨霊事	八文字屋	当二の替石山に、名も高橋と云 傾城、道中なしにすらすらと出 給ふよさ、小哥少しながらよし 『役者友吟味』 (備考：坂田藤十郎の紙子譲り 初花姫 坂田兵七郎)
				怨霊のうた 胡麻点・節付	上冊の本文中 5 行	揚屋の男女・禿共 「皆一樣に出立て風流踊り 拍子を揃え」		
宝永 5・2 /替	京・亀屋 座元榊山小四郎	上本 せりふ 残らず 小哥入	傾城暁の鐘	気遣いの哥 「こうた 耳は聞 く役目は見る～ 小うた 「親は子ゆえに～」	上冊の本文中 4 行余 下冊中巻の本文中 の約 1 行分	口城之介 榊山小四郎 唄方カ	八文字屋	
				「小哥」の指定	上巻の本文中 6 行	傾城陸奥 水木染之介 怨霊事		
正徳 3・二/替	京・布袋屋 座元 榊山四 郎太郎	並本	傾城柏の大 黒天	顔見せおどり哥 十二のゑどづくし	表紙見返しの役人 替名の上段 約 16 字×17 行		八文字屋	上上 水木染之介 ふろにて十介平十郎殿にころ され、死霊あらはれての所作。 藝こなれましたれ共、けいせい 風はおぼこにみへ、風俗しやん とせずしてうつりかねる 『役者座振舞』
正徳 3・1	京・亀屋 座元 花井小 山三	並本	福引巳午大籠	顔見せおどり哥 十二のゑどづくし	表紙見返しの役人 替名の上段 約 16 字×17 行		八文字屋	
正徳 5・1	京・都万太夫 座元萩野長太夫	並本 題簽に 小哥入	傾城千尋海 (佐渡島三郎 左衛門作)	怨霊の小うた	初丁表の役人替名の 上段 17 字×17 行	傾城遠州 萩野長太夫 長太夫カ	江嶋屋	『役者色景圖』(正徳 4・2 刊)に 「揚屋の二階で半太夫を引語り」 とあるので、歌う可能性有り
正徳 5・盆	京・亀屋 座元 榊山四郎 太郎	並本	けいせい十三 鐘	よみうりかぞゑう た	表紙見返しの役人 替名の上段 約 28 字×16 行	弥市 榊山勘介 弥市哥うたふ 市丸たゞ六 村山平十郎 たゞ六しや ミせん引 小哥大あたり	江島屋	
正徳 5・11	京・早雲 座元 大和山甚 左衛門	並本	千代重菊新盃	顔見世踊哥 風呂尽 し	初丁表の役人替名の 上段 15 字×16 行		八文字屋	「筒井哥之介／当顔見世花売り 若松と成て一節の小哥。聞事で ござつた」とあるのは該当しない 『役者我身宝』

正徳 5・11	京・布袋屋 座元大和屋甚 兵衛	並本	万宝千年松 (安達三郎左 衛門作)	顔見世踊哥 扇尽し	初丁表の役人替名の 上段 15 字×15 行 下巻の 12 行目に相当カ	腰元歌う(挿絵)	中嶋又兵衛	
正徳 6・二ノ替	京・都万太夫 座元 榊山四郎 太郎	並本	傾城金竜山	哥祭文都鳥 胡麻点・節付	本文初丁表の半丁 下巻の 8 行目に 「此所祭文初口 にあり」と指定	太鼓四五九郎 榊山勘介 勘介祭文 梅永幸介 村山平十郎 平十郎三味線 梅永重郎介 榊山小四郎カ 小四郎尺八カ	正本屋九兵 衛	道外方上 榊山勘介ノ狂言作者 近年祭文当り上物 立役上上 村山平十郎ノ 浄瑠璃三味線当り上上 『芝居晴小袖』
正徳 6・二ノ替	京・早雲 座元 大和山 甚左衛門	並本	傾城錦産衣	怨霊紅葉笠	本文初丁表の役人 替名の上段 約 18 字×16 行	傾城道のく 山村哥の介 上巻切りの怨霊事	江島屋	若女方 上『役者我身室』
正徳 6・二ノ替	京・布袋屋 座元大和屋甚 兵衛	上本 上一冊	傾城雄床山	小哥 「暮れし廊の装いや〜 小哥 「春の夢覚めて跡な きあだ花の〜」	上巻の本文中の約 5 行分 ----- 上巻の本文中約 3 行半	廓場の導入歌 大井川吉次郎 大和屋甚兵衛 小姓たみ弥 富沢長太夫 剃髪場面		若衆方中の上上 富沢長太夫 『芝居晴小袖』

※ この表は、正徳期までの上方版絵入狂言本を対象として、作成した。

ただし、次の作品については、音曲詞章があっても表に載せなかった。

元禄 4 年・秋 京・都万太夫座 並本『娘親の敵討ち』（及び、その版木を流用した元禄 8 年上演の並本『水木辰之助餞振舞』） 歌謡詞章が短く省略されているため。

宝永 3 年度 京・ 並本『天満屋心中』 浄瑠璃本の流用した狂言本

宝永 5 年度 京・都万太夫座 並本『難波重井筒』 義太夫節正本を抄出した狂言本

宝永 6 年 京・布袋屋座 並本『巖島姫滝』 都太夫一中正本を抄出した狂言本

正徳 4 年初興行カ 京・早雲座 並本『大和歌五穀色紙』 宇治薩摩正本「五穀色紙」の一部を流用した狂言本

表3 役者の歌・演奏による音曲正本

【中村座】

上演年	外題	狂言名題／番目	役名・役者名・演奏者	本文中の指定・奥書	版元・所蔵	役者評判記
宝永5・閏1	八百屋お七 哥祭文	傾城嵐曾我 〔第三番目か〕	〔大磯虎〕嵐喜代三郎仕候 〔新造千弥〕霧浪音之助うたひ申候 古今節		土佐屋 抱谷 狂言本有り	花女方中 霧浪音之介 『役者稽古三味線』
享保16・3	踊り口説 重言尽 ／日待揃 ／橋尽	妻迎雞曾我 第一番目	音頭 坂田兵四郎 吉住小三郎 音頭 染川多三太 染川常八 染川吉弥 萩野嶋之助		中嶋屋 抱谷	4人は中村座色子
元文4・1	髪梳きの段 哥浄瑠璃	鎌倉風新玉曾我 第一番目	虎 坂田市太郎 曾我十郎 中村七三郎 (内題下)髪梳き坂田市太郎語り申候	(奥書)右ハ坂田市 太郎語り申候正本 をうつし令板行候	伊賀屋 長原集1	若女形上上士 坂田市太郎 『役者大極舞』
延享4・5	沢村小傳次哥 嵐音八浄瑠璃	菅原伝授手習鑑 第三番目	よし兵衛 中村七三郎 豊後節 嵐玉柏語り申候 三下りうた 沢村小傳次うたい申候 胡弓 芳沢あやめ	(奥書)右ハ嵐玉柏 節付け沢村小傳次 章指	伊賀屋 パリ	若女形上上士 嵐玉柏 若女形上上吉 沢村小傳次 『役者三輪杉』
延享5・1	掛合琴哥	魴鰈鑑曾我 第一番目	工藤左衛門 市川宗三郎 大磯虎 嵐富之介 曾我五郎 尾上菊五郎 少将 沢村小傳次 三味線 杵屋作十郎	本文には「小傳 次・富之介・菊五 郎の掛合・連節」 富之介は琴弾歌い	伊賀屋 パリ	若女形上上吉 嵐富之介 若女形上上吉 尾上菊五郎 若女形上上吉 沢村小傳次 「此人小歌上手にて」 『〔延享五年三都評判記〕』
延享5・1	小妻重山吹海道	魴鰈鑑曾我 第二番目	瀬川菊之丞 嵐玉柏 嵐音八 掛合所作相勤申候 役者と唄方の共演 長哥 松島庄五郎 中山小十郎 〔綴じ目〕 杵屋作十郎 〔綴じ目〕 杵屋四郎三 吉住重郎治 囃子連名有り	本文に 「玉柏小うたひに て」 「音八投節」 「説経」 「囃子うたひ」	伊賀屋 パリ	若女形上上士 嵐玉柏 道外上上吉 嵐音八 『延享五年三都評判記』
寛延4・7	乗掛妹背小室節	恋女房染分手綱 第八段目	浄瑠璃(紋)佐野川千蔵 ワキ 佐野川小松 三味線 佐野川乙次郎 大和川常八 小まん 中村桑太郎 与作 中村七三郎	内題下「佐野川 楓江直作」	伊賀屋 芸大透写	若女形上上士 佐野川千蔵 小松・乙次郎・常八は 中村座色子 『役者翁叟鏡』

宝暦 3・1	(蝶衛) 出遣い十二段	男伊達初買曾我 第一番目	浄瑠璃 (紋) 佐野川千蔵直伝 三味線 野崎松菊 三味線 吉沢梅松 中村富士郎相勤申候		伊賀屋 図説 316 〔一中正本〕	若女形上上十 佐野川千蔵 「弾語りを聞と気がとけ どけと成初雪」『役者秘事枕』 袖崎松菊・梅松は中村座色子 十二段の上り聞事聞事 『役者色番匠』
宝暦 4・7	(梅川忠兵衛) 草枕夢路相合駕	根元阿国歌舞妓 第二番目	(桐紋) 浄瑠璃 佐野川千蔵直伝 ワキ 菊川大介 ワキ 袖崎駒太郎 三味線 佐野川金五郎 三味線 嵐金五郎 梅川 吾妻藤蔵 亀屋忠兵衛 市川升蔵	(奥書) 右者佐野川 千蔵直伝	伊賀屋 都立中央 竹内	若女形上上十 佐野川千蔵 色子 袖崎駒太郎 『役者懐相性』 『役者大峰入』

【市村座】

上演年	外題	狂言名題／番目	役名・役者名・演奏者	本文中の指定・奥書	版元・所蔵	役者評判記
享保 15・5	相の山 哥祭文	大和国非人仇討	佐野川万菊 竹中金作 野崎喜代松 大和川松之助 (以上二人は色子) 4 人の掛合 (三味線・胡弓の弾き語り)		中嶋屋 都立中央	若女形上上吉 佐野川万菊 市村座女形 竹中金作 市村座色子カ 野崎喜代松 市村座色子 大和川松之助 『役者若見取』
元文 4・7	踊口説或夜密夫	初髻通曾我 第四番目 累解脱蓮葉 第二番目	佐野川千蔵 嵐菊五郎 嵐菊太郎		中嶋屋 歌舞伎図説 353 図 表紙のみ	
元文 4・9	知略の琴哥	初髻通曾我 四番目大詰 菊重栄景清	佐野川千蔵 琴弾き語り相勤申候 瀧中哥川 三味線相勤申候	(奥書) 右の哥さの川 千蔵直伝の正本	中嶋屋 長原集 1	佐野川千蔵 中村座色子 『役者年徳棚』元文 3・1 若女形上上士 瀧中哥川 『役者恵宝参』元文 5・1
寛保 1・春	難波の春駒	ワキトリ鐘入曾我 第一番目	二上り／祭文／哥 浄瑠璃 曾我の老母 沢村宗十郎 三浦の片貝 瀧中哥川 曾我の五郎 津打文三郎 浄瑠璃三味線 化粧坂少将 沢村重之井 〃 大磯屋お千 佐野川千蔵 三味線 傾城道奥 菊川千松 同 山吹 松島蔵松 浄瑠璃うた 小柴の掃部 松島茂平次	(上巻の内題下) 掛合歌祭文 (下巻の内題下) 浄瑠璃掛合せりふ	泉屋権 バリ	道外上上吉 松嶋茂平次『役者二追玉』

寛保 2・1	姿花五色桜 五人男雁金 文七節	富士見里栄曾我 第一番目	(中冊) 市村宇左衛門 大和川房五郎 岩井染松 佐野川千蔵 坂田伊三松		泉屋権 芸大 透写本	江戸惣巻軸 上上吉 市村座色子 若女形上上 若女形上
	雁金文七清川		(下冊) 浄瑠璃 松嶋茂平次語り申候 山崎与次兵衛 市村宇左衛門 藤屋吾妻 瀬川菊之丞			道外上上吉 松嶋茂平次 『役者柱伊達』
寛保 3・1	東雲富士腰帯 出語り 道行の段	春曙塚曾我 第四番目	宮古路豊後節 浄瑠璃 佐野川千蔵 同 佐野川京七 三味線 嵐玉柏 同 佐野川千助 瀬川菊之丞 尾上菊五郎 所作相勤申候	(内題下) 佐野川千蔵節付	泉屋権 芸大透写本	若女形上上 市村座色子 『役者和歌水』
延享 1・7	浄瑠璃坂 幼敵討ち 道化頼光山入り	開關今川状 第三番目	嵐音八相勤申候 三味線 尾上菊五郎		泉屋権 バリ	道外上上吉 嵐音八 若女形上上吉 尾上菊五郎 『役者子住算』
寛延 3・2	たが袖相の山	通神衛曾我 第二番目	浄瑠璃出語り (紋)佐野川千蔵 (紋)芳沢蔵之助(色子) 三味線 瀧中音松(色子) 同 菊川千寿 八百屋お七 中村喜代三郎せりふ入り 小姓 尾上菊五郎		泉屋権 図説 315 表紙のみ	若女形上上 佐野川千蔵 市村座色子 芳沢蔵之助 同 瀧中音松 『役者新詠合』
寛延 3・秋	禿哥	貢物入船名護屋 第二番目	禿 松代 小佐川幾世 禿 山路 芳沢蔵之助 連れ節ニ相勤候 傾城松山 中村喜代三郎 椀屋久兵衛 市村亀蔵		泉屋権 都立中央 バリ	幾代・蔵之助 市村座色子 『役者新詠合』
寛延 4・2	(色町流行歌) おででこでん節	初花隅田川 第四番目 女侠東雛形	おででこ伝助 坂東三八 罷出二上りうた相勤候		泉屋権 バリ 都立中央	敵役上上士 坂東三八 『役者翁叟鏡』

宝暦 5・11	江戸名物蕎麦尽	樸椒峠吉例相撲 第二番目	音頭哥 白妙 佐野川千蔵 相勤申候 小鼓 宇野長七 大鼓 大田市佐衛門 蕎麦切売仙石屋伊兵衛 市村亀蔵 女房お松 佐野川市松 掛合せりふ	本文中に 「是が千蔵 踊り口説き」	泉屋権 東洋文庫	若女形上ト 佐野川千蔵 「一中節の声のよさは～ 中にも三味線弾がたり、久々 聞きました」『役者懸想文』
宝暦 7・2	新板道中双六	染手綱初午曾我	(紋)佐野川千蔵直伝 掛合浄瑠璃せりふ入り ちねんじよのおさん 瀬川菊之丞 小藤太女房梅がえ 佐野川千蔵 八幡三郎 嵐音八		泉屋権 都立中央	若女形上ト 佐野川千蔵 「道中双六の道行。浄瑠璃の一ふし 久々で聞きましたが、いつ聞いても うまい声でんとたまらぬ楓江丈」 『役者笑上戸』
宝暦 7・3カ	(哥浄瑠璃) 相の山小笹の車	傾情鬼界嶋原 第一番目	哥 水木八三郎 哥 東吉太郎 三味線 嵐小伊三 彫 浮世代之介 市村亀蔵 三味線 袖崎嶋之介		泉屋権 演博 透写本	子役 子役 市村座色子 嵐小伊三 (若女形上『役者笑上戸』) 上上吉若太夫 市村亀蔵 市村座色子 袖崎嶋之介 『役者真壺鋳』

不明

【中村座】

寛保 1・3	童獅子桜競	菜花曙曾我 第三番目	佐野川市松 染川若五郎 中村市五郎 嵐富之助 (演奏者連名が無い)		伊賀屋 バリ	
--------	-------	---------------	---	--	-----------	--

第三章

江戸版長唄正本における株板化の動き

— 中村座を事例として —

はじめに

江戸歌舞伎においては、舞踊の場面に多彩な音曲が展開した。河東節・長唄・常磐津節・富本節・清元節など、それぞれに趣の異なる音曲は名題役者が演じる所作に色をそえ、華やかな見せ場となつて観客を魅了してきたのである。

舞踊の演目に新作が出ると、役者・作者・演奏者などの上演情報とともにその音曲の詞章は三丁程度の半紙版の小冊子に載せられ、上演時に芝居茶屋や絵草紙屋から頒布された。

筆者は、右の音曲のうちの特に長唄の薄物について、伝本の調査を行つてきている。そして、その版行上の特徴を第一章において江戸の三座別にまとめてきた。その結果、江戸版の長唄正本は三座ともに、版式や版行形態の上で概ね足並みを揃えたかたちで版行されていることがわかつてきたのである。伝本は、享保十六年（一七三一）中村座の上演作品を最古として、明治期にわたりほぼ継続して残っている。

この長唄正本が、長唄を用いた所作場の元のかたちを知る上での基本資料になることは言うまでもない。けれども、本章では少し視点を變えて、長唄の薄物全体を江戸の地本問屋が扱う草紙（地本）の一品目と捉える立場で考察を進めたい。

長唄の薄物の特徴の一つは、異版が多いことである。この異版の存在によつて当時の偽版の実態や版權の確立する過程を知ることができ、全体として江戸の地本における版權のあり方を具体的に捉えうる好資料群となつていたのである。特に中村座の伝本には刊年と「蔵板」

「再板」「改板」などの記載が備わっており、その動向を他の二座よりも顕著に捉えることができる。したがつて、本章では中村座を取り上げて、その版行形態の変化から読みとれる版權のあり様を検討していく。

一 地本としての長唄の薄物

近世における版權をあらわす言葉に「板株（株板）」がある。この「板株（株板）」とは、版木に付随する、その板木を用いて独占的に出版・販売を行う權利と捉えてよい。そして板株の独占的權利を保証するために、仲間の結成とその公認が必要であつたと考える。物の本（書物）の場合、江戸では板株の權利は、書物問屋仲間行事の吟味を経た上で、奉行所の改板許可が下付され、「株帳」に登録されて初めて発生する。登録されると、版木自体は摩滅・焼失などによつて失われても、その書物を出版・販売する独占的權利は残るのである。

一方、地本⁴の場合、板株の設定は寛政二年（一七九〇）十月に地本問屋仲間行事による新本改めの制度が導入されてからとなるようで、登録手続きも物の本に比べて簡便な措置がとられていたらしい。長唄の薄物に対する扱いについては『義太夫本公訴一件』の「あつまのふみや」（江戸地本問屋「抜本版行者」側の記録）に断片的に触れた箇所がある。以下は西宮新六が、三河屋喜兵衛方の抜本の元株主であつたことから、奉行所より江戸における義太夫本の始末について問われ、天保三年（一八三二）十一月十九日付けでこれに返答した書

面の一部分である。西宮新六は江戸では古参の義太夫本版元で、伝本は少ないが長唄の薄物も版行している。

尤義太夫本ニ不限、長唄本其外常盤津・富本・清元・新内節等ニ至るまで仲間行事之改は仕来り不申候。此義は芝居ニ而狂言ニ興行致し、且は太夫共門弟其外江稽古本ニ相用ひ候事故、前より新規ニ出来之分ニ而も其時と改は無之候。尤何節ニ不寄稽古本杯は文章左而已正敷品ニ而も無之事故、少く宛は尾籠之文句杯も有之趣ニ而、改之義は前より地本問屋行事ニ而も致不申候而取扱来候。此義は、地本問屋行事被 召出御尋被遊候得は、相訳申候。

これによると、江戸では寛政二年（一七九〇）十月に地本問屋仲間の行事改めが導入されてからも、長唄や豊後系浄瑠璃の音曲本は新本改めの対象にはなっていなかったことが窺える。その理由として、芝居に使われた音曲は上演に際し検閲を経て公開されたものであり、その詞章を載せた本は用途や使う人も限られ、内容も芝居唄の文句であることが挙げられている。さらにその先を読み進めると、以下の通りである。

近来追と被 仰渡有之、両仲間取締宜敷成行、譬仲間之者ニ而も猥ニ板行彫刻は不為致候。前とは同渡世も少く猥ニ板行致来、譬は百人一首・実語教・庭訓往来之類杯、三ヶ津は不及申、其外ニ而も多分類板有之、且江戸表は書物・地本両仲間之内ニも

沢山ニ類板持来、夫と摺立渡世致来候。尤只今は仲間内ニ而も、年代記・塵劫記之類ニ而も原板所持無之者、猥ニ彫立候義は不為致候得共、（以下略）。

すなわち、以前は類版をたやすく版行できたが、次第に書物問屋仲間・地本問屋仲間の取り締まりが厳しくなり、長年版次を重ねた普及度の高い実用書なども、近来は原板を所持していないとみだりに版行できなくなっていることが記されている。

長唄正本も地本に入る以上は、改めは行われなくともこうした動向を受け、原版を所有して重版・類版を排除する意識は高まっていたと考えられよう。

歌舞伎の音曲正本・せりふ正本は同じ体裁をとり、共紙表紙と三丁程度の本文からなり、「薄物（うすもの）」とも呼ばれていた。これらは、案内として芝居茶屋から配られ、また、観劇用パンフレットとして芝居町を中心に絵草紙屋からも販売されていた。三升屋三三治の『作者年中行事』（嘉永元年成立）の三の巻、豊後節の薄物に関する部分では、次のような記述も見られる。

一、薄もの板行して楽やへ配りて後、家元よりけいこに出る。

此本出来ざる内は、けいこに出し事なし。（以下略）

一、流儀／＼に寄るとはいへど、作法は旧家ゆへ、ひもの町を元とする。

このように、正本を芝居内部での稽古に用いていたことが窺われる。豊後節とは宮古路豊後から分流した常磐津節・富本節・清元節浄瑠璃であり、檜物町とは代々常磐津節の家元文字太夫の住居があったことから文字太夫を指す言葉である。歌舞伎の音曲正本には稽古本としての機能が備わっていたのであるから、外部者の稽古本へと展開していたと考えられる。

二 正本と偽版

ここでは、初版本の選定根拠を示し、初版と多数伝存する異版の関係を、168頁の表と、130頁に掲げる「相生獅子の図版」によって説明していく。表1と表6(169頁)は伝本を上演順に並べていったものである。表の縦軸は、最上段が上演年(表紙の大名題による)、二段目が外題(長唄曲名)、三段目以下は版元別に伝本を整理したものである。表はひと続きのものであるが、版行形態によって表1から表4に分け、表5は都座へ、表6は中村座へ興行権が移動したので分けている。なお、本章で取り上げている版については、その部分を太枠で囲み見分けやすいようにした。また、各版の所在については、197頁の「所蔵一覧」に所蔵先と架蔵番号を載せてある。

それではまず、130頁に掲げた「相生獅子の図版」正本①と、その異版②③を見ていただきたい。図版の右側が表紙、左側は本文の最初の半丁である。

「相生獅子」は明和六年(一七六九)二月に中村座で「曾我襍愛護若松」の第二番目に上演された長唄曲である。すべての版種を載せることは紙幅の都合上できなかったが、流行曲であったため、異版が非常に多く出ている。表紙の左側に外題すなわち曲名が「相生獅子」とあり、右上の演奏者連名の横に大名題が「曾我襍愛護若松」と各版に共通して記入されているのだが、絵や文字の書体には時代様式の違いが感じられる。刊年の記載がないため、どれが初版なのか、ということがまず問題となろう。

そこで、演劇書から長唄正本の版元に関する記述をひろってみると、『新成 明和伎鑑』(明和六年(一七六九)十月刊)に、

三芝居番付板元		
中村勘三郎芝居	段落附番附せりお新	高砂町横通り 村山源兵衛
市村羽左衛門芝居	役者附番付	さかい町 中嶋や伊左衛門
同	段落附番附せりお新	たちばな町 いつみや権四郎
森田勘弥芝居	段落附番附せりお新	大橋町五丁め 金井半兵衛

とあり、興行時に出る出版物について座と版元の間に専属関係のあったことが示されている。番付類やせりふ正本・音曲正本といった劇場出版物は、座側から上演ごとに継続して情報の提供を受ける必要がある。座と版元との間に本来専属の関係が形成されやすいといえる。中村座の顔見世番付、辻番付、浄瑠璃正本、長唄正本、せりふ正本といった劇場出版物は、村山源兵衛が版元であると記されている。そこで、

「相生獅子の図版」

⑦

村山源兵衛版

上田図書館花月文庫

[illegible]

華光



相壁 椰子

相生獅子

[illegible]

無刊記版

松浦史料博物館

[illegible]

相生獅子

相生獅子

[illegible]

富士屋小十郎版

国立音楽大学附属図書館竹内文庫

高
峴出市千部
富士田松嶺
陸

將德六三郎
將德五三郎
將德依吉
若田宗卿

西鶴言集
古川後藏
軍屋士郎
加一通

曾叔祖愛護若松

附錄



相生獅子

朱乙輝

桐生獅子

[illegible]

沢村屋利兵衛版

国立音楽大学附属図書館竹内文庫

最 田仙良
 遊出市十
 富苗松茂
 張
 持屋六三
 持屋三三
 持屋佐吉
 持屋佐吉
 古川清三
 西修吉
 太田宗助
 北が里

大いなる愛を

陳以鼎之孫



相生獅子 中村雁

中村隆

賴生獅子

[illegible]

才

森田屋金蔵版

国立音楽大学附属図書館竹内文庫

[illegible]

財生獅子

竹賀字多

[illegible]

力

伊賀屋勘右衛門版

国立音楽大学附属図書館竹内文庫

[illegible]

卷之五

U

[illegible]

各所蔵機関に伝存する膨大な長唄の薄物のなかから村山版を集め、大名題によって上演順に整理し、『長唄原本集成』の成果をも取り込み、169頁の表1の三段目に表した。

中村座の長唄正本は享保十六年（一七三一）の上演作品から伝本があり、江戸の地本問屋大手の鱗形屋、中村座の番付版元中嶋屋、そして江戸浄瑠璃正本や役者絵細版を手がける伊賀屋が初期の版元であったようだ。表1で版元1・版元2の欄をもうけてあるのは、上演時のものとみられる版が二種存在する場合があるからである。座に出入りする版元は限定されてはいたが複数あった模様である。宝暦八年（一七五八）と十一年（一七六一）には市村座の専属版元泉屋権四郎の名も見えるが、宝暦十二年（一七六二）には村山源兵衛が「中村座はんもと」と奥書に記し始め、中村座と独占的な関係を築くことが見てとれる。さらに、明和八年（一七七二）頃から村山源兵衛版の奥書には「中村座板元」「正銘板元」の表記が多く見られ、村山が正本版元として定着していることが確認できる。「相生獅子の図版」ではのが村山源兵衛版で、上演時に出された正本となる。長唄正本は、新作の長唄曲が芝居で上演されるときに出たものであるから、表紙に大名題（狂言名題）があれば刊年は必要なかったと見られる。

ちなみに、下の図版のは享保十九年（一七三四）三月上演の市村座の長唄正本である。奥書に「市村座新きやうげんはんもと」とあり、市村座では中村座より三十年近く前に座の専属版元が形成されていたことがわかる。

⑦「江戸桜五人男掛合文七節」 泉屋権四郎版

早稲田大学演劇博物館蔵



再び「相生獅子の図版」にもどると、村山版②と非常によく似た版面が、下の④にある。これは無刊記版である。版元名を記さないこと自体が、享保七年（一七二二）の出版条令に照らして疑わしい存在と見なされよう¹⁾。この無刊記版は、文字の入り方や跳ね方などの細部に違いが見つかり、彫りも全体的に堅い印象であることから、村山版を版下に用いて被せ彫りしたものと推測される。村山版の表紙の版元名部分を削除して、「中むら」と入れ、「座」の文字は除いていることに特徴がある。絵の部分については頭部の扇や牡丹の葉に手を加え、着物の柄は省略している。本文については、黒く色をかけた箇所について変体仮名を変えるなど、意図的に版下に手を加えていることが窺える。

「相生獅子」には本屋儀兵衛版が伝わっていないが、本屋儀兵衛版にも村山版を版下に用いて被せ彫りしたと見られる版が多く見つかる。そこで、正本とその異版について版面の比較を詳細に行ったところ、いがや版や村山版を版下に流用しているのは本屋儀兵衛版と無刊記版に限られることが明らかとなった。しかも、本屋儀兵衛版や無刊記版は市村座や森田座の正本に対しても、同じ手法をとっているのである。

よって、169頁表1の正本の欄（すなわち版元1と2）の下に、本屋儀兵衛版・無刊記版の欄を設け、正本に対する本文の流用関係を表してみた。表では、伊賀屋版・村山版を元版にして、版元名以外をそのまま版下に用いているものはA1、村山版を版下としながら部分的に手を加えているものはA2、村山版の意匠を参考に版下を作り直して

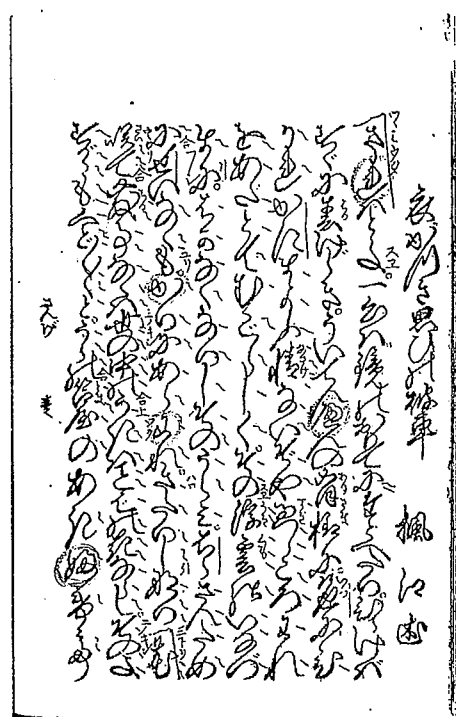
いると認められるものはA3と識別して、表記している。

この識別方法を具体的に説明すると、「相生獅子の図版」においては、④の無刊記版の本文がこのA2にあたる。本文の第四行の六文字目、同行の下から五文字目、最終行の九文字目について、村山版と用字が異なっている。（表紙についても版面の流用関係が認められるが、これについては第一章の第一節を参照されたい）。また、本屋儀兵衛版の例として、「衣かづき思破車」（表紙と本文初丁表）の図版を⑤に掲げた。⑤・a村山版に対して、⑤・b本屋儀兵衛版の本文はやはりA2の関係にあるのだが、音曲本にとって重要な要素である墨譜や文字譜もそのまま流用している。

コー a 村山源兵衛版 早稲田大学演劇博物館安田文庫旧蔵本

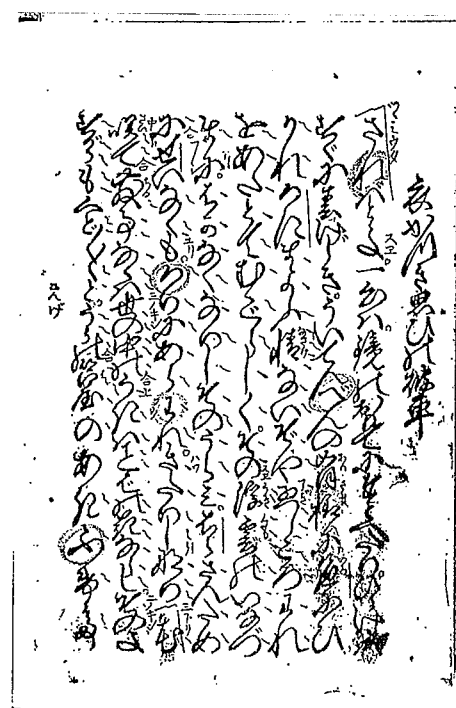
特 11-1212-11J





コーb 本屋儀兵衛版 早稲田大学演劇博物館安田文庫旧蔵本

特ノ11-1212-93E



このように元版とのあいだに版面の覆刻関係が認められながら、伊賀屋や村山源兵衛と相版を組んでいない場合には、偽版（無断出版物）の可能性が考えられる。「中村座板元」と村山版の奥書に入る例が多くなるのも、偽版に対する対抗策と受け取れる¹²⁾。

重版・類版の概念規定については、大坂本屋仲間記録「上組済帳標目」に残された、享保十二年（一七二七）正月に江戸十軒店月行事が役所へ差し上げた文書がよく引用される。だが、これは本屋仲間（江戸では書物問屋仲間）を対象としたものである。ここでは前述の『義太夫本公訴一件』から、二代目蔦屋重三郎の倅祐助が天保四年（一八三三）正月二十六日付けで寺社奉行に出した返答書の一部を、地本（江戸の草紙類）における重版の参考資料として引用する。大坂の丸本株所持者である紙屋与右衛門と糸屋七五郎が、三河屋喜兵衛・蔦屋重三

郎のほか江戸の抜本版行者三人を相手取り寺社奉行に訴えたため、江戸の抜本版行者や地本問屋行事が吟味を受け、抜本版の来歴や慣行について文書を提出しているのである。

一体重板与申儀は、外持ち主の摺本を以板下二仕、彫刻致候を重板与唱申候。重三郎方二而売候稽古本之儀は、板下別ニ相認彫刻仕候得は、全重板与申義は更ニ無之¹⁹。

これをそのまま解釈するならば、外持ち主の摺本（すなわち他人が板株と版木を所有して摺った版）を版下にとって彫刻すると重版になる。しかし、蔦屋重三郎の版行する稽古本は、版下を別に認め彫刻しているので重版ではないということになる。ただし、「板下別に相認め」の部分、蔦屋重三郎が抜本株と版木を地本問屋仲間の濱松屋幸助から文政九年（一八二六）中に譲り受けている、また、版下は江戸で操座に出勤する太夫から直に受け取る下書から作成していると引用部分の前後で述べているので、丸本を流用していることを認めている訳ではないようである。（しかし、大坂の丸本株所持者から抜本株は無株と認識されている。）筆者はいくく江戸版義太夫抜本の伝本調査を十分に行っておらず、丸本と抜本の脈絡からこの引用部分を読み解く材料を持ち合わせていない。ただ「外持ち主の摺本を以て板下に仕り彫刻致す」という記述は、断片的ではあるが、丸本と抜本の関係を斟酌せずとも、重版の内容を具体的な手法によって示す証言になっていると思われるのである。そして、蔦屋は地本問屋行事を勤め、富本正

本の版元でもあったことから、この重版に対する認識は、音曲正本の版行に携わる地本問屋の間である程度共有されていたと推測される。

この引用部分を、本屋儀兵衛版・無刊記版から読み取れる版面の状況に照らし合わせるならば、A1は重版。A2・A3も他持ち主の版の流用であるから重版となろうが、あるいは重版に対する抜け道として江戸で通用していた手法であった可能性も窺える。だが、いずれも伊賀屋や村山の上演時に正本を出す権利に不正参入しようとする行為であることは明らかである。

表1でみると宝暦期（安永六年（一七七七）三月の間、村山源兵衛版に酷似する版が正本と並行して出ており、村山は事実上の重版によって、初版を出す権利を侵害されたままの状態であることがわかる。ただ、本屋儀兵衛版や無刊記版においては、座名から「座」を除く表記がよくとられている。これは公許の興行権者である座元に對し憚りがあつたためと推測され、正本との差別化は一応はかられていたと見られる。音曲の詞章や上演情報は座から提供されるものであるから、このように偽版が横行する背景には座側の容認態度があつたと考えられる。おそらく宣伝の益をとって黙認していたのであろう。

三 相版化

表1に続いて、174頁表2の安永六年（一七七七）十一月から、村山源兵衛は本屋儀兵衛と相版を組むようになる。重版・類版は、版元に

とって版の作製にかかる経費の回収を妨げる存在であるから、その版元を相版元にするにはよくとられる方法であった。表1の状態から脱し、一応弁済措置がとれるように状況が変化したものと推測される。

また、村山源兵衛が本屋儀兵衛を相版元にとすると、無刊記版も出なくなっているの、無刊記版は本屋儀兵衛が出していた可能性もある。

だが、177頁表3の天明二年（一七八二）十一月から村山源兵衛は松本屋万吉を相版元とする。本屋儀兵衛は相版元からはずれ、天明二年（一七八二）十一月上演の「めりやす雪月花」を単独で版行しているが、この表紙では座名が「中村」となっており、やはり「座」の文字は入らない。

『（画入読本）外題作者画工書肆名目集』に「一、貸本屋世利本渡世の者にて手広にいたし候者名前」とあるが、そこに「南鍋町一丁目宇多閣 本屋儀兵衛」¹⁴と出てくるため、本屋儀兵衛は文化期頃（一八〇四～一八一七）には芝居町の入り口である江戸橋四日市から移転して、長唄本の版行から手を引いていたようだ。

正本版元の村山源兵衛は、中村座の顔見世番付を明治期にわたって版行している。また、市村座の専属版元である泉屋権四郎は紅絵の一枚摺りを始めた版元であり、森田座の専属版元江見屋も錦絵の見当の考案者として知られる版元である。ゆえに表1～表3の時期における三座の専属版元は、芝居絵や劇場出版物を専門に扱う中小規模の出版工房であったと見られる。

この時期までの版行上の特徴としては、座と専属関係にある版元が形成され、長唄正本の版行を独占するようになったことであるが、そ

の版行の権利は、新作の上演時（すなわち初版）に限られていたと考えられる。というのも、座の専属版元（中村座にあっては村山源兵衛）による再版本が伝存しないからである¹⁵。先に引用した『明和伎鑑』で劇場出版物が「三芝居番付版元」として括られているのは、それらが基本的には一興行で版木を使い切る一過性の出版物であったことを示している。

そして、座の専属版元が形成されると、その利権に不正参入しようとする偽版が現れるようになる。表1～表3は偽版の版行状況を示すために、長唄の薄物の中から正本の版元である伊賀屋版や村山版と、本屋儀兵衛版・無刊記版だけを取り出して、それぞれの本文の関係をあらわしたものである。しかし、「相生獅子の図版」に掲げた㊦㊧に見られるように、非常に流行った曲は本屋儀兵衛版や無刊記版のほかに、多くの版元が版行を手がけている。それらの異版については、表の本屋儀兵衛版と無刊記版の下に欄を設けることができなかったの、¹⁶「後版」として184頁の表7にまとめており、本章の「五」で触れることとする。

四 版元の交代

続く178頁表4では、天明六年（一七八六）に沢村庄五郎の名が版元にあがってくる。沢村庄五郎は、翌年天明七年（一七八七）三月に『名に響／日出扇』を刊行している¹⁶。江戸から上った中村仲蔵が大坂中

村座で「義経千本桜」に出た折りの芸評を載せた評判記である。この役者評判記に関する記述が、『秀鶴随筆』坤の巻の冒頭に次のように出てくる。

江戸堺町沢村油麿(店)より、大坂評判記参申候、日出扇、大慶仕申候¹⁷

『東都劇場沿革誌料』上巻の「役者名目商店のこと」には

鬻付油

堺町 家主 沢村屋利兵衛

絵草紙商仕、目印丸にいの字紋所付申候、延享二年開店二代目

宗十郎持也、

天明の頃今の利兵衛引受たり¹⁸、

とあることから、沢村庄五郎と沢村屋利兵衛は同じ人物である可能性が高い。沢村利兵衛は二代目宗十郎の芝居町にある鬻付け油の店を引き継いで、絵草紙屋を兼ねた店を経営しており、堺町の家主でもあったようである。

先に引用した『明和伎鑑』は明和六年(一七六九)の刊行であったが、三升屋二三治の『賀久屋寿々免』(弘化二年(一八四五)秋脱稿)第三巻にも、劇場出版物と専属版元の関係を示す記述があるので、その部分を掲出しよう。

三芝居板元

中村座 役附 せともの町 村山源兵衛

同 鬻付油の石本 さかい町 沢村利兵衛

市村座 鬻付油の石本 山本重五郎

同 役者附 福地茂兵衛

森田座 鬻付油の石本 田所町 小川半助

河原崎座とも

河原崎座 役者附 芝神明前 丸屋甚八

福地茂兵衛、山本重五郎ハ、名前株持ち主ゆゑ、住所外名前故相糺さす。爰にしるすのみ。両家とも猿若町二丁目、茶屋也。近年三座とも版下、今の清水正七認る。中頃迄、山本重五郎・高麗屋金三郎、番附を書し事¹⁹。

『明和伎鑑』の記述と比較すると、中村座の番付版元が村山源兵衛であるほかは版元が入れ代わっている。村山源兵衛の所在が瀬戸物町になっており、これは表4¹⁷⁸頁の寛政元年(一七八九)以降と対応する。だが、森田座の小川半助の住所が田所町とあるので、この記載は享和三年以降のものとなる。中村座の長唄薄物本の版元はさかい町沢村利兵衛となっており、伝本の状況と一致する。表4を見ると、当初は村山源兵衛と相版のかたちをとっているが、次第に沢村屋が単独で中村座の正本版元となる様子がわかる。そして、これに伴い、版行形態にも大きな変化が起きているのである。

寛政三年(一七九一)正月の上演の「対面花春駒」を例にとり説明しよう。次の140〜142頁に「対面花春駒の図版」を掲げる。各々の図版

「対面花春駒の図版」

村山源兵衛・沢村屋利兵衛相版

早稲田大学演劇博物館安田文庫

特イ
11
121
26
C

長	軍醫署	三	材立放歸	田部
暎	軍用勸告	強	料金和吉	六御勸告

[illegible]

沢村屋利兵衛版

早稲田大学演劇博物館 特 13, 443, 92

443
92

[illegible][illegible]

⑦

沢村屋利兵衛(寛政三年刊記)版

国立音楽大学附属図書館竹内文庫 07-0803

長崎田舎三 井原正徳 田中依十郎
 長崎田舎三 井原正徳 田中依十郎
 長崎田舎三 井原正徳 田中依十郎
 長崎田舎三 井原正徳 田中依十郎



寛政三年正月一日 沢村屋利兵衛
 寛政三年正月一日 沢村屋利兵衛
 寛政三年正月一日 沢村屋利兵衛
 寛政三年正月一日 沢村屋利兵衛

⑧

沢村屋利兵衛(文政九年)再版

国立音楽大学附属図書館竹内文庫 07-0808

長崎田舎三 井原正徳 田中依十郎
 長崎田舎三 井原正徳 田中依十郎
 長崎田舎三 井原正徳 田中依十郎
 長崎田舎三 井原正徳 田中依十郎



寛政三年正月一日 沢村屋利兵衛
 寛政三年正月一日 沢村屋利兵衛
 寛政三年正月一日 沢村屋利兵衛
 寛政三年正月一日 沢村屋利兵衛

⑦

沢村屋利兵衛・丸屋鉄次郎相版

国立音楽大学附属図書館竹内文庫 07-0811



初版は、沢村屋利兵衛が村山と相版で出している⑥の版である。次いで、同時期にその下の⑦の、版元名から村山と入った部分を削り切った同版本が出たと考えるのが順当であろう。⑦の沢村屋利兵衛版は、

奥書に初演時の刊年が入っているが、役者絵や本文の文字の大きさ・書体から見て後の版である可能性が高い。参考として、「対面花春駒」の二か月後に上演された長唄曲「五月菊名大津絵」の正本⑧を次に掲げる。これは書体や行数に初版本の体裁が備わり、上演時の刊年と蔵版表記も入っている。

⑧

「五月菊名大津絵」 沢村利兵衛版

早稲田大学演劇博物館安田文庫 特イ11 1212 26 D

置田寛吉	村松和吉	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎
置田寛吉	村松和吉	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎
置田寛吉	村松和吉	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎
置田寛吉	村松和吉	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎
置田寛吉	村松和吉	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎
置田寛吉	村松和吉	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎
置田寛吉	村松和吉	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎
置田寛吉	村松和吉	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎
置田寛吉	村松和吉	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎
置田寛吉	村松和吉	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎	佐田三郎



初版は、沢村屋利兵衛が村山と相版で出している⑥の版である。次いで、同時期にその下の⑦の、版元名から村山と入った部分を削り切った同版本が出たと考えるのが順当であろう。⑦の沢村屋利兵衛版は、

おそらく、②においても、この②と同様に、巻末に刊年および「沢村蔵板」と入る版が存在したのではないかと推測するが、あるいは村山との関係から蔵版の表記を入れるのが遅れた可能性も考えられる。

次に④の版を見ると、版面が擦れてやや読み取りにくいが奥書きに、

原板 寛政三亥年正月吉日

再板 文政九戌年九月吉〔日〕 沢村蔵板

とある。さらに④では表紙の版元の欄に丸屋鉄次郎が求版者として記されており、沢村には板賃（版木使用料）収入があったと推測できる。ここで注目すべき点は、正本版元の沢村屋利兵衛が蔵版者と明記され、上演時の初版だけではなく、再版をも出すようになっていたことである。

再び表に戻って、都座に興行権が移る179頁表5を見ると、沢村屋は初版においては相版元あるいは賣所として名を出しているが、再版は単独で板行している。次に、中村座に興行権が戻る180頁表6になると、沢村屋は版元に戻り、再版に際しても沢村屋と他の版元との相版のかわかりとられていて、沢村の原版に対する所有権が守られていることがわかる。管見によれば、寛政期以降に中村座で上演された長唄曲で、沢村屋以外の版元が沢村と相版を組まずに版行しているのは一例だけである。それは寛政十一年（一七九九）十一月上演の「牛飼室梅花」^{うしかいむろのこのはな}山本平吉・和泉屋市兵衛の相版本で、表6では便宜上「沢村Ⅱ種」の欄に入れている。

なお、「蔵板」の表記は中村座の沢村利兵衛版にのみ見られ、市村座の正本では一例・森田座の正本には二例確認できたのみである³⁰。

市村座、河原崎座においても、多少の時期的なずれは生じていても、ほぼ時期を同じくして座の専属版元が交代し、これに伴い初版だけではなく再版をも出すかたちに長唄正本の版行形態が変化する。市村座では天明四年に控櫓の桐座へ興行権が移り、長唄正本の版元も泉屋権四郎から富士屋小十郎に代わる。そして天明八年（一七八八）十一月に桐座から市村座へ興行権が戻るのだが、その際には版元も市村茂兵衛・山本重五郎・富士屋小十郎の相版へと代わっている。また、寛政三年（一七九一）十一月には森田座においても興行権が河原崎座に移行し、長唄正本の版元が小川半助に代わる。このように、長唄正本は三座ともに版行形態の変化を見せているのである。

五 「後版」グループ

それでは、これまで検討してきたことを踏まえて、再度130〜133頁の「相生獅子の図版」を見てみたい。これらの相生獅子の版種は、次の3つに分けて捉えることができるであろう。

- ① 上演時正本としての村山版②。
- ② 村山版が出た直後に村山版を流用して作られ、観劇時の需要に便乗したと見られる偽版④。
- ③ ④からの版は、上演後時を隔てて、流行った曲を需要に応じ

ていろいろな版元が版行したものと考えられる。それを「後版」グループと位置づけて呼ぶことにする。このなかに③の沢村版が入るのはもちろんのことである。

この③は190頁の「後版表」に掲げている²⁾。◎印は版種が複数存在することを示す。「後版表」を見ると、富士屋小十郎以下、多田屋利兵衛まで十二軒の版元が版行を手がけている。人気曲で需要があったため、多くの版元が版次を重ねて後々まで版行したのであろう。「後版」の表紙には「稽古本」と記載されている例も少なくない。

重要な点は、「後版」の長唄曲はいずれも初演が表1と表3の時期であることだ。よって、これらの「後版」は沢村屋利兵衛が中村座の版元になる前の時期の、座との間に独占的な版行の権利は成立していても、蔵版という意識がまだなかったために、複数の版元が再版を出せる状態を示していると考えられるのである。ただし、これにも例外が一つ存在する。「一奏現在道成寺」は寛延二年（一七四九）三月上演の長唄曲で、初版の正本は伊賀屋から出ている。再版本が国立音楽大学附属図書館の竹内文庫にあり、大字六行本で「後版」の体裁をとる。これには版元が「元はま町伊賀屋勘右衛門原板／ふきや町富士屋小十郎再板」と記されている。伊賀屋勘右衛門は「義太夫本公訴一件」のなかに地本問屋仲間行事としてその名が挙がっているもので、富士屋に対しあるいは原版の権利を主張できたのかもしれない。

そして、表4の寛政三年（一七九一）以降と表6、すなわち沢村屋利兵衛が中村座の長唄正本の版元になってからは、沢村の原版所有者としての権利は再版時においてもほぼ守られていると言ってよいであ

ろう。したがって、中村座の専属以外の版元が沢村屋と相版を組まずに版行することは起きていない。先に述べた「牛飼室梅花」山本平吉・和泉屋市兵衛相版本が例外的に見つかるのみである。

「後版」グループの版元は、出版の権利がまだ上演時に限られていた時代の作品について、再版本を出していると考えられるが、その場合には座と版元との間に特定の関係は存在せず、三座で当たって流行った作品を版行しているようである。

以上のことから、中村座の長唄正本において株板化は、寛政期に起きたと判断してよいであろう。

それでは「後版」において、沢村屋利兵衛は中村座の専属版元として、村山版の版權を引き継いでいる面はあるのだろうか。正本の版行において、沢村屋は当初村山と相版を組んでいるので、その可能性も十分に考えられる。確認してみよう。

190頁「後版表」の上から八段目にある沢村屋利兵衛の欄を左に見ていくと、宝暦三年（一七五三）二月上演の「京鹿子娘道成寺」の複数ある版種のうちの一種に「沢村屋利兵衛正」と見つかる。だがそれ以外は、村山源兵衛との相版は見当たらず、十二の版元の中で沢村屋が正本版元であることを示す徴証は出てこない。

ただ、沢村屋版に「再板」と入っているのが目に付く。これはおそらく、村山版の再版というよりは、沢村自身の作った原版に対する再版を意味しているのではないかと思われる。なぜならば、市村座上演作品の「後版」においても、沢村が出している版には「再板」と入

る例が多く見つかるからである。元来、沢村屋利兵衛版には他の版元にはみられない蔵版者や版次（刷次の場合もあり）についての情報が記されている。

「後版」は正本に比べて、国内外の所蔵機関に非常に多く伝わっているのだが、現調査段階では、後版において特定の座と版元の専属関係は認められない。「後版表」で、天明元年（一七八一）十一月上演の「我背子恋の合榼（別称蜘蛛拍子舞）」の上から四段目を見てほしい。◎印の下に記載した福地茂兵衛・山本重五郎・富士屋小十郎は、天明八年（一七八八）十一月から市村座の専属となる版元であるのだが、伊賀屋と相版を組んで、中村座上演作品を版行している。この福地茂兵衛相版本は、天明八年十一月以降に版行されたと考えてよい。原本は国立音楽大学図書館竹内文庫・明治大学図書館に伝わり、その表紙には「四天王宿直着綿 第一番目三立目」と中村座の初演時の大名題が入り、「中村座」と座名も入れている。福地茂兵衛は市村羽左衛門の後見を勤め、座元に近い親族のひとりである。そうした版元が中村座上演作品の「後版」を出しているのである。

一方、沢村屋利兵衛もまた、他の二座すなわち市村座（桐座）・森田座（河原崎座）で当たった曲の後版を版行しており、特に市村座上演の作品については多くの曲を版次を重ねて出している。

後版を出すのは、「後版表」に掲げた版元にほぼ定まっている。また、「後版」には本屋儀兵衛版や無刊記版に見られるような、座名から「座」の文字が除かれる例は見られない。

六 株板化の要因

「後版」の存在によっても、寛政期に株板化の起きていることが裏付けられたと思う。それでは、こうした変化がなぜ起きているのだろうか。

178 頁の表4で再度確認すると、中村座で沢村庄五郎の名が版元に挙がってくるのは天明六年（一七八六）からである。しかし、沢村屋利兵衛による再版は、寛政元年（一七八九）七月上演の「八朔梅月の霜月」からとなる。その沢村屋利兵衛版I種の再版本の奥書には「寛政元酉年七月吉日 再板 沢村蔵板」とあるのだが、沢村の蔵版は一応初演時と見てよいであろうか。伝本上は、この作品から沢村屋利兵衛が再版・再々版をも出す版行形態に変わっている。補足すると、森田座においても、河原崎座に興行権が移る寛政三年（一七九一）十一月に長唄正本の版元が小川半助に代わり、翌寛政四年十一月上演の「花車岩井扇」から再版本（7種あり）が伝存する。

したがって、蔵版あるいは版行形態の変化する作品の年代に、その変化の理由を求めるならば、出版取締令との関係が想起されるであろう。江戸では寛政二年（一七九〇）に地本問屋仲間が再結成され、十月には行事をたてて新本に対し自主検閲を行うことを盛り込んだ申渡しとなされる。長唄正本については、改めが行われていなかったことは冒頭で述べたとおりである。だが、こうした株板化は、地本にも版權を明らかにして幕府の禁令に抵触する内容かどうか吟味しつつ、重版・類版に対する取締を強化する態勢が整えられたことに連動した動きで

あることは間違いないであろう。

ところが市村座では、もっと早い年代、すなわち天明四年（一七八四）十一月に、版元の交代と、初版の版元が再版をも行うという版行形態の変化が同時に起きているのである。その契機は、市村座から桐座への興行権の移譲である。その前の、天明三年（一七八三）六月までは市村座の専属版元は泉屋権四郎であることが伝本で確認できる。

しかし、天明四年（一七八四）十一月には桐座に興行権が移り、この時上演の長唄正本「狂乱雲井袖」から、桐座の正本版元は富士屋小十郎に代わる。そして富士屋は初版だけではなく、再版・再々版を単独あるいは伊賀屋・森田屋と相版を組むかたちで出すようになる。

次いで、五年間の約定による桐座の仮興行が済み、天明八年（一七八八）十一月に市村座に興行権が戻ると、長唄正本の版元も市村茂兵衛・山本重五郎・富士屋小十郎の相版となり、再版等に際してはこの正本版元と伊賀屋・森田屋金蔵との相版のかたちとがとられている²²。

つまり、市村座では出版取締令より五年以上前に、桐座への興行権移譲を機に版元の交代と事実上の株板化が起きているのである。ここには座側の意志を感じ取ることができよう。

前述したとおり、中村座の正本版元となる沢村屋利兵衛は堺町の家主であり、沢村宗十郎²³の油店を継いで絵草紙株を取得している。一方、市村座でも天明八年（一七八八）十一月から、正本版元が福地茂兵衛・山本重五郎・富士屋小十郎の相版となる。そのうちの福地（市村）茂兵衛は、市村座の後見をつとめる座元の有力な親族と見られ、山本重五郎も葺屋町の芝居茶屋総代となり、この二人は『賀久屋寿々

免』の「三芝居板元」に「名前株持ち主」と記されていることから、直接出版業を営んでいたわけではないらしい。そしてもう一人の相版元である富士屋小十郎については、「式亭雜記」（式亭三馬著）の文化八年四月五日の記事に

ふきや町ふじ屋小十郎 めりやす長うた本のはんもとなり²⁴

とあり、伝本上でも桐座（市村座の控櫓）の正本や多くの後版を単独で出していることが確認できるので、おそらく富士屋が出版実務を担当していたのであろう。とすれば、版元の交代については、座あるいは芝居町の内部者が版元におさまったとの捉え方ができる。天明四年十一月から桐座の版元が富士屋小十郎に代わるが、桐座の関係者が版元として名を出さないのは控櫓の格であるためで、市村座に対する遠慮があったと推測する。

地本問屋仲間行事による自主検閲の再開は、版元にとってむしろ出版環境の整備を意味する。それにもかかわらず、なぜ芝居内部者への版元の交代が起きているのであろうか。ここで、株板化の起きる寛政期にかけて三座の置かれていた状況に目を転じてみたい。木挽町に立地し集客に問題を抱えていた森田座の場合は、当初から座の経営が安定せず、地代訴訟をすでに度々経験してきている。それに対し、堺町の中村座、葺屋町の市村座は、幾度かの類焼を受けてはいるが、宝暦期末、明和期に所作事がひとつの絶頂期を迎え、安永期に入ってもまだ一応安定した座の存在があった。ところが、天明期に入ると市村座

は経営に破綻を来しはしめる。その原因ともなる両座の火災の記録を天明寛政期にたどると、以下のようになる。

安永十年（一七八一） 正月九日、新材木町より出火、両座焼失（十年目）。

天明三年（一七八三） 十月二十七日、小伝馬町二丁目より出火。両座類焼（三年目）。

天明六年（一七八六） 正月二十二日、湯島天神前より出火。中村座（四年目）桐座類焼。

しかもこの年は長雨により秋に大洪水がおきている。

寛政五年（一七九三） 十月二十五日、湯島雲州侯奥より出火、両座類焼²⁵。

この間、天明二年（一七八二）と四年（一七八四）に市村座では地代訴訟が起きており、天明二年にはかろうじて示談が調う。だが、天明四年の場合には『安永撰要類集』によると、その額は「是迄之地代金千九百四拾兩余滞有之迷惑仕候」とあり、吟味の末、市村座は休座を申し付けられている。これについて葺屋町茶屋共拾人・煮売茶屋廿七人他から、左記のとおり芝居興行存続の嘆願が出ている。

町内茶屋其外芝居懸之者共諸商人裏之輕キ者共迄家業無御座今日を送り兼難儀至極仕候（桐）長桐名題二而仮芝居為仕一同渡世為致度旨當六月中願出候二付追々吟味仕候處大借之羽左衛門儀ニ御座候故迎も芝居出来不仕

そして、これが認められたため、その明地（空き地）は五カ年の約定で桐座の仮興行の場となるのである。しかし、注目したいのは、その次の以下の文言である。

是迄類焼之度と並狂言相休候節共二追と金五百五拾兩余町内より合力いたし段々合力致尽候上之儀ニ御座候間何卒長桐名題二而葺屋町仮芝居申付候様相願候旨申之候²⁶

市村座が類焼を受け芝居興行を休む事態になると、芝居町関係者はお金を出し合って援助してきており、その高が五百五十兩以上になると記されている。これによって、芝居興行を存続させるために芝居町ぐるみで資金の補填を行ってきたことが知れる。この天明四年の休座については、津村淙庵の見分随録である『譚海』巻の四にも「古来より羽左衛門借金十六萬四千四百兩に及といへり」とあり、桐座仮興行についても以下のように言及している。

ふきや町芝居休み困窮に及び、家主某世話にて金子をこしらへ、桐長桐座をはじめたる故、又ふきや町にぎはへり。天明四年七月中より普請はじまり、廿日の内に出来、やぐらをあげ興行に及ぶ。毎日家主立合世話致し、芝居失墜格別に減少し、山師の類一切懸り合に致さざるゆへ繁昌す²⁷（傍線筆者）

すなわち、芝居興行の存続をかけて座の頭取・役者ばかりでなく、家

主や芝居茶屋など芝居掛かりの者たちが金策や座の運営に深く関わって状況を打開しようとしていたことが窺われる。そして先に述べたように、この桐座仮興行に際してとられた方策の一つが、芝居町内部者への版元の交代と株板化であったと推測されるのである²⁸。さらに推し量れば、こうした動きに隣の芝居町である堺町も無関心でいられるはずはなかったであろう。

家主や座の後見者・芝居茶屋総代が長唄正本の版元に入っているのは、おそらく債権の代表者という立場に拠るのではないだろうか。そして、その背景には長唄正本が観劇用パンフレットから稽古本へと、再版性の高い出版商品に成長してきたことがあり、その出版益を座や芝居茶屋など芝居町内部に取り込む方策がとられたと推測されるのである。夥しい数の後版や再版本が、今日に残っていることは、稽古本に対する当時の需要の多さを示しているよう。

寛政五年（一七九三）には、中村座と市村座の両座に地代金の滞りによる地立出入が起きて地所明け渡しと決まり、中村座は十月に都座へ、市村座は十一月に再び桐座へ、それぞれ五カ年の約定で興行権が移る。この時に町奉行へ出された中村座の地立願いの伺書には、当時中村座には地代金の滞りが佐兵衛方に三千百六十余両、吉五郎方に六百四十六両余、ほかに大借金を抱えているとあり、中村座も同様の逼迫した状況にあったことがわかる。

しかしそうした経営努力の甲斐もなく、名題役者の取り合いによる給金のつり上げ、数度の類焼による普請代、資金不足からくる内部紛争は不当たり続きへとつながって、ついに自力での立て直しは叶わず、

寛政六年（一七九四）十月には「三芝居狂言座取締方議定証文」の提出により、役者の給金の上限が引き下げられ、座組は三座申し合わせの上で決めることとなり、互いに役者を高給金で囲い込まないよう助勤させるなど、様々な再建策が取り決められるのである。

七 天保期の芝居町移転後

寛政九年（一七九七年）、都座から中村座に興行権が戻ってから、180頁表6に見るように、長唄正本の版元も沢村屋利兵衛に定まっており、変化物の流行や豊後系浄瑠璃との掛合によって再び所作事が流行するが、享和・文化・文政期とそれ以降も版行上の目立った変化は起きていない（都合上、表6への掲載は文化年間までとしている）。ただ、水野忠邦の天保の改革による引き締め政策に関連した、次の二つの事柄を挙げておきたい。

天保十二年（一八四一）十月七日に中村座より出火し、堺町・葺屋町の芝居町が焼失し、十二月には市中風俗改めの趣により、堺町・葺屋町両座と操芝居、そのほかこれに携わる町家が浅草聖天町に（後猿若町に変更）移転を命じられる。これと対応して、伝本の上でも、天保十三年（一八四二）十月上演の『花童露草刈』から沢村屋利兵衛の住所が「さるわか町老丁目」になっている。しかし、嘉永二年（一八四九）九月上演の「めりやす尾花の露」からは住所が再び「さかい町」に戻る。

また、天保十二年十二月には、天保の改革の一環として株仲間解散令が発せられる。だが、株仲間廃止の結果が好ましくなかったため、幕府は嘉永四年（一八五一）に問屋組合の再興を図っている。『諸問屋名前帳』（国立国会図書館蔵）には、それ以降の本組みと仮組の間屋名と住所などが記載されているが、その「地本双紙問屋」仮組のところに、

中村座の版元として、

沢村屋利兵衛（猿若町一丁目家主）

村山源兵衛（安政二年八月加入、室町二丁目家主）

市村座の版元として、

山本重五郎（文久元年六月加入、猿若町二丁目惣左衛門地借）

森田座・河原崎座の版元として、

小川屋半助（嘉永六年十二月加入、御所町茂八店）

の名が挙がつており、嘉永四年問屋組合の再興後に新規加入していることがわかる。これにより、本組の仲間規定に加わったと見られる。なお、本組みには「後版」表の版元のうち、山本屋平吉、伊賀屋勘右衛門、萬屋重三郎の名が記載されている。

猿若町に移転してからは集客に問題を抱え、三座は幕末から経営不振に陥り弱体化していく。長唄正本も、沢村屋利兵衛版は丸屋鉄次郎に求版されて出ることが多くなる。

しかしそれと同時期に、「杵屋蔵板」・「芳村蔵板」といった長唄演奏者の蔵版本が現われ始める。例として、下に『松竹梅』正本の表紙と本文を掲げる。

『唄浄瑠璃 松竹梅』表紙と本文初丁表（始めの四行部分）

丸屋鉄次郎版 杵屋治郷蔵版 明治大学図書館蔵本



松竹梅
まぼろしの愛女余年とある
須磨の内裡も仇波の義理も
八月の夜ふくぬ後さうな
なむとておもひおもひと

これは、明治元年（一八六八）九月に中村座・守田座の合併興行「音揃両勘大寄」の第一番目四立目に上演された作品で、外題には唄浄瑠璃と角書きが付くが、大薩摩との掛けによる長唄曲である。表紙右下の枠外に「通二丁目 丸屋鉄次郎板」とあるが、左側の外題下に「杵屋治郷 蔵板」と記載されている。本文の内題下に「十二代目杵屋六左衛門作」とあるため、「治郷」は三味線方の巻軸として正本の連名に記載される十二代目六左衛門の俳名と推測できる。長唄の作詞・作曲者が蔵版し、丸屋鉄次郎を支配人として版行されていると見られる。これは、仲間外素人が版木を所有する方法である。

このほか、三味線方の二代目杵屋勝三郎が蔵版者となり長唄正本を版行する例も存在する。

『大和の手向五字』文政六年三月森田座上演

「杵屋勝三郎蔵板」

『吾住森野辺乱菊』奥書「文久元辛酉年喜久月狂言」

「杵勝板」

『深山桜及兼樹振』明治二十一年再版本

「二代目杵屋勝三郎蔵」、丸屋鉄次郎を支配人とする。

『柱建子手柏』字表紙本、明治六年再版本

「杵屋蔵版」

『紫』（安政五年）、『しのび車』（安政五年）、『箱根の富士笠』（安政六年刊記）、『春の友』（元治元年刊記）などにも「杵屋板」とあるため、勝三郎の蔵版本と見なして良いであろう。

また、『歳旦 梅乃榮』は新年の祝儀曲として作られた曲であるが、

奥書に「明治三庚午年正月 伊勢町岡安〇蔵板」とあり、これは蔵版者が唄方であると見られる。歳旦物であるから、歌舞伎上演作品ではない。

『元禄花見おどり』は明治十一年新富座の開場式に初演された長唄曲で、作詞は竹柴瓢助。「銀座芳村板行」と巻末にあるので、これも蔵版者が唄方の可能性がある。

『楠公』の奥書にも「明治三十五寅年三月吉日 植木店 杵屋版」とあり、ここにすべてを掲出しないが、各派で唄方や三味線方が蔵版者となり、長唄の簿物を版行し始めていることがわかるであろう。

明治二十年（一八八七）十二月には版權条例に伴い、脚本楽譜条例も制定され、脚本・楽譜も版權保護の対象となる。著作権法の整備に向けた出版令を先取りする動きが、長唄の唄方・三味線方の蔵版によってすでに始まっているのである。

このように長唄演奏者の手に版權が渡ると、長唄正本が有していた稽古本の面がさらに助長され、記譜法が発達していく。三味線の音曲は勘所を押さえることによって得られる音高をひとつのたよりとして習得するものである。だが、その勘所を記譜して用いる方法が、伝統的な教授の上で主流になることはなかったのである。長唄各派の演奏者は、明治期の洋楽の導入によって知った洋楽の楽譜に触発され、各流派では自派の持ち曲に対し、記譜の試行錯誤を重ねるようになる。杵屋六左衛門派においても、長唄を五線譜化した楽譜が版行されている。そして、勘所を用いた伝統的な教授方法と洋楽の記譜法を融合させる近代化の過程を経て、今日、長唄の譜本は、研精会譜（相対音高

譜」と、杵家会の赤譜（勘所譜）に大別され普及している。

今日の稽古を目的とする長唄譜は、直接的には幕末期に座が衰退することによって現れた長唄演奏者による蔵版本に端を発していると言つてよい。しかし、その前に、寛政初期に起きた長唄正本の株板化、すなわち、版權の確立によって、出版の態勢が整い、これが記譜という特殊な付加価値の付いた稽古本の展開を用意することになった事実を見過ごしてはならない。

長唄正本の株板化し、演奏者による蔵版本が出現した背景には、長唄の稽古本の購買層が広がり、実技を伴つて質的に深く長唄を、ひいては三味線の音曲を享受しようとする層が定着していることを表している。掛合物などは、長唄や常磐津などの繊細違いを聞き分けられることが一つの前提となつて成立する演目である。これは、長唄をめぐつて、ひとつの音楽文化が成熟した受容の段階に入っていることを示している。寛政期に起きた長唄正本の株板化は、その礎になっていると言えよう。

まとめ

中村座上演の長唄正本についてその版行上の変化をたどり、寛政期に起きる株板化の問題を中心に検討を加えてきた。

江戸の出版業界では、京都・大坂の outlet に始まった経緯もあり、重版・類版の規制が緩い特有の商慣習が形成されてきた。そのような中

で、江戸歌舞伎は、草紙（地本）の世界に江戸根生いの文化的価値を創り出す一つの源となつてきたのである。ゆえに、歌舞伎がその時代の空気を先取りし観衆の支持を得るほどに、それは江戸の草紙（地本）の充実へとつながつていったに違いない。

長唄正本は享保期に版行が始まり、その後も体裁を変えることなく明治期まで版行され続けている。長唄正本は、それ自体が舌禍事件や奢侈取締の対象になることはなかった。けれども、そこには地本界のその時々々の趣向が反映されているように思われる。重版・類版のあり様、出版者の版權確立の過程等々は検討してきたとおりである。

歌舞伎は役者至上主義のエンターテインメントを追求するあまり、天明期から深刻な経営難に陥る。そのとき、芝居町内部での経営に対する合理化の動きと、地本問屋仲間の再興という地本界の趣向とが相まって、長唄正本の株板化は起きたと考えられよう。

1 長唄正本における板株化の視点は、佐藤悟氏「地本論」（『読本研究新集』第一集 翰林書房、一九九八年）においてすでに指摘されている。

2 江戸時代においては、儒書・仏書・神書・医書・漢籍・古典・歌書などの堅い内容の「物之本」と、娯楽的庶民的内容の「草紙類」は分けられていた。物の本は物の本屋（江戸では書物問屋）が扱い、仲間を結成した。これに対し草紙類は草紙問屋・絵草紙問屋が扱った。

3 蒔田稻城『京阪書籍商史』（出版タイムス社、一九二八年）、稻

岡勝「蔵版、偽版、版權——著作権前史の研究」(東京都立中央図書館研究紀要 第二十二号、一九九二年)、朝倉治彦・大和博幸解説(『享保以降江戸出版書目(新訂版)』臨川書店、一九九三年)、藤実久美子「武鑑の出版と書物師出雲寺」(『江戸文学 江戸の出版Ⅱ』第十六号(べりかん社、一九九六年))、『日本古典書誌学辞典』本屋仲間の項(岩波書店、一九九九年)などを参考とした。

4 江戸出来の草紙類、絵本・草双紙・江戸浄瑠璃本・芝居音曲本・浮世絵等は地本と呼ばれ、これらは江戸の地本問屋が出版・販売に携わった。

5 江戸の地本問屋が版行する義太夫大字五行・六行の段抜床本(抜本)が、大坂方の所持する義太夫丸本株の重版・類版にあたり差障るとして、天保三年九月に、大坂の書物問屋紙屋与右衛門と糸屋七五郎から大坂本屋仲間年行事の手紙を添えて、江戸の書物問屋行事須原屋源助に申し出があった。三河屋喜兵衛・蔦屋重三郎ら江戸の抜本に携わってきた地本問屋五人は、この申し出を不服とし示談に応じず、先手を打って、天保三年十月二十九日に須原屋源助を相手取り町奉行所へ出訴した。一方、紙屋与兵衛ら大坂の書物問屋とこれに与する江戸の書物問屋三組行事側も、十二月に三河屋喜兵衛・蔦屋重三郎らを相手取り寺社奉行に出訴したため、天保四年二月九日に町奉行所へ引き渡しとなって争われた。江戸の抜本版元側・江戸書物問屋行事側・大坂丸本株所持者(大坂書物問屋)側の各訴訟記録からなる。鈴木俊幸「江戸板義太夫本訴訟始末(上)」(『中央大学文学部紀要』第八三号、一九九九年)を参考とした。

6 山根為雄氏解題校注「義太夫本公訴一件」(『日本庶民文化史料集成』第七卷人形浄瑠璃 三一書房、一九八三年)。

7 三升屋二三治「作者年中行事」参之卷(『日本庶民文化史料集成』第六卷歌舞伎 三一書房、一九七九年)。

8 芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成』第六卷歌舞伎(三一書房、一九七九年)。

9 長唄原本集成刊行会編『長唄原本集成』卷一〜十四(長唄原本集成刊行会、一九三六年〜一九三九年)。

10 「相生獅子」を本論文の図版に選んだ理由は、座の専属版元の形成と、それにとりまう偽版の出現、多数の後版の存在など、表1の版行の構図を説明するためには伝本が揃っているからである。だが、「相生獅子」の上演は明和六年だけではない。

中村座 享保十九年一月 十八公今様曾我 第三番目 いがや版

中村座 明和六年二月 曾我模様愛護若松 第二番目 村山源兵衛版

市村座 安永八年四月 蝶千鳥若栄曾我 第二番目大詰 泉屋権四郎版

市村座 寛政元年三月 恋こいのよすが 便仮名書曾我 第二番目 市村茂兵衛・

と、四種の「相生獅子」の長唄正本が伝存している。それぞれ大名題や演奏者は異なるが、本文は寛政元年の正本に増補部分が加わるものの、ほかの正本はほぼ同じである。瀬川菊之丞が家の芸として相生獅子を、代替わりで演じることが眼目となって版行されたものである。明和六年以降の三種の正本が再版の扱いになっていないことに、長唄正本の劇場出版物としての特殊性があらわれている。また、明和六

年上演のものだけに、異版が多く存在するのである。本稿では明和六年上演の村山版と、「曾我模様愛護の若松」の大名題をもつ異版の關係をとりあげていく。

11 『御触書寛保集成』三十五(二〇二〇)(岩波書店、一九六〇年)の享保七寅年(一七二二)十一月「新板書物取締之事」五か条の第四に

一、何書物ニよらず此以後新板之物、作者并板元之実名、奥書ニ為致可申候事、

とあることによる。ただし、まだ地本を対象とした触れではない。

12 河東節は江戸浄瑠璃であるが、その祖十寸見河東は長唄に先行して享保初期から歌舞伎に出勤している。小松屋が正本版元である。しかし、いがや・奥村屋・井筒屋・近江屋なども河東節の音曲本を手がけており、その中には小松屋の本文を版下に流用した版がすでに伝存する。小松屋では正本の表紙に、「河東直伝之正本ハ／小松よりほかに無之候所ニ／此ころるいはん相ミへ申候／河東／正めいの／本にハ此如の判形ヲ致／令板行者也能と御吟／味被御求可被下候」と載せて偽版の存在を明言し、対抗措置として太夫の印章(判形)を入れ差別化を図っている。拙稿「河東節正本の版行に関する一考察―江戸歌舞伎における初期の音曲正本と位置付けて―」(『北海道東海大学紀要 人文社会科学系』第十九号、二〇〇六年)参照。

長唄正本においては、このような偽版の存在を示す文言は見つからない。宝暦六年(一七五六)三月市村座上演のせりふ正本の奥書に「浄るり／せりふ／長うた／市村座はんもと／右之外狂言などいづ

け。やぐら下。一まいすりのゑ外方一切出シ不申候」とあるのが唯一の例である。この違いは、浄瑠璃太夫が座元や家元であることに対し、長唄の演奏者は座に属して、長唄正本は芝居座元の権限が反映した出版物となっていることによると考えられる。歌舞伎の座元側では宣伝の益をとって、偽版の存在にはこの時期鷹揚であったと推測される。

13 前掲注7「義太夫本公訴一件」。

14 松本隆信氏「画入読本外題作者画工書肆名目集」(『国文学論叢 第一輯 西鶴 研究と資料』至文堂、一九五七)。

15 長唄正本は際物であったため、所作事が当たった場合には、直ちに村山は初刷りを板下にとり、同じ彫師の手になる板木を別に作って部数を増やす方法をとったと考えられる。というのは、同版に見えながら、墨刷り部分の木目の異なる版が存在するからである。また、翌興行へロングランを続けた場合には、再印もあつたであろう。

16 原本が大阪府立大学の椿亭文庫にあり、その奥書に「于時天明七未三月廿三日／正名板元 大坂道頓堀 敦賀屋吉右衛門／同江都堺町 沢村庄五郎」とあることを確認している。

17 森銑三氏ほか監修『新燕石十種』第五卷(中央公論社、一九八一年)。

18 国立劇場芸能調査室編『歌舞伎選書6 東都劇場沿革誌料』上(国立劇場芸能調査室、一九八三年)。

19 「賀久屋寿々免」(『日本庶民文化史料集成』第六巻歌舞伎『三書房、一九七九年』)。

20 市村座の長唄正本『所作 男舞楓顔色』(『白旗世界樹全鏡 第

一番目三立目」天保九年六月上演)の奥書に「ふきや町 山本重五郎蔵板」とある。また、森田座の長唄正本『めりやす 時雨の紅葉』の奥書に「安政三丙辰年顔見世狂言／はんもと小川半助蔵板」とある。いずれも早稲田大学演劇博物館安田文庫旧蔵本である。

21 後版表に掲げた各版については、伝本の数が非常に多いため、所蔵場所と架蔵番号を本論文には載せていない。

22 前掲注1、拙稿「江戸版長唄正本にみる版行形態の変化―享保く寛政期にいたる市村座の場合―」(東海大学国際文化学部紀要 第二号、二〇一〇年)の表1による。

23 沢村宗十郎は、天明く寛政期に中村座に属しており、寛政六年十月に都座仮興行となる際には座頭をつとめている。

24 『続燕石十種』一(廣谷国書刊行会、一九二七年)。

25 「江戸三座焼失一覧表」(西山松之助編『江戸町人の研究』第五卷、第三章「江戸三座と遊郭の炎上」所収、吉川弘文館、一九七八年)、『東都劇場沿革誌料』(前掲注17)寛政五年の項による。

26 『安永撰要類集』二十八 三芝居之部(国立国会図書館)。

27 津村淙庵著「譚海」巻の四(『日本庶民生活史料集成』第八卷所収 三一書房、一九八五年)。

28 さらに補足すれば、森田座においては宝暦十四年(一七六四)から勘定方をつとめる金井半兵衛が長唄正本の版元に入り、上村吉衛門(江見屋・錦絵の見当の考案版元)と相版を組むかたちをとる。しかしまだ再版は手がけておらず。再版を行うようになるのは寛政三年(一七九一)に河原崎座へ興行権が移り、版元が小川半助へ交代して

からになる。

29 国立国会図書館編『旧幕引継書目録 諸問屋名前帳』(湖北社、一九七八年)。

終章

本論文各章のまとめと総括

ここでもう一度、本研究で論じてきた内容について、振り返ってみたいと思う。

薄物の形態をとる長唄本は、『長唄原本集成』（木村捨三他編、長唄原本集成刊行会、一九三六―一九三七年）や『歌舞伎図説』（守随憲治編、万葉閣、一九三一年）などにおいて、すでに主要な版が複製され、また図版掲載されてきている。だが、各所蔵機関で筆者が実際に伝本の調査を進めて見ると、長唄の薄物はもつといろいろな版元が版行しており、各作品で異版も非常に多く存在することがわかった。しかし、従来の複製書や研究書ではそうした異版の存在に触れることは殆どなく、長唄の薄物の全容を調査した上での本研究は行われていなかったと言える。

夥しい異版の中に、初版本を選び出すには、どれが上演時正本なのか、その根拠を明らかにする必要があった。ゆえに、長唄の薄物では正本と異版群がどのような仕組みで版行されているのか、この問題にまず取り組んだのである。

第一章では、長唄の薄物の伝本調査により得られた書誌データを、江戸の三座、すなわち中村座・市村座・森田座（それぞれ控櫓を含む）に分けてまとめている。初版本については、『賀久屋寿々免』や三升屋二三治の著書の中に三座の専属版元を挙げ、扱う劇場出版物（番付

やせりふ正本・音曲正本など）を示した項があることから、これを伝本と照らし合わせて検証した。それらの演劇書の中では、中村座は村山源兵衛から沢村屋利兵衛に、市村座は泉屋権四郎から福地茂兵衛・山本重五郎へ、森田座では金井半兵衛から小川半助へと、長唄正本の版元が代わっていくことが記されており、これは伝本の状況とほぼ一致するが、伝本によって版元の交代の時期も特定することができた。膨大な伝本の中から座の専属版元による版を求め、それらを上演年順に並べて表にあらわしたため、そこから読み取れたのである。表は168頁以降に載せている。

表は、長唄の薄物を版元別に（版元名の無い版を含む）整理したものである。専属版元の正本を上段に掲げ、その下に専属以外の版元（版元名の無い版を含む）を配置する。しかし、紙幅の都合上、すべての版元を載せることはできなかった。したがって、本論文の表では版権の確立過程を捉えることを目的として掲出内容を選んでいる。

正本のほかに、異版の中からは本屋儀兵衛版と無刊記版を選び表に掲出している。その理由は、本屋儀兵衛版と無刊記版には正本に酷似する版が存在し、正本に特に近い関係にあると見なされるからである。この二つの版を糸口とし正本との関係を捉えることによって、他の異版の位置付けも明らかになると考えたからである。

その結果、得られた版行上の特徴として、重複する点もあるが次のことが挙げられる。

- (1) 新作の長唄正本は、当初は役者絵や番付を扱う三々四軒ほどの版元から出されていたが、中村座と森田座では宝暦十二年（一

七六二)頃、市村座ではより早く享保十九年(一七三四)頃から、座と専属関係を結ぶ版元が形成され、上演時の版行を独占するようになる。この専属版元は、正本の奥書に「中村座板元」

「市村座板元」「森田座板元」として表記されている。

(2)座の専属版元が形成され、上演時に正本を版行する権利を持つようになる、その正本を版下に用い被彫りして作成したと見られる版も多く出回っている。そうした版は本屋儀兵衛版か無刊記版に限られるのだが、本屋儀兵衛は正本の版元と相版を組んでおらず、無刊記版も版元名を載せていないのであるから、それらは無断版行物であると考えられよう。それらは、正本が出た直後に作られ、観劇時の需要に便乗して売られたと推測される。

(3)座の専属版元は重版が継続的に出回ることにより、大きな損失を受けているはずなのであるが、重版の版行を差し止める手段がないと見えて本屋儀兵衛版と無刊記版は安永中期まで継続して出ている。

長唄正本は整版(木版)の技法で作られており、丁数も三丁五丁程度であるため、これを版下に用いて彫れば複製本は安易に作り出せるのである。その際に、元版の版元名部分や奥書は当然削除される。だが、長唄正本は座側から提供される上演情報や絵や詞章など、様々な要素で構成されているため、それらの内容が本屋儀兵衛版・無刊記版ではどのように扱われているのか調べて見た。すると、音曲正本にとって重要な要素である

胡麻点や節付けが本屋儀兵衛と無刊記版において削除される例はほとんど見られず、絵師名や筆耕者の印は除かれる傾向があった。長唄の薄物は音曲本でありながら、音曲担当者の権限があまり反映されない出版物であることを示している。これは、長唄の唄方や三味線方が座に属するからであろう。

長唄正本に強く反映しているのは、やはり座元の権限である。これは座名の表記に最も顕著に現れていると言えよう。本屋儀兵衛版や無刊記版には、座名を削除したり、あるいは「座」の文字を除いて「中村」「市村」「森田」と表記する例が多く見つか。これは、おそらく無断版行に際して、公許の興行権者である座元に対し憚があったためと推測される。正本の版面が流用されることで、専属版元の権利は侵害されているのだが、座元への遠慮というかたちで正本と不正出版物の間に差別化が図られている。また正本版元の側も「中村座板元」「市村座板元」「森田座板元」と奥書に入れることで、内容の正当性を主張している。版権のまだ確立していない時代の芝居本の出版事情を表す例となろう。

(4)中村座の長唄正本では、安永六年(一七七七)の顔見世興行から座の専属版元が本屋儀兵衛と相版を組むようになる。ようやく重版に対する対策がとれるようになったと見られる。市村座の版元泉屋権四郎は相版を行ってはいない。森田座の場合は、金井半兵衛が宝暦十四年(一七六四)から版元になり、伊勢屋や江見屋と相版を組んで長唄正本を版行するが、安永七年(一

七七八)頃には相版先を本屋儀兵衛に変えているが、これらの相版先は重版対策というより出版業務を引き受ける支配人と推測する。森田座では、他座より早い段階に長唄正本の版行の権利(株)を取得して座の内部者を版元になっている点に、先駆的な面がある。ただ、金井半兵衛は再版本を出してはいない。

(5)その後、天明期、寛政期の三座の正本においては、専属版元の交代が確認できる。中村座では天明七年(一七八七)の正本から沢村庄五郎(沢村屋利兵衛)が専属版元になり、市村座では天明四(一七八四)年の正本から富士屋小十郎が、河原崎座では寛政三年(一七九一)の正本から小川半助が専属版元になる。これらの版元は、三升屋二三治が「三座芝居板元」として挙げる版元に一致する。

これに伴い三座の長唄正本は、専属版元が上演時正本だけではなく、再版・再々版本をも出すかたちに版行態勢が変わる。

版元交代前の長唄正本における専属版元の版行の権利は、基本的に新作の上演時に限られていたと推測される。というのは、専属版元による再版本が残っていないからである。誤刻を訂正した覆刻版が例外的に見つかる程度である。当たった曲を上演時に覆刻して増し刷りすることは、当然あったと考えられる。だが、原版を後にまで所有して、需要を測りながら再版を行う意識はまだなかったと考えられる。それが行われるのは、市村座が最も早く天明期、中村座と森田座は寛政期になってからと見られる。

第一章では書誌データから必要事項を抜き出し、表にあらわすことによって、このように版行上の特徴を捉えたが、これに加えて、表で分類した各伝本の所蔵先を「所蔵一覧」に挙げて目録にしていることも第一章の成果となっている。

第二章では、江戸歌舞伎における長唄の形成論を長唄正本に拠って試みている。その際には、第一章の成果、すなわち、長唄の薄物の伝本をを層網羅的に調査し、それらに資料的吟味を加えて選定した初版本を基にする。この長唄正本を中心的资料に据え、役者評判記や番付類・絵入狂言本・歌謡集などの周辺資料をも用いて、長唄所作事の形成を音曲の面から捉えようとした。

江戸歌舞伎における長唄の成立に関する従来の通説は、『近世邦楽年表』に記載される顔見世番付の記録に基づいて作られてきた。その通説とは、おおよそ次のようなものである。番付上の「江戸長うた」の初見は、宝永元年(一七〇四)江戸山村座の顔見世番付とされる。その頃は、江戸版の番付に記載される唄方の肩書きには「京長うた」「大坂長うた」が混在して、上方下りの唄方も出演していたが、享保十二年(一七二七)以降は、「江戸長うた」で占められるようになる。したがって、長唄の唄方が江戸出身者で占められるこの年を以て江戸長唄の確立と見なす、というのである。一見、明快に長唄の成立を説明しているようであるが、顔見世番付の表記はいったいどの程度実態を現しているのだろうか。

顔見世番付は顔見世興行の座組を表すものと考えられているが、

長唄正本は新作の長唄所作事が出る毎に版行されたものである。その表紙には「長唄 松嶋庄五郎」のように肩書きと演奏者氏名も記載されており、役者絵や詞章は所作の内容を伝えている。したがって、長唄正本の方がより実態を反映する資料と考えられる。

高野辰之は『日本歌謡史』において、顔見世番付の肩書きの地名部分を少し異なるニュアンスで捉えている。高野は「京小うた」「大坂長うた」などは京や大坂での当たり作品を、唄方共々江戸歌舞伎で用いていることを指すと捉えている。とすると、それが「江戸長唄」の肩書きで占められるということは、江戸の歌舞伎は自前で所作事の唄をまかなえるようになったと言うのであろうか。

そこで筆者は従来の顔見世番付の肩書きに拠って作られている長唄の確立論（通説）を、長唄正本によって内容の面を考慮しながら照らし合わせてみた。

現在のところ、長唄正本の最古は享保十六年（一七三一）上演の『傾城無間の鐘』と『無間の鐘新道成寺（傾城道成寺とも言う）』であり、その表紙には「長唄 坂田兵四郎」と記載されている。これらの正本を始め寛延期までの初期の長唄正本について唄方を調べてみると、そのほとんどが坂田兵四郎か、あるいは、坂田兵四郎と松嶋庄五郎の競演で占められていた。特に三座の長唄正本は坂田兵四郎に始まっていることから見ても、長唄正本は坂田兵四郎によって創刊されたと言っても過言ではない状態にある。長唄正本の表紙にはその所作事（舞踊）を演じる役者名と、その舞台面での絵が表紙に描かれており、所作事の正本である面も備えているが、初期の長唄正本には特に音曲本の意

識がより強く反映されているように思われる。というのは、初期の正本の奥書には「右は坂田兵四郎直傳を以令板行候」という文言が入っているからである。こうした奥書は浄瑠璃正本に備わるもので、太夫の詞章や節付けを正當に伝える本であることを保証する極め書と呼ばれる。初期の長唄正本は浄瑠璃正本の様式にならった奥書を入れることで、坂田兵四郎の唄方としての存在を強く打ち出している。

先に掲げた「無間の鐘」と「無間の鐘新道成寺」は、初代瀬川菊之丞が享保十五年（一七三〇）の顔見世興行から江戸に下り、翌年二月に演じた作品である。坂田兵四郎も菊之丞と共に享保十五年に江戸中村座へ下ったと推測される。だが、この「無間の鐘」は、初演が享保十三年（一七二八）の市山助五郎座で、この時すでに菊之丞が所作を演じて当たりを取っている。これを江戸で再演したところ、大ヒットし五月までロングラン興行しているのである。したがって江戸で坂田兵四郎が歌った長唄「無間の鐘」は、すでに菊之丞の所作に付いていたもの、あるいはこれを多少改作したものであったと推測されるのである。

坂田兵四郎は、上方の演劇書の中には小歌方として記載される例が多く、またこの時期の京の顔見世番付は小歌方が大勢を占めていることをも考え合わせると、京では小歌方であったと判断できる。ゆえに、江戸で上演された「無間の鐘」も実質的には上方の小歌か、あるいは、上方の小歌色の強いものであったと推測される。

よって、寛延期まで上演作品について長唄正本から、所作事の演目と役者を調べたところ、長唄正本として江戸で版行されている作品は、

そのほとんどが上方下りの役者の当たり芸の再演であり、唄方は坂田兵四郎が勤めているのである。上方から移入された当たり芸の所作事には、すでに上方の小歌が付いていたと考えられ、これを江戸で上演する際にはやや手を加えたりして、長唄正本として版行した可能性が考えられる。これは、先の通説が言う、「享保十二年以降の顔見世番付では長唄方は「江戸」の肩書きを持つ江戸出身者で占められるようになり、これをもって江戸長唄の確立とみなす」という内容と実態的にかなり違っていると言える。長唄正本から見ると、この時期の江戸の長唄所作事はまだ上方芸の移植段階にあったと考えらる。顔見世番付で享保十二年から長唄の唄方が「江戸」と冠する表記に統一されることには、むしろ長唄所作事を江戸歌舞伎の重要な場に仕立ていこうとする座の方針が読み取れるのである。

元禄歌舞伎の時代において、江戸は荒事を好む風があり、薩摩外記・浄瑠璃や土佐節・浄瑠璃が好まれる傾向にあった。しかし、享保期に入ると、江戸にも上方の和事を受け入れる土壌が育ちつつあった。そして、上方の和事芸は主に若女方の芸によって江戸に持ち込まれていたのである。上方版絵入狂言本に載る音曲詞章を調べて見ると、特に傾城事や怨霊事などに上方の小歌が付いていたことがわかる。

上方から唄方が多く江戸に下ってきていたことは、顔見世番付が示している通りである。だが、中村座が所作事の達人である瀬川菊之丞と小歌方を呼び、長唄正本を創刊する企画を組めたのは坂田兵四郎であったからだと考えられる。坂田兵四郎は、江戸の歌舞伎界と観客に上方の小歌、延いては和事芸を受け入れさせ、根付かせるだけの十分

な力量と背景を持ち合わせていた。それは、上方元禄歌舞伎の名優坂田藤十郎の甥としてその威光を備え、義子として和事芸を継承してきた人物であったからである。

中村座は江戸の観客の和事に対する嗜好を察知しており、坂田兵四郎を呼んで、享保初期にはすでに判式の定まっていたせりふ正本・浄瑠璃正本と同じ体裁で長唄正本を版行することにした。これは、人気役者のせりふ、浄瑠璃太夫の出語りとともに、坂田兵四郎という唄方のスターの存在によって、これらが江戸歌舞伎の見せ場となったことを表している。そして、それ以降、長唄正本は明治期に至るまで版行され続けるのであるが、これは江戸歌舞伎において長唄所作事が重要な演目となって定着したことを示している。坂田兵四郎は江戸における長唄所作事の反映の起点に位置する人物と筆者は考え、よってこれを長唄の形成期と捉えるのである。

さらに、筆者は長唄正本を版行するアイデアもまた、上方の小歌と共に上方から入ってきたのではないかと考える。上方版の絵入狂言本に記載される音曲詞章を抜き出し表にあらわして見たところ、小歌・歌の詞章を版行する伝統は江戸ではなく上方にあることが明らかにあった。

しかし、小歌には見過ごすことのできない二面性があった。小歌は顔見世番付では「小歌方」と記載され唄方の役割であるのに、絵入狂言本・役者評判記・歌謡集などにおいて小歌は役者の芸として登場してくることが圧倒的に多いのである。これは、歌舞伎において小歌が主流の時代にあつては、役者と唄方の役割がまだ未分化の状態にあつ

たことを示している。

江戸に小歌が移植され、享保後期に長唄正本として版行され出すと、小歌の役者が歌う側面はどのようなものになったであろうか。

長唄正本が江戸で版行され始める享保十六（一七三一）年以降、江戸では長唄正本と並行して、「役者の歌う正本」も数は少ないが版行されていることが薄物の中に確認できた。それらを「役者の歌う正本」名付けて伝本のリストを作成し、長唄正本との記載内容の比較を行った。すると、「役者の歌う正本」には長唄の表記が見られず、よって、長唄正本が江戸で版行される頃には長唄は唄方の専門芸になり、役者と唄方は分化が促されたとの結論を導き出した。

役者と唄方の役割の分離は、双方の芸に技術的な深まりをもたらし、所作事作品は次第に複雑となり長大化していった。そして、変化物のような、複数の役柄の踊り分けのおもしろさに、長唄、常磐津・富本・清元節浄瑠璃などの音曲ジャンルの対比の妙を加えた作品も生まれ、さらに、より音曲面の対比を全面に出す掛合物のような作品も企画されるようになっていく。これには稽古本目的の薄物が広まり、三味線による音曲の伝習が進み、長唄や常磐津など各ジャンルの繊細な違いを聞き分け享受する層の存在が前提となる。

坂田兵四郎の江戸下りは、江戸歌舞伎において長唄所作事が形成される上での一つの起点となっており、また、後には長唄のみならず所作事全体の繁栄をもたらしたと筆者は位置付ける。

このように長唄正本を用いることにより、長唄の形成についていくつかの私見を加えられた。また、小歌の上演時正本についても調査を

行つて、天理図書館所蔵の一枚摺を上方版小歌正本として提示したことも第二章の成果としたい。

第三章では、第一章の書誌的データから得られた三座の長唄の薄物の版行上の特徴を出版研究へと展開させた。

先行研究には、近年では、吉野雪子「長唄正本とその板元の動向についての一考察」（一九八九年）や「長唄正本とその版元」（二〇〇五年）がある。これらの研究成果を踏まえて、筆者も独自に伝本の調査を行ってきた。筆者の場合は長唄の薄物を江戸の草紙（地本）の一品目と捉える立場から、版権の確立過程を説明しようとする点に違いがある。

先にも述べてきたが、長唄正本の特徴の一つは、異版の多いことである。この異版の存在によつて、当時の偽版の実態や版権のあり方を具体的に捉えることができるのである。長唄正本の伝本は、享保十六年（一七三一）の上演作品を最古として、明治期まで継続して版行されていることに資料的強みがあり、このような資料群は他の地本ジャンルには存在しない。特に中村座の長唄正本においては、寛政期以降の版に刊年と「蔵板」「再版」などの記載が備わっており、他の二座よりも版権の確立する過程を顕著に捉えることができる。したがって、第三章では中村座を事例に取つて、その版権の確立する過程について考察した。

中村座の場合でその過程を示すと、以下ようになる。中村座の長唄正本は当初、三箇所程度の版元から出ているが、宝暦十二年（一七

六二)頃から座の専属版元として村山源兵衛がその版行を独占するようになる。一方、これと並行して偽版(本屋儀兵衛版と無刊記版を指す)も版行されたりするのだが、村山は安永六年(一七七七)十一月からこの偽版の版元と相版を組むようになる。さらに、天明七年(一七八七)からは座の専属版元が沢村屋利兵衛に代わり、寛政元年(一七八九)の作品から「沢村蔵板」と刻して、上演時の初版だけではなく、再版をも出すかたちに版行形態が変化する。そして、沢村屋以外の版元が版行を手がける場合には、沢村屋との相版のかたちが取られ、沢村屋の原版所有に対する権利は守られていると見なされ、株板化したと認められる。

同様の書誌的データに基づき、桐座(市村座の控櫓)では天明四年(一七八四)の作品から、河原崎座(森田座の控櫓)では寛政四年(一七九二)の作品から、長唄正本の株板化が認められた。

近世における版權を表すことばに、「株板(板株)」がある。この「株板」とは、板木(自前で作った場合、譲り請けた場合、摩滅・焼失などによって現存しない場合もある)に付随する、その板木を用いて独占的に出版・販売を行う権利と捉えてよいであろう。そして、株板の独占的権利を保証するために、仲間の結成とその公認が必要であったと考えられる。

『義太夫本公訴一件』は、江戸の地本問屋が版行する義太夫抜本が、大坂方の丸本株所持者から重版にあたるとして訴えられた件を記録したものである。江戸の義太夫抜本の版元は、長唄についても稽古本目的の版(本論文の第三章では後版と呼んでいるもの)を版行している

場合が多い。また、『義太夫本公訴一件』には歌舞伎の音曲本の版行上の慣例についても触れているため、それらの記述を参考にした。それによると、義太夫抜本に限らず、長唄本や常盤津・富本・清元・新内本などの芝居の音曲本は、寛政二年(一七九〇)に導入された地本問屋仲間の行事の新版改めの対象にはなっていなかったようである。その理由として、それらは稽古本目的で版行され、読み物とは用途が異なっていること、使用者が限られること、本文の内容が芝居の歌であることなどが挙げられている。また、これに関しては、音曲正本は、芝居で上演される内容であり、すでに一度上演許可を得ているため、開版手続きが省略されたと見なす見解もある。

寛政二年から地本にも原版の所有者を定め、新本の開版にあたってその内容を吟味し、元株所有者の重版・類版に相当しないか、行事の改めが行なわれるようになったことで、音曲正本の版元の間にも、原版を所有して重版を排除する意識は十分高まっていたと考えられる。

長唄正本において株板化が起きた要因には、先に述べた寛政二年(一七九〇)の地本に対する出版取締令の影響が考えられるのだが、その一方、市村座では、天明四年(一七八四)という早い段階で、控櫓の桐座へ興行権が移譲されるときに、株板化が起きている。したがって、こうした版行形態の変化は座側の主導によって起きているとも考えられるのである。特に市村座においては桐座に興行権が移る時に、版元の交代と株板化の現象が起きていることから、『東都劇場沿革誌』『歌舞伎法令集成 正・続』『歌舞伎年表』『戯場年表』などに当時の市村座と桐座の事情をひろってみた。

市村座では、天明元年（一七八一）から資金不足による興行不振が続いている。名題役者の給金の高騰と、度重なる類焼を受けて普請代がかさみ、市村座の借財はこの頃には莫大に膨れあがっていたという。給金の未払いから主立った役者が退座し、上方から呼び寄せた役者も下つてこなかったりして、役者と帳元、金主間に対立が起き、内部紛争事件にまで発展し興行が安定しない。天明二年（一七八二）には地代の滞りから、地主により訴訟を起こされ、一旦地所の明け渡しを言い渡されるが、仲介者の骨折りよつて示談が調い、取り下げられていく。このときに葺屋町の芝居茶屋では、芝居興行を続けるために、地代金百両を肩代わりしていることが記録されている。しかし、市村座は天明三年（一七八三）にも類焼を受け、この折りにも葺屋町の芝居関係者が五百五十両余を用立て、芝居の続行に合力したと書かれている。翌、天明四年（一七八四）には再び地代訴訟を起こされ、このときには市村座の借財は『譚海』に十六萬四千四百両に及ぶと記載されている。座元の市村羽左衛門は町奉行から吟味を受け、返済の用途が当分立たないと判断され立ち退きを命じられる。ここに至り、市村座は長い伝統の中で、始めて櫓を下ろす事態が起きるのである。『安永撰要類集』によれば、葺屋町の町内茶屋、芝居関係の者達、諸商人、裏方の仕事に就く者達から、芝居が続かないと死活問題となるため、桐座で仮興行する嘆願書が出されている。そして、五力年の約定で、櫓の桐座に興行権の移譲が認められ、顔見世興行から桐座の仮興行となる。桐座の開場にあたっては、家主の世話で金子を調達し、毎日家主が立ち会って積極的に経営に関与し、山師の類を一切排除し、芝居町

全体で再び経営破綻が起きないように堅実な方策を立てている様子が窺える。この折りに、劇場出版物についても新たな態勢が作られた可能性があり、その一つが長唄正本の株板化であったと考えられる。

寛政五年（一七九三）には中村座と市村座の両座に地代金の滞りによる地立出入が起きて、地所明け渡しと決まり、中村座は十月に都座へ、市村座は十一月に再び桐座へ、それぞれ五力年の約定で興行権が移る。この時、中村座には地代金の滞りが四千両近くあったという。

したがって逼迫した経営状態は市村座に限ったことではなく、中村座も同様の状態に陥っていたことが窺える。

音曲正本は、上演予告、あるいは観劇用パンフレットの目的で版行されていたと見られるが、上演後にも稽古本としての需要が起き、長唄所作事の隆盛とともに再版性の強い出版商品に成長していったと考えられる。おそらく座でその出版益を取り込むために、寛政初年を先後して三座共に版元の交代と版行形態の変化が起きているのではないだろうか。版元もそれまでの絵草紙屋系統の者から、中村座では堺町の家主の一人が絵草紙株を取得して長唄正本の版元になっており、市村座では座の後見を務める親族と芝居茶屋総代の役にある者が版元に入っていることはこれを裏付けている。芝居茶屋が版元になるのは、債権者の代表の意味合いがあったのではないかと推測する。今日に残された夥しい数の稽古本の存在は、長唄の簿物に対する需要の多さを物語っている。

このように、第三章では、中村座上演の長唄正本についてその版行上の変化を辿り、寛政期に起きている株板化の問題を中心に据えて検

討を加えた。江戸の三座は天明期から深刻な経営難に陥る。そのとき、芝居町内部でとられた経営に対する合理化の方針と、地本問屋仲間の再興という重版に対する取締強化策に転じた地本界の動きが相まって、長唄正本に株板化は起きていくとの結論を導き出した。

そして、天保十二年（一八四一）十月に芝居町が焼失したことにより、十二月には市中風俗改めの趣により、堺町・葺屋町両座と操芝居、そのほかこれに携わる町家が浅草聖天町（後猿若町に変更）へ移転を命じられる。猿若町の移転は、芝居町に集客の深刻な問題をもたらした、座は急速に衰退していく。すると、「杵屋蔵板」「芳村蔵板」と記した、長唄の唄方や三味線方を蔵版者とする長唄正本が出現してくるのである。それらの中には、歌舞伎上演を目的としない作品も出てくるのである。

明治二十年（一八八七）十二月には版權条例に伴い、脚本楽譜条例も制定され、脚本・楽譜も版權保護の対象となる。著作権法の整備に向けた出版令を先取りする動きが、長唄の唄方や三味線方の蔵版本によつてすでに始まっている。

このように長唄演奏者の手に版權が渡ると、長唄正本が有していた稽古本の側面がさらに助長され、やがて新たな記譜法を生み出す方向に展開していく。

長唄の伝習は、三味線の勘所が一つの拠りどころとなつて行われてきたのであるが、この勘所を記譜して活用する方法が記憶による伝統的教授の中で積極的に用いられる事はなかったと言える。ところが、明治期に洋楽が導入され洋楽譜が広まると、長唄各派でも記譜法を工

夫して自派の曲を譜本化しようとする意識が生まれ、その結果さまざまな記譜の試行錯誤が為される。長唄曲を五線譜で表す譜本や、三味線の勘所をピアノやオルガンの鍵盤とやヴァイオリンのポジションと比較する解説も載せられ、複数の流派が新たな記譜法を考案して譜本を出している。このような近代化の過程を経て、今日、長唄の譜本は研精譜（相對音高譜）と、杵家会の赤譜（勘所譜）に大別して普及している。

こうした長唄の譜本の道筋は、直接的には幕末期に座が衰退することによつて唄方・三味線方が蔵版本を出せるようになったことに端を発していると言えよう。しかし、より俯瞰的に見れば、寛政初期に長唄正本が株板化した、すなわち版權が確立したことによつて稽古本の出版態勢が整い、記譜法の追求が可能となつて、付加価値のある記譜を伴った譜本の展開がもたらされたことを見過すべきではない。

長唄正本の株板化は、稽古本の購買層の広がりを背景として起きており、次に続く記譜法の発達を用意した。これは長唄をめぐってひとつの音楽文化が成熟した受容の段階に入っていることを示している。

長唄正本は、狂言全体の原作の姿を捉える上で、歌舞伎台帳を補う重要な資料となる。しかしその一方で、筆者は従来の複製書や研究書であまり取り上げられることのなかった異版群にも視点を置くことにより、地本におけるひとつの版權の確立過程を捉え、これを今日の譜本に繋がる礎として位置付けた点に第三章の成果がある。

今後の展望

江戸において享保期は所作事の再創造が行われ、歌舞伎の所作事（舞踊）に用いられる音曲が豊かに展開していく始まりの時期と位置づけられる。『古今論語役者魁』（近江斎薪翁著、明和九年（一七七二）正月刊）は、江戸の俳優論を展開した書として知られているが、その中に、初代瀬川菊之丞の残したことばがある。

豊後・一中・半太夫・河東の所作は、狂言をする心にてふりを付がよし。

ここにある「豊後」とは、上方の一中節の系統を引き、江戸で発達した豊後系浄瑠璃（常磐津節・富本節・清元節）を指す。また、半太夫・河東節は生粹の江戸浄瑠璃である。菊之丞は享保十五年（一七三〇）に江戸中村座へ下り、「無間の鐘」の所作を長唄の地（伴奏）で演じ、これが大ヒットして五月までのロングラン興行になった。ゆえに、長唄を用いた所作事についても熟知していたはずである。所作事の達人と称される瀬川菊之丞が残したこのことばは、浄瑠璃を地とする所作事と、長唄所作事は演じ方が違うということを言外に伝えているように思われる。

歌舞伎の小歌は風流系の組歌形式の小歌を元とするが、若衆歌舞伎や野郎歌舞伎の時代には狂言系の小謡が流入し、歌方は座敷芝居や遊里にも出演したため、地歌や遊里の流行歌との交渉も当然考えられる。

また、能の謡や説経・祭文・古浄瑠璃からは劇的展開を獲得するなど、常に開かれたかたちで様々な芸能を摂取してきた。そのような多面的な要素を有する段階にあった小歌から、長唄が形成されてきたと筆者は考える。そして、長唄もまた常に能や狂言、浄瑠璃を摂取しながらも、長唄所作事としての独自性を築いてきたと言える。これは富士田吉治の経歴にも如実に表れているよう。

若女方であった佐野川千蔵は、都和中を親方とする色子であったので、浄瑠璃や三味線を仕込まれ、歌う（語る）芸を得意としていたようである。千蔵の琴歌や豊後節などの浄瑠璃は、役者の歌う正本として数点伝存している。この佐野川千蔵が二代目都和中を継ぎ、その後宝暦期には長唄方に転身して富士田吉治となり、「唄浄瑠璃」を創始して長唄所作事の全盛期を担うことになるのである。

幕末から明治初年にかけては大薩摩節を吸収合併している。このように長唄は浄瑠璃を取り込み、唄浄瑠璃のような領域を創り出しながらも、唄としてのスタンスは失わず、むしろ掛合物のような演目においては浄瑠璃各派との違いを明確に表しているのは不思議なことである。

江戸歌舞伎における所作事の展開を、音曲の面から捉えようとする場合には、長唄所作事だけではなく浄瑠璃所作事にも目を向け、狂言全体のなかで所作事の役割を捉えていくことが必要であろう。本研究で取り組んだ江戸長唄の形成は、所作事の音曲の歴史に取り組む上での端緒となるテーマであった。

あとがき

長い間取り組んできた音曲正本の書誌調査も、ここで一つのかたちとなるに及んで、様々な思いがわき上がってくる。初めて長唄正本を目にしたのは、修士課程の学生の時であった。杵屋勘五郎（現、寒玉）先生のお宅へ長唄のお稽古に伺っていた頃、ある日先生から光栄にも「正本を持ち寄る研究会がありますから、書記として行きませんか」と声をかけていただいた。書記の渡辺尚子さんが都合により止められるので、私を誘って下さったのである。正本のことについて何も知らないまま、参加させていただいた。（『季刊邦楽と舞踊』掲載の「長唄正本研究」15〜63は筆者が書記をつとめさせていただいている。）その研究会で、勘五郎先生や稀音家義丸先生が、とても熱心に正本を見ておられたことを今でも記憶している。長唄正本は、江戸時代からこんな風に長唄に携わる人々によって大切に扱われ、伝えられてきたのだとその時思った。

森鷗外や永井荷風も長唄正本の蒐集家であつたと聞く。長唄正本は、簡素な体裁の小冊子であるが、長唄の詞章や役名・役者名、演奏者といった情報を単に載せているだけでなく、何か新作の蓋が明く時の活気そのものが伝えているようで、それで次々、見られる限りの伝本にあたってみようと思うようになった。

諸本の整理に取りかかった頃は、異版の多さと、同版・異版の識別の難しさに閉口し、何度も挫折しかかった。それでも、時を置いて何度か見直しているうちに、少しずつ整理の方向も見えてきたのである。

それをまとめる機会がここに得られて嬉しく思う。

薄物の伝本は、長唄だけではなく歌舞伎の音曲全般について調査してきた。また、版式が同じであるせりふ正本も対象に含めている。調査に際しては、諸先生方から御高配を賜り、また、各所蔵機関での閲覧の際には係の方々に多くの労を執っていただいた。心より感謝を申し上げます。

最後に、これまでの道のりを振り返って、長唄正本へ最初に導いて下さった杵屋寒玉先生、長い間親身に面倒をみて下さり御指導を賜りました原道生先生、総合研究大学院大学への進学を勧めて下さった鳥越文蔵先生、赤間亮先生、そして国際日本文化研究専攻の博士課程に指導教官として受け入れて下さった笠谷和比古先生、副指導教官の荒木浩先生とリュッターマン先生、蒲生郷昭先生をはじめ正本研究会の先生方、配川美加さんに心より御礼を申し上げます。

〈初出〉

第一章 江戸版長唄正本の書誌的研究

第一節 江戸版長唄正本に見る版行形態の変化―享保く寛政三年に至る中村座の場合―

(二〇〇九年三月発行、『東海大学国際文化学部紀要』創刊号掲載の同論文に加筆訂正。)

第二節 江戸版長唄正本に見る版行形態の変化―享保く寛政期に至る市村座の場合―

(二〇一〇年三月発行、『東海大学国際文化学部紀要』第二号掲載の同論文に加筆訂正。)

第三節 江戸版長唄正本に見る版行形態の変化―享保く享和期に至る森田座・河原崎座の場合―

(二〇一二年三月発行、『東海大学国際文化学部紀要』第四号掲載の同論文に加筆訂正。)

第二章 江戸歌舞伎における長唄の形成

第一節 長唄正本の刊行と長唄の形成 書き下ろし

第二節 小歌から長唄への展開 書き下ろし

第三章 江戸版長唄正本における株板化の動き

―中村座を事例として―

(二〇一三年九月発行、『日本研究』第四十八集掲載の同論文

に加筆訂正。二〇一二年一〇月三〇日、日本近世文学会秋期大会(於福岡大学)における口頭発表「江戸版長唄正本の版行上の特徴について」をもとにしたもの。)

中村座・都座

表と所蔵一覧

〈初版と異版の関係表〉（表1～6に分割して表示）

【表1】

上演年月	曲名（外題）	版元1（元版） 内題下述者／ 筆耕／胡・譜	版元2	本屋儀兵衛版	無刊記版Ⅰ種	無刊記版Ⅱ種	無刊記版Ⅲ種	無刊記版Ⅳ種
享保16・2	傾城無間鐘	鱗形屋商標・透写 奥書「く菊之丞相勤申候」 胡・譜有	元濱丁いがや、同版かA1 内題と奥書無、胡・譜有					
享保16・2	無間鐘新道成寺	堺町中嶋屋 譜有	元濱丁いがや 譜有					
享保17・1	うしろめん	堀丁中嶋屋（本文無） 譜有						
享保19・1	相生獅子	いがや 譜有						
元文4・4	鳥羽の恋塚	元濱丁いがや、奥書「右八坂田兵四郎 直傳を以令板行候」 「鼓うた」有	明和6・2の村山版A3					
元文6・2	高野道行歌祭文		橘丁四丁目泉屋権四郎 胡譜有					
元文6・2	一奏勢熊坂	元濱丁いがや・透写 奥書「大薩摩 主膳太夫直傳之以正本令板行也」*① 譜有						
寛保1・8	兵四阿屋造	元濱丁いがや・透写 譜有						
寛保4・2	百千鳥娘道成寺	元濱丁いがや・透写 胡・譜有						
延享3・11	初見雪氷衣	元濱丁いがや 譜有						
延享4・11	山中対面の道行	元濱丁いがや 「上るり」有						
延享5・1	掛合こと哥	「綴目」いがや 胡・譜有						
延享5・1	小妻重山吹海道	元濱丁いがや 胡・譜有						
寛延1・11	（室咲）京人形	元濱丁いがや 下冊に胡・譜有						
寛延2・1	無間鐘	「綴目」いがや 胡・譜有						
寛延2・3	一奏現在道成寺	元濱丁いがや 胡・譜有						
宝暦3・1	今様熊坂の段	いがや 譜有						
宝暦3・2	京鹿子娘道成寺	元濱丁いがや 後修本有	元濱丁いがや本文無	正銘版元、別版 Ⅱ種と同版	別版	同版本儀版	別版	
宝暦3・2	花の縁	元濱丁いがや・後修本有 譜有						
宝暦3・7	一奏乙女姿羽衣所作	元濱丁いがや 「上るり」有			後修本とA2			
宝暦4・2	分身鉄五郎	元濱丁いがや 「綴目」いがや 譜有						
宝暦4・2	夜鶴花果籠	「綴目」いがや 譜有						
宝暦4・2	江戸鹿子男道成寺	元濱丁いがや 「鼓唄・二上り」有			すべてと別版			
宝暦4・2	英執着獅子（上册） （下冊）	元濱丁いがや 「上るり」有		別版 A1	別版 A1	Ⅰ種と覆刻関係 A1	別版（上下二冊）	A1（上一冊）
宝暦4・11	冬牡丹揚羽面影	元濱丁いがや 「上るり」有						
宝暦5・1	万歳貝尽掛合せりふ	元濱丁いがや 胡有						
宝暦6・2	やりおどり長哥	元濱丁いがや 「合」有						

上演年月	外題	版元(元版)	述/筆/胡譜	版元2	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版三種	無刊記版IV種
宝暦6・11	早咲枕丹前	元濱丁いがや							
宝暦8・11	寿相生羽衣			橘町二丁目泉屋権四郎		上一冊のみ 版元2とA2	上下冊版元2とA2 I種の上冊と異版	下一冊のみ 版元2のA1	上下一冊別版
宝暦9・1	舞扇子姥桜	高砂町村山源兵衛							
宝暦10・5	舞鶴初丹前	元大坂町村山源兵衛							
宝暦11・3	勝色桜丹前	いづみ町村山源兵衛							
宝暦11・3	髪梳名とり草			橘町二丁目泉屋権四郎					
宝暦12・3	芳野草	いづみ町横通り村山源兵衛、 (奥)「中村座はんもと村山源兵衛」			別版	本儀版の覆刻			
宝暦12・3	道行旅初桜	村山源兵衛(図版表紙掲載)				関係不明	IのA3	Iと別版	
宝暦12・7	男郎花	村山源兵衛				関係不明			
宝暦12・11	紅葉寶					関係不明			
宝暦12・11	一奏夕告鳥	村山源兵衛・透写							
宝暦12・11	勝舞台名寄行列	村山源兵衛・透写							
宝暦13・2	姥桜江島面	村山源兵衛・透写							
宝暦13・5	旅寝の小蝶	村山源兵衛・透写							
宝暦13・5	峰雲皐墨染	村山源兵衛 作者金井三笑 胡・譜有							
宝暦13・5	夏柳島玉川	村山源兵衛 作者金井三笑 胡・譜有							
宝暦13・11	末広冬牡丹				関係不明				
宝暦14・2	艸摺引				関係不明				
宝暦14・2	爪音幸紋尽	村山源兵衛				本儀版と別版	A2	別版	すべてと別版
宝暦14・4	ねこのつま	村山源兵衛、(奥)「中村座はん元 高砂町村山源兵衛」							
明和1・8	めりやす 袖の露	村山源兵衛							
明和1・11	御所風俗鞆丹	高砂町村山源兵衛	カン有						
明和1・11	縁結祝葛葉	村山源兵衛			A2				
明和2・1	めりやす 親子草	高砂町村山源兵衛	譜有		別版				
明和2・11	姿の鏡関寺小町	村山源兵衛			A1 胡譜有	A3 胡譜有			
明和2・11	冬至梅たが袖丹前	村山源兵衛	胡・譜有						
明和2・11	花寄系図咄	村山源兵衛	胡・譜有						
明和2・11	ふたつ文字	村山源兵衛	胡・譜有			A2 胡譜有	別版 胡譜有	すべてと別版 胡譜有	すべてと別版 胡譜有
明和3・7	馴染相の山	村山源兵衛	胡・譜有			A1 胡譜有			
明和3・11	松吹袖汐路	村山源兵衛・透写	譜有						
明和3・11	梅紅葉二人物狂	村山源兵衛	胡・譜有						

上演年月	曲名	版元1 (元版)	述者／筆耕／胡譜	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種	無刊記版IV種	無刊記版V種	無刊記版VI種
明和4・1	琴の段 朧月	村山源兵衛	純通与三兵衛述 胡・譜有		A2・述者無 胡譜有	別版・述者無 胡譜有	無刊記版III種 II種の覆刻 譜有			
明和4・1	春調娘七種	村山源兵衛、(奥)「中むら座は んもと 高砂町村山源兵衛」	胡・譜有		A1、奥書無 胡譜有	別版 胡譜有	すべてと別版 胡・譜有			
明和4・1	春雨	村山源兵衛	胡・譜有		A1胡譜有					
明和4・1	袖柳名所塚	村山源兵衛	胡・譜有		A2・述者無 胡・譜有					
明和4・8	秋葉籠	村山源兵衛	楓江述 胡・譜有							
明和4・8	衣かつぎ思破車	村山源兵衛	楓江述 胡・譜有	A2・述者無 胡・譜有	同版後印 述者有 版元欄削去 胡譜有	本儀版の被影 胡譜有				
明和4・11	早咲賤女乱拍子	村山源兵衛	純通与三兵衛／富士田 楓江述 胡・譜有	A1 述者無 胡・譜有	別版 述者無 胡・譜有	すべてと別版 譜有				
明和4・11	楓袖相生曲	村山源兵衛	胡・譜有	不明 胡・譜有						
明和4・11	おどり念仏									
明和4・11	鉢扣色入船	村山源兵衛③	胡・譜有		A1述者有 胡譜有					
明和5・1	ちごさくら	村山源兵衛	楓江述 胡・譜有							
明和5・4	葉桜園の團	村山源兵衛・透写	胡・譜有							
明和5・9	渡初鵲丹前	村山源兵衛	胡・譜有							
明和5・9	おとぎ紅葉早物語	村山源兵衛	胡・譜有							
明和5・9	畳算	村山源兵衛	楓江述 胡・譜有		A1述者有 胡・譜有	A2述者有 胡・譜有	別版 述者有 胡・譜有	すべてと別版 述者有 胡譜有	IVの被影 述者無 譜有	すべてと別版 述者無 胡譜有
明和5・11	梅楓娘丹前	村山源兵衛	胡・譜有							
明和5・11	深見草咲分丹前	高砂町横通り村山源兵衛	胡・譜有							
明和5・11	初時雨	村山源兵衛	胡・譜有④		A1 胡・譜有					
明和5・11	相生菊相撲	村山源兵衛	作者増山金八 譜有							
明和6・1	心駒勢草摺	高砂町横通り村山源兵衛	胡少有							
明和6・2	一奏廓羽衣	高砂町横通り村山源兵衛	胡・譜有							
明和6・2	道行女夫傘	高砂町横通り村山源兵衛	胡・譜有	A1胡・譜有						
明和6・2	相生獅子	高砂町横通り村山源兵衛⑤	胡・譜有		2 胡・譜有	別版 胡譜有	IIのA1 譜「上」のみ	すべてと別版 胡・譜省略有		
明和6・5	追善江戸桜其俤	村山源兵衛	増山金八述 胡・譜有							
明和6・5	弾的准系図	村山源兵衛	増山金八述 胡・譜有		同修本と同版 胡・譜有					
明和6・7	雲の峰	高砂町横通り村山源兵衛 (奥)中むら座板元村山源兵衛	胡・「入」有		別版 胡・「入」有					

上演年月	曲名	版元1(元版)	述者/筆耕/胡麻・文字譜	版元2	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種
明和6・7	めりやす 萩の風	高砂町横通り村山源兵衛	胡・譜有					
明和6・7	めりやす 待夜	高砂町横通り村山源兵衛	胡・譜有					
明和6・11	めりやす かみ心	高砂町横通り村山源兵衛	胡・譜有			A1 胡・譜有		
明和6・11	楓葉恋狩衣	高砂町横通り村山源兵衛 (奥)中村座板元村山源兵衛	胡・譜有					
明和7・1	釣狐春乱菊	高砂町横通り村山源兵衛	胡・譜有		A1 胡・譜有 鼎峨印無	別版 胡無・譜有	すべてと別版 胡・譜有	
明和7・1	春宝東人形	高砂町横通り村山源兵衛	鼎峨印 胡・譜有					
明和7・3	こころの五文字	高砂町横通り村山源兵衛	胡・譜有	(瓢箪形内に「文」 A1 胡・譜有				
明和7・3	山桜姿鐘入	高砂町横通り村山源兵衛	胡・譜有					
明和7・8	めりやす 星明	高砂町横通り村山源兵衛	鼎峨印 胡・譜有		A2 述者無 印無 胡譜有	A2 述者無 印無 胡譜有		
明和7・11	狂乱 須磨友千鳥	高砂町横通り村山源兵衛	鼎峨印 胡・譜有			A1 述者有 印無 胡譜有		
明和7・11	粧古郷綿花	高砂町横通り村山源兵衛正	天滴述 鼎峨印 胡・譜有		A2 述者無 印無 胡譜有			
明和7・11	水仙対丹前	高砂町横通り村山源兵衛正	天滴述 鼎峨印 胡・譜有					
明和7・11	めりやす うき枕	高砂町横通り村山源兵衛板	天滴述 鼎峨印 胡・譜有			A2 述者無 印無 胡譜有		
明和8・1	花姿放下僧	高砂町横通り村山源兵衛	天滴述 胡・譜有					
明和8・3	髪梳十寸鏡	高砂町村山源兵衛	天滴述 鼎峨印 胡・譜有			A2 述者無 印無 胡譜有		
明和8・3	めりやす 仇ざくら	高砂町村山源兵衛	天滴述 鼎峨印 胡・譜有			A2 述者無 印無 胡譜有		
明和8・7	妹背星紅葉丹前	高砂町横通り村山源兵衛	胡・譜有					
明和8・11	花角力里盃	新いつみ丁中ほど村山源兵衛 (奥)「中むら座板元 村山源兵衛正」	天滴述 胡・譜有					
明和8・11	冬牡丹園生獅子	新いつみ丁中ほど村山源兵衛	喜立述 鼎峨印 胡・譜有					
明和8・11	紅白勢丹前	「」中ほど村山源兵衛・(奥)「中むら座板元 新いつみ町村山源兵衛」	天滴述 胡・譜有			A1 述者無 胡譜有 奥書無	図版表紙掲載 関係不明	
明和8・11	雪花喻系図	新いつみ丁中ほど村山源兵衛・透写 (奥)「中村座正銘板元むら山正」	譜有					
明和8・11	めりやす 鳥の音	新いつみ丁中ほど村山源兵衛 (奥)「むら山正」	天滴述 胡・譜有					
明和9・1	曙鎌倉名所	新いつみ丁中ほど村山源兵衛	天滴述 胡・譜有					
明和9・1	梅笑粧くさずり	新いつみ丁村山源兵衛正 (奥)中村座板元正銘 村山	胡・譜有			A1 胡譜有 奥書無・内題角書無		
明和9・1	春遊駅路駒	新いつみ丁中ほど村山源兵衛	胡・譜有					
明和9・1	(狂乱初露 雲井 の里言葉	新いつみ町村山源兵衛・(奥)中村 座板元正銘新いつみ町むら山	天滴述 胡・譜有			A1 述者無 胡・譜有 奥書無	別版 胡譜省略有	

明和9・1	めりやす 若くさ	新しいみ丁中ほど村山源兵衛	天滴述	「上ケ」有				A1 述者無「上ケ」有		
明和9・1	めりやす わが涙	新しいみ丁中ほど村山源兵衛		胡・譜少有				不明 胡・譜少有		
明和9・8	初歌舞妓女花槍							不明 胡有		
明和9・8	めりやす 笹引							不明 胡・譜有		
明和9・11	雪の一夜室乱梅							Iと別版 胡譜有		
明和9・11	めりやす 白たえ									
安永2・1	めりやす かきつばた							不明 胡・譜有		
安永2・8	三扇雲井月	南側村山源兵衛								
安永2・11	陸花袍	下冊(奥)「中村座正銘版元村山源兵衛」								
安永2・11	めりやす 錦木	高砂町南側村山源兵衛	天滴述	胡有「カ」有						
安永3・1	(風流万歳)五衣の品	高砂町南側村山源兵衛		「三絃大小・哥」有						
安永3・8	めりやす 神頼	(奥)「中村座正銘版元村山源兵衛」	機流述							
安永3・9	めりやす 思ひ寝	高砂町南側村山源兵衛		胡有			A1 胡有			
安永3・11	めりやす 庭の落葉	(奥)「中村座正銘版元村山源兵衛」		胡有						
安永4・2	御所望釣狐	高砂町南側村山源兵衛正・透写								
安永4・2	めりやす 花散鐘	透写本(表紙に版元名無し)								
安永4・2	めりやす 葉桜	(奥)「中村座正銘版元村山源兵衛」								
安永4・11	翁草恋種蒔	高砂町南側村山源兵衛	喜立述							
安永5・4	置霜怨乱菊	高砂町南側村山源兵衛		鼎峨印						
安永5・11	めりやす ねぬよ									
安永6・1	めりやす すくな文字							不明		
安永6・3	鐘掛花振袖							不明「手ヲドリ」有	Iと別版 譜無	IIと同版 2・3丁は覆刻

【表2】

上演年月	曲名	版元1	述者／筆耕／胡麻点・文字譜	版元2
安永6・11	めりやす 時雨月	板元 高砂町南新道村山源兵衛／ 賣所 江戸橋四日市本屋儀兵衛		
安永6・11	めりやす 雪見酒	板元 高砂町南新道村山源兵衛／ 賣所 江戸橋四日市本屋儀兵衛	胡・譜有	
安永7・2	めりやす 臘月	板元 高砂町村山源兵衛／ 賣所 江戸橋四日市本屋儀兵衛	明和4年上演版の 同版後印・述者無	板元 高砂町南新道村山源兵衛／ 江戸橋四日市本屋儀兵衛・同版後印
安永7・2	咲分梅笑顔	板元 (綴じ目) 村山源兵衛／ 賣所 江戸橋四日市本屋儀兵衛		
安永7・2	めりやす 男文字	板元 高砂町村山源兵衛／ 賣所 四日市本屋儀兵衛	胡有	
安永7・7	其紅葉懺悔物語	板元 高砂町村山源兵衛 元 江戸橋四日市本屋儀兵衛	透写 譜有	
安永7・11	信夫石恋御所染	高砂町南新道村山源兵衛／はん もと／江戸橋四日市本屋儀兵衛	「ヲトリ」有	
安永7・11	めりやす 花夕部	板元 高砂町南新道村山源兵衛 元 江戸橋四日市本屋儀兵衛	正	
安永7・11	琴歌 雪の夜	高砂町南新道村山源兵衛／はん もと／江戸はし四日市本屋儀兵衛	左交述	
安永8・1	風流女萬歳	板元 高砂町村山源兵衛 元 江戸橋四日市本屋儀兵衛	鼎峨丸印 「ヲトリ」有	
安永8・1	初夢姿富士	高砂町村山源兵衛／板元／江戸橋 四日市本屋儀兵衛	「上るり・哥」有	
安永8・5	花菖蒲對の手綱	板元 高砂町村山源兵衛 元 江戸橋四日市本屋儀兵衛		
安永8・8	秋の花角力	板元 高砂町村山源兵衛 元 江戸橋四日市本屋儀兵衛	譜有	
安永8・8	華筵千種の丹前	高砂町村山源兵衛／正本板元／江戸橋 四日市本屋儀兵衛		
安永8・9	ニッ紋とくに 相の山	板元 高砂町村山源兵衛 元 江戸橋四日市本屋儀兵衛	正 胡・譜有	
安永8・11	氷面鏡梅佛	高砂町村山源兵衛／はんもと／ 江戸橋四日市本屋儀兵衛		

安永 8・11	恋の乱れ芋	高砂町南新道村山源兵衛／はんもと／ 江戸橋四日市本屋儀兵衛	
安永 9・1	潔江戸絵藤	〔綴目〕村山源兵衛／はんもと／江戸橋 四日本屋儀兵衛	「ヲトリ」有
安永 9・3	曳各鐘最貞	高砂町村山源兵衛／はんもと／ 江戸橋四日市本屋儀兵衛	
安永 9・7	三拍子秋野色々	高砂町村山源兵衛／はんもと／ 江戸橋四日市本屋儀兵衛	「ヲトリ・チラシ」有
安永 9・7	映紅葉奴僕	高砂町村山源兵衛／はんもと／ 江戸橋四日市本屋儀兵衛	譜有
安永 9・8	髪梳き 秋の暮	高砂町村山源兵衛／はんもと／ 江戸橋四日市本屋儀兵衛	
安永 9・11	引連樹春駒	高砂町村山源兵衛／はんもと／ 江戸橋四日市本屋儀兵衛	
安永 9・11	めりやす 磯千鳥	高砂町村山源兵衛／はんもと／ 江戸橋四日市本屋儀兵衛	
安永 9・11	めりやす 関の戸	高砂町村山源兵衛／はんもと／ 江戸橋四日市本屋儀兵衛	
天明 1・3	道行花の雪吹	板（裁断）村山源兵衛 正	
天明 1・4	めりやす 仇枕	元 江戸橋四日市本屋儀兵衛 高砂町村山源兵衛／板元／ 四日市本屋儀兵衛	
天明 1・9	色見草四の染分	板 たかさご町村山源兵衛 元 四日市本屋儀兵衛	
天明 1・11	紅白姿色鏡	高砂丁村山源兵衛／はんもと／ 四日市本屋儀兵衛	
天明 1・11	我背子恋の合槌	高砂丁村山源兵衛／はんもと／ 四日市本屋儀兵衛	左交述 譜有
天明 1・11	丹前 花姿視	高砂丁村山源兵衛／はんもと／ 四日市本屋儀兵衛	
天明 1・11	屏風の関	板 高砂丁村山源兵衛 元 本屋儀兵衛	左交述
天明 2・1	めりやす 雨の柳	板 たかさご町村山源兵衛 元 江戸はし四日市本屋儀兵衛 透写	

天明2・1	花遊小鳥囀	高さこ町村山源兵衛／はんもと／ 江戸ばし四日市本屋儀兵衛	「ヲトリ」有	
天明2・1	琴哥 かり寝	板 たかさこ町村山源兵衛 元 江戸ばし四日市本屋儀兵衛	三朝述	
天明2・3	釣狐花設畏	高さこ町村山源兵衛／はんもと／ 江戸ばし四日市本屋儀兵衛	譜有	
天明2・7	今様月汐汲	高さこ町村山源兵衛／はんもと／ 江戸ばし四日市本屋儀兵衛		
天明2・7	道行昔のうつし絵	板 たかさこ町村山源兵衛 元 江戸ばし四日市本屋儀兵衛		

【表3】

上演年月	曲名	版元(元版)	述者／筆耕／胡・譜	本屋儀兵衛版	無刊記版1種
天明2・11	琴柱のかり	板 高砂町村山源兵衛 元 長谷(川)町松本や万吉	「こと哥」有		
天明2・11	めりやす なみ枕	板 高砂町村山源兵衛 元 長谷川町松本や万吉			
天明2・11	めりやす 雪月花	板 高砂町村山源兵衛 元 長谷川町松本や万吉		別版	
天明2・11	花楓粧丹前	はんもと／高砂町村山源兵衛／ 長谷川町松本や万吉	「ヲトシ」有		
天明3・1	花緑千歳寿	板元／高砂丁村山源兵衛／長谷 川丁松本屋万吉			
天明3・1	初花色の染手綱	板元／高砂丁村山源兵衛／長谷 川丁松本屋万吉			
天明3・2	恋の柳糸	板元／高砂丁村山源兵衛／長谷 川丁松本屋万吉	左交述		
天明3・2	乱咲扇子蝶	板元／高砂丁村山源兵衛／長谷 川丁松本屋万吉			
天明3・4	再咲花娘道成寺	板元／高砂丁村山源兵衛／長谷 川丁松本屋万吉	譜有		
天明3・8	めりやす 秋の夜	板 高砂丁村山源兵衛 元 長谷川丁松本屋万吉			
天明4・1	道行 児桜恋淵瀬	はんもと／高砂町村山源兵衛／ 松本屋万吉	譜有		
天明4・1	咲競梅丹前	はんもと／高砂町村山源兵衛／ 松本屋万吉	透本		
天明4・3	めりやす 色増袖	板 和泉丁村山源兵衛 元 長谷川丁松本屋万吉			
天明4・3	馴初船の内				哥」有
天明4・3	朝日の舞鶴				透写本

【表4】

上演年月	曲名	版元(元版)	筆耕/胡譜	本屋儀兵衛版	無刊記版	沢村屋利兵衛版Ⅰ種	沢村屋利兵衛版Ⅱ種	沢村屋利兵衛版Ⅲ種	沢村屋利兵衛版Ⅳ種
天明6・11	狂乱岸姫松	板よし町村山源兵衛							
天明7・2	重荷の塩柴	元さかい町沢村庄五郎 板高さこ丁村山源兵衛 正銘	本						
天明7・11	色見草古巣玉籬	元さかい町澤村庄五郎							
寛政1・4	めりやす 雨の後	さかい丁沢村庄五郎							
寛政1・7	八朔梅月の霜月	板せとの町村山源兵衛 元さかい町沢村庄五郎	左交述		版元欄内削 同版後印	別版 奥「寛政元酉年七月 吉日 再板 沢村蔵板」	Ⅰの同版後印 Ⅰと同奥書	*⑥	
寛政1・11	松鶴嫩丹前	はんもと さかい町沢村庄							
寛政1・11	めりやす 東歌	板せとの町村山源兵衛 元さかい丁沢村庄五郎	左交述						
寛政2・1	初約束手管草摺	はんもと さかい町沢村庄五郎							
寛政2・1	太夫株常盤万歳	はんもと 沢村庄五郎さかい丁							
寛政2・3	めりやす 雑草	板せとの町村山源兵衛 元さかい丁沢村庄五郎							
寛政2・7	放下僧月の弓取	板元 さかい町沢村庄五郎							
寛政2・11	釣狐菊寒咲	板 沢村庄五郎 元 村山源兵衛							
寛政2・11	春駒勇笑顔	板元 さかい丁沢村庄五郎							
寛政3・1	めりやす うわ帯	板さかい丁沢村庄屋利兵衛 元せとの町村山源兵衛							
寛政3・1	対面花春駒	板さかい丁 沢村庄屋利兵衛 元せとの町村山源兵衛			同版 版元名欄のうちの 「せとの町村山源兵衛削去」	別版 奥「寛政三亥 正月吉日 沢村蔵板」		すべてと別版 奥「原板寛政 三亥年正月吉日/再板文政 九戌年九月吉日澤村蔵板」*⑦	原板沢村庄屋利兵衛 求板丸屋鉄次郎
寛政3・5	五月菊名大津絵	板 [空欄] 元 さかい丁沢村庄利兵衛・ (奥書「寛政三亥年五月吉日沢村蔵板」)			版元欄に「さかい丁沢村 屋利兵衛」中央書 同版				

【表5】
〈都座〉

上演年月	曲名	版元(元版)	沢村屋利兵衛版Ⅰ種	沢村屋版Ⅱ種	沢村屋版Ⅲ種
寛政6・2	(めりやす)月の鏡	さかい町中嶋屋伊左衛門 作者松井由輔述(表紙) ／沢村屋利兵衛／はんもと 譜無			
寛政6・5	(めりやす)やどり車	さかい町中嶋屋伊左衛門 狂言作者松井由輔述(表紙) ／沢村屋利兵衛／はんもと 合			
寛政6・7	(琴唄)雲井の鷹	さかい町中嶋屋伊左衛門 ／沢村屋利兵衛／はんもと 合			
寛政6・7	(めりやす)下紐	さかい町中嶋屋伊左衛門 ／沢村屋利兵衛／はんもと 合			
寛政6・7	(床さかつき)相の山	さかい町中嶋屋伊左衛門 ／沢村屋利兵衛／はんもと 譜無			
寛政6・11	(めりやす)糸車	板元 きり屋／沢村屋／中嶋屋 五瓶述 三下り、合			
寛政7・1	(新うた)五大力	板元 桐屋傳左衛門／中嶋屋伊左衛門 ／沢村屋利兵衛 並木五瓶述 譜無	別版 大字 述者有 三下り、合	別版 大字 述者有 譜無	Ⅱ種の覆刻 述者無 譜無
寛政7・2	三瀬川吾妻人形	板元 桐屋傳左衛門／沢村屋利兵衛 ／中嶋屋伊左衛門 合			
寛政7・11	色手綱鬻の駒引	板元 とみさわ町桐屋傳左衛門 ／賣所 さかい町中嶋屋伊左衛門 合			
寛政7・11	折簾竹梅幸	板元 とみさわ町桐屋傳左衛門 ／賣所 さかい町中嶋屋伊左衛門 ツツミ哥、合			
寛政7・11	(めりやす)心の蝶	板元 とみさわ町桐屋傳左衛門 ／賣所 さかい町中嶋屋伊左衛門 譜無			
寛政8・1	(めりやす)心の木枕	(表紙欠)			神田／森田屋金蔵／平永町 三下り、合
寛政9・3	(めりやす)爪紅粉	板元 桐屋傳左衛門 ／賣所 さかい町沢村屋利兵衛 ゑんふ述 二上り、合			
寛政9・8	姿花穂七種	板元 桐屋傳左衛門 ／賣所 さかい町沢村屋利兵衛 二上り、三下り、ツツミ 杵屋和吉述	沢村屋利兵衛 さかい丁 手習子 抜摺り本		
寛政9・9	(めりやす)あだし髪	板元 桐屋傳左衛門 ／賣所 さかい町沢村屋利兵衛 二上り、合			
寛政9・9	忍夫摺形見狩衣	板元 桐屋傳左衛門 ／賣所 さかい町沢村屋利兵衛 ウタイ、三下り、合			

【表6】注⑧

〔中村座〕

上演年月	曲名	版元（元版）	沢村屋Ⅰ種	沢村屋Ⅱ種	沢村Ⅲ種	沢村Ⅳ種
寛政9・11	（仙臺ぶし）吾妻唄	板元 さかい町沢村利兵衛 ／せともの丁村山源兵衛	表紙「再板」別版 大字 二上り、合			
寛政9・11	（めりやす）心の雪	板元 沢村利兵衛 ／村山源兵衛				
寛政10・3	（めりやす）墨の梅	はんもと／沢村屋利兵衛／さかい丁 ／村山源兵衛				
寛政10・3	（唄浄瑠璃）邯鄲四季の 花道	板元 さかい丁沢村屋利兵衛 ／村山源兵衛 亀玉述	同版 述者有 表紙「村山源兵衛」削去	I種の覆刻 「再板」述者有		
寛政10・11	花車紅葉錦	はんもと／沢村屋利兵衛／さかい丁				
寛政11・2	（めりやす）花の関の戸	はんもと／沢村屋利兵衛／さかい丁				
寛政11・11	（めりやす）室のゑがほ		板 沢村屋利兵衛 三下り 元 森田屋金蔵 大名題無			
寛政11・11	牛飼室梅花	はんもと／沢村屋利兵衛／さかい町 杵屋正次郎作	板 さかい丁沢村屋利兵衛 元 平永町 森田屋金蔵 別版 内題下作者名無	板 よし町角山本平吉 元 芝神明前和泉や市兵衛 Iと同版 版元名部分入木		
寛政12・1	帯挽花農小林	はんもと／沢村屋利兵衛／さかい町	同版後印、表紙別版	板元 さかい丁沢村利兵衛 ／平永町森田屋金蔵 別版		
寛政12・3	（めりやす）心の筆	はんもと／沢村屋利兵衛／さかい				
寛政12・5	江戸花五枚錦絵	板元 さかい町／沢村屋利兵衛	板元 さかい丁沢村利兵衛／平永 丁森田屋金蔵 花娘 抜刷			
寛政12・11	（めりやす）蕨紅葉	はん元／沢村屋利兵衛／さかい町 五瓶述				
享和1・11	花挾碁立梅	はん元／沢村屋利兵衛／さかい町				
享和3・5	三重霞嬌敷顔鳥		板元 さかい町沢村屋利兵衛 表紙「再板」 左交述 （奥）享和三亥正月吉日沢村蔵板	覆刻 （奥）享和三亥五月吉日 沢村蔵板		
享和3・2	ぬれ翹			神田平永町森田屋金蔵 写本		
享和3・4	（琴唄）秋空	板元 さかい町／沢村屋利兵衛／蔵板				
享和3・8	新八重梅	正銘／はん元／沢村屋利兵衛蔵板／さかい町				
文化1・2	うてな	さかい丁／沢村屋利兵衛／はんもと				
文化2・3	法花四季臺	はんもと／沢村屋利兵衛／さかい丁 （下冊奥）「文化」乙丑年三月三日蔵版 上下二冊本	本文覆刻（含刊記） 表紙別版 上下二冊本	表紙別版 本文Iの後印 一冊本	表紙別版「再板」 本文Iの覆刻 ◎*⑧	原版沢村利兵衛 求版丸屋鉄次郎 本文別版 慶應三年丁卯九月再板
文化2・4	（めりやす）妻戸の風	はんもと／沢村屋利兵衛／さかい町 （奥）「文化」二丑四月十日蔵版 ◎				

文化2・11	若緑姿相生	板元／さかい町／沢村屋利兵衛／北がわ				
文化3・2	七字の花在姿繪	板元／さかい町／沢村屋利兵衛／北がわ (下冊奥)「文化三寅二月吉日 沢村蔵板」	本文覆刻(含刊記) 表紙別版	Iの覆刻(含刊記)	別版 ◎ (奥)原版 文化三寅二月吉日 再版 文政四巳年五月吉日 日 沢村蔵板	板元丸屋鉄次郎 別版
文化3・4	(めりやす)袖の海	板元 さかい町／沢村利兵衛／北がわ (奥)「文化三寅の四月十四日 沢村蔵板」				
文化4・5	(子日)男舞曲相生	さかい町沢村屋利兵衛板 ウタイ、三下り (奥)「文化四丁卯年五月吉日 沢村蔵板」	別版 (奥)「原版文化四丁卯年五月吉日／再板文政十三庚寅年三月良辰 沢村蔵板」			
文化4・5	(重陽)色砧離花姫	さかい町沢村屋利兵衛板 (奥)「文化四丁卯年五月吉日 沢村蔵板」				
文化5・1	寶君壽万歳	さかい丁／澤村屋利兵衛／はん元 一上り (奥)「文化五辰正月二日 堺町沢村蔵板」				
文化5・2	梅庭意最貞	板元 わかい丁／沢村屋利兵衛 (奥)「文化五辰年二月吉日 澤村蔵板」				
文化5・4	道行鳥邊山	板元 さかい丁／沢村屋利兵衛／北かハ (奥)「文化五辰七月十七日 澤村蔵板」				
文化5・7	(めりやす)月雪花操車	板元 さかい丁／沢村屋利兵衛 (奥)「文化五辰八月十日 沢村蔵板」	別版◎ 刊記「文政九戌年九月吉日再刻 澤村蔵板」	IIの覆刻	別版 原版沢村利兵衛 求板丸屋鉄次郎	
文化5・8	濱松風戀歌	板元 さかい町／沢村屋利兵衛／北がわ (奥)「文化五辰八月十日 沢村蔵板」				
文化5・11	天津矢声恋神業	はんもと／沢村屋利兵衛／さかい町 (奥)「文化五辰年霜月朔日 沢村蔵板」				
文化6・4	邯鄲園菊蝶	沢村屋利兵衛／さかい町 (奥)「文化六巳年四月吉日 沢村蔵板」	別版 通二丁目 丸屋鉄次郎／はんもと			
文化6・9	(めりやす)ゆかりの月	板元 さかい丁／沢村屋利兵衛 (奥)「文化六巳年四月吉日 沢村蔵板」	本文後印 表紙別版	覆刻 通二丁目丸屋鉄次郎		
文化7・3	八重やまぶき	はんもと／沢村屋利兵衛／さかい町 (奥)「文化七午年三月吉日 沢村蔵板」				
文化7・5	(めりやす)木の下やみ	はんもと／沢村屋利兵衛／さかい丁 (奥)「文化七午年五月吉日 沢村蔵板」				
文化7・7	伊勢音頭恋目の双六	板元 さかい丁／沢村屋利兵衛 (奥)「文化七午年七月十五日 澤村蔵板」				
文化7・8	小原女 廊の禿	正銘 堺町／沢村屋利兵衛／はんもと (奥)「文化七午年八月十七日澤村蔵板」上冊 正銘板元／さかい丁／沢村屋利兵衛／北がわ (奥)「文化七午年八月十七日 澤村蔵板」下冊	別版 上二冊	別版 表紙Iの覆刻「文久二戊七月再板 澤村蔵板」 上下一冊本	IIの覆刻 原版沢村屋利兵衛 求板丸屋鉄次郎 上下一冊本	

文化 7・11	追松梅明春	正銘 堺町／澤村屋利兵衛／板元 (奥) 文化七庚午十一月朔日 沢村屋蔵板			
文化 7・11	(琴唄) 花色香	正銘 さかい丁／沢村屋利兵衛／はんもと (奥) 「文化七庚午霜朔日 沢村蔵板」			
文化 8・3	遅桜手尔葉七字	正銘 さかい丁／澤村屋利兵衛／はんもと (奥) 「文化八未年三月吉日 澤村蔵板」 上下二冊	別版 一冊本 (奥) 「原板文化八未年三月吉日 ／再板文政四年巳四月吉日 澤村蔵板」	字表紙本 本文Ⅰの覆刻	沢村屋利兵衛／大黒屋金之 介相版 別版「上下」二冊 「大黒屋金之助」を削去し た版あり
文化 9・9	(めりやす) 青葉	正銘 さかい丁 沢村屋利兵衛／板元			
文化 8・11	岩井月緑の松本	正銘 さかい丁 沢村屋利兵衛／はんもと (奥) 「文化八未年霜月朔日 澤村蔵板」			
文化 8・11	(めりやす) 浪枕	正銘 さかい丁／沢村屋利兵衛／はんもと (奥) 「文化八年霜月朔日 澤村蔵板」			
文化 9・1	千代の春緑末広	正銘 堺町／沢村屋利兵衛／板元 (奥) 「文化九申年正月吉日 澤村蔵板」			
文化 9・7	万歳君堺町	正銘 堺町／沢村屋利兵衛／板元 (奥) 「文化九年申七月十五日 澤村蔵板」			
文化 9・9	再春松種時	正銘 堺町／沢村屋利兵衛／板元 (奥) 「文化九申年九月九日 沢村蔵板」*⑨	本文覆刻 字表紙	本文別版 字表紙	版元部分墨丁 Ⅱの覆刻 「丸鉄板」と入る同版有
文化 9・9	紅葉袖名錦絵	正銘 堺町／沢村屋利兵衛／板元 (奥) 「文化九申年九月九日 沢村蔵板」 同版の字表紙本あり			通三丁目丸屋鉄次郎板 「明治十七年再版」
文化 10・2	(めりやす) 命毛	正銘 堺町／沢村屋利兵衛／板元 (奥) 「文化十酉年二月十二日 沢村蔵板」			
文化 10・3	四季詠寄三太字	正銘 堺町／沢村屋利兵衛／板元 (奥) 「文化十酉年三月七日 沢村蔵板」 上下二冊	別版(A3) 上下二冊 (奥) 「文化十酉年三月吉日 沢村蔵板」	本文Ⅰの覆刻 (奥) 「文化十酉年三月吉日 發板／文政十三寅歳四月吉 日再板 澤村蔵板」◎	本紋別版 大字
文化 10・9	御名残尾花留袖	正銘 堺町／沢村屋利兵衛／板元 (奥) 「文化十癸酉年秋九月 沢村蔵板」			
文化 11・3	寄三津再十二支	正銘 堺町／沢村屋利兵衛／板元 (奥) 「文化十一戌年三月 澤村蔵板」			
文化 12・1	梅離霞帯曳	正銘 さかい丁／沢村屋利兵衛／はんもと (奥) 「文化十二亥年一月吉日 沢村蔵板」			

文化12・3	其九繪彩四季桜	正銘 さかい丁／沢村屋利兵衛／はんもと (奥) 「文化十二戌年三月吉日 沢村蔵板」				
文化12・11	今様嫩花道	正銘 さかい丁／沢村屋利兵衛／はんもと (奥) 「文化十二亥年霜月朔日 沢村蔵板」				
文化13・5	(琴唄)朝顔	正銘 さかい丁／沢村屋利兵衛／はんもと (奥) 「文化十三年五月吉日 沢村蔵板」				
文化13・9	御名残七小町容彩四季	正銘 堺町／沢村屋利兵衛／板元 (奥) 「文化十三年九月吉日 沢村蔵板」				
文化15・1	道中丸色廓	正銘 堺町／沢村屋利兵衛／板元 終丁欠				

〔注〕

本表は、長唄の薄物の伝本を版元別に整理し、これを上演順に並べたものである。

上演年は表紙の大名題から取り、その際は『歌舞伎年表』・『正本による近世邦楽年表(稿)』・『享保から慶応まで』(『国立音楽大学音楽研究所年報』第11集別冊、一九九五年)、立命館大学アトリササチセンター公開データベースの中から『歌舞伎・浄瑠璃等興行年表』・『根岸正海氏(寄託) 江戸音曲正本一覽』を参照した。

また、正本に刊年の記載がある場合はそれに拠った。

表1～3は、正本(上演時初版)と本屋儀兵衛版・無刊記版だけを扱い、正本を元版とした場合の本文の流用関係をあらわしている。

本屋儀兵衛版と無刊記版I～VIの欄に記載した「A1(A2・A3・別版)」は正本(版元1・2)との本文の関係を示す。

本屋儀兵衛版と無刊記版の本文の関係について記すときは、「本儀版と同版」や「I種(無刊記I種)と同版」のようにあらわした。

この表で対象とする長唄の薄物は、表紙に「長唄」と記載のある正本のほかに、「長唄」と記載がなくとも長唄の唄方・三味線方の名が記されているものも含めた。

ただし、字表紙本は含まなかった。

述者は本文の内題下にある署名からとり、表紙からはとっていない。また、筆耕の署名・刻入印についても本文から(本文末にみられる)とっている。

詞章に胡麻点がある場合は全体的・部分的を問わず「胡有」有と表に載せている。文字譜(節付け名)は、文字譜とみなしにくい「オトリ」・「哥」・「ツツミ哥」などについても一応「譜有」として記載しているが、本文の冒頭の「二上り」「三下り」と中間の「合」のみの場合は文字譜無しとみなして表には載せなかった。

版元は、正本で特に必要と思われる場合、原本通りの表記を写すようにした。

- *① 『高野道行哥祭文』『一奏勢熊坂』は「菜花曙曾我 第三番目」・「中村座」と表紙にあるが、版元が異なる。
- *② 上下二冊本である。他に、下冊の表紙を除いて上下一冊にした覆刻版があり(竹7・1183・明1023)、その表紙に「上下」と入る版(黒木)がある。
- *③ 下冊の表紙を除き、上下冊の本文を合わせて一冊にした同版本あり。上冊の表紙から「上」を削去して表紙にしたつくり。
- *④ 版元2として「瓢箪形内に文」の商標の版有、本文は「別版 胡・譜有」。
- *⑤ 享保19年1月上演のいがや版の本文を参考にして版下を作っている(いがや版のA3)。
- *⑥ このほか、沢村屋利兵衛版の異版が3種と、沢村屋利兵衛と森田屋金蔵相版の版が4種存在するが、刊年・蔵版に関する奥書はない。
- *⑦ このほかに、沢村屋利兵衛版で奥書のない異版がある。
- *⑧ ◎は版種が複数あることを示す。その際には本文を基準とした。
- *⑨ 天保4・9再演時の正本(沢村屋版)あり。

表7 〈版元1と本屋儀兵衛・無刊記版の表紙の関係 及び、大名題・座名の記載の比較〉

上演年月	曲名	版元1	版元2	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種	無刊記版IV種
享保16・2	傾城無間鐘	鱗形屋・透写 傾情福引名護屋 二番目 中村座	いがや・同版修かA2*① 同上 中むら座					
享保17・1	うしろめん		中島屋 初曆商曾我 二番目 座名なし					
宝暦3・1	京鹿子娘道成寺	いがや上下二冊 男伊達初買曾我 第三番目 中村座	版元1と上下冊別版 同上 中むら座・中村座	上冊の絵とA2カ 同上 中村座	上冊絵A2・下冊絵A1 上冊なし・下冊同上 無	いがや上冊とA2・3 元版1と同 中村座		
宝暦3・1	花の縁	いがや 男伊達初買曾我 第三番目 中むら座			表紙A2 同上 中むら	表紙A1 同上 座名と版元名を削除	表紙A3 同上 中村	
宝暦4・2	江戸鹿子男道成寺	いがや上下二冊・透写 百千鳥艶郷曾我 二番目 中村座		表紙別版 名題有・番目無 中村	表紙本屋儀兵衛版と同版 名題有・番目無 中村			
宝暦4・2	英執着獅子	いがや上一冊 百千鳥艶郷曾我 第三番目 中村座		表紙上冊とA1*② 同上 中村	表紙上冊とA3 同上 中村座	表紙Iと覆刻関係 同上 中村座	表紙IとA2・3*③ 同上 中村座	表紙上冊とA2 名題無・番目無 中村
		いがや下一冊 百千鳥艶郷曾我 第三番目 中村座		表紙下冊とA1 同上 中村	表紙下冊とA3 同上 中村座	表紙下冊とA3 無・無 中村		
宝暦8・11	寿相生羽衣		泉屋権四郎上下二冊 木毎花相生鉢樹第一番目 中村座		絵版元2上冊とA2 同上 無	絵版元2上下冊とA2 同上 無	表紙版元2下冊とA2 同上 無	別版 上下一冊 名題有・番目無 無
宝暦12・3	芳野草	村山版 曾我最良二本樓 二番目 中むら座		絵がA2 名題無・番目無 中村	本儀版の覆刻 名題無・番目無 中村			
宝暦12・3	道行旅初桜	村山版 曾我最良二本樓 二番目 中村座			上下二冊表紙A2 曾我最良二本樓二番目 中むら	表紙IとA3 同上 中村座	絵IとA2 名題無・番目無 中村	
宝暦12・11	紅葉賣				不明*④ 名題無・番目無 無			

上演年月	曲名	版元1	版元2	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種	無刊記版IV種
宝曆13・11	末広冬牡丹	村山版 大丈夫高館實記第一番目 中むら座		表紙A2 大丈夫高館實記第一番目 中むら				
宝曆14・2	艸摺引			不明 人來鳥春告曾我・番目無 中むら	絵本儀版と覆刻関係 名題無・番目無 中むら			
宝曆14・2	爪音幸紋尽	村山版 人來鳥春告曾我 第二番目 中むら座		表紙A2 同上 中むら座	表紙Iの覆刻 同上 中むら座		表紙別版 名題無・番目無 中むら	
明和1・11	縁結祝葛葉	村山版 賛相馬内裡 第二番目 中村座		表紙A2 名題有・番目有 中村	絵A2 無 中むら			
明和2・1	めりやす 親子草	村山版 天津風念力曾我 第二番目 中むら座		表紙A2 同上 中村				
明和2・11	姿の鏡関寺小町	村山版 袖神楽雨乞小町 第一番目 中村座		表紙A1 同上 中村	表紙A2(本儀版の覆刻) 無(出だしの文句) 中村			
明和2・11	ふたつ文字	村山版 神楽雨乞小町 第二番目 中村座		表紙A2とA3 名題有・番目無 中むら	表紙Iの同版後印 名題有・番目無 中むら		絵と外題A2 名題有・番目無 無	別版 名題有・番目無 無
明和3・7	馴染相の山	村山版 八百屋お七恋江戸染 第二番目 中村座		表紙A2 同上 中むら				
明和4・1	琴の段 朧月	村山版 初商大見世曾我 第一番目 中村座		表紙A2 同上 中村座	絵A2 同上 中村		表紙II種と同版力 名題有・番目無 中村	
明和4・1	春調娘七種	村山版 初商大見世曾我 第一番目 中村座		表紙A3 同上 中むら	表紙別版 無(出だしの文句) 中村座		別版・絵IIとA2 名題有・番目有 中村座	
明和4・1	春雨	村山版 初商大見世曾我 第二番目 中村座		表紙A1 同上 中むら				
明和4・8	秋巢籠	村山版 其名月色人 第二番目 中村座		表紙A2 同上 中むら				

上演年月	曲名	版元1	版元2	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種	無刊記版IV種	無刊記版V種	無刊記版VI種
明和4・8	衣かつぎ思破車	村山版 其名月色人 第二番目 中村座		表紙A2 名題有・番目無 中村	表紙同版後印 名題有・番目有 中村座	本儀版のA2 無・無 中村				
明和4・11	早咲賤女乱拍子	村山版・鳥居清経画 太平記賤女振袖 第一番目 中村座		表紙A2 画師名無 名題有・番目無 無 中村	表紙A2 画師名無 名題有・番目無 無 中村	表紙別版 名題有・番目無 無 中村				
明和4・11	おどり念仏			不明・清経画 太平記賤女振袖第一番目 中村座						
明和5・1	ちごさくら	村山版 筆始曾我章 第二番目 中村座		表紙A2 同上 中むら						
明和5・9	畳算	村山版 天竺徳兵衛古郷取梶 第二番目 中村座		表紙A1 同上 中村座	表紙A2 同上 中村座	表紙A2 同上 中村座	表紙IIと同版 同上 中村座	表紙A3 同上 無	表紙IVのA2 名題有・番目無 無	絵A2 無・無 中むら座
明和5・11	初時雨	村山版 今於盛末廣源氏 第一番目 中村座	商標(文・別版) 同上 中村座							
明和6・2	道行女夫傘	村山版 曾我我愛護若松 第二番目 中村座	表紙A2 同上 中村							
明和6・2	相生獅子	村山版 曾我我愛護若松 第三番目 中村座	表紙A2 同上 中むら	絵A1 無・無 中むら	絵A2・覆刻II 無・無 中むら			表紙A3 同上 無		
明和6・5	弾的准系図	村山版上下二冊 曾我我愛護若松 第三番目 中村座		表紙同版後印						
明和6・7	雲の峰	村山版 念力撲葉鏡 第一番目 中村座		絵A1 無・無 中村座						
明和6・11	めりやす かみ心	村山版 常花栄鉢樹 第一番目 中村座		表紙A1 同上 中村座						
明和7・1	釣狐春乱菊	村山版 鏡池佛曾我 第一番目 中むら座	表紙A2 同上 中むら	表紙A3 同上 中むら座	絵A2 名題有・番目無 中むら					

上演年月	曲名	版元1	版元2	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種
明和7・3	こころの五文字	村山版 鏡池俤曾我 第二番目 中村座	表紙別版 同上 中むら座			
明和7・8	めりやす 星明	村山版 敵討忠孝鑑 第三番目 中村座	表紙A2 無・無 中村		表紙A2・儀と異版 無・無 中村	
明和7・11	狂乱 須磨友千鳥	村山版 夜鳥木材陽的 第一番目 中村座			表紙A2 同上 中村	
明和7・11	粧古郷帰花	村山版 鶴森一陽的 第一番目 中村座	表紙A2 同上 中村			
明和7・11	めりやす うき枕	村山版 鶴森一用的 第二番目 中村座			表紙A3 名題有・番目無 中むら	
明和8・3	髮梳十寸鏡	村山版 堺町曾我年代記 第二番目 中村座			表紙A2 名題有・番目無 中村	
明和8・3	めりやす 仇ざくら	村山版 堺町曾我年代記 第二番目 中村座			表紙A2 名題有・番目無 中村	
明和8・11	紅白勢丹前	村山版 倭花小野五文字 第一番目五立目 中村座			表紙A1 名題有・番目無 中村	
明和6・ 安永2頃	七襲秋羽衣				不明 名題無・番目無 中村	
明和9・1	梅笑粧くさずり	村山版 春曾我明晴艸紙 第一番目 中村座			表紙A1 名題有・番目無 中むら・中村	
明和9・1	(狂乱初霞) 雲井 の里言葉	村山版 春曾我明晴艸紙 第一番目 中村座			表紙A2 同上 中むら	表紙別版 名題有・番目無 中むら
明和9・1	めりやす 若くさ	村山版 春曾我明晴艸紙 第一番目四立目 中村座			表紙A1 名題有・番目無 中村	

上演年月	曲名	版元1	版元2	本屋義兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種
明和9・8	初歌舞妓女花槍				不明 花御所根元舞臺第一番目 中村座		
明和9・8	めりやす 笹引				不明 花御所根元舞臺第一番目 中村座		
明和9・11	雪の一夜室乱梅				不明 大鎧海老胴篠塚 番目無 中むら座		
明和9・11	めりやす 白たえ				不明 大鎧海老胴篠塚 番目無 中村座	I種のA2 名題有・番目無 中村座	
安永2・1	道行初の鶯				不明 和田酒盛栄花鑑 番目無 中むら座		
安永2・1	めりやす かきつばた				不明 和田酒盛栄花鑑 番目無 中むら座		
安永3・9	めりやす 思ひ寝	村山版 御詠染曾我雛形 第二番目 中村座			表紙A2 無・無 中村座		
安永4・11	翁草恋種蒔				不明 名題無・番目無 中村座	不明Iと別版 名題無・番目無 中むら座	
安永3・5頃	壽萬歳				不明 名題無・番目無 中村座		
安永5・11	めりやす ねぬよ				不明 咲此花顔関・番目無 中村座		
安永6・1	めりやす すくな文字				不明 稚児硯青柳曾我・番目無 座名無		
安永6・3	鐘掛花振袖				不明 稚児硯青柳曾我第二番目 中村座	表紙(連名以外)IのA1 名題有・番目無 中村座	表紙IのA3 無・無 中むら

上演年月	曲名	版元1	版元2	本屋義兵衛版	無刊記版I種
天明2・11	めりやす 雪月花	村山／松本や 五代源氏實振袖 中村座	表紙別版 名題有・番目無 中村		
天明3・8	めりやす 秋の夜	村山／松本屋 勝角力団扇上羽 中村座			
天明4・3	馴初船の内			不明 曾我娘長者・番目無 中村	
天明4・3	朝日の舞鶴			不明 曾我娘長者・第一番目 四立目 中村座	

〔注〕

表2は版元1と本屋義兵衛版・無刊記版I〜VI種の表紙あるいは絵部分の関係について記したものである。表1と対応させているが、表2では版元1のみの伝存する曲は省略している。本屋義兵衛版と無刊記版各種の段の二行目に「表紙A1（A2・A3・別版）」とあるのは、版元1を元版とした場合の、表紙の関係を表す。版元1が伝存しない場合は本屋義兵衛版・無刊記版との関係は「不明」と記載される。また、本屋義兵衛版と無刊記版間の関係について特に記載する場合は「本儀版のA2」、「I（無刊記版I種）」と「同版」のように版種を明らかにしてある。各曲について、それぞれの版種の段の二行目には大名題と番目を、三行目には座名を正本の記載どおりに書き出している。表中で特に記さない場合は一冊本である。

- *① いがや版の表紙では、「瀬川菊」に続く文字が「次郎」となっており、はめ込んだ感じがする。このいがや版では、外題下に「瀬川菊之丞ついでん」とあり、演奏者連名も異なることから、狂言名題が鱗形屋版と同じであつても再演時の正本とみられる。
- 鱗形屋版がいわゆる「版本写し」の透写本であるため推測となるが、いがや版の表紙は、鱗形屋版の表紙を版下として部分的に入れ替えたA2か、または、版木を入木した同版修とみられる。
- *② 本屋義兵衛版には他に下冊の表紙を除いて上下一冊にした版があり、その表紙は上冊の同版後印である（竹内文庫3060）。
- さらに、竹305と同版本で表紙に「上下」と入る版がある（黒木文庫1703）。
- *③ 上下一冊本であり、上冊に下冊の表紙を除いて本文を続けている。
- *④ 表紙に「上下」と入る同版本あり（芸N9・演特イ11-1212-7C）。
- *⑤ 芸大本E24の表紙には「中村」と「中むら」と両方入っているが、芸大本N11の表紙では「中村」が版木から削去され「中むら」とだけ入る。

両書は表紙・本文ともに同版である。

〔後版表〕

上演年	曲名	富士屋小十郎 ふきや町 かし通り／南側	伊賀屋勘右衛門 （住所変）	和泉屋市兵衛 芝神明前	山本平吉 よし町 川岸角	森田屋金蔵 神田平永町	沢村屋利兵衛 さいかい町	丸屋鉄次郎 高屋重三郎 小伝馬町 三丁目	大黒屋 金之介 清水治平衛 本芝三丁目	濱松屋幸助 通油町 北側	多田屋利兵衛 堀江町四丁目 日本橋通三丁目
寛延2・3	一奏現在道成寺	元浜町伊賀屋勘右衛門原板 ふきや町富士屋小十郎再板									
宝暦3・2	京鹿子娘道成寺	◎	◎	○山本相版	○森田屋 と相版	◎	◎再板 利兵衛正 文政13年改板澤村蔵板 天保11年澤村蔵板	◎沢村相版 「文久4年 再々刻」			○
宝暦4・2	英執着獅子	◎	◎		○森田屋 と相版	○	◎大黒屋金之介相版 ○岩戸屋久兵衛相版	○沢村相版	相版	○	○
宝暦6・11	早咲枕丹前	◎南側1種大名題有	○		○森田屋 と相版	○					○
宝暦12・3	道行旅初夜				○森田屋 と相版	○					
宝暦14・2	爪音手紋尽				○岩戸屋相版		◎「再板」大名題無				
宝暦14・4	ねこのつま				○	○	◎「再板」大名題無				
明和2・11	姿の鏡開寺小町	○	○富士屋相版			◎	◎		○		○
明和4・1	琴の段 朧月	○字稽古本				◎「申年八月再板」	◎「文久三年八月 改板」	○原板沢村 求板丸屋			○字稽古
明和4・1	春調娘七種	◎	◎	○森田屋 と相版	◎						
明和4・8	秋葉龍	○	○	○山本相版		◎「再板」					
明和6・2	相生獅子	◎	◎富士屋相版 ◎単独		○森田屋 と相版	◎	◎「再板」	○		○	○
明和7・1	釣狐春乱菊	○手				○					
明和9・1	雲井の里言葉					○					
明和9・11	めりやす白たえ	○				○					
安永4・11	翁草戀種時 （種時二番目）	◎	◎富士屋相版 ◎単独			◎大名題無 ◎沢村単独 大名題無「再板」 ○岩戸屋久兵衛相版	◎原板沢村 求板丸屋			○	
天明1・11	我背子恋の合榎 （蜘蛛拍子舞）	○	○富士屋相版 ◎福地茂兵衛／ 山本重五郎／ 富士屋と相版			○字稽古本	○福地茂／ 山本／伊 賀屋と相版				
天明2・3	釣狐花談良	○			○森田屋 と相版	○					
天明3・8	めりやす秋の夜				○大名題無						
天明4・3	馴初船の内	○									
天明4・11	めりやす黒髪	◎	○			◎「再板」沢村屋 利兵衛板正	○				
天明5・3	八挺鉦	○									

字：字表紙本

〔所蔵一覧〕 中村座・都座の長唄の薄物

傾城無間鐘 元1：特イ 11-1212-1B 元2：
竹 07-2387(再演)
無間鐘新道成寺 元1：江、元2：演特イ
11-1212-1C
うしろめん 元2：原本集成1
相生獅子 元1：演特イ 11-1212-1D
鳥羽の恋塚 元1：原1
高野道行歌祭文 元2：パ
一奏勢熊坂 元1：演特ト 13-308
兵四阿屋造 元1：演特ト 13-310
百千鳥娘道成寺 元1：特イ 11-1212-1G
初見雪氷衣 元1：パ
山中対面の道行 元1：パ
掛合こと哥 元1：パ
小妻重山吹海道 元1：パ
(室咲)京人形 元1：パ
無間鐘 元1：パ
一奏現在道成寺 元1：パ
今様熊坂の段 元1：加
京鹿子娘道成寺 元1：加・パ、元2：図 360、
儀：竹 7-400、I：演特イ 11-1212-2C と 78A・
演和ト 13-127 他、II：松・竹 7-401・芸 N11・
演和ト 13-419-24・演特イ 11-1212-78B・辻他
花の縁 元1：加、元2：芸 N24/2、I：松、II：
竹 2388、III：芸 N9
一奏乙女姿羽衣所作 元1：パ
分身鉄五郎 元1：パ
夜鶴花巢籠 元1：パ
江戸鹿子男道成寺 元1：パ、儀：演特イ
11-1212-79B、I：演特イ 11-1212-79C
英執着獅子 元1(上下2冊)：演特イ 11-1212-3A
・加・パ、儀(上下2冊)：松・竹 7-1161 と
1162・演特イ 11-1212-79D・演和ト 13-423-24 他
・(上下1冊)明 1023・竹 7-1163 (破)・黒、
I：上(上冊)・花(下冊)、
II：演和ト 13-98(上冊)・上(下冊)、

III：明 1022・演特ト 13-443-9(上下一冊)、
IV：抱(上冊)
冬牡丹揚羽面影 元1：パ
万歳貝尽掛合せりふ 元1：加
やりおどり長哥 元1：パ
早咲枕丹前 元1：演特イ 11-1212-4B
寿相生羽衣 元2：演特イ 11-1212-5B・辻・
花上、I：芸 N9 上冊・演和ト 13-419-58、
II：演特イ 11-1212-85D と E・演和ト 13-70・
演特ト 13-443-29 と 30 他、
III：演和ト 13-419-59 下、IV：竹 7-534
舞扇子姥桜 元1：演特ト 13-448-19(透写)
舞鶴初丹前 元1：演特イ 11-1212-5G(透写)他
勝色桜丹前 元1：明 1051
髪梳名とり草 元2：竹 7-2611
芳野草 元1：芸 N24/2・竹 7-2392、
儀：演特イ 11-1212-6C と 86F、
I：演和ト 13-67
道行旅初桜 元1：川(表紙のみ掲載)、
I：竹 7-1432 と 1433・明 1052・演特ト
13-443-37 他、II：竹 7-3178 と 2027、
III：演特ト 13-443-38
男郎花 元1：芸 N 24/2
紅葉賣 I：演和ト 13-105・芸 N 9・演特イ
11-1212-7C
一奏夕告鳥 元1：演和ト 13-448-30
勝舞台名寄行列 元1：演和ト 13-448-31(透写)
姥桜江島面 元1：演和特ト 13-448-33(透写)
旅寝の小蝶 元1：演和ト 13-448-34(透写)
峰雲皐墨染 元1：パ
夏柳烏玉川 元1：パ
末広冬牡丹 儀：演特イ 11-1212-7G
艸摺引 儀：演特イ 11-1212-8A と 88A、
I：演特ト 13-443-49
爪音幸紋尽 元1：明 1069・演和ト 13-421-25、
I：芸 N9 と E24、演特イ 11-1212-8B・松・

演特ト 13-443-48 他、Ⅱ：霞、Ⅲ：辻
 ねこのつま 元 1：竹 7-2394・芸 N24/2
 めりやす 袖の露 元 1：芸 N24/2
 御所風俗輦丹 元 1：演特イ 11-1212-8G
 縁結祝葛葉 元 1：芸 N24/2・松、
 儀：演和ト 13-84
 めりやす親子草 元 1：芸 N24/2・竹 7-2397、
 儀：演特イ 11-1212-8K・演特ト 13-443-51 他
 姿の鏡関寺小町 元 1：明、儀：芸 N12・
 演特イ 11-12112-9H と 90G・演和ト 13-88、
 I：芸 N9・明・演特イ 11-1212-90H・
 竹 7-2837
 冬至梅たが袖丹前 元 1：演特イ 11-1212-9J
 花寄系図咄 元 1：花・明
 ふたつ文字 元 1：芸 N24/2・竹 7-2399・
 演和ト 13-423-52、I：演特イ 11-1212-9I・
 演和ト 13-53・明、Ⅱ：演和ト 13-423-54・
 竹 7-1323、Ⅲ：竹 7-1319・演和ト 13-85・松・
 芸 N9、Ⅳ：竹 7-2040
 馴染相の山 元 1：演特イ 11-1212-9N・東大・
 竹 7-2400・芸 N24/2・演特ト 13-448-5、
 I：松
 松吹袖汐路 元 1：芸 E(透写)
 梅紅葉二人物狂 元 1：演特イ 11-1212-10C
 琴の段朧月 元 1：芸 N24/2・明・竹 7-2402・
 演和ト 13-418-49、I：竹 7-251 と 2403・
 演和ト 13-418-50、Ⅱ：演特イ 11-1212-10J と
 特ト 13-443-61、Ⅲ：竹 7-2576
 春調娘七種 元 1：上・明・演特イ 11-1212-10I と
 91I、I：演特イ 11-1212-91J と特ト 13-443-58
 と和ト 13-94、Ⅱ：芸 N9・演特ト 13-443-60・
 竹 7-2136、Ⅲ：竹 7-3079
 春雨 元 1：演特イ 11-1212-11A・芸 N24/2、
 I：演特イ 11-1212-92C
 袖柳名所塚 元 1：演特イ 11-1212-11B、明
 秋巢籠 元 1：芸 N24/2・演特イ 11-1212-11I、
 I：花・演和ト 13-107
 衣かつぎ思破車 元 1：演特イ 11-1212-11J と
 93C、儀：演特イ 11-1212-93E、

I：演特イ 11-1212-93D、Ⅱ：上
 早咲賤女乱拍子 元 1：抱、I：明・
 演特ト 13-443-65・演和ト 13-423-30、
 Ⅱ：演特イ 11-1212-11M と 93K、
 Ⅲ：演特イ 11-12112-93L
 楓袖相生曲 元 1：花
 おどり念仏 I：明・演特ト 13-417-7
 鉢扣色入船 元 1：演特イ 11-1212-11K と
 93I(上下二冊)・93H(上下一冊本)
 ちごさくら 元 1：芸 N24/2・竹 7-2405・明・演
 特イ 11-1212-12D と特ト 13-417-11、
 I：演特イ 11-1212-94H と I
 葉桜閨の團 元 1：芸 E(透写)
 渡初鵲丹前 元 1：演特イ 11-1212-12F・98DE
 おとぎ紅葉早物語 元 1：演特イ 11-1212-12G
 畳算 元 1：芸 24/2、I：松・竹 7-2407、Ⅱ：明、
 Ⅲ：演特イ 11-1212-12H と 98F、
 Ⅳ：演和ト 13-421-7、Ⅴ：竹 7-2901・抱、
 Ⅵ：芸 N9・N11
 梅楓娘丹前 元 1：演特イ 11-1212-12 K・95K
 深見草咲分丹前 元 1：明
 初時雨 元 1：芸 N24/2、I：松
 相生菊相撲 元 1：パ
 心駒勢草摺 元 1：演特イ 11-1212-13C
 一奏廓羽衣 元 1：演特イ 11-1212-13E
 道行女夫傘 元 1：演特イ 11-1212-13D・
 芸 N24/2、儀：演特イ 11-1212-96G
 相生獅子 元 1：花・演特ト 13-429-10・
 竹 7-2135・東大、I：松・明・竹 7-2460・
 演特ト 13-443-3・4、Ⅱ：演特イ 11-1212-97E・
 霞・芸 N9・竹 7-2461・演和ト 13-434-7D、
 Ⅲ：上・明、Ⅳ：演特イ 11-1212-13F
 追善江戸桜其俤 元 1：演特イ 11-1212-13H・花
 弾的准系図 元 1：花・演特ト 13-417-9(同修本
 か)、I：演特イ 11-1212-13Gト 97A・
 演特ト 13-429-6 他
 雲の峰 元 1：花・芸 N24/2・明、I：芸 N3
 めりやす 萩の風 元 1：芸 N24/2・花・
 演特イ 11-1212-14B と 98B

めりやす待夜 元1 : 芸 N24/2
 めりやすかみ心 元1 : 演特イ 11-1212-14F と
 98H、I : 演和ト 13-387
 楓葉恋狩衣 元1 : 演特イ 11-1212-14G
 釣狐春乱菊 元1 : 演特イ 11-1212-14L と 99F・
 99G、儀 : 花・演特ト 13-443-75、I : 明、
 II : 演特ト 13-443-74
 春宝東人形 元1 : 演特イ 11-1212-15A と 99E
 こころの五文字 元1 : 演特イ 11-1212-15B と
 99J、元2 : 竹 7-2046
 山桜姿鐘入 元1 : 演特イ 11-1212-15C、
 めりやす星明 元1 : 演特イ 11-1212-16A、
 儀 : 演特イ 11-1212-100D、I : 芸 N24/1
 狂乱須磨友千鳥 元1 : 演特イ 11-1212-16C・
 演特ト 13-417-10、I : 演特イ 11-1212-100H
 粧古郷帰花 元1 : 演特イ 11-1212-16E、儀 : 明
 水仙対丹前 元1 : 演特イ 11-1212-16D
 めりやすうき枕 元1 : 演特イ 11-1212-16F、
 I : 松
 花姿放下僧 元1 : 花・博
 髪梳十寸鏡 元1 : 演特イ 11-1212-17C と 100J・
 演特ト 13-319・花・博・芸 E24、
 I : 竹 7-319 と 7-2409
 めりやす仇ざくら 元1 : 演特イ 11-1212-17B・花・
 博、I : 芸 E24
 妹背星紅葉丹前 元1 : 博
 花角力里盃 元1 : 博・演特イ 11-1212-17I
 冬牡丹園生獅子 元1 : 演特イ 11-1212-17H と
 101A・博
 紅白勢丹前 元1 : 博、I : 演特イ 11-1212-17
 G・芸 N11、II : 近
 雪花喩系図 元1 : 芸 E(透写)
 めりやす 鳥の音 元1 : 演特イ 11-1212-17J・博
 七裏秋羽衣 I : 竹 7-2978(表になし)
 曙鎌倉名所 元1 : 博・
 梅笑粧くさずり 元1 : 博、I : 演特ト 13-443-77・
 芸 E24・芸 N11
 春遊駅路駒 元1 : 博
 (狂乱初霞) 雲井の里言葉 元1 : 博、

I : 芸 E24・演和ト 13-427、
 II : 演特イ 11-1212-18A
 めりやす若くさ 元1 : 博、I : 芸 E24・明
 めりやすわが涙 元版1 : 博
 初歌舞妓女花槍 I : 芸 E24
 めりやす笹引 I : 芸 E24
 雪の一夜室乱梅 I : 演和ト 13-425-14
 めりやす白たえ I : 芸 E24・花・明、
 II : 演和ト 13-124
 めりやすかきつばた I : 演和ト 13-106
 道行初の鶯 I : 竹 7-1436(表紙のみ存、表にな
 し)
 三扇雲井月 元1 : 辻
 陸花栴 元1 : 芸 N11・抱・演特ト 13-443-83
 めりやす錦木 元1 : 芸 N11・明・抱・花・松・
 演特イ 11-1212-18J・辻
 (風流万歳) 五衣の品 元1 : 芸 N11
 めりやす神頼 元1 : 明
 めりやす思ひ寝 元1 : 抱、I : 明
 めりやす庭の落葉 元1 : 芸 E(透写)
 御所望釣狐 元1 : 芸 E(透写)
 めりやす花散鐘 元1 : 演特ト 13-448-90(透写)
 めりやす 葉桜 元1 : 演特イ 11-1212-19F
 翁草恋種蒔 I : 演和ト 13-444-2F・
 演特ト 13-443-84、II : 竹 7-169 と 170
 置霜恋乱菊 元1 : 花
 壽萬歳 I : 演特イ 11-1212-20L(表になし)
 めりやす ねぬよ I : 演特ト 13-413(本文欠)
 めりやす すくな文字 I : 竹 7-2413
 鐘掛花振袖 I : 芸 N9、II : 竹 7-2607、
 III : 竹 7-314
 めりやす 時雨月 元1 : 演特ト 13-413・竹 7-2414
 めりやす 雪見酒 元1 : 竹 7-2415
 めりやす 朧月 元1 : 松・黒、元2 : 芸 N9・
 演特ト 13-443-87
 咲分梅笑顔 元1 : 松
 めりやす 男文字 元1 : 芸 N24/1
 其紅葉懺悔物語 元1 : 芸 E
 信夫石恋御所染 元1 : 明・松

めりやす 花夕部 元1：明・松
 琴歌 雪の夜 元1：松 835-S11-10・12
 風流女萬歳 元1：竹 7-2417
 初夢姿富士 元1：松
 花菖蒲對の手綱 元1：竹 7-2418
 秋の花角力 元1：松
 華筵千種の丹前 元1：竹 7-2419
 二ツ紋ときに相の山 元1：7-2420
 氷面鏡梅笛 元1：竹 7-2421
 恋の乱れ芋 元1：松・竹 7-2422・演和ト 13-413B(表紙のみ存)
 潔江戸絵藤 元1：松
 曳各鐘最眞 元1：霞
 三拍子秋野色々 元1：竹 7-2424
 映紅葉奴僕 元1：竹 7-2423
 髪梳き 秋の暮 元1：竹 7-2425・7-29
 引連樹春駒 元I：芸 E(透写)
 めりやす磯千鳥 元1：竹 7-2426
 めりやす関の戸 元1：竹 7-2427
 道行花の雪吹 元1：明
 めりやす 仇枕 元1：竹 7-48
 色見草四の染分 元1：明
 紅白姿色鏡 元1：松
 我背子恋の合樋 元1：松
 丹前 花姿視 元1：明・演特イ 11-1212-22B
 屏風の関 元1：松
 めりやす雨の柳 元1：演特イ 11-1212-22E
 花遊小鳥囀 元1：明
 琴哥 かり寝 元1：明・霞
 釣狐花設罨 元1：明・芸 N9
 今様月汐汲 元1：明 1194
 道行昔のうつし絵 元1：演特イ 11-1212-22H
 ・明カ
 琴柱のかり 元1：松
 めりやすなみ枕 元1：松
 めりやす雪月花 元1：松、儀：演特イ 11-1212-22I
 花楓粧丹前 元1：演特イ 11-1212-22J・松
 ・明

花緑千歳寿 元1：明
 初花色の染手綱 元1：明
 恋の枷糸 元1：演特イ 11-12112-22L・竹 7-2428
 乱咲扇子蝶 元1：明
 再咲花娘道成寺 元1：演特イ 11-1212-22M
 めりやす秋の夜 元1：演特イ 11-1212-22Q
 ・演和ト 13-418-6
 道行児桜恋淵瀬 元1：芸 E(透写)
 咲競梅丹前 元1：芸 E(透写)
 めりやす色増袖 元1：松
 馴初船の内 I：演特イ 11-1212-23B・竹 7-2979
 朝日の舞鶴 I：芸 E
 狂乱岸姫松 元1：芸 E
 重荷の塩柴 元1：芸 E
 色見草古巢玉籬 元1：演和ト 13-281
 めりやす雨の後 元1：演特イ 11-1212-25A
 八朔梅月の霜月 元1：演特イ 11-1212-25C・
 演特イ 11-1212-107A・演和ト 13-423-4・
 明 2001、無刊記版：竹 7-3021、
 沢村 I：明 2002、沢村 II：芸 N28・
 演特イ 11-1212-107BCD
 松鶴嫩丹前 元I：演特イ 11-1212-25D
 めりやす東歌 元1：演特イ 11-1212-25E
 初約束手管草摺 元1：演特イ 11-1212-25F
 太夫株常磐万歳 元1：演特イ 11-1212-25G
 めりやす雛草 元1：演特イ 11-1212-25H
 放下僧月の弓取 元1：演特イ 11-1212-25J
 釣狐菊寒咲 元1：演特イ 11-1212-25K
 春駒勇笑顔 元1：演特イ 11-1212-26A
 めりやすうわ帯 元1：演特イ 11-1212-26B
 對面花春駒 元1：演特イ 11-1212-26C・
 竹 7-2882、沢村 I：演特ト 13-443-92、
 沢村 II：竹 7-2884、沢村 III：芸 N26、
 沢村 IV：竹 7-2883(奥書無)
 五月菊名大津絵 元1：演特イ 11-1212-26D・
 演特イ 11-1212-108A(奥書無)、
 沢村 I：演特ト 13-429-17・明・竹 7-564
 めりやす月の鏡 元：竹 7-902
 めりやすやどり車 元：明・竹 7-2430

- 琴唄雲井の雁 元：松
 めりやす下紐 元：松
 床さかづき相の山 元：松
 めりやす糸車 元：竹 7-2431
 新うた五大力 元：松・竹 7-2432、
 沢村Ⅰ：竹 7-521・2732・演特Ⅰ 11-1212-27E・
 109EF、沢村Ⅱ：竹 7-522・芸 16、
 沢村Ⅲ：竹 7-523・524・明
 三瀬川吾妻人形 元：演特Ⅰ 11-1212-27F
 色手綱誓の駒引 元：演特Ⅰ 11-1212-27G
 折籠竹梅幸 元：明
 めりやす心の蝶 元：竹 7-507・2433
 めりやす心の木枕 元：芸 N 3、後版：竹 7-2726
 (森田屋版)
 めりやす爪紅粉 元：竹 7-2437
 姿花秋七種 元：明・演和ト 13-285、
 沢村Ⅰ：芸 N22・竹 7-2848・2849・
 演特Ⅰ 11-1212-28A と 109H (抜き本)
 めりやすあだし髪 元：竹 7-2438
 忍夫摺形見狩衣 元：明
 仙台ぶし吾妻唄 元：竹 7-50、沢村Ⅰ：竹 7-51・
 演特Ⅰ 11-1212-28C・演和ト 13-194・
 演和ト 13-444・3E・明
 めりやす心の雪 元：竹 7-2439
 めりやす墨の梅 元：演特Ⅰ 11-1212-28E・
 竹 7-2441・
 (唄浄瑠璃) 邯鄲四季の花道 元：明、
 沢村Ⅰ：芸 N 3、沢村Ⅱ：竹 7-331
 花車紅葉錦 元：近 (表紙のみ掲載)
 めりやす花の関の戸 元：竹 7-2442
 めりやす室のゑがお 沢村Ⅰ (森田屋相版)：演特Ⅰ
 11-1212-29F
 牛飼室梅花 元：演特Ⅰ 11-1212-110B、
 沢村Ⅰ (森田相版)：演特Ⅰ 11-1212-29E・
 竹 7-92、後版：竹 7-93
 帯曳花農小林 元：演特Ⅰ 11-1212-29K・明・
 竹 7-249・250・2063・2573、沢村Ⅰ：竹 7-248・
 2574、沢村Ⅱ (森田相版)：演特Ⅰ 11-1212-110DE
 めりやす心の筆 元：演特Ⅰ 11-1212-30B と 110F
 江戸花五枚錦絵 元：演特ト 13-429-18・明、沢村
 Ⅰ (森田屋相版)：演特Ⅰ 11-1212-30F (抜き本)
 めりやす蔦紅葉 元：演特Ⅰ 11-1212-30I
 花袂碁立梅 元：演特Ⅰ 11-1212-31H
 三重霞嬉敷顔鳥 沢村Ⅰ：明・竹 7-1422・1423・
 3175・演特Ⅰ 11-1212-110J・演特ト 13-443-96・
 演特ト 13-429-20、沢村Ⅱ：竹 7-1424・3174・
 演特Ⅰ 11-1212-32F、沢村Ⅱ^〳 (字表紙)：竹
 7-3176
 むれ翹 後版：演特Ⅰ 11-1212-142 (森田屋版
 透写本)
 琴唄秋空 元：演特Ⅰ 11-1212-32H
 新八重梅 元：演特Ⅰ 11-1212-32I
 めりやすうてな 元：演特Ⅰ 11-1212-33C
 法花四季台 元：竹 17-1043・1044、沢村Ⅰ：
 竹 7-1045 ~ 1048・2998・2999・芸 N 3・明、
 沢村Ⅱ：竹 7-3000・3001、
 沢村Ⅱ^〳 (字表紙)：竹 7-3002、
 沢村Ⅲ：明・竹 7-1049、
 沢村Ⅲ^〳：竹 7-1050 (表紙覆刻)、
 沢村Ⅳ (丸鉄求版)：竹 7-1051
 めりやす妻戸の風 元：明
 若緑姿相生 元：演特Ⅰ 11-1212-33G・明 (表紙
 の振付者なし)
 七字の花在姿繪 元：明 2056・竹 7-622・624・626
 ・1774・1776・演特Ⅰ 11-1212-34A と 111G、
 沢村Ⅰ：明 2055・演特Ⅰ 11-1212-112A、
 沢村Ⅱ：演特Ⅰ 11-1212-112AB・竹 7-620、
 沢村Ⅲ：竹 7-628 と 629 と 1779・
 演特Ⅰ 11-1212-112CD、
 沢村Ⅲ^〳：竹 7-631・1778 (字表紙)、
 沢村Ⅳ：竹 7-632
 めりやす袖の海 元：明・竹 7-758
 (子日) 男舞曲相生 元：演特Ⅰ 11-1212-34C・
 演和ト 13-178・明、沢村Ⅰ：竹 7-246
 (重陽) 色礎籬花姫 元：演特Ⅰ 11-1212-34DE と
 113E
 寶君寿万歳 元：演特Ⅰ 11-1212-34G・明
 梅庭意最眞 元：黒・演特Ⅰ 11-1212-34I (透写本)

- 道行鳥邊山 元：竹 7-3180・3181・
 演特イ 11-1212-35A・演和ト 13-286 カ
- めりやす月雪花操車 元：竹 7-3469
- 濱松風恋歌 元：明・芸 N22・竹 7-1185・1186
 ・3072・3073・演特イ 11-1212-113I、
 沢村 I：演特イ 11-1212-113J114A・竹 7-1187・
 1188・3074、沢村 II：竹 7-1190・3076、
 沢村 II[〃]：芸 N17(表紙覆刻)、
 沢村 III：竹 7-1191、
 沢村 IV：竹 7-1192・1193・3077
- 天津矢声恋神業 元：明
- 邯鄲蘭菊蝶 元：演特イ 11-1212-36A・
 演和ト 13-419・21・竹 7-332・334・3339、
 丸鉄：竹 7-335
- めりやすゆかりの月 元：竹 7-1630・2446・
 明 2069・芸 N1、
 沢村 I：明 2070・演特イ 11-1212-36C、
 丸鉄：竹 7-3258
- めりやす八重やまぶき 元：黒・竹 7-1562
- めりやす木の下やみ 元：黒
- (伊勢音頭)恋目の双六 元：演和ト 13-296
- 小原女(上冊)廓の禿(下冊) 元(上下 2 冊)：演特イ
 11-1212-36G・114K・115CD(下冊)・
 竹 7-288 ～ 296・明、元[〃]：(下冊字表紙)芸 N19
 ・演特イ 11-1212-115E・竹 7-301・1763・1764・
 2138・2595(下冊字表紙)・2597、
 沢村 I：芸 N17 と 19・明・演特イ 11-1212-115A
 ・特イ 13-312-89・竹 7-297 ～ 299・2595・2596、
 沢村 I[〃]：竹 7-3332(上冊字表紙)、
 沢村 II：竹 7-3333、沢村 III：芸 N27・
 演特イ 11-1212-115B
- 追払梅明春 元：演特イ 11-1212-36H
- 琴唄花色香 元：竹 7-1156・1825(表紙欠)
- 遅桜手尔葉七字 元：(上冊)竹 7-231・229・1746・
 2562・明、(下冊)竹 7-230・2563・明、
 沢村 I：(上下 1 冊)芸 N4・竹 7-233 と 234 と
 1747 と 1748 と 2099 と 2564 と 2565・明 2110
 ・演特イ 11-1212-37A と 115G、
 沢村 I[〃]：芸 N17 と 25・明 2109(改刻箇所)、
- 沢村 II：(字表紙本文 I の覆刻)竹 7-235 と 2566
 と 2577
- 沢村 III：(大黒屋相版)竹 7-236・238・3323、
 沢村 IV：(上 1 冊丸鉄相版)竹 7-1745・2568・2569・
 演特イ 11-1212-116A、他有り
- めりやす青葉 元：黒
- 岩井月緑の松本 元：演特イ 11-1212-37E と 116G
- めりやす浪枕 元：特イ 11-1212-37F(表紙破)
- 千代の春緑末廣 元：演特イ 11-1212-37I
- 万歳君堺町 元：明
- 再春菰種蒔 元：演特イ 11-1212-38C と 117AB
 ・竹 7-1387・1389・3149・3150、
 沢村 I：(字表紙)明・竹 7-1393・1394・3151、
 沢村 II：(字表紙)芸 N27・演特イ 11-1212-117C・
 演特イ 13-312-97・竹 7-1390～1392 と 1838 と 3152
 と 3153、沢村 III：(版元部分墨丁)竹 7-3156・
 演特イ 13-312-98、
 丸鉄：竹 7-1396
- 紅葉袖名残錦絵 元：演特イ 11-1212-38D と 117DE・
 芸 N1 と 4・明・竹 7-1517～1520・3205～3207、
 元[〃]：(字表紙)明・竹 7-1521・1522・3208、(他に
 天保四年再演版有り)
- めりやす命毛 元：演特イ 11-1212-38G・明
- 四季眺寄三大字 元(上下 2 冊)：竹 07-604～607 と
 2779 と 2780・演特イ 11-1212-38H・117G・118A、
 沢村 I(上下 1 冊)：演特イ 11-1212-118BC・
 竹 7-608～611・2781・2782、
 沢村 II：明 2091・竹 7-2783、
 沢村 II[〃]：明 2092・演特イ 11-1212-118D・竹 7-613
 と 2784 と 22785、
 沢村 II[〃]：(本文 II 同版表紙別版)演特イ 13-312-10
 2・竹 7-614 と 615 と 2786 と 2787、
 沢村 III：竹 7-2789、
 沢村 III[〃]：演特イ 11-1212-119A・竹 7-2788・
 芸 N25・明 2100、
 沢村 IV：芸 N25・竹 7-616・演特イ 13-312-101
- 御名残尾花留袖 元：竹 7-2580
- 寄三津再十二支 元：明・竹 7-1638～1640・3260・
 演特イ 11-1212-40A

梅籬霞帯曳 元：・明・演特11-1212-40D・芸N11
 其九繪彩四季櫻 元：竹785～790・演特11-1212-
 40Eと119EF、元’：(上冊表紙覆刻)明・演和ト13
 -44と45カ
 今嫩花道 元：演特11-1212-41E・明
 琴唄朝顔 元：演特11-1212-41G
 御名残七小町容彩四季 元竹7-977
 道中丸色廓 元：特11-1212-42A(欠本)

[略語]

(元1)元版1 (元2)元版2
 (儀)本屋儀兵衛版
 (I～VI)無刊記版I～VI種
 (沢村I～IV)沢村利兵衛再版I～IV種
 (丸鉄) 丸屋鉄次郎版
 上 上野学園大学日本音楽史研究所
 演 早稲田大学演劇博物館
 辻 早稲田大学演劇博物館辻町文庫
 加 東京都立中央図書館加賀文庫
 霞 東京大学総合図書館霞亭文庫
 抱 抱谷文庫
 黒 東京大学教養学部黒木文庫
 芸 東京芸術大学附属図書館
 竹 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫
 パ フランス国立図書館
 博 東京国立博物館
 花 上田市立上田図書館花月文庫
 松 松浦史料博物館
 明 明治大学附属図書館松和文庫

書籍に図版掲載

原 『長唄原本集成』
 図 『歌舞伎図説』
 近 『日本近世日本舞踊史』石井国之著
 川 『江戸長唄』川上邦基著

市村座・桐座

表と所蔵一覧

表1 〈版元表記と本文の関係 及び作者・筆耕署名〉

市村座

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)	内題下署名/筆耕	版元2	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種
享保18・1	色里踊口説あれ みさしやんせ節	元濱丁いがや	胡麻点・文字譜 胡・譜無					
享保18・7	大踊こんこりき節	元濱丁いがや	胡・譜無					
享保19・3	やつし西行富士見五郎	横山町老丁目新道 泉権 (奥)此ころせけんろく*1 /松島庄五郎(坂田兵四郎直傳之以板行仕候者也 (奥)長うた坂田兵四郎(松嶋庄五郎直傳の正本也 /市村座新きやうげんはんもと(右同)	胡・譜有 胡・譜無					
享保19・3	江戸桜五人男掛合 文七節	元濱丁いがや 横山町老丁目新道 泉権 (奥)右此本ハ松嶋庄五郎直傳之正本也	胡・譜有 胡・譜無					
元文4・11	小山田太郎物狂せりふ	元濱丁いがや	胡無・譜有					
元文5・4	孤東柳	橋町四丁目横町 泉権/はんもとおろし 胡無・譜無有 (奥)右此本ハ松嶋庄五郎直傳之正本也	胡無・譜無有					
元文5・6	文月弓矢誉	橋町四丁目 泉権	胡無・譜有					
元文5・11	大坂土産 丹前鐘踊	橋町四丁目 泉権	胡無・ランド哥					
寛保2・1	姿花五色桜	橋町四丁目 泉権・透写	胡・譜無					
寛保2・1	思いの緋桜	橋町四丁目 泉権・透写 (奥)右此本ハ坂田兵四郎(松嶋庄五郎 直傳の以令板行者也	胡・譜少有	橋町二丁目泉権 A3 胡・譜少有 (奥)右此本ハ(同上二名)直傳ヲ 以板行仕候/市村座はんもと(同)		別版 同版富士屋版*2	すべてと別版	すべてと別版
寛保2・11	今様こんくわい信田妻	橋町四丁目 泉権・透写	胡無・譜有					
寛保4・1	高尾さんげの段	橋町 泉権	胡無・ツツミ哥					
延享2・1	釣狐鑑乱曲	橋町四丁目 泉権・透写 胡無・ツツミ哥・ウタ	胡無・譜有					
延享2・7	東雲いもせの八声	橋町二丁目(四)丁目 泉権・透写*3 胡無・譜有	胡無・譜有					
延享2・11	掛合 鼓哥	橋町四丁目 泉権・透写 胡無・キン	胡無・譜有					
延享4・4	元服花菖蒲	橋町二丁目 泉権	胡少・譜有					
延享4・11	紫宵宿夜霜	橋町二丁目 泉権	胡少・譜有					
延享5・1	鶴の丸日の出男	橋町二丁目 泉権	胡無・譜有					
延享5・1	(土手八町)當世羽織	橋町泉権	胡無・譜有					
延享5・4	菜の花小蝶の袂	橋町二丁目 泉権 胡無・上ケ・ツツミ哥 (下冊奥)市村座はんもと(右同)	胡無・上					
寛延1・8	子宝木の葉の絹	橋町二丁目 泉権	胡無・上					
寛延1・8	坂田金時道行	橋町泉権	胡無・譜有					
寛延1・11	放下僧小切子所作の段	橋町二丁目 泉権	胡無・譜有					
寛延1・11	室の閨魁丹前	橋町二丁目 泉権	胡無・譜有					
寛延2・1	浦山吹東人形	橋町二丁目 泉権 (下冊奥)市村座はんもと(右同)	胡無・ツツミ哥・上ケ					
寛延4・1	朧月面影花	橋町二丁目 泉権 胡少・ツツミ哥・哥	胡少・譜有					
寛延4・3	鳴神上人北山桜	橋町二丁目 泉権 勤筆沾翁 胡無・譜有	胡無・譜有					
宝暦3・1	花笠娘丹前	橋町二丁目 泉権 胡1カ所・引・合他 (下冊奥)市村座板元所(右同)	胡無・上・合					
宝暦3・6	無間の鐘	橋町二丁目 泉権 胡無・上・合	胡無・上・合					

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)	内題下署名/筆耕	版元2	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種	無刊記版IV種	無刊記版V種
宝暦4・1	振分髪獅子乱曲	橘町二丁目 泉権 (下冊奥)市村座はんもと(右同)	胡麻点・文字譜 胡無・譜有							
宝暦4・8	(新春駒)秋野月毛の駒	橘町二丁目 泉権 (下冊奥)市村座はんもと(右同)	胡・譜有			別版 胡・譜有				
宝暦4・11	風流妹背の柱建	橘町 泉権 (下冊奥)市村座はんもと(右同)	胡無・うたひ・哥							
宝暦4・11	高砂丹前	橘町 泉権 (下冊奥)市村座はんもと(右同)	胡・譜無							
宝暦5・1	髪梳妹背鏡	橘町二丁目 泉権	胡少・譜有		江戸橋四日市大坂屋義兵衛別版 胡少・譜有	大坂屋と同版 胡少・譜有	大坂屋と同版 胡少・譜有	大坂屋の覆刻 胡少・譜有 同版富士屋版*4	別版 胡少・譜有	
宝暦5・1	(四季詠)牡丹郎郷里	橘町二丁目 泉権 (冬冊奥)浄るりせりふ板元 市村座板元(右同)	胡・譜有							
宝暦5・7	浪枕枯梗物狂	橘町二丁目 泉権	胡無・譜有							
宝暦5・8	門出京人形	橘町二丁目 泉権	胡無・譜有	橘町二丁目 泉権 版元1の覆刻		別版				
宝暦5・8	蟬丸都尾花	橘町二丁目 泉権 (奥)市村座板元(右同)	胡無・地方・合							
宝暦5・11	雛形源丹前	橘町二丁目 泉権 (下冊奥)市村座板元(右同)	胡・譜無							
宝暦5・11	今様四季三番三(上册)	橘町二丁目 泉権	胡無・合			A1 胡無・合 1のA2	Iの覆刻胡無・合 1のA1	別版胡無・合 1のA3	別版 胡無・合 同版富士屋版*5	
宝暦6・3	花曇忠義金	橘町二丁目 泉権・透写 (下冊奥)浄るり/長哥/せりふ市村座板元根元(右同)	胡無・譜有	橘町二丁目 泉権 版元1の覆刻 胡無・合		胡無・合	胡無・合	胡無・合のみ	同版富士屋版*5	
宝暦6・7	呼小鳥印の柳	橘町二丁目 泉権板(図版)	胡・譜無							
宝暦6・7	名取川	橘町二丁目 泉権・透写 (奥)市村座はんもと(右同)	胡・譜無							
宝暦6・11	百千鳥娘道成寺	橘町二丁目 泉権	胡有・譜有			A1 胡・譜有	A1 胡無・譜有	A3 別版 胡・譜有	A1 胡・譜有	すべてと別版 同版富士屋版*6
宝暦6・11	弓力手くちなゑ丹前	橘町二丁目 泉権 (下冊奥)市村座はんもと(右同)	胡・譜無							
宝暦7・2	鳥指浮流朝比奈	橘町二丁目 泉権 (中・下冊奥)浄るり/せりふ/長哥 市村座板元(右同)	胡少・譜有							
宝暦7・2	(めりやす)花の香	橘町二丁目 泉権 (奥)浄るり/せりふ/長うた/ほめことは 市村座板元(同版元・住所)	胡無・譜有							
宝暦7・7	(からくり橋弁慶)月の出汐	橘町 泉権 (下冊奥)市村座 せりふ/上るり/ほめ詞 やぐら下/なだいつけ(同版元住所)	胡無・譜有							
宝暦7・7	忍笠堤の関路	橘町二丁目 泉権(図版)								
宝暦8・1	粧六花	橘町二丁目 泉権 (下冊奥)市村座板元根元(右同)	胡・譜有							

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)	内題下署名/筆耕	版元2	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種	無刊記版IV種	無刊記版V種
宝暦8・1	「上册」花に酔姿の友 「下册」昼夜太夫のせりふ 雛祭神路桃	橘町二丁目 泉権・透写 (下册奥)市村座はんもと(右同)	胡・譜有 胡・譜有							
宝暦8・3	「上册」官女・春駒踊・杜若 「中册」鍵踊・傾城 「下册」山賤・布さらし 野路母子草	橘町二丁目 泉権 (下册奥)市村座板元(右同)	胡・譜有 胡・譜有 胡・譜有		A1胡・譜有	A2胡・譜有	別版 傾城本文			
宝暦8・3	紫の曙大踊り	泉権・透写 (奥)市むら座板元(右同)	胡・譜無 胡・譜有							
宝暦8・9	乱菊枕慈童	橘町二丁目 泉権 (下册奥)市村座はんもと(右同)	胡・譜有 胡・譜有			(上)A1胡・譜有 (下)A2胡・譜有 奥書無	A1胡・譜有 A2胡・譜有 奥書無	(上下)別版 胡・譜有	(上下)IIIのA3 別版 胡無・譜有	すべてと別版 胡無・譜少
宝暦8・11	乱調尾上鐘	橘町二丁目 泉権 (奥)市村座はんもと(右同)	胡・譜有							
宝暦8・11	面影青砥瀧津瀬	橘町二丁目 泉権 (下册奥)市村座はんもと(右同)	胡無・浄るり 胡・譜有							
宝暦8・11	(めりやす)小夜あらし	橘町二丁目 泉権 (奥)市むら座はんもと(右同)	胡・譜有	同上版元 1の同版後印		A1胡・譜有 奥「市むら座」 のみ残す	A1胡・譜有 奥「市むら座」 のみ残す	A1 IIと同版 後印 胡・譜有 奥書無	別版 胡無・譜少 同版富士屋版*7	すべてと別版 胡・譜有
宝暦9・1	無間鐘	橘町二丁目 泉権・透写	胡少・譜有							
宝暦9・1	花子	橘町二丁目 泉権・透写 (奥)市村座はんもと(右同)	胡無・鼓哥							
宝暦9・1	曲輪歌仕方形万歳	橘町二丁目 泉権・下一冊	胡無・合・哥							
宝暦9・3	恋空蟬	橘町二丁目 泉権 (奥)市村座はんもと(右同)	胡・譜有							
宝暦9・3	姿の華	橘町二丁目 泉権 (奥)市村座はんもと(右同)	胡・譜無			A1胡無・譜有 奥書無				
宝暦9・5	(菖蒲)杜若	橘町二丁目 泉権・下一冊 (奥)市村座はんもと(右同)	胡無・合	橘町二丁目 泉権 1の覆刻奥書同		A1胡無・合 奥書「市村座」残	A1胡無・合 奥書無	別版 胡無・合	すべてと別版	
宝暦9・5	根元草摺引	橘町二丁目 泉権	胡無・上るり							
宝暦9・5	分身鉄五郎	橘町二丁目 泉権	胡・譜有							
宝暦9・5	髪梳夜撫子	橘町二丁目 泉権・透写 (奥)市むら座はん元(右同)	胡・譜有							
宝暦9・7	女舞紅葉賀	橘町二丁目 泉権・透写・終丁欠	胡・譜有							
宝暦10・1	幼愛四季の万歳	橘町二丁目 泉権・上一冊	胡・譜有							
宝暦10・6	鐘入解脱衣	橘町二丁目 泉権	胡・譜有							
宝暦10・6	鎌倉風真田笠紐	橘町二丁目 泉権・下一冊 (奥)市村座はん元(右同)	胡無・上るり			不明 胡・譜有	別版I 胡・譜有			
宝暦10・6	(めりやす)仮枕	橘町二丁目 泉権 (奥)市村座はん元(右同)	文阿 胡・譜有		A2胡・譜有 奥書無・文阿無					
宝暦10・6	夜半の乱髪	橘町二丁目 泉権 (奥)市むら座はんもと(右同)	胡部分的・譜有							
宝暦10・11	色見草	橘町二丁目 泉権 (奥)市村座はんもと(右同)	文阿 胡・譜有							

[illegible]

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)	内題下署名/筆耕	版元2	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種	無刊記版IV種
宝曆13・7	(めりやす)秋七種	橘町二丁目 泉権 (奥)市むら座正板元(右同)	胡・譜有		A2胡・譜有 奥書無	別版胡無・譜有	A3胡無・譜有		
宝曆13・11	狂乱情姿繪	橘町二丁目 泉権 (奥)市村座はんもと(右同)	胡・譜有						
宝曆13・11	紅葉傘住吉丹前	橘町二丁目 泉権 (奥)市村座はんもと(右同)	胡・譜有						
宝曆13・11	玉櫛笥寝鐘	橘町二丁目 泉権	胡・譜有						
宝曆13・11	(拍子舞)恋文字道中雙六	橘町二丁目 泉権	胡・譜有						
宝曆14・1	無間鐘 昔草	橘町二丁目 泉権	胡・譜有						
宝曆14・3	女伊達姿花	橘町二丁目 泉権 (奥)市村座はんもと(右同)	胡・譜有		A1胡・譜有 ルビ落 奥書無	別版胡・譜有*10			
宝曆14・4	狂乱手管のすががき	橘町二丁目 泉権 (奥)市村座はんもと(右同)	胡・譜有						
宝曆14・5	乗掛情の夏木立				寶所 江戸橋四日市 本儀 別版胡・譜有	胡・譜有	(A)非同版I 胡・譜有	本儀版と同版 胡・譜有	本儀版覆刻関係 胡・譜有 内題異
明和1・8	有明鶏	橘町二丁目 泉権 (奥)市むら座板元(右同)	胡・譜有						
明和1・8	川柳二つの竹	橘町二丁目 泉権・透写	胡・譜有						
明和1・11	冬至梅雪の空柱	橘町二丁目 泉権・透写 (奥)市むら座板元(右同)	胡・譜有						
明和1・11	鞭桜宇佐幣	橘町二丁目 泉権 上下二冊 金井三笑述 同版1(上)一冊	胡・譜有						
明和1・11	花錦嫩丹前	橘町二丁目 泉権 (下冊奥はんもと(右同))	胡・譜有		A1胡・譜有 奥「はんもと」残	A1胡・譜有 奥書無	別版 胡無・譜有	別版胡・譜有	別版 胡・譜有
明和1・11	浜衛幾世月	橘町二丁目 泉権 (奥)市むら座板元(右同)	胡・譜有						
明和1・11	冬小菊御乳女童	橘町二丁目 泉権・透写	胡・譜有			A2胡・譜有			
明和1・11	雪咲心の花	橘町二丁目 泉権	胡・譜有						
明和1・11	雪傘積恋歌	橘町二丁目 泉権	胡・譜有			A2胡・譜有 述者有 奥書無	A2・Iの覆刻胡無 譜有 述者有 奥書無	別版 胡無 胡・譜有	すべてと別版 胡無ニ上り、合 同版富士屋*11
明和2・1	夜鶴綱手車	橘町二丁目 泉権 (奥)市村座板元(右同)	胡・譜有						
明和2・1	思ひ川	橘町二丁目 泉権	胡・譜有			A1胡・譜有	別版胡・譜有		
明和2・2	里花浮空柱	橘町二丁目 泉権	胡・譜有						
明和2・2	十寸鏡	橘町二丁目 泉権	胡・譜有						
明和2・5	花扇裾野神瑞籬	橘町二丁目 泉権 (奥)市村座板元(右同)	胡・譜有						
明和2・7	(少将道行)百夜車	橘町二丁目 泉権	胡・譜有			A1胡・譜有	別版胡・譜有		
明和2・7	朝顔	橘町二丁目 泉権	胡・譜有						
明和3・2	糸遊花紋盡	橘町二丁目 泉権	胡・譜有						
明和3・7	神眼大おとり	橘町二丁目 泉権	胡・譜有						
明和3・7	乱萩恋山路	橘町二丁目 泉権	胡・譜有						
明和3・8	(髪梳)霧の籬	橘町二丁目 泉権	胡・譜有						

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)	内題下署名/筆耕	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種	無刊記版IV種	無刊記版V種	無刊記VI種	無刊記VII種
明和3・11	恋の出雲路	橋町二丁目 泉権 上一冊	胡・譜有	下一冊胡譜有	A1胡・譜有	A1胡・譜有	A3胡・譜有	別版 I A3	胡・譜有		
明和3・11	我ころ	橋町二丁目 泉権	胡・譜有			Iの被彫	書体違	胡・譜有	A3誤刻有		
明和4・1	金色栄萬歳	橋町二丁目 泉権	胡・譜有	A2胡・譜有							
明和4・1	乱咲梅映香	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								
明和4・1	左右花兵交	橋町二丁目 泉権	胡・譜無								
明和4・1	琴の音	橋町二丁目 泉権	胡・譜有		A1胡・譜有	A3胡・譜有					
明和4・1	春の曙	橋町二丁目 泉権	胡・譜有			商標有					
明和4・1	(初日)童子戯面被	橋町二丁目 泉権	胡・譜有	別版胡・譜有	A2胡・譜有	同版Iカ胡譜有	Iの被彫	胡無・譜有			
明和4・4	(後日)稚子勇鎧踊	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								
明和4・4	末の春	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								
明和4・7	左文字	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								
明和4・7	染糸	橋町二丁目 泉権	胡・譜有		A1胡・譜有	A1胡・譜有					
明和4・11	塩衣須磨佛	橋町二丁目 泉権	胡・譜有		A1胡・譜有	A1・同版I	別版胡・譜有	別版胡無・譜有			
明和4・11	六出花吾妻丹前	橋町二丁目 泉権	胡・譜有		A1胡・譜有	胡・譜有	別版胡・譜有	別版胡無・譜有			
明和4・11	初恋心竹馬	橋町二丁目 泉権	胡・譜有		A2胡・譜有	A2胡・譜有	A2胡無・譜有	A2胡無・譜有	別版胡・譜有		
明和4・11	振袖京早咲	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								
明和4・11	魁都童	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								
明和5・2	揚屋入曲輪誰袖	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								
明和5・2	色競梅玉垣	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								
明和5・2	東撈賤妻木	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								
明和5・2	(めりやす)花夕榮	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								
明和5・2	廊桜	橋町二丁目 泉権	胡・譜有		A1胡・譜有						
明和5・3	初旅名取艸	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								
明和5・8	舞扇千艸装	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								
明和5・8	二世の縁	橋町二丁目 泉権	胡・譜有		A2胡・譜有	別版胡・譜有					
明和5・8	花楓穂出窓	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								
明和5・11	寒椿名所花	橋町二丁目 泉権	胡・譜有		別版胡・譜有						
明和5・11	(道行)置箱尾花袖	橋町二丁目 泉権	胡・譜有		A2胡・譜有	別版胡・譜有					
明和5・11	大鳥毛嫩緑	橋町二丁目 泉権	胡・譜有		A2胡・譜有	Iの被彫胡無譜有	別版胡・譜有	別版胡無・譜有	別版胡無譜有*12		
明和5・11	冬牡丹五色丹前	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								
明和5・11	(拍子舞)教草吉原雀	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								
明和5・11	(下冊)	作者桜田治助/ 富士田楓江述	胡・譜有		不明胡・譜有	A2胡・譜有	A2胡・譜有	別版	胡無譜有		
明和5・11	ぬくめ鳥	橋町二丁目 泉権	胡・譜有		不明胡・譜有	A2胡・譜有	IIと非同版	上下一冊			
明和6・1	(丹前)富つみ男丹前	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								
明和6・1	狂乱若木櫻	橋町二丁目 泉権	胡・譜有								

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)	内題下署名/筆耕/胡麻点・文字譜	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種	泉権/本儀相版
明和6・1	由縁花	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和6・3	(お菊)春の袖	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和6・3	(お菊)幸助(道行)	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和6・3	由縁の初櫻	富士田楓江直傳	胡・譜有					
明和6・3	旅柳二面鏡	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和6・5	江戸花陽曾我祭大踊	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和6・7	八千代釣竿	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和6・7	鞠子弓稚遊	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和6・7	嫩染分紅葉	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和6・7	色鹿子紅葉狩衣	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和6・11	隈取安宅松	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和6・11	彩色群高松	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和6・11	初深雪都花	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和7・1	未待誓言葉	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和7・1	春色鳥追姿	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和7・1	吾妻振花の閑札	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和7・1	御代松子日初恋	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和7・1	廓盆	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和7・1	梅か香	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和7・1	其容形七枚起請	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和7・1	住吉踊/お福女	(五冊之内一)冊	胡・譜有					
明和7・1	梳久	(五冊之内一)冊	胡・譜有					
明和7・1	芦の葉達磨	(五冊之内一)冊	胡・譜有					
明和7・1	虚無僧/文七	(五冊之内一)冊	胡・譜有					
明和7・1	かほよ鳥	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和7・5	潤色放下僧	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和7・6	撃鬘四社幣	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和7・7	(風流)香具賣/花火賣	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和7・7	今様はなかつみ	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和7・8	関東小六後雛形	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和7・11	梅顔壽丹前	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和7・11	翁草霜舞女	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和8・2	相生初若菜	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和8・2	主誰十重襦	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和8・8	千代見舳舳丹前	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和8・8	拾貝真砂翳	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和8・8	三保松常世通路	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和8・8	昔昔楓信樂	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和8・11	咲分籠	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)	内題下署名/筆耕	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種	泉権/本儀相版
明和8・11	雄舞縁寒菊	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和8・11	放下僧千代綾竹	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和9・1	懸想文賤の七種	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
明和9・2	縁種時	(綴じ目)二丁目 泉権	胡・譜有					
明和9・2	初恋富士太鼓	橘町二丁目 泉権	胡・譜有					
安永1・11	月都誓塩竈	正銘はんもと 泉権	胡・譜有					
安永1・11	恋のかげ針	正銘はんもと 泉権	胡・譜有					
安永1・11	初霜信田笠	正銘はんもと 泉権	胡・譜有					
安永1・11	真紅乱糸	正銘はんもと 泉権	胡・譜有		A2胡・譜有			
安永2・3	鶏合稚角力	(綴じ目)一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有					
安永2・3	松朝日鳥指	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有					
安永2・3	初昔文の仲立	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有		A2胡・譜有鼎峨印無			
安永2・3	掛合江戸名所盡	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有					
安永2・3	鎌倉風咲分丹前	(綴じ目)一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有		A2胡・譜有鼎峨印無	別版胡・譜有		
安永2・3	蝶鳥千年藤	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有		A1胡・譜有鼎峨印無			
安永2・3	女夫水	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有		A3胡・譜有鼎峨印無			
安永2・3	姿の乱咲	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有		A1胡・譜有鼎峨印無			
安永2・8	平戸名所談	(綴じ目)一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有					
安永2・8	仇浪鷺思羽	(綴じ目)一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有					
安永2・8	月猿片摘姿	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有					
安永2・8	道行法の芦分舟	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有		A1胡・譜有鼎峨印無			
安永2・8	(めりやす)月の弓	(綴じ目)一丁目 泉権	胡・譜有					
安永3・1	狂女山路梅	(奥)泉屋ごん四郎正						
安永3・1	(めりやす)夜半の鐘	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有	A3胡・譜有				
安永3・1	三幅対連理果籠	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有		A1胡・譜有鼎峨印無	別版胡・譜有		
安永3・1	梅丹前模様	本所松坂町一丁目 泉権	胡・譜有					
安永3・1	(琴哥)花散里	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有					
安永3・3	花信風折帽子	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有		A1胡・譜有鼎峨印有・譜有鼎峨印有			
安永3・4	其面影二人枕久	(綴じ目)一丁目 泉権	胡・譜有		A1胡・譜有	別版胡・譜有	IIの覆刻胡・譜有	
安永3・8	月額秋花鎗	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有					
安永3・11	風流錦誰袖	(綴じ目)一丁目 泉権	胡・譜有					
安永3・11	初霜楓姿繪	本所松坂町一丁目 泉権	胡・譜有					
安永3・11	空今櫻吹雪	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有					
安永3・11	(めりやす)夕時雨	本所松坂町一丁目 泉権	胡・譜有		A1胡・譜有			
安永4・2	温泉山路鶯	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有		A1胡・譜有鼎峨印無			
安永4・2	(めりやす)鳥もがな	本所松坂町一丁目 泉権	胡・譜有					
安永4・3	むかし艸	本所松坂町一丁目 泉権	胡・譜有					
安永4・3	家櫻朧雙陰	(綴じ目)一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有					
安永4・9	誰袖賤花賣	(綴じ目)一丁目 泉権	胡・譜有					

上演年月	曲名（外題）	版元1（元版）	内題下署名／筆耕／ 胡麻点・文字譜	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	泉権／本儀相版
安永4・11	亀万代島墓丹前	本所松坂町一丁目 泉権 （奥）泉屋権四郎正	胡麻点・文字譜 鼎峨印胡無・譜有			
安永4・11	濡衣波玉橋	本所松坂町一丁目 泉権	西川鈍通述 鼎峨印胡無・譜有		A1胡省略多・譜有述者無 鼎峨印胡無・譜有	
安永5・1	（めりやす）白と顔	本所松坂町一丁目 泉権	笠縫専助述 胡無・合			
安永5・1	（めりやす）帰る雁	本所松坂町一丁目 泉権	笠縫専助述 胡無・合			
安永5・1	（めりやす）廓灸すゑ	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡無・合			
安永5・1	（琴唄）琴とはば	本所松坂町一丁目 泉権正 作者 笠縫専助述	鼎峨印胡無・二上り、哥		A1胡無・二上り、哥 内題下作者無・鼎峨印無	
安永5・9	（めりやす）貞と顔	本所松坂町一丁目 泉権	笠縫専助述 胡無・合			
安永5・11	露時雨	本所松坂町一丁目 泉権	胡無・合			
安永5・11	氷鏡花野守	本所松坂町一丁目 泉権	胡無・合			
安永5・11	鉢扣紅葉袖	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡無・二上り、哥			
安永5・11	丹前錦園生	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡無・二上り、哥			
安永6・1	（めりやす）きせ綿	本所松坂町一丁目 泉権・複製・透写 鼎峨印胡無・三下り、合	胡無・合		別版胡無・三下り、合 透写胡無・二上り	
安永6・1	心の花	本所松坂町一丁目 泉権	胡無・合			
安永6・1	蝶花若草摺	本所松坂町一丁目 泉権	透写 胡・譜有		別版胡無・譜有	
安永6・1	（めりやす）言の葉	本所松坂町一丁目 泉権	欠本 胡・譜有			
安永6・3	霞立雲舞振	本所松坂町一丁目 泉権	胡・譜有			
安永6・4	道行恋弦掛	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有			
安永6・11	名寄幼角力	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有			
安永6・11	勝色衣籠英	本所松坂町一丁目 泉権	中村新七述 胡・譜有			
安永6・11	今様雪花車	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有			
安永6・11	（琴歌）園の笛	本所松坂町一丁目 泉権	胡・譜有			
安永6・11	（めりやす）雪の梅	本所松坂町一丁目 泉権	胡・譜有			
安永7・2	大津繪姿花	本所松坂町一丁目 泉権	胡無・上、合		A3胡無・譜有述者無 鼎峨印無 別版胡・譜有	
安永7・2	（道行）力竹箱根鶯	本所松坂町一丁目 泉権	中重述 鼎峨印胡・譜有			
安永7・2	双面濡春雨	本所松坂町一丁目 泉権	胡・譜有			
安永7・3	（女竹）男竹（分身五郎）	本所松坂町一丁目 泉権	中重述 胡・譜有			
安永7・3	さし茂艸	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有			
安永7・4	女狐縁花笠	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有			
安永7・4	花似振袖傘	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有			
安永7・5	家橘花男道成寺	本所松坂町一丁目 泉権	鼎峨印胡・譜有			
安永7・7	（道行）片輪車	本所松坂町一丁目 泉権	胡・譜有			
安永7・9	繰返七容鏡	本所松坂町一丁目 泉権	胡無・二上り、三下り			
安永7・11	花橘栄丹前	本所松坂町一丁目 泉権	胡少・譜有			
安永7・11	都娘菊の壽	本所松坂町一丁目 泉権	胡・譜有			
安永8・4	相生獅子	本所松坂町一丁目 泉権	がや版・村山源兵衛版と別版 鼎峨印胡無・譜有			
安永8・8	（めりやす）女郎花	本所松坂町一丁目 泉権 （奥）正本所（右同）	鼎峨印胡無・譜有			
安永8・11	（めりやす）雪の夜	本所松坂町一丁目 泉権	胡無・譜有			
安永9・1	色模様蝶に菊壽	本所松坂町一丁目 泉権	胡無・譜有			
安永9・2	春雨柳濡髪	本所松坂町一丁目 泉権	胡無・合			

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)	内題下署名／筆耕／	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	泉権／本儀相版													
安永9・9	山姥四季英	本所松坂町一丁目 泉権	杵屋林驚述 胡無・ツツミ哥、合		別版述者無 胡無・ツツミ哥、合														
安永9・11	霜の花窓の手管	本所松坂町一丁目 泉権	透写 胡無・合																
安永9・11	陸奥千賀の塩汲	本所松坂町一丁目 泉権	透写 胡無・合																
安永9・11	松六花雛鶴丹前	本所松坂町一丁目 泉権	透写 筆耕印有 胡無・合																
安永9・11	橘霜月長刀	本所松坂町一丁目 泉権	透写 胡無・合																
安永9・11	菊紅葉色中同士	本所松坂町一丁目 泉権	笠縫専助述 胡無・三下り、合			同版か覆刻 胡無・合三下り 内題下無													
天明1・4	舞扇君が蘭	本所松坂町一丁目 泉権	胡無・譜無																
天明1・4	教草吉原雀	本所松坂町一丁目 泉権	泉権																
天明1・4	参らせ候恋の哥口	本所松坂町一丁目 泉権	明和5年上演時泉権版の覆刻 胡無・三下り																
天明2・2	春霞袖梅枝	本所松坂町一丁目 泉権	透写 胡無・譜無																
天明2・4	田植唄	本所松坂町一丁目 泉権	胡無・合																
天明2・4	吾妻歌四季の蘭	本所松坂町一丁目 泉権	一部透写 胡無・合																
天明2・9	楓幣色隨意	本所松坂町一丁目 泉権	透写 胡無・合																
天明2・9	(めりやす)村さめ	本所松坂町一丁目 泉権	透写 胡無・本調子																
天明2・11	(めりやす)白たえ	本所松坂町一丁目 泉権	齊馬靈述 胡無・三下り、合方																
天明2・11	(奥)正本所(右同)	本所松坂町一丁目 泉権	胡無・三下り																
天明3・3	袖引都移画	本所松坂町一丁目 泉権	透写 胡無・合																
天明3・3	(めりやす)霞の華	本所松坂町一丁目 泉権	透写 胡無・合																
天明3・6	乗來恋入海	本所松坂町一丁目 泉権	透写 胡無・合																
桐座																			
上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)	内題下署名／筆耕／	富士屋	再版I種	富士屋	再版II種	富士屋	再版III種	富士屋	再版IV種	富士屋	再版V種	富士屋	再版VI種	富士屋	再版VII種	富士屋	再版VIII種
天明4・11	狂乱雲井袖	葎屋町かし通り 富士屋小十郎	胡無・ツツミ哥、二上り	住所	再版I種	再版II種	相版大傳馬町 二丁目伊賀屋	伊賀屋	相版神田鍋町	相版伊賀屋	再版伊賀屋	相版住所墨 森田屋金藏	伊賀屋	相版神田通	相版神田鍋町	西横丁伊賀屋	相版新泉町北側 伊賀屋		
天明5・1	四季の万歳	葎屋町かし通り 富士屋小十郎	胡無・哥、合	住所	再版I種	相版大傳馬町 二丁目伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	相版神田鍋町	相版伊賀屋	丁伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋		
天明5・2	春昔由縁英	葎屋町かし通り 富士屋小十郎	林驚述胡無・次第	住所	再版I種	相版大傳馬町 二丁目伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	相版神田鍋町	相版伊賀屋	相版住所墨 森田屋金藏	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋		
天明5・11	女夫松高砂丹前	葎屋町かし通り 富士屋小十郎	胡無・哥、ウタイ	住所	再版I種	相版大傳馬町 二丁目伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	相版神田鍋町	相版伊賀屋	相版住所墨 森田屋金藏	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋		
天明6・8	(めりやす)今朝秋	葎屋町かし通り 富士屋小十郎	胡無・三下り、合	住所	再版I種	相版大傳馬町 二丁目伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	相版神田鍋町	相版伊賀屋	相版住所墨 森田屋金藏	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋		
天明6・11	(今様)神楽月恵方万歳	葎屋町かし通り 富士屋小十郎	胡無・合方、三下り、合	住所	再版I種	相版大傳馬町 二丁目伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	相版神田鍋町	相版伊賀屋	相版住所墨 森田屋金藏	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋		
天明6・11	(琴唄)空音	葎屋町かし通り 富士屋小十郎	胡無・二上り	住所	再版I種	相版大傳馬町 二丁目伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	相版神田鍋町	相版伊賀屋	相版住所墨 森田屋金藏	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋		
天明6・11	(拍子舞)写繪雲井弓	葎屋町かし通り 富士屋小十郎	胡無・合	住所	再版I種	相版大傳馬町 二丁目伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	相版神田鍋町	相版伊賀屋	相版住所墨 森田屋金藏	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋		
天明7・1	菊壽の艸摺	葎屋町かし通り 富士屋小十郎	胡無・三下り、合	住所	再版I種	相版大傳馬町 二丁目伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	相版神田鍋町	相版伊賀屋	相版住所墨 森田屋金藏	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋		
天明7・3	七襲東雛形	葎屋町かし通り 富士屋小十郎	増補林驚述 胡無・二上り、三下り、合	住所	再版I種	相版大傳馬町 二丁目伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	相版神田鍋町	相版伊賀屋	相版住所墨 森田屋金藏	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋		
天明7・11	紅葉寄雪盞	葎屋町かし通り 富士屋小十郎	透写 胡無・三下り、ウタイ、哥	住所	再版I種	相版大傳馬町 二丁目伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	相版神田鍋町	相版伊賀屋	相版住所墨 森田屋金藏	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋		
天明7・11	(めりやす)文反古	葎屋町かし通り 富士屋小十郎	胡無・三下り、合	住所	再版I種	相版大傳馬町 二丁目伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	相版神田鍋町	相版伊賀屋	相版住所墨 森田屋金藏	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋		
天明8・1	准心の引綱	葎屋町かし通り 富士屋小十郎	胡無・本調子、二上り、合	住所	再版I種	相版大傳馬町 二丁目伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	相版神田鍋町	相版伊賀屋	相版住所墨 森田屋金藏	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋		
天明8・1	(めりやす)忍恋艸	葎屋町かし通り 富士屋小十郎	胡無・二上り	住所	再版I種	相版大傳馬町 二丁目伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	相版神田鍋町	相版伊賀屋	相版住所墨 森田屋金藏	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋		
天明8・4	(追善)藤しのだ吾妻紫	葎屋町かし通り 富士屋小十郎	胡無・前弾き、二上り	住所	再版I種	相版大傳馬町 二丁目伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	相版神田鍋町	相版伊賀屋	相版住所墨 森田屋金藏	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋		
天明8・8	(琴唄)紅葉のゑん	葎屋町かし通り 富士屋小十郎	胡無・二上り、合	住所	再版I種	相版大傳馬町 二丁目伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	相版神田鍋町	相版伊賀屋	相版住所墨 森田屋金藏	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋	伊賀屋		

市村座

上演年月	曲名(外題)	版元1 (元版)	内題下署名/筆耕/胡麻点・文字譜	再版I種	再版II種	再版III種
天明8・11	(拍子舞)五條橋往來の噂	市村茂兵衛/透写	胡無・哥合			
天明8・11	壽万歳	市村茂兵衛/山本重五郎/富士屋小十郎	胡無・二上り、三下り、合方			
天明9・1	(めりやす)袖の海	市村茂兵衛/山本重五郎/富士屋小十郎	胡無・譜無	相版平永町 森田屋金蔵/別版		
寛政1・3	相生獅子	市村茂兵衛/山本重五郎/富士屋小十郎	胡無・カン、合			
寛政1・8	山鷄月姿視	市村茂兵衛/山本重五郎/富士屋小十郎	胡無・ツツミ哥、三下り、合			
寛政1・11	神楽月梅見丹前	市村茂兵衛/山本重五郎	透写 胡無・合			
寛政2・3	吾嬬鳥娘道成寺	市村茂兵衛/山本重五郎	胡無・合			
寛政2・11	(歌浄瑠璃)浜柳松掛糸	市村茂兵衛/透写	胡無・本調子、合方、合			
寛政3・8	艶容狂言袴	市村茂兵衛/富士屋小十郎/山本重五郎	胡無・ツツミ哥、合			
寛政3・11	梅冬至春駒	市村茂兵衛/富士屋小十郎/山本重五郎	胡無・三下り、合			
寛政4・8	(めりやす)忍夫艸	市村茂兵衛/富士屋小十郎/山本重五郎	胡無・三下り、合、合方			
寛政4・8	七瀬川最中桂女	市村茂兵衛/富士屋小十郎/山本重五郎	杵屋弥十郎述 胡無・三下り			

桐座

上演年月	曲名(外題)	版元1 (元版)	内題下署名/筆耕/胡麻点・文字譜	再版I種	再版II種	再版III種
寛政6・11	(琴唄)小夜ころも	葺屋町 富士屋小十郎/山本重五郎	胡無・二上り、合方、合			
寛政7・11	(めりやす)松の雪	葺屋町 富士屋小十郎/山本重五郎	五瓶述 胡無・三下り、合			
寛政8・1	(めりやす)梅の香	葺屋町 富士屋小十郎/山本重五郎	胡無・本調子、合			
寛政8・7	(琴唄)闇の友	葺屋町 富士屋小十郎/山本重五郎	松井由輔述 胡無・二上り、合			
寛政8・7	(めりやす)東金	葺屋町 富士屋小十郎/山本重五郎	並木五瓶述 胡無・三下り、合			
寛政8・7	(めりやす)投嶋田	葺屋町 富士屋小十郎/山本重五郎	並木五瓶述 胡無・本調子、合			
寛政8・11	月の顔	葺屋町 富士屋小十郎/山本重五郎	胡無・本調子、合方、合			
寛政8・11	(めりやす)田毎月	葺屋町 富士屋小十郎/山本重五郎	胡無・三下り、合			
寛政9・1	(めりやす)いるさの月	葺屋町 富士屋小十郎/山本重五郎	五瓶述 胡無・二上り、合、合方			

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)	内題下署名/筆耕/胡麻点・文字譜	再版I種	再版II種	再版III種
寛政9・1	(めりやす)五大力	葺屋町 富士屋小十郎	五瓶述	胡無・三下り、合	同上版元	同上版元
寛政9・11	(めりやす)峯の松風	葺屋町 富士屋小十郎	五瓶述	胡無・三下り、合	同上版元	同上版元
寛政10・1	(めりやす)結び文	葺屋町 富士屋小十郎	五瓶述	胡無・三下り、合		
寛政10・3	(めりやす)四つの袖	葺屋町 富士屋小十郎	胡無・三下り、合			
寛政10・3	(めりやす)ゆかりの月	葺屋町 富士屋小十郎	胡無・本調子、合			

市村座	曲名(外題)	版元1(元版)	内題下署名/筆耕/胡麻点・文字譜	再版I種	再版II種
寛政10・11	鄙曲好中車	市村茂兵衛	胡無・三下り、合、一上り		
寛政11・4	(めりやす)時鳥	葺屋町 富士屋小十郎	胡無・二上り、合		
寛政11・7	(めりやす)恋の橋	葺屋町 富士屋小十郎	胡無・三下り、合方		
寛政11・9	(めりやす)笑くらべ	市村茂兵衛	胡無・本調子、合、合方		
寛政11・11	色真猿月夜神楽	葺屋町 富士屋小十郎	胡無・合		
寛政11・11	菊苗栄万歳	市村茂兵衛	胡無・合		
寛政11・11	(狂乱)雪吹の雛形	葺屋町 富士屋小十郎	胡無・ツヅミ哥、合	同上版元	相版大傳馬町 二丁目 伊賀屋
寛政11・11	(めりやす)鴛名残	市村茂兵衛	胡無・三下り、合		
寛政12・6	(めりやす)五大力	葺屋町 富士屋小十郎	胡無・三下り、合		

注 *1

奥書「▲此ころせけん。きやうけん二もいたし不申候。まきらわしきせりふ／あまた相見へ申候間。このうへ何二よろづ。まへ／＼。御ぞんじのはん元／よく／御あらためなされ御もとめくたされへく候／いずみや権四郎板／▲右此本ハ(松しま庄五郎／さかた兵四郎直傳之以板行仕候者之」

*2

本文が葺屋町かし通り富士屋小十郎版字表紙本『めりやす／新むけん』(松和文庫蔵)と同版。

*3

誤写力、四丁目が正しい。同じ大名題「寿曾我 第二番目」の入る宮古路正本『曾根崎妹背の森』と「寿曾我 第四番目」と入る宮古路正本『哥枕隠屏風』では橋町四丁目となっている。

*4

本文が葺屋町かし通り富士屋小十郎版字表紙本(竹内文庫07-880・松和文庫)と同版の關係にある。

*5

本文が葺屋町かし通り富士屋小十郎版字表紙本(竹内文庫07-1688・1689)と同版の關係にある。

*6

本文が葺屋町かし通り富士屋小十郎版字表紙本(松和文庫・早演特11-12123E)と同版關係にある。

*7

葺屋町南側富士屋小十郎版(竹内文庫07-568)のA3である。

*8

上一冊本と、上冊表紙に「上下」と入り下冊の表紙を除いて本文を続ける上下一冊本あり。

*9

元版が葺屋町南側富士屋小十郎版(竹内文庫07-1066・早演特11-1212-871・特11331236)とみられる。

*10

本文が、木挽町四丁目 大坂屋喜右衛門版字表紙本(東大国文学研究室蔵)と同版とみられる。

*11

本文が葺屋町南側富士屋小十郎版字表紙本(竹内文庫07-1646)と同版で先印である。

*12

葺屋町かし通り富士屋小十郎版(上野学園蔵・竹内文庫07-1335・1336)の本文が覆刻關係における元版とみられる。

表2 (版元1と本屋儀兵衛・無刊記版の表紙の関係 及び、大名題・座名の記載の比較)
市村座

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)・絵師名 / 大名題/ 座名	版元2	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種	無刊記版IV種	無刊記版V種
寛保2・1	思いの緋桜	泉権版・透写(絵なし) 富士見里栄曾我・第二番目 市村座	泉権版 文字A3 同上・番目無 市村座		2の絵A2・文字A3 同上・番目無 座名無 同上・番目無 市村座	Iと同版 同上・番目無 座名無 市村座	表紙2のA3 大名題無・番目無 市村座		
宝暦4・8	(新春駒)秋野月毛の駒	泉権版 由良千軒蟾兔湊・第二番目 市村座			上冊絵A2・外題紋A1 同上・番目無 市村座				
宝暦5・1	髪梳妹背鏡	泉権版 子宝愛護曾我・第二番目 市村座		大阪屋儀兵衛絵A2 同上・番目無 市村座	大坂屋と同版 同上・番目無 市村座	大坂屋と同版 同上・番目無 市村座	大坂屋と同版力 同上・番目無 市村座	表紙A2 大名題無・番目有 座名無	
宝暦5・8	門出京人形	泉権版 夕霧阿波鳴渡 市村座	泉版1の覆刻 同上 市村座		上冊絵A1・下冊絵A2 蟬丸都尾花 第四番目夕 霧阿波鳴渡 市むら 同上・同上 市村座	表紙Iと覆刻関係 同上・同上 市村座	絵A3 大名題無・番目無 市村座		
宝暦5・11	今様四季三番三	泉権版 樸椒峠吉例相撲・第一番目 市村座			表紙IのA2・紋を陰き 同上・同上 市村座	表紙IのA2 大名題無・番目無 (上冊無下冊市むら) 市村座	Iの下冊絵A2 大名題無・番目無 市村座	表紙別版*1 大名題無・番目無 市村座	
宝暦6・3	西州隅田川名所盡	泉権版・連名上部「哥哥」誤刻 梅若菜二葉曾我・第一番目 市村座	1の改刻「長哥」 同上・同上 市村座		表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・番目無 市村座	表紙A2・Iの覆刻 大名題無・番目無 市村座	表紙別版*2 大名題無・番目無 市村座	
宝暦6・11	百千島娘道成寺	泉権版 復花金王櫻・第一番目 市村座			表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・番目無 市村座	表紙A2・Iの覆刻 大名題無・番目無 市村座	表紙別版*2 大名題無・番目無 市村座	
宝暦8・3	雛祭神路桃 [上冊]宮女・春駒踊・杜若	泉権版 恋染隅田川・第一番目 市村座		表紙A1 同上・同上 市村座					
宝暦8・9	乱菊枕慈童	泉権版 星合源氏車・第三番目 市村座			表紙A2 同上・同上 市村座	表紙同版I 同上・同上 市村座			
宝暦8・11	(めりやす)小夜あらし	泉権版 顔鏡棧敷嵩・第二番目 市村座	泉権版1のA3 同上・同上 市村座		表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 大名題無・番目無 市村座	絵A2 同上・同上 市むら	表紙IIIのA3 同上・同上 市むら	表紙A3 同上・番目無 市村座
宝暦9・3	恋空蟬	泉権版 二十山蓬萊曾我・第二番目 市村座			表紙A2 同上・番目無 市村座		IIの被彫 同上・同上 市村座	表紙A3*3 同上・同上 市村座	表紙別版 同上・同上 市村座

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)・絵師名 /大名題/座名	版元2	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種	無刊記版IV種	無刊記版V種	無刊記版VI種
宝暦9・5	(菖蒲)杜若 根元草摺引	泉権版・下一冊 二十山蓬萊曾我・第二番目 市村座	泉権版・同版1 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座
宝暦10・6	鐘入解脱衣				表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座
宝暦10・6	(めりやす)仮枕	泉権版 曾我萬年柱・第二番目 市村座		表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座
宝暦10・11	剣鳥帽子照葉盃	泉権版 梅紅葉伊達大間・第二番目 市村座		表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座
宝暦11・1	(めりやす)雉子の雨	泉権版 江戸紫根元曾我・第一番目大詰 市村座	泉権版・同版1	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座
宝暦12・4	柳雛諸鳥囀 [上冊]布袋	泉権版 残雪縣曾我・第二番目大詰 市村座		表紙A2*4 同上・番目無 市村座	表紙A2 同上・番目無 市村座	表紙A2 同上・番目無 市村座	表紙A2 同上・番目無 市村座	表紙A2 同上・番目無 市村座	表紙A2 同上・番目無 市村座	表紙A2 同上・番目無 市村座
	[下冊]唐子	泉権版 残雪縣曾我・第二番目大詰 市村座		表紙A2 同上・番目無 市村座	表紙A2 同上・番目無 市村座	表紙A2 同上・番目無 市村座	表紙A2 同上・番目無 市村座	表紙A2 同上・番目無 市村座	表紙A2 同上・番目無 市村座	表紙A2 同上・番目無 市村座
	華笠踊	泉権版 残雪縣曾我・第二番目大詰 市村座		表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座
	草摺	泉権版 残雪縣曾我・第二番目大詰 市村座		表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座
	[上冊]鷺娘	泉権版 残雪縣曾我・第二番目大詰 市村座		表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座
	[下冊]内題なし	泉権版・誤刻「うしろめん」有 誤刻訂正除去 市村座	泉権版・覆刻1	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座
	[上冊]後面	泉権版 残雪縣曾我・第二番目大詰 市村座		表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座
	[下冊]傾城	泉権版 残雪縣曾我・第二番目大詰 市村座		表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)・絵師名 /大主題/座名	版元2	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種	無刊記版IV種	無刊記版V種
宝曆13・2	初咲法楽舞	泉権版 封文栄曾我・第一番目		絵IIIのA1*6 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	絵A1 大主題無・番目無 市村座	表紙A3 大主題有・番目有 市村座	表紙本儀の被彫 同上・同上 市村座	別版*7 同上・同上 市村座
宝曆13・2	紅梅夜濃鶴	泉権版 封文栄曾我・第二番目			表紙A2 同上・同上 市村座				
宝曆13・7	(めりやす)秋七種	泉権版 星合言葉東山栄・番目無		表紙A2 同上・番目無 市村座	表紙A2・本儀同版修 同上・番目無 市村座	絵A2・絵向き鏡合 同上・番目無 市村座			
宝曆14・3	女伊達姿花	泉権版 江戸染曾我雛形・第二番目		表紙A2 同上・同上 市村座	本儀版と同版 同上・同上 市村座				
宝曆14・5	乗掛情の夏木立			非同版I 恋女房染分手綱 座名無	同上・第八段目道行 市村座	IのA2 大主題無・段目無 市村座	本儀版の被彫 大主題有・段目無 座名無	Iの被彫 大主題有・段目有 市村座	
明和1・11	鞭桜宇佐幣	泉権版 若木花須磨初雪・第一番目	泉権版 別版 同上・同上 市村座						
明和1・11	花錦嫩丹前	泉権版 若木花須磨初雪・第一番目		表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A2・本儀版A2 大主題無・番目無 市村座	上冊絵A1 大主題無・番目無 市村座	IIの被彫り 大主題無・番目無 市村座	IVの同版後印 大主題無・番目無 市村座	
明和1・11	雪咲心の花	泉権版 若木花須磨初雪・第二番目			表紙A1 同上・同上 市村座				
明和2・1	夜鶴綱手車	泉権版 色上戸三組曾我・第一番目四立目		表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 大主題無・番目無 市村座	絵A1 大主題無・番目無 市村座	絵A3 大主題有・第一番目 市村座*8	
明和2・1	思ひ川	泉権版 色上戸三組曾我・第一番目六立目			表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座			
明和2・7	(少将道行)百夜車	泉権版 女夫星逢夜小町・第一番目			表紙A1 同上・同上 市村座	絵A1 大主題無・番目無 市村座			
明和3・11	恋の出雲路	泉権版 上一冊 東山殿劇朔・第一番目四立目		下一冊比較不能 同上・同上 市村座					
明和3・11	我こころ	泉権版 東山殿劇朔・第二番目大詰 市村座			絵A3・文字A2 同上・同上 市村座	絵A3・絵Iの被彫 同上・同上 座名無	A3の別版 同上・番目無 市村座	絵A1・文字A2 同上・二番目大詰 座名無	別版 同上・同上 市村座

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)・絵師名 /大名題/座名	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種	無刊記版IV種	無刊記版V	無刊記VI種	無刊記VII種
明和4・1	金色榮萬歳	泉権版 曾我和曾我・第一番二立目 市村座	表紙A2 同上・同上 市むら							
明和4・1	琴の音	泉権版 曾我和曾我・第一番六立目 市村座	表紙A2 同上・同上 市むら	表紙A2 同上・同上 市むら	表紙A3 同上・同上 市むら座					
明和4・4	(初日)童子戯面被	泉権版 太平記忠臣講釈續/世大坂二對女夫 市村座	繪A1題面被り 無/無 座名無	表紙A1 有/有 市むら	表紙A2・IA2 無/無 市むら	IIの被彫 無/無 市むら				
明和4・7	染糸	泉権版 義經千本櫻・第二番目序 市村座	表紙A2 同上・同上 市むら	表紙A2 同上・同上 市むら						
明和4・11	塩衣須磨佛	泉権版 鳥居清經圖 鶴重藤咲分勇者・四番續第一番目二立目 市村座	表紙A2絵師名無 同上・同上 座名無	表紙A2・IA2 大名題無・番目無 座名無・絵師名無	同版I後印 有・有 絵師名無	繪A2絵師名無 大名題無・番目無 市村				
明和4・11	六出花吾妻丹前	泉権版 鳥居清經圖 鶴重藤咲分勇者・四番續第一番目三立目 市村座	表紙A2絵師名無 同上・同上 市むら	上冊表紙A1 大名題無・番目無 破有座名・絵師名不明 表紙A2絵師名無 同上・同上 市村	繪A1絵師名無 大名題有・番目有 上冊無・下冊市むら	繪A2・覆刻関係 有・有 市村座				
明和4・11	初恋心竹馬	泉権版 鳥居清經圖 鶴重藤咲分勇者・四番續第一番目四立目 市村座	表紙A1絵師名無 同上・同上 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	繪A2・覆刻関係 有・有 市村座					
明和5・2	廊桜	泉権版 酒宴曾我鸚鵡返・四番續第二番目 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座						
明和5・8	二世の縁	泉権版 伊勢磨大同一年・四番續第一番目四立目 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	繪A2 同上・同上 座名無						
明和5・11	寒椿名所花	泉権版 男山弓勢競・第一番目三立目 市村座	繪A2 同上・第一番目 座名無							
明和5・11	(道行)置霜尾花袖	泉権版 男山弓勢競・第一番目三立目 市村座	表紙A2 同上・第一番目 市村座	表紙A3 大名題無・番立目無 市村座						
明和5・11	冬牡丹五色丹前	泉権版 男山弓勢競・第一番目五立目 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座	表紙A2・IA2 大名題無・番立目無 市村座	別版 同上・番立目無 市村座					
明和5・11	(拍子舞)教草吉原雀 (上冊)	泉権版 男山弓勢競・四番續第二番目 市村座	表紙A1カ 不明 市むら	表紙A2 大名題有・續番目無 市むら	表紙A2・I被彫 大名題有・番立目有 座名無	A2・IIの被彫カ 無・無 市村座	別版 華面 大名題有・番目有 市村座*10	VIの被彫カ 大名題・番目有 市村座絵師名無		

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)・絵師名 /大名題/座名	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種	無刊記版IV種	無刊記版V種	泉権/本儀相版
明和5・11	(拍子舞)教草吉原雀 (下冊)	泉権版 男山弓勢競・四番續第二番目 市村座		未確認	表紙A2 同上・第二番目 市村座	表紙A2 大名題無・續番目無		繪A2 有・有 市村座	
明和6・7	鞠子弓稚遊	泉権版 一富清和年代記・第一番目三立目 市村座		表紙A2 同上・同上 座名無	繪A1・IA2 大名題無・番立目無 座名無	表紙A2・翌刻関係I 大名題有・番立目有 座名無		繪A1 大名題無・番立目無 市村座	
明和6・7	嫩染分紅葉	泉権版 一富清和年代記・四番續第二番目 市村座		表紙A2 同上・同上 座名無					
明和6・11	色鹿子紅葉狩衣	泉権版 雪梅顔見勢・四番續第一番目三立目 市村座	表紙A2 同上・同上 市村座						
明和6・11	限取安宅松	泉権版 雪梅顔見勢・四番續第一番目四立目 市村座		表紙A1 同上・同上 市村座	同上・續番立目無 市村座	同上・繪A1上下一冊 大名題無・續番立目無 市村座			
明和7・1	御代松子日初恋	泉権版 富士雪會稽會我・四番續第一番目四立目 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	繪A2 大名題無・續番立目無 市村座	別版 大名題有・同上 市村座				
明和7・1	廓盆	泉権版 富士雪會稽會我・四番續第二番目序幕 市村座		表紙A1 同上・同上 市村座	別版 同上第二番目序幕 市村座				
明和7・1	其容形七枚起請(五卷六冊)のうち、 婉久(一冊)	泉権版 富士雪會稽會我・四番續第二番目 市村座	別版 大名題無・續番目無 市村座						
明和7・1	虚無僧/文七 (上下一冊)	泉権版 富士雪會稽會我・四番續第二番目 市村座	同上・表紙A2 同上・同上 市村座						
明和7・1	かほよ鳥	泉権版 富士雪會稽會我・四番續第二番目中幕 市村座	表紙A1 同上・同上 市村座	表紙A2 同上・第二番目中幕 座名無					
明和7・7	(風流)香具賣/花火賣	泉権版 粧相馬紋日・四番續第一番目二立目 市村座		表紙A2 名題無・續番立目無 表紙破損により不明					
明和7・7	今様はなかたみ	泉権版 粧相馬紋日・四番續第一番目四立目 市村座		表紙A2 同上・續番立目無 市村座					

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)・絵師名 /大名題/座名	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種
明和7・8	関東小六後雛形	泉権版 粧相馬紋日・四番續第二番目大詰 市村座	表紙A2 同上・同上 市村	絵A2・絵本儀のA1 同上・同上 市村		
明和7・11	梅顔壽丹前	泉権版 女男菊伊豆着綿・四番續第一番目四立目 市村座	表紙A2 同上・續番立目無 座名無	絵A2・絵本儀のA1 大名題無・續番立目無 市村		
明和7・11	翁草霜舞女	泉権版 女男菊伊豆着綿・四番續第一番目五立目 市村座		表紙A2 同上・同上 市村	絵A1 同上・第一番目五立目 市村	
明和8・2	相生初若菜	泉権版 和田酒宴納三組・四番續第一番目三立目 市村座		表紙A2 同上・同上 市村		
明和8・11	咲分籠	泉権版 梅世嗣鉢木・四番續第一番目二立目 市村座	表紙A2 大名題無・續番立目無 市村			
安永1・11	真紅乱糸	泉権版 江戸容儀曳綱坂・四番續第一番目四立目 市村座		表紙A2 大名題無・續番立目有 市村		
安永2・3	初昔文の仲立	泉権版(本所松坂町一丁目) 江戸春名所曾我・四番續第一番目四立目 市村座		表紙A2 大名題無・續番立目無 市村		
安永2・3	鎌倉風咲分丹前	泉権版 江戸春名所曾我・四番續第一番目五立目 市村座		絵A1 同上・第一番目五立目 市村座		
安永2・3	蝶鳥千年藤	泉権版 江戸春名所曾我・四番續第一番目五立目 市村座		表紙A2 同上・續番立目無 市村	表紙A2 同上・續番立目無 市村座	
安永2・3	姿の乱咲	泉権版 江戸春名所曾我・四番續第二番目中幕 市村座		表紙A2 同上・續番立目無 市村		
安永2・8	(めりやす)月の弓	泉権版 四天王寺幟供養・四番續第二番目 市村座		表紙A2 同上・續番立目無 市村座		
安永3・1	(めりやす)夜半の鐘	泉権版 結鹿伊達染曾我・四番續第一番目三立目 市村座	表紙A3絵師名無 同上・同上 市村座			
安永3・1	三幅対連理巢籠	泉権版 結鹿伊達染曾我・四番續第一番目三立目 市村座		表紙A2 大名題無・續番立目無 市村座	絵A1 大名題無・續番立目無 市村	

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)・絵師名 ／大名題／座名	本屋儀兵衛版 表紙A3 同上・同上 市村座	無刊記版I種	無刊記版II種	無刊記版III種	泉権／本儀相版
安永3・1	(琴哥)花散里	泉権版 結鹿伊達染曾我・四番續第一番目五立目 市村座					
安永3・3	花信風折帽子	泉権版 上下二冊 結鹿伊達染曾我・四番續第二番目 市村座		上冊表紙A2 大名題無・續番目無 市村 上下一冊			
安永3・4	其面影二人婉久	泉権版 上下二冊 無(八代目市村羽左衛門十三回忌追善所作) 市村座		無 市村 上下一冊	上冊絵A1 無 市むら 上下一冊	上冊絵A1・II被彫 無 市むら 上下一冊	
安永3・11	(めりやす)夕時雨	泉権版 清經画 児櫻十三鐘・第二番目 市村座		表紙A2 絵師名無 大名題無・番目無 市村座			
安永4・2	温泉山路鶯	泉権版 清經画 栄曾我神樂太鼓・第一番目三立目 市村座		表紙A2 絵師名無 大名題無・番立目無 市むら			
安永4・11	濡衣波玉橋	泉権版 清經画 親船太平記・第二番目 市村座		表紙大部分破損につ き不明			
安永4・12	(めりやす)むつのはな			関係不明 親船太平記・第二番目 市村座			
安永5・1	(琴唄)琴とはば	泉権版 清英画 杵屋作十郎直傳 冠言葉曾我由縁・第一番目五立目 市村座		絵A2 絵師名無・直伝者無 同上・番立目無 市むら座			
安永5・9	露時雨			関係不明 透写本 楓錦龜山通・番目無 市村座			
安永5・11	丹前錦菌生			関係不明 大名題無・番目無 市村			
安永5・11	(めりやす)きせ綿	泉権版 清經画 透写・複製存 姿花雪黒主・第二番目 市村座		表紙A1 絵師名無 同上・同上 市村座	表紙A1 絵師名無 同上・番目無 市村		
安永6・1	心の花			関係不明 大名題無・番目無 市村			
安永6・3	霞立雲舞振	泉権版 清經画 常磐春羽曾我・第二番目 市村座		表紙A2 絵師名無 同上・番目無 市村			

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)・絵師名 /大名題/座名	本屋儀兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種	泉権/本儀相版
安永6・11	(めりやす)雪の梅	泉権版 清經画 児華表飛入阿柴・第二番目 市村座		表紙A2 清經画 同上・番目無 市村座		
安永7・2	(道行)力竹箱根鷲	泉権版 清經画 穠木雛高尾曾我・第一番目三立目 市村座		表紙A1 絵師名無 大名題無・番立目無 市村座		
安永7・2	双面濡春雨	泉権版 清經画 穠木雛高尾曾我・第一番目四立目 市村座		表紙A3 絵師名無 大名題無・番立目無 市村座		
安永9・9	山姥四季英	泉権版 聡浄瑠璃坂・中之巻切狂言 市村座		表紙A2 大名題無・無 市村座		
安永9・11	菊紅葉色中同士	泉権版 群高松雪簾・第二番目 市村座				透写本絵無・文字Aカ 同上・同上 市村座

注

- *1 表紙が葺屋町かし通り 富士屋小十郎版絵表紙本(竹内文庫07-1688・1689)の同版先印になる。版元欄は空欄。
- *2 表紙が葺屋町かし通り 富士屋小十郎版絵表紙本(松和文庫蔵・早演特111-1212-83F)の同版先印となる。
- *3 葺屋町南側 富士屋小十郎版絵表紙本(竹内文庫07-568)と覆刻関係にある。
- *4 2種の本屋儀兵衛版がある。⑦上下二冊本、⑧上下一冊本であるが、⑧の表紙は⑦の上冊と同版で本文は別版である(下冊の表紙を除いてある)。
- *5 表紙が同版の⑦上一冊本、⑧の上下一冊本(2種)がある。⑦は表紙に「上」と入る。⑧は表紙に「上」がない。⑨は表紙に「上下」と入る。
- *6 本屋儀兵衛版に⑦⑧2種あり。両方ともに無刊記版III種の絵A1である。(本文は泉屋版とそれぞれ別版)。
- *7 葺屋町南側 富士屋小十郎版絵表紙本(竹内文庫07-1066・早演特111-1212-871・早演特113-312-36)が覆刻関係の元版とみられる。
- *8 版元欄に「葺屋町南側 富士屋小十郎」と入る絵表紙本(竹内文庫07-1646)が覆刻関係の元版とみられる。
- *9 葺屋町かし通り 富士屋小十郎版絵表紙本(上野学園蔵・竹内文庫07-1335・1336)が覆刻関係の元版とみられる。
- *10 無刊記VI種とVII種は上下一冊本。

〔所蔵一覧〕市村座・桐座の長唄薄物

色里踊口説あれみさしゅんせ節 元1：原本集成

大踊こんこりき節 元1：原本集成

やつし西行富士見五郎 元1：演特ト13-417-2

江戸桜五人男掛合文七節 元1：演特ト13-417-1

曾我踊口説 狩場大踊 元1：図354

小山田太郎物狂せりふ 元1：原本集成

孤東柳 元1：原本集成1

文月弓矢誉 元1：東洋文庫

(大坂土産)丹前縫踊 元1：原本集成1

姿花五色桜 元1：芸W768.4E透写絵無

思いの緋桜 元1：演安1E、元2：芸W768.4E透写、

I：演安76A、II：松浦・早演和ト13-118、

III：竹07-2044

今様こんくわい信田妻 元1：芸W768.4E透写

高尾さんげの段 元1：パ3261

釣狐鎧乱曲 元1：芸W768.4E透写

東雲いもせの八声 元1：芸W768.4E透写

(掛合)鼓哥 元1：芸W768.4E透写欠本

元服花菖蒲 元1：パ3262

紫宵宿夜霜 元1：パ3262

鶴の丸日の出男 元1：パ3262

(土手八町)當世羽織 元1：パ3262

菜の花小蝶の袂 元1：パ3261

子宝木の葉の絹 元1：パ3261

坂田金時道行 元1：パ3262

放下僧小切子所作の段 元1：パ3261

室の閨魁丹前 元1：パ3261

浦山吹東人形 元1：パ3261

朧月面影花 元1：加2・パ3261

鳴神上人北山桜 元1：霞・パ3262

花笠娘丹前 元1：加3・パ3263

無間の鐘 元1：パ3261・演安2D

振分髪獅子乱曲 元1：加4・パ3261

(新春駒)秋野月毛の駒 元1：加4・パ3261・3263

・演安3B、I：明

風流妹背の柱建 元1：加4・加4・パ3261

高砂丹前 元1：加4・パ3261

髪梳妹背鏡 元1：加5・演安3E・パ3263、儀：黒、

I：竹07-2610、II：竹07-2034、III：演安80F、

IV：松浦

(四季詠)牡丹邯鄲里 元1：加5

浪枕桔梗物狂 元1：加5・演安3F・パ3261

門出京人形 元1：加5・松、元2：加5・パ3261・

演安3G、I：演安80G・演和ト13-419-9

蟬丸都尾花 元1：加5・パ3261

雛形源丹前 元1：加5・パ3261

今様四季三番三(上冊) 元1：加5・パ3261・東・

演安3H、I：芸N9・演和ト13-443-14・和ト13-444・

辻・竹07-69と70・明、II：演安81C、

III：演特ト13-443-15・和ト13-119・演安81B

両州隅田川名所盡 元1：演安4Aと82A・明・

演和ト13-426-6、元版2：東・パ3261、

I：演安82B・和ト13-122・演和ト13-434-7・

竹07-1686と1687・松・芸N9・霞(上1冊)、

II：明・国、III：霞(下1冊)、IV：演特ト13-443-17

花曇忠義金 元1：演特ト13-448-7透写

呼小鳥印の柳 元1：『近世日本舞踊史』表紙掲載

名取川 元1：演特ト13-448-8透写

百千鳥娘道成寺 元1：明・演安4C・和ト13-424-36、

I：芸N12・抱・松・黒1706・1711・竹07-1523・1524

・1525・1526他・パリ3263・演安82Hと83ABCD、

II：明・霞・竹07-3210、III：芸N9・演和ト13-126、

IV：演和ト13-424-37、V：演和ト13-288

弓力手くなゑ丹前 元1：パ3263

鳥指浮流朝比奈 元1：加6

(めりやす)花の香 元1：演安4D・抱・パ3263

(からくり橋弁慶)月の出汐 元1：パ3263

忍笠堤の関路 元1：『江』表紙掲載

粧六花 元1：パ3263

花に酔姿の友 元1：演特ト13-448-13透写上冊

昼夜太夫のせりふ 元1：同上下冊

雛祭神路桃

[上冊]官女・春駒踊・杜若 元1：パ3263・演安4H、

儀：演特ト13-443-20・辻

[中冊]鍵踊・傾城 元1：演安4H・明・パ3263、
 I：竹07-1295・演安84H・和ト13-434-6F、
 II：竹07-3120
 [下冊]山賤・布さらし 元1：演安4H・パ3263表紙欠
 野路母子草 元1：演安4I・特ト13-448-14透写
 紫の曙大踊り 元1：演特ト13-448-15透写絵無
 乱菊枕慈童 元1：演安5A・和ト13-426-1と2・
 竹07-3271、I：竹07-1657・1658・3271・3273他・
 花・芸N9・明・演安84JK・演特ト13-443-26・辻・蜂、
 II：明・竹07-1663ト3272・上・芸N12、
 III：演安84Lと 85A・演和ト13-125・芸N11、
 IV：竹07-1657、V：竹07-1665・2124・和ト13-426-3
 ・特ト13-476-19
 乱調尾上鐘 元1：パ3263・演特ト13-448-17透写
 面影青砥瀧津瀬 元1：パ3263・『江』
 (めりやす)小夜あらし 元1：演和ト13-420-4・
 芸N24/2表紙欠、元2：演和ト13-420-5、
 I：竹07-566・演和ト13-114・和ト13-413-8表紙存
 ・松、II：芸N9、III：竹07-567・抱、IV：明、
 V：抱・竹07-2041
 無間鐘 元1：演特ト13-448-20透写
 花子 元1：演特ト13-448-21透写
 曲輪歌仕方形万歳 元1：パ3263
 恋空蟬 元1：演特ト13-417-8、I：演和ト13-419-50
 ・和ト13-434-6A
 姿の華 元1：演安5E
 (菖蒲/杜若)根元草摺引 元1：パ3263、
 元2：演和ト 13-282・辻、I：竹07-539・540・2742・
 芸N9・演安5D・85GH・演和ト13-83・松・抱、
 II：竹07-2050、III：演特ト13-443-32、
 IV：上・芸N11
 分身鉄五郎 元1：『芸古代鸚鵡石掛合本』に所収
 髪梳夜撫子 元1：演特ト13-448-22透写
 女舞紅葉賀 演特ト13-311透写(欠本)
 幼愛四季の万歳 元1：パ3263
 鐘入解脱衣 元1：加8
 鎌倉風真田笠紐 I：明、II：芸N3・演和ト13-121・
 特ト13-429-4
 (めりやす)仮枕 元1：竹07-2390、儀：演和ト13-95
 夜半の乱髪 元1：パ3263

色見草 元1：パ3263
 剣烏帽子照葉盃 元1：パ3263・抱、I：竹07-479・
 2710・明・芸N9とN11・演安5Iと85K・演特ト
 13-443-34・演特ト13-443-34・演和ト13-444-2I・
 演和ト13-419-45、II：花、III：霞、IV：竹07-2032、
 V：演安86A、VI：明・演和ト13-419-46
 (めりやす)雉子の雨 元1：竹07-2391、
 元2：演安5J、I：演和ト13-419-31と32、
 II：演和ト13-87、III：竹07-2037
 紋日簾拍子 元1：加8・芸「古代鸚鵡石掛合」上冊
 姿乱菊 元1：『川』表紙掲載
 鶯の色羽粧ひ丹前 元1：パ3263
 雙紋雪の俤 元1：パ3263
 浦千鳥見女汐汲 元1：芸N24/2・パ3263
 籬の垣衣草 元1：パ3263・演安6E
 (髪梳)夜玉櫛 元1：パ3263
 柳雛諸鳥囀
 [上冊]布袋 元1：演安87C・パ3263、儀㊦：演安 6G
 ・竹07-1618と3231・演和ト13-77、儀㊧：明、
 I：竹07-2023・明、II：上・明・演安87D・
 竹07-3248
 [下冊]唐子 元1：演安87C・パ3263、儀㊦竹07-1619
 と3231・演安6Gf・和ト13-77、I：上
 華笠踊 元1：演安6Gd・パ3263、儀：竹07-1617
 と3229
 草摺 元1：演安6Gg・パ3263、儀：竹07-3232
 [上冊]鶯娘 元1：花333・パ3263、I：演安86IとJ、
 II：演安6Ga・花333・竹07-3233(表紙に「上下」と
 入る)、III：上、IV：竹07-3230・明・芸N9
 [下冊]内題なし 元1：パ3263、元2：花・抱・
 演安6Ge、I：花・松・演安87B
 [上冊]後面 元1：パ3263・上・芸N11、
 儀：竹07-1609・辻、I：演安6Gb・演特ト13-443-43
 ・竹07-1608、II：霞・明、III：明
 [下冊]傾城 元1：パ3263、I：竹07-1616
 (めりやす本調子)松虫 元1：演安7A・パ3263破
 糸縷賤緒巻 元1：パ3263
 雛形娘丹前 元1：パ3263・演安7B
 初咲法楽舞 元1：パ3263、儀㊦：花、儀㊧花・
 演安87H、I：演安7D・演特ト13-443-45、

II : 竹 07-1062・芸N9とN111・演和13-423-3・松、
 III : 明・竹07-1060・1061・3009・演和13-109、
 IV : 演安87G・竹07-2039、V : 竹07-3010
 紅梅夜濃鶴 元1 : パ3263・演安7E・演和13-419-52、
 I : 演特13-443-46
 卯花相の山 元1 : パ3263・芸N24/2本文存
 所縁の茶杓 元1 : 演特13-448-37透写
 (めりやす)秋七種 元1 : 演和13-418-3・芸N24/2
 本文存、儀 : 芸N11・演和13-418-4・演安7F、
 I : 演和13-64、II : 演特13-443-47
 狂乱情姿繪 元1 : パ3263
 紅葉傘住吉丹前 元1 : パ3263・演安7I下冊
 玉櫛笥寝鐘 元1 : パ3263・演安7H表紙存
 (拍子舞)恋文字道中雙六 元1 : パ3263
 (無間鐘)昔草 元1 : 演安8E
 女伊達姿花 元1 : 演安8Dと85B・パ3263表紙破
 儀 : 明・竹07-2047、I : 明、
 狂乱手管のすががき 元1 : パ3263
 乗掛情の夏木立 儀 : 抱、I : 演安88Cと8F・
 演和13-422-15、II : 竹07-2045、III : 芸N3・
 演特13-429-12・演特13-312-28、IV : 演安88
 DとE、明
 有明鶏 元1 : 芸N24/2
 川柳二つの竹 元1 : 演特13-448-44透写
 冬至梅雪の空炷 元1 : 演特13-448-47透写
 鞭桜宇佐幣 元1 : 明上下2冊・演安8H下1冊、
 元2 : 演安8H上1冊欠本
 花錦嫩丹前 元1 : 演安89A、儀 : 演安89B・芸N12
 I : 上・竹07-2052、II : 明・演特13-429-7、
 III : 演特13-443-50、IV : 竹07-1148
 浜衛幾世月 元1 : 明破・演特13-448-46透写
 冬小菊御乳女童 元1 : 演特13-448-45透写
 雪咲心の花 元1 : 芸N24/2・演安8Iと89E、
 I : 演安89F・和13-434-6D・竹07-2395破
 雪傘積恋歌 元1 : 演安8J
 夜鶴綱手車 元1 : 芸N24/2・明・演安9A破と89G汚
 ・演特13-417-17・18・パ3263、I : 上・演安89H
 ・明、II : 霞、III : 竹07-1645・演和13-110、
 IV : 竹07-3266
 思ひ川 元1 : 演安9Bと89L・パ3263、

I : 演安 89M、II : 演和13-113・演和13-418-52
 里花浮空炷 元1 : 演安9D・パ3263
 十寸鏡 元1 : パ3263・芸N24/2・明・演安9Cと90A
 花扇裾野神瑞籬 元1 : 演安9E
 (少将道行)百夜車 元1 : 演安9F・パ3263、
 I : 演安90B、II : 演安90C
 朝顔 元1 : 演安9Gと90F
 糸遊花紋盡 元1 : 演安9M・演特13-101
 神唄大おとり 元1 : 演安10A
 乱萩恋山路 元1 : 演安10B
 (髪梳)霧の籬 元1 : 国
 恋の出雲路 元1 : 演安10Da上1冊、
 儀 : 演安10 Db下1冊
 我がころ 元1 : 花・芸N24/2破、I : 演安10Eと91E
 ・演和13-426-9と10、II : 霞、III : 芸N9・抱、
 IV : 芸N11・竹07-2401・演和13-443-56・
 演和13-68・和13-434-6F・明、V : 竹07-3288
 金色栄萬歳 元1 : 演安11C、儀 : 芸N12
 乱咲梅映香 元1 : 演安11Dと92E
 左右花兵交 元1 : 演安11E上1冊
 琴の音 元1 : 明、I : 演安92F、II 演安11F
 春の曙 元1 : 芸N24/2
 (初日)童子戯面被 元1 : 明・辻、儀 : 竹07-1483
 I : 演安11G・演特13-443-62、II : 竹07-2033、
 III : 上
 (後日)稚子勇鎧踊 元1 : 演安11H・明破
 末の春 元1 : 『日本歌謡集成』9巻口絵に所収
 左文字 元1 : パ3263・芸N24/2本文存
 染糸 元1 : パ3263・芸N24/2本文存、
 I : 松・竹07-2404
 塩衣須磨佛 元1 : パ3263、I : 松・花333・花333
 竹07-2767、II : 演安12A・霞・竹07-2049、
 III : 演安94A表紙破、IV : 芸N9
 六出花吾妻丹前 元1 : パ3263・竹07-1461・1462
 I : 芸N11、II : 竹07-2053表紙破、
 III : 芸N9上下1冊・演和13-123上下2冊
 初恋心竹馬 元1 : パ3263・花335・抱・演安12B、
 I : 演安94D・演和13-423-2・演特13-443-67、
 II : 国・芸N9・演和13-82、III : 霞・演安94F、
 IV : 竹07-2035、V : 演安94E

- 振袖京早咲 元1：パ3263
- 魁都童 元1：パ3263・明破
- 揚屋入曲輪誰袖 元1：パ3263
- 色競梅玉垣 元1：パ3263
- 東撈賤妻木 元1：パ3263、儀：漆崎
- (めりやす)花夕榮 元1：パ3263
- 廓桜 元1：パ3263・芸N24/2本文存、
I：演安12Eと94J汚れ有、
- 初旅名取艸 元1：パ3263
- 舞扇千艸装 元1：パ3263・竹07-1356本文存
- 二世の縁 元1：パ3263・明・国(表紙破)・芸N24/2、
I：演安12Iと94K、II：演安94L・演和13-91
- 花楓穂出恋 元1：パ3263
- 寒椿名所花 音パ3263、I：演安12L
- (道行)置霜尾花袖 元1：パ3263・辻、
I：演特13-443-69・松、II：竹07-194・演安12N
- 大鳥毛嫩緑 元1：パ3263
- 冬牡丹五色丹前 元1：パ3263・演安95EGと95F
・演和13-423-57・抱、I：演安95H・竹07-1333
と1334・黒・花333・抱、II：竹07-2028と3132、
III：芸N9・演和13-423-58、IV：演和13-423-59、
V：竹07-3133
- (拍子舞)教草吉原雀 元1：(上下2冊)演安13Aと95I
・辻・パ3263、I：(上下2冊)辻カ、
II：(上册)演安95J・演特13-443-71、
(下册)芸N17・演特13-443-71、
III：(上下2冊)竹 07-2025、IV：(上册)上、
V：(上下2冊)演和 13-117、
VI：(上下1冊)竹07-2544、
VII：(上下1冊)竹07-3318。[IとIIは確認必要]
- ぬくめ鳥 元1：芸N24/2・演安13B汚れ
- (丹前)筥つつみ男丹前 元1：パ3263
- 狂乱若木櫻 元1：パ3263(2冊有り)・演安13I
- 由縁花 元1：パ3263・芸N24/2・演安13Jと97B
- (髪梳)春の袖 元1：パ3263・演安13Lと97D・芸N24/2
- (お菊/幸助)道行由縁の初櫻 元1：パ3263・パ3263
- 旅柳二面鏡 元1：パ3263・演安14Aと98A下1冊
- 江戸花陽曾我祭大踊 元1：芸W768.52/E透写
- 八千代釣竿 元1：パ3263・演安14C
- 鞠子弓稚遊 元1：パ3263、I：演安14D、II：抱、
III：抱、泉/儀：演安98C・演特13-429-9a
- 嫩染分紅葉 元1：パ3263・演安14E、
I：芸 768.52/E24
- 色鹿子紅葉狩衣 元1：パ3263・花335、
儀：演安 14H
- 隈取安宅松 元1：パ3263・上、I：演安14Jと98I、
II：竹07-2051、III：明・演和13-280
- 彩色群高松 元1：パ3263・演安14I
- 初深雪都花 元1：パ3263・演安14Hと99D・花335
- 末待誓言葉 元1：パ3263・演安15Dと99K・花335
- 春色鳥追姿 元1：パ3263・演安15E・花335
- 吾妻振花の関札 元1：パ3263・演安15G・花335
- 御代松子日初恋 元1：パ3263・演安15F・花335、
儀：松・辻、I：明：芸768.52/E、II：竹07-3184
- 廓盃 元1：パ3263・演安99L・花335・抱、
I：明・演安99M・和13-120、II：演安15H・抱・
演和13-413-6F表紙存
- 梅か香 元1：パ3263表紙破・花335
- 其容形七枚起請
住吉踊/お福女 元1：パ3263・演安15J・花335
椀久 元1：パ3263・演安15J・花335、
儀：演安100B
- 芦の葉達磨 元1：パ3263・演安15J・花335
- 虚無僧/文七 元1：(上下2冊)パ3263・演安15J
・花335、儀：(下1冊)芸N9・演特13-429-11・
竹07-2876(表紙に「上下」なし)
- かほよ鳥 元1：パ3263・花335、儀：演安15I・
竹07-2408、I：霞
- 潤色放下僧 元1：パ3263・花335
- 髻鬘四社幣 元1：パ3263・花335
- (風流)香具賣/花火賣 元1：パ3263、I：抱(表紙破)
- 今様はなかつみ 元1：パ3263、I：竹07-2036
- 関東小六後雛形 元1：パ3263、儀：演安16B・抱、
I：演安100E・竹07-2620
- 梅顔壽丹前 元1：パ3263、儀：演安16H、
I：本安100I
- 翁草霜舞女 元1：パ3263・花335・辻、I：辻・
竹07-2539、II：演安16G
- 相生初若菜 元1：パ3263(2冊有り)・花335、
I：演安17Dと100K

主誰十重襦 元1：パ3263(2冊有り)・花335
 千代見艸榮丹前 元1：パ3263
 拾貝真砂襦 元1：パ3263
 三保松常世通路 元1：パ3263
 昔昔楓信楽 元1：パ3263
 咲分簾 元1：パ3263、儀：演安17K汚れ
 雄舞縁寒菊 元1：パ3263
 放下僧千代綾竹 元1：パ3263
 懸想文賤の七種 元1：パ3263
 縁種蒔 元1：パ3263
 初恋富士太鼓 元1：パ3263・松・演特ト13-80
 月都誓塩竈 元1：パ3263
 恋のかけ針 元1：パ3263
 初霜信田笠 元1：パ3263・演和ト13-81
 真紅乱糸 元1：パ3263・花333、I：演特ト13-443-81
 鶏合稚角力 元1：パ3263
 松朝日鳥指 元1：パ3263
 初昔文の仲立 元1：パ3263・演特ト13-417-14・松・
 抱・辻、I：芸N11・花333
 掛合江戸名所盡 元1：パ3263
 鎌倉風咲分丹前 元1：パ3263、I：上
 蝶鳥千年藤 元1：パ3263・抱・花333、I：松・
 竹07-884、II：演安18G欠本・演和ト13-444-2H
 女夫水 元1：パ3263・花333・辻・明表紙欠、
 I：演和ト13-424-29表紙欠
 姿の乱咲 元1：パ3263・花333、I：演安18H
 平戸名所談 元1：パ3263
 仇浪鶯思羽 元1：パ3263
 月黛芹摘姿 元1：パ3263
 道行法の芦分舟 元1：抱・パ3263表紙破
 (めりやす)月の弓 元1：パ3263・辻・抱、
 I：竹07-2410
 狂女山路梅 元1：パ3263
 (めりやす)夜半の鐘 元1：パ3263・抱・明・辻、
 儀：演安18K
 三幅対連理巢籠 元1：抱・パ3263、I：竹07-584、
 II：演安19A
 梅丹前模様 元1：パ3263
 (琴哥)花散里 元1：パ3263・抱・演安18L、儀：明・
 演安102D

花信風折帽子 元1：パ3263・芸N11下1冊、
 I：竹07-1112
 其面影二人桝久 元1：パ3263、I：上、
 II：演安19B・竹07-2868欠本、
 III：芸N3・演安102E・竹07-2867
 月額秋花鎗 元1：パ3263
 風流錦誰袖 元1：パ3263
 初霜楓姿繪 元1：パ3263・芸N11
 空今櫻吹雪 元1：パ3263・演安19C・演特ト13-39A
 ・演和ト13-420-48・竹07-2411・抱
 (めりやす)夕時雨 元1：明・演特ト13-417-16・
 パ3263・竹07-3257、I：演和ト13-96・抱
 温泉山路鶯 元1：パ3263・芸N11・竹07-260、
 I：演安19G表紙破
 (めりやす)鳥もがな 元1：パ3263
 むかし艸 元1：パ3263
 家櫻朧雙陰 元1：パ3263
 誰袖賤花賣 元1：パ3263
 亀万代島臺丹前 元1：演安20A上下2冊・
 パ3263下1冊
 濡衣波玉橋 元1：パ3263・抱・竹07-1014、
 I：花333表紙破
 (めりやす)むつのはな I：明
 佛須磨狩衣 元1：パ3263
 (めりやす)帰る雁 元1：パ3263
 (めりやす)廓灸すゑ 元1：パ3263
 (琴唄)琴とはば 元1：パ3263、I：演和ト13-76
 (めりやす)貞と顔 元1：パ3263・竹07-280本文存
 露時雨 I：芸W768.52/E透写
 氷鏡花野守 元1：パ3263
 鉢扣紅葉袖 元1：パ3263
 丹前錦菌生 I：演安20J
 (めりやす)きせ綿 元1：演和ト13-52、
 I：竹07-2412、II：演和ト13-413-4表紙存
 心の花 I：演特ト13-448-108透写
 蝶花若草摺 元1：演安20M・竹07-883と2955
 (めりやす)言の葉 元1：芸W768.52/E透写
 霞立雲舞振 元1：国、I：演安200
 道行き恋弦掛 元1：明
 名寄幼角力 元1：演安21A

勝色衣籠英 元1：抱(本文錯簡有り)・演特ト13-321-A表子存
 今様雪花車 元1：演安21B・演和ト13-418-13破(琴歌)闇の笛 元1：演和ト13-421-26
 (めりやす)雪の梅 元1：演和ト13-413-I表紙存・芸W768.52/E透写、I：演安20Q表紙存
 大津繪姿花 元1：松
 (道行)力竹箱根鶯 元1：松、I：明
 双面濡春雨 元1：松・明、I：演和ト13-74
 (女竹/男竹)分身五郎 元1：演安21F
 さし茂艸 元1：松
 女狐縁花笠 元1：松
 花似振袖傘 元1：松
 家橘花男道成寺 元1：演安21G・松(上1冊)
 (道行)片輪車 元1：芸N24/1・明
 繰返七容鏡 元1：演安21I-abc 3冊
 花橘栄丹前 元1：明
 都娘菊の壽 元1：明
 相生獅子 元1：松・演安21J
 (めりやす)女郎花 元1：演特ト13-93
 (めりやす)雪の夜 元1：演安21Kと103H
 色模様蝶に菊壽 元1：松・明
 春雨柳濡髪 元1：松・明
 山姥四季英 元1：明、I：竹07-1570
 霜の花恋の手管 元1：芸W768.52/E透写
 陸奥千賀の塩汲 元1：芸W768.52/E透写
 松六花雛鶴丹前 元1：演安21M(表紙存)・芸W768.52/E透写
 橘霜月長刀 元1：芸W768.52/E透写
 菊紅葉色中同士 元1：明、
 泉／儀：演特ト13-448-107透写
 舞扇君が菌 元1：明
 教草吉原雀 元1：明
 参らせ候恋の哥口 元1：演特ト13-112
 春霞袖梅枝 元1：芸W768.52/E透写
 田植唄 元1：演安22F
 吾妻歌四季の菌 元1：演安22G(本文2丁より写)
 楓幣色随意 元1：芸W768.52/E透写
 (めりやす)村さめ 元1：芸W768.52/E透写
 (めりやす)白たえ 元1：松・抱

袖引都移画 元1：明
 (めりやす)霞の華 元1：芸W768.52/E透写
 乗來恋入海 元1：芸W768.52/E透写
 狂乱雲井袖 元1：明・演安23D、
 再I：演和ト13-419-35、再II：芸N4・14・26
 ・演和ト13-23-AG・演和ト13-437-4G・竹07-423・2675
 ・明、再III：竹07-427・2677、再IV：竹07-426と
 2678、再V：演和ト13-179
 四季の万歳 元1：演安23E
 春昔由縁英 元1：明完本・竹07-3090完本・
 演安23F(上1冊)と104H(中1冊)
 女夫松高砂丹前 元1：竹07-3187・演和ト13-424-25
 と26・辻、再I：竹07-1471・1472・3188・
 演安23H、再II：明・竹07-1474・3190・演和ト13-23
 再III：演安105B・竹07-1477・3192、
 再IV：竹07-3194・演特ト13-312-66と67、
 再V：芸N27・竹07-1479・演安105A・
 演特ト13-312-67、VI：明・竹07-1478・3193、
 VII：竹07-1475と3191・演和ト13-49-Eと
 演和ト13-424-28、VIII：竹07-1473と3189・芸N22・
 演和ト13-424-27
 (めりやす)今朝秋 元1：松
 (今様)神楽月恵方万歳 元1：明
 (琴唄)空音 元1：演安24C
 (拍子舞)写繪雲井弓 元1：竹07-106・107・2502・
 明・演安240欠本と106B・演特ト13-429-14・
 花335、再I：竹07-108、再II：竹07-109・110・111
 ・演安106C・明、再III：明・竹07-112・113
 菊壽の艸摺 元1：竹07-362・2633・演安24E・明
 再I：竹07-2634
 七襲東雛形 元1：竹07-2973・演安24F欠本・
 演特ト13-429-13、富／森：竹07-2600・明
 紅葉寄雪盞 元1：芸W768.52/E透写
 (めりやす)文反古 元1：演安24I・竹07-1332表紙欠
 奥書有
 准心の引綱 元1：演安24J・竹07-2972
 (めりやす)忍恋艸 元1：演安24K
 (追善)藤しのだ吾妻紫 元1：演和ト13-423-51(上1
 冊)・演和ト13-278と和ト13-423-51(中下1冊)
 (琴唄)紅葉のゑん 元1：竹07-1515・3204・演安24L

(拍子舞) 五條橋往来の囃 元1：芸W768.52/E透写

壽万歳 元1：演安24M

(めりやす) 袖の海 元1：演安25B表紙存・

竹07-757、富士屋／森田屋相版：明

相生獅子 元1：演和113-289

山鶏月姿視 元1：演和113-291

神楽月梅見丹前 元1：芸W768.52/E透写

吾嬬鳥娘道成寺 元1：演安25I

(歌浄瑠璃) 浜廂松掛糸 元1：芸W768.52/E透写

艷容狂言袴 元1：演和113-290

梅冬至春駒 元1：演和113-220

(めりやす) 忍夫艸 元1：竹07-2429・演特113-429-62

七瀬川最中桂女 元1：演和113-422-2

(琴唄) 小夜ごろも 元1：竹07-571

(めりやす) 松の雪 元1：竹07-1419・明

(めりやす) 梅の香 元1：演安27I

(琴唄) 閨の友 元1：演和113-422-12

(めりやす) 東金 元1：演安27J

(めりやす) 投嶋田 元1：竹07-2434

月の顔 元1：明

(めりやす) 田毎月 元1：明

(めりやす) いるさの月 元1：明

(めりやす) 五大力 元1：演安27K・竹07-525、

再I：竹07-526・2729、再II：芸N3・竹07-527、

再III：明

(めりやす) 峯の松風 元1：演安28D

(めりやす) 結び文 元1：演安28F・竹07-1457

(めりやす) 四つの袖 元1：竹07-1643・2440・明・

演安28H

(めりやす) ゆかりの月 元1：演安28G

鄙曲好中車 元1：演安28J

(めりやす) 時鳥 元1：演安29B

(めりやす) 恋の橋 元1：演安29C

(めりやす) 実くらべ 元1：演安29D

色真猿月夜神楽 元1：演安29H

菊苗栄万歳 元1：演安29G

(狂乱) 雪吹の雛形 元1：演安110C、再I：明・演安

29I・竹07-2681、再II：明

(めりやす) 駕名残 元1：演安29J

(めりやす) 五大力 元1：竹07-2731

[略語]

元1：版元1

元2：版元2

儀：本屋儀兵衛版

I～VII：無刊記版I～VII種

泉／儀：泉屋権四郎・本屋儀兵衛相版

再I～VIII：再版I～VIII種

富／森：富士屋小十郎・森田屋金蔵相版

上：上野学園大学日本音楽史研究所

演：早稲田大学演劇博物館

演安：同上安田文庫旧蔵本

共通番号「特イ11－1212－」を略す

辻：早稲田大学演劇博物館辻町文庫

加1～：東京都立中央図書館加賀文庫

「浄瑠璃せりふ」全10冊(数字は冊数)

霞：東京大学総合図書館霞亭文庫

黒：東京大学教養学部黒木文庫

国：東京大学国文学研究室

芸：東京芸術大学附属図書館

竹：国立音楽大学附属図書館竹内文庫

東：東洋文庫

蜂：東京都立中央図書館蜂屋文庫

花：上田市立上田図書館花月文庫

パ：フランス国立図書館

抱：抱谷文庫

松：松浦史料博物館

明：明治大学図書館松和文庫

原：『長唄原本集成』所収

江：『江戸時代音楽通解』掲載

川：川上邦基編『江戸長唄』

図：『歌舞伎図説』所収

森田座・河原崎座

表と所蔵一覽

表1 〈正本に対する本屋儀兵衛版と無刊記版の本文の関係〉

河原崎座

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)	内題下作者署名/筆耕	版元2	江戸橋四日市 本屋儀兵衛	無刊記版I種	無刊記版II種
元文4・1	無間の鐘石の帯	元濱町いがや(表紙掲載)	胡麻点・文字譜				

森田座

寛延4・春	菜花小蝶袂1	いがや	占翁書 胡無・譜有				
宝暦9・3	瀧桜男雛形	いかや 長唄富本掛合	胡・譜有				
宝暦11・2	(男無間)曙桜	橘町二丁目 泉権(表紙掲載)					
宝暦12・1	(めりやう)妹背玉櫛笥	橘町二丁目 泉権 (奥)森田村座はんもと(右同)	胡・譜有				
宝暦12・2	寿勢草摺曳	橘町二丁目 泉権 透写 (奥)森田村座はんもと(右同)					
宝暦12・2	(江戸鹿子)桜鐘入	橘町二丁目 泉権 透写 (下冊奥)森田村座版元(右同)	胡・譜有				
宝暦12・11	松尔妹背現高砂	橘町二丁目 泉権(表紙掲載)			字表紙本 本文Iと別版	本儀版と別版 胡・譜有	IのA3 胡無・譜有
宝暦13・11	寒梅簾乱咲						
宝暦14・2	鐘尔桜黄昏姿	金井半兵衛/伊勢屋吉十郎 透写	胡・譜有				
明和2・11	染分鞍馬嵩	金井半兵衛板/寶所木挽町 四丁目大坂屋喜右衛門 透写	胡・譜無				
明和4・11	(掛合)紅葉の錦	板元金井半兵衛 /伊勢屋吉十郎 透写	作者桜田治助 胡・譜有				
明和4・11	丹前雪見月	板元金井半兵衛 /伊勢屋吉十郎	胡・譜有				
明和7・1	馴初思の矢の根	板元木挽町三丁目金井新兵衛 作者瀧井秀助 胡無・譜有				胡無・譜有	
明和7・11	素袍の棲取	板元木挽町三丁目金井新兵衛・透写	胡無・合				
明和7・11	面影葵上	はん元木引丁 金井 透写	胡無・上るり				
明和8・1	花希紅絵蝶			堺町横通人形町 磯田屋 鼎峨印 胡無・譜有	上中冊磯田屋のA1 筆耕印無 胡無・譜有		
明和8・9	菊八重七人化粧				胡無・合のみ		
明和8・11	帰花顔見世丹前						
明和9・1	鬚髪梅物語	板元金井半兵衛 /寶所芝神明前上村吉右衛門 透写	作者塚越菜陽 胡・譜有				
明和9・7	色見艸	板元金井半兵衛/寶所上村吉右衛門	胡無・合のみ		別版 胡無・合のみ	本儀版のA1 胡無・合	別版 胡無・合
明和9・7	舞扇名取月				胡無・合	本儀版のA1 胡無・合	
明和9・8	高尾銀河祭				胡無・合、下、ヲトリ	本儀版のA1 胡無・合	別版 胡無・合

上演年月	曲名(外題)	版元(元版)	内題下作者署名/筆耕	江戸橋四日市 本屋儀兵衛	無刊記版I種	無刊記版II種
安永1・11	雪花縁狩衣	はんもと金井半兵衛 ／うり所上村吉右衛門	胡麻点・文字譜 鼎峨印 胡無・合	A1 鼎峨印 胡無・合	A3 胡無・合	
安永1・11	羅浮梅窓圓	板元金井半兵衛 ／賣所上村吉右衛門	鼎峨印 胡無・合、つゝミ哥、二上り			
安永1・11	めりやすうとりの雪	板元木挽町金井半兵衛 ／賣所芝神明前上村吉右衛門	菜陽述 胡無・アイノテ	別版 胡無・合ノ手のみ		
安永2・1	初恋姫小松	板元木挽町金井半兵衛 ／賣所芝神明前上村吉右衛門	鼎峨印 胡・譜無			
安永2・1	めりやすひとつみぞ	板元木挽町五丁目金井半兵衛 ／賣所芝神明前上村吉右衛門	胡無・譜?	A1カ 胡無・合		
安永2・1	めりやす春の雨	板元木挽町五丁目金井半兵衛 ／賣所芝神明前上村吉右衛門	鼎峨印 胡・譜無			
安永2・閏3	英風流石橋	板元金井半兵衛／賣所上村吉右衛門	増山金八述 胡・譜無2			
安永2・8	挹知月汐衣				胡無・合	
安永2・8	めりやす月のまへ				胡無・三下り、合方	
安永2・11	乱菊稚釣狐	板元木挽町五丁目金井半兵衛／賣所芝神明前 横丁上村吉右衛門	胡無・合			
安永2・11	色見艸相生丹前	(奥)森田座正銘賣所芝神明前 江見屋正 板元木挽町五丁目金井半兵衛 鼎峨印 胡無・ツツミ哥、哥カカリ ／賣所芝神明前横丁上村吉右衛門				
安永3・1	影清囃鎌倉	(奥)森田座正 はん元金井半兵衛 ／賣所芝神明前上村吉右衛門	狂言作者笠縫専助 鼎峨印 胡無・上るり			
安永3・8	めりやす露配	板元金井半兵衛 正 賣所芝神明前上村吉右衛門 板もと木挽町五丁目金井半兵衛 ／賣所芝神明前上村吉右衛門	菜陽述 鼎峨印 胡無・合方 鼎峨印 胡無・三下り			
安永3・11	梅楓御法扇	正 金井半兵衛 ／賣所芝神明前上村吉右衛門	鼎峨印 胡無・哥			
安永3・11	八千代丹前	板元木挽町五丁目金井半兵衛 ／賣所芝神明前上村吉右衛門	鼎峨印 胡無・合、ヲトリ			
安永4・1	妻戀春乱菊	板元木挽町五丁目金井半兵衛 ／賣所芝神明前上村吉右衛門	鼎峨印 胡無・ツツミ哥、哥カカリ			
安永4・1	めりやすわか艸	板元木挽町五丁目金井半兵衛 ／賣所芝神明前上村吉右衛門	鼎峨印 胡無・三下り、合			

上演年月	曲名(外題)	版元(元版)	内題下作者署名/筆耕 胡麻点・文字譜	江戸橋四日市 本屋儀兵衛	無刊記版I種	無刊記版II種
安永4・8	袖模様四季色歌	板 金井半兵衛 元 芝神明前上村吉右衛門	胡無・合		第2冊別版、第3冊別版 胡無・合	
安永4・11	茶花香室早咲	板 金井半兵衛 元 芝神明前上村吉右衛門	鼎峨印 胡無・合			
安永4・11	破軍簾追風	板 金井半兵衛 元 芝神明前上村吉右衛門	鼎峨印 胡無・ツミミ哥、哥カカリ 合			
安永4・11	浪花和賤女	板 金井半兵衛 元 芝神明前上村吉右衛門	胡無・譜有			
安永4・11	一奏菊の粧	板 金井半兵衛 元 芝神明前上村吉右衛門 (表紙存)				
安永5・1	名大磯細見風流	板 金井半兵衛 元 芝神明前上村吉右衛門 正	鼎峨印 胡無・ヲトリ、チラシ			
安永5・1	神託千早の振袖	板 金井半兵衛 元 芝神明前上村吉右衛門 正	胡無・ツミミ哥、哥カカリ、 合			
安永5・1	めりやす 柳の糸ゆふ	板 金井半兵衛 元 上村吉右衛門 正	胡無・合			
安永5・7	色見草月臺	板 金井半兵衛 元 芝神明前上村吉右衛門 (奥) 森田座正本板元寶所芝神明前上村吉右衛門	胡無・合、ヲトリ 正本清書印「鼎峨印」			
安永5・11	鐘恨姿の花	板 金井半兵衛 元 芝神明前上村吉右衛門	胡無・ウタイ、哥、 ヲトリ、チラシ			
安永5・11	ねやのさしぐし	板 金井半兵衛 元 芝神明前上村吉右衛門	天滴述 胡無・二上り、合			
安永5・11	花の雪羽片模様	板 金井半兵衛 元 芝神明前上村吉右衛門	鼎峨印 胡無・ヲトリ		A1彫り粗 鼎峨印無 胡無・ヲトリ	
安永6・1	御酒宴左扇	板 金井半兵衛 元 芝神明前上村吉右衛門	中村重助述/天滴章 鼎峨印 胡・譜有			
安永6・1	琴歌 廻達世	板 金井半兵衛 元 芝神明前上村吉右衛門	胡・譜有		A1彫り粗 胡無・譜有	A2 胡有・譜有
安永6・4	めりやす 峯の松	板 金井半兵衛 元 芝神明前上村吉右衛門 (表紙存)				
安永6・7	めりやす 心のおわせ碁	板 金井半兵衛 元 芝神明前上村吉右衛門	笠米富述 鼎峨印 胡・譜有			

河原崎座

上演年月	曲名(外題)	版元(元版)	内題下作者署名/筆耕/胡麻点・文字譜	再版1	再版2	再版3	再版4	再版5	再版6	再版7
寛政3・11	初舞台花の丹前	板元はせ川町小川半助	杵屋正治郎	胡無・合						
寛政4・3	千早振袖の梅香	板元はせ川町小川半助	杵屋正治郎	胡・譜無						
寛政4・3	杜若七重の染衣	板元はせ川町小川半助	杵屋正治郎作 胡無・二上り、合他							
寛政4・11	梅紅葉重弓	はせ川町小川半助	杵屋正次郎述 胡無・三下り、合							
寛政4・11	花車岩井扇	長谷川町小川半助はんもと	杵屋正次郎述 胡無・三下り、合 ツ、ミ哥他	田所町小川半助 別版	同上 再1被彫	同上 再版2被彫	同上 別版大字	同上 同版再4	同上 再4被彫	同上 再4被彫3

上演年月	曲名(外題)	版元(元版)	内題下作者署名/筆耕/胡麻点・文字譜	江戸橋四日市 本屋儀兵衛	無刊記版I種	無刊記版II種
安永6・7	かたつもん 相の山	板金井半兵衛	天滴述 鼎峨印 胡・譜有			
安永6・11	めりやす 夢のしらせ	板金井半兵衛	菜陽述 鼎峨印 胡・譜有			
安永7・3	糸ざくら	元 芝神明前上村吉右衛門 板金井半兵衛	胡・譜有			
安永7・7	待夜枝折傘	板元 正 江戸橋四日市本屋儀兵衛門				
安永7・11	梅紅葉賤小原木	板元 木挽町五丁目金井半兵衛 元 同四(丁)目千本藤七	天滴述 鼎峨印 胡・譜有			
安永7・11	めりやす 心づくし	板元 金井半兵衛 正 江戸橋四日市本屋儀兵衛	胡有・三下り、合、合方			
安永8・1	松の吟	板元 木挽町五丁目金井半兵衛 江戸橋四日市本屋儀兵衛	胡無・合、鼓弓、琴歌			
安永8・3	めりやす 短夜	板元 木挽町五丁目金井半兵衛 江戸橋四日市本屋儀兵衛	天滴述 胡無・譜有			
安永9・11	雛雪牛王袂	板元 木挽町五丁目金井半兵衛 江戸橋四日市本屋儀兵衛	胡少有・譜有			
天明1・11	室に香鳥毛生先	板元 木挽町五丁目金井半兵衛 江戸橋四日市本屋儀兵衛	胡無・合			
天明2・3	京偶昔繪姿	板元 木挽町五丁目金井半兵衛 元 江戸ばし四日市本屋義兵衛	胡無・譜有			

上演年月	曲名（外題）	版元（元版）	内題下作者署名／筆耕／胡麻点・文字譜	再版1	再版2	再版3
寛政4・11	めりやす室の梅	はせ川丁小川半助はんもと	胡無・譜無			
寛政5・5	馴染相の山	はせ川町小川半助はんもと	胡無・本てうし			
寛政5・8	月顔最中名取種	はんもと小川半助はせ川丁	胡無・うた	別版 胡無・うた	別版 胡無	別版 胡無
寛政5・9	江戸紫娘道成寺	小川半助はんもと（透写本）	胡無・イノリ、チラシ、合			
寛政5・11	万吉歳徳若	はんもと小川半助はせ川丁	胡無・譜無			
寛政6・8	めりやす露の色	板元小川半助はせ川丁	胡無・譜無			
寛政6・11	折能恋掛鳥帽子	はんもと小川半助はせ川町	胡無・合、大小、ひやうし			
寛政6・閏11	めりやす木毎のいろ	はんもと小川半助はせ川丁	胡無・合			
寛政7・2	めりやすわかれの雪	はせ川丁小川半助はんもと	胡無・合、カン			
寛政7・11	琴哥 水の糸	板元はせ川町小川半助	胡無・合			
寛政9・8	神楽歌艳夕四手	はんもと小川半助はせ川丁	胡無・合			

森田座

寛政10・7	玉兎難波産	はんもと小川半助はせ川町	胡無・合、ツ、ミ哥他			
寛政10・9	万歳然三河屋	はんもと小川半助はせ川町	胡無・譜有			
寛政10・11	青海波花簪	はせ川丁小川半助はんもと	胡無・三下り、合			
寛政11・3	草摺花写絵	はせ川丁小川半助はんもと	胡無・三下り、合			

河原崎座

寛政12・11	里神楽帽子初花	はんもと小川半助はせ川町	胡無・ツ、ミ哥、合			
寛政12・11	めりやす 多にしの橋立	はんもと小川半助はせ川丁	胡無・二上り、合			
寛政12・11	三代扇手毎梅	はんもと小川半助はせ川丁	胡無・合	「はせ川丁」を削去した同版本		
享和1・3	面影相の山	はんもと小川半助はせ川丁	胡無・合			
享和1・5	田舎染梅鶯	はんもと小川半助はせ川丁	胡無・二上り、三下り、合			
享和1・5	琴唄 新曲六玉川	はんもと小川半助はせ川丁	胡無・合			
享和3・11	汲や汲め、月出潮	はんもと小川半助田所町 一世一代古人杵屋正次郎述	胡無・三下り、ツヅミ哥			
享和3・11	琴うた測と瀬	はんもと小川半助田所丁	胡無・譜無			

注

- 寛延4年は再演。初演は、寛延元年春の市村座「紋盡名古屋曾我 第三番目」に演じられた後「面信田」の所作である。いずれも山本岩之丞がつとめている。
- 本文は、宝暦四年三月中村座上演の『相生獅子』元はま町いがや版の本文を被彫りしたものである。
- 再版7は本文末に「弘化三年ノ八月再板」と刊年がある。このほか、再版8（同版元）がある。また、沢村屋利兵衛版、森田屋金蔵版もあり。

表2 〈正本に対する本屋義兵衛版・無刊記版の表紙の関係、及び、大名題・座名の記載の比較〉
森田座

上演年月	曲名(外題)	版元1(元版)	版元2	本屋義兵衛版	無刊記版I種	無刊記版II種
宝暦13・11	寒梅簾乱咲			字表紙本	関係不明 梅水仙伊豆入船 第一番目 森田座	大名題無・番目無 森田座
明和8・9	菊八重七人化粧		磯田屋 鑑面草七野束帯 第二番目大詰 森田座	磯田屋版のA2 同上・同上 森田		
明和8・11	帰花顔見世丹前			関係不明 葺換月吉原 番目無 森田		
明和9・7	めりやす 色見艸	金井半／賣所上村相版 けいせい紅葉襦 番目無 森田座 鳥居清秀画		文字A1・絵別 同上・番目無 森田	本儀のA2 同上・番目無 森田	
明和9・7	舞扇名取月			関係不明 けいせい紅葉襦 森田	本儀のA2 同上・第二番目 森田	A2 大名題無・第二番目 森田
明和9・8	高尾銀河祭			関係不明 大名題無・番目無 森田		
安永1・11	雪花縁狩衣	金井半／うり所上村相版 伊豆厩劇 第一番目 森田座 鳥居清秀画		表紙A2 同上・番目無 森田 絵師名無	表紙A2 同上・番目無 森田座 絵師名無	
安永1・11	めりやす かとりの雪	金井半／賣所上村相版 伊豆厩劇 第二番目 森田座 鳥居清秀画		絵A2 同上・同上 森田 絵師名無		
安永2・1	めりやす ひとつみぞ	金井半／賣所上村相版 大名題無・番目無 森田座 鳥居清秀画		表紙A2・A3 大名題無・番目無 森田 絵師名無		
安永2・8	栴知月沙衣			関係不明 大名題無・第一番目 森田	関係不明 宮柱殿舞臺 第一番目 座名無	
安永2・8	めりやす 月のまへ					
安永4・8	袖模様四季色歌	金井半／上村相版 けいせい月の都 森田座		絵A2 同上・番目無 森田座		
安永5・11	花の雪羽片模様	金井半／上村相版 ・知太平記 第二番目 森田座 清經画		表紙A2 同上・番目無 森田座 絵師名無		
安永6・1	琴歌 廻達世	金井／上村相版 江戸綉小袖曾我 第二番目 森田座 清經画		表紙A2 大名題無・番目無 森田 絵師名無	表紙A2 大名題無・番目無 森田座 絵師名無	表紙A2 大名題無・番目無 森田座 絵師名無

〔所蔵一覧〕 森田座・河原崎座の長唄薄物

- 無間の鐘石の帯 元1：江(表紙掲載)
- 菜花小蝶袂 元1：パ
- 瀧桜男雛形 元1：加
- (男無間)曙桜 元1：川(表紙掲載)
- (めりやす)妹背玉櫛笥 元1：抱
- 寿勢草摺曳 元1：演特ト 13-448-27(透写)
- (江戸鹿子)桜鐘入 元1：演安 6F・特ト 13-448-28
- 松尔妹背現高砂 元1：川(表紙掲載)
- 寒梅籠乱咲 I：石(表紙掲載)、II演安 7J・和ト 13-71
- 鐘尔桜黄昏姿 元1：演特ト 13-448-42(透写)
- 染分鞍馬嵩 元1：特ト 13-448-51
- (掛合)紅葉の錦 元1：芸 W768.52/E(透写)
- 丹前雪見月 元1：花 335
- 馴初思の矢の根 元1：上 335
- 素袍の棲取 I：明
- 面影葵上 元1：芸W768.52/E(透写)
- 花希紅絵蝶 元1：演特ト 13-448-69(透写)
- 菊八重七人化粧 元2：国 3 冊、儀：演安 17F
- 帛花顔見世丹前 儀：演安特ト 13-443-74・小
- 髻鬘梅物語 元1：芸 W768.52/E
- 色見艸 元1：演特ト 13-417-3・特ト 13-443-78(表紙欠)、
儀：小、I：国
- 舞扇名取月 儀：黒・小、I：演安：18B、II：明・小
演特ト 13-443-79
- 高尾銀河祭 儀：明上下 2 冊
- 雪花縁狩衣 元1：芸 N11・演安 18D・小、儀：竹 7-1635、
I：小
- 羅浮梅恋圓 元1：演和ト 13-417(上下 2 冊)
- (めりやす)うとりの雪 元1：演和ト 13-419-11、儀：竹 7-136
・小
- 初恋姫小松 元1：演特ト 13-417-13
- (めりやす)ひとつみぞ 元1：辻、儀：芸 N11・竹 7-1238
・演和ト 13-423-41・黒
- (めりやす)春の雨 元1：演特ト 13-417-5
- 英風流石橋 元1：演和ト 13-423-26・小(上下 2 冊)
- 挹知月汐衣 I：演安 18I
- (めりやす)月のまへ I：芸 N11・国
- 乱菊稚釣狐 元1：芸 N11・小・花 335(表紙欠)
- 色見艸相生丹前 元1：芸 N11・小
- 影清囃鎌倉 元1：芸 N11
- (めりやす)露配 元1：竹 7-942
- (めりやす)ゑんさだめ 元1：演特ト 13-417-6・小
- 梅楓御法扇 元1：演特ト 13-417-4・小(上下 2 冊)、
花(上 1 冊)
- 八千代丹前 元1：小
- 妻戀春乱菊 元1：演特ト 13-417-12
- (めりやす)わか艸 元1：演特ト 13-417-20・国
- 袖模様四季色歌 元1：(二)演安 19Ha・(三)芸 N17・小、
I：(一・二・四)芸 N17・(一・三)演安 19Hbc、(一)明・
(一〜四)竹 7-759〜762・(一〜三)小
- 茶花香室早咲 元1：芸 N11・小
- 破車簾追風 元1：演安 20B・演特ト 13-39・小
- 浪花和賤女 元1：小
- 一奏菊の粧 元1：小(表紙存・破)
- 名大磯細見風流 元1：芸 N11
- 神託千早の振袖 元1：小

(めりやす) 柳の糸ゆふ 元1 : 芸 N24/I

色見草月盞 元1 : 小

鐘恨姿の花 元1 : 小

ねやのさしぐし 元1 : 小

花の雪羽片模様 元1 : 小、I : 竹 7-1160

御酒宴左扇 元1 : 竹 7-509・小

(琴歌) 廻逢世 元1 : 明・小、I : 小、II : 芸 N24/I

(めりやす) 峯の松 元1 : 演安 21D(表紙存)

(めりやす) 心のあわせ砥 元1 : 明

(ふたつもとときに) 相の山 元1 : 小

(めりやす) 夢のしらせ : 明

糸ざくら 元1 : 小

待夜枝折傘 元1 : 明

梅紅葉賤小原木 元1 : 明

(めりやす) 心づくし 元1 : 小

松の吟 元1 : 明・小

(めりやす) 短夜 元1 : 芸 N24/I・演和 13-92

雛雪午王袂 元1 : 演安 21N

室に香鳥毛生先 元1 : 松・演和 13-427-6B

京偶昔繪姿 元1 : 芸 W768.52/E・川?

初舞台花の丹前 元1 : 演安 26E

千早振袖の梅香 初 : 演安 26F・明・竹 7-2917

杜若七重の染衣 初 : 小(上下 2 冊)・竹 7-2110 (上 1 冊)

梅紅葉童弓 初 : 演安 26J・108F・芸 768.52/E24

花車岩井扇 初 : 演安 26I・竹 7-1122・3041・明・

芸 768.52/N3、再1 : 芸 N26・演安 108B・明・小・

竹 7-3043 ~ 3046、再2 : 竹 7-1123 ~ 1125・3042、

再3 : 竹 7-1126・1127、再4 : 竹 7-1129・3047・3048・

演和 13-75、再5 : 竹 7-1128・芸 N22、再6 : 竹 7-1130・

演安 108D・和 13-437-2K 九、再7 : 竹 7-1131・1132・3049・

演安 108E・和 13-23-BO 九・芸 N26

(めりやす) 室の梅 初 : 演安 26K

馴染相の山 初 : 演安 26L

月顔最中名取種 初 : 竹 893 ~ 895・2926 ~ 2929・明・

芸 W768.52/N3・N26・演和 13-421-17・安 108H・

特 13-429-16・竹 7-2925、再1 : 竹 897 ~ 899・演安 109CD

・特 13-312-78・和 13-421-18 と 19、再2 : 竹 896・2933・

2944・明・演和 13-437-3F・和 13-49-H・和 13-421-20 と 21

・和 13-239、小、再3 : 竹 7-900・901・2930 ~ 2932・明・

芸 N15 と 17・演特 13-312-77・和 13-421-22

江戸紫娘道成寺 初 : 演安 27B

万吉歳徳若 演安 27C(第2丁欠)・竹 7-1656(表紙欠)

(めりやす) 露の色 初 : 松・竹 7-1866(表紙欠)

折能恋掛鳥帽子 初 : 演安 27D・明

(めりやす) 木毎のいろいろ 初 : 演特 13-448-114(透写)

(めりやす) わかれの雪 初 : 演特 13-448-116(透写・絵無)

(琴歌) 水の糸 初 : 演安 27H

神楽歌艳夕四手 初 : 竹 7-0287(初丁破)・芸 N768.52/E(透写)

玉兔難波産 初 : 明・演安 28I・特 13-429-15・小

万歳然三河屋 初 : 演和 13-231・明・竹 7-1421・小

青海波花簪 初 : 演安 28K

草摺花写絵 初 : 演安 29A

里神楽帽子初花 初 : 明

(めりやす琴歌) 糸にし橋立 初 : 演安 30L

三代扇手每梅 初 : 演安 30M・和 13-195・和 13-434-10AB・

明・小、再印 : 小

面影相の山 初 : 演安 31D

田舎染梅鶯 初 : 演安 31E・和 13-418-10

(琴唄) 新曲六玉川 初 : 演安 31F

汲や汲め月出潮 初 : 演安 32L・特 13-429-19

琴うた淵と瀬 初 : 演安 32L・特 13-11212-32M

[略語]

元1：元版1

元2：元版2

儀：本屋儀兵衛版

I：無刊記版Ⅰ種

Ⅱ：無刊記版Ⅱ種

泉／儀：泉屋権四郎、本屋儀兵衛相版

初：初版

再1～：再版1～

演：早稲田大学演劇博物館

演安：早大演劇博物館安田文庫、

冒頭の共通番号の特に11-1212を省略

芸：東京芸術大学附属図書館

国：東京大学国文学研究室

加：東京都立中央図書館加賀文庫

竹：国立音楽大学附属図書館竹内文庫

抱：明治大学図書館抱谷文庫

パ：B n F フランス国立図書館

花：上田市立上田図書館花月文庫

松：松浦史料博物館

明：明治大学図書館松和文庫

吉：日吉小三八氏蔵本

江：『江戸時代音楽通解』所載

川：川上邦基編『江戸長唄』所収

掲載図版一覧

第一章 第一節

『姿の花関寺小町』諸本の表紙と本文初丁表

- | | | | |
|--------|------------|---------------------|-------------|
| 14 頁 | ① 村山源兵衛版 | 明治大学図書館 | |
| | ② 本屋義兵衛版 | 東京芸術大学附属図書館 | W768.52/N12 |
| | ③ 無刊記版 | 東京芸術大学附属図書館 | W768.52/N19 |
| 15 頁 | ④ 清水治兵衛版 | 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫 | 07-716 |
| | ⑤ 富士屋小十郎版 | 明治大学図書館 | |
| | ⑥ 多田屋利兵衛版 | 東京芸術大学附属図書館 | W768.52/N26 |
| 16 頁 | ⑦ 沢村屋利兵衛版 | 東京芸術大学附属図書館 | W768.52/N6 |
| | ⑧ 森田屋金蔵版 | 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫 | 07-2012 |
| | ⑨ 森田屋金蔵版 | 稀音家義丸氏 | |
| 17 頁上段 | ⑩ 伊賀屋勘右衛門版 | 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫 | 07-729 |

参考図版 河東節正本『神楽獅子』表紙と本文初丁表

- | | | | |
|--------|------|-------------|---------------|
| 17 頁中段 | 小松屋版 | 東京芸術大学附属図書館 | 768.44/Ka86/1 |
| 下段 | 伊賀屋版 | 東京芸術大学附属図書館 | 768.44/Ka86/3 |

参考図版 せりふ正本『江戸町づくしせりふ』表紙と本文初丁表

- | | | | |
|------|------|------|--|
| 20 頁 | 伊賀屋版 | 抱谷文庫 | |
|------|------|------|--|

『疊算』（長唄の薄物）本文初丁表の内題と冒頭の三行部分

- | | | | |
|--------|--------|-------------|----------------|
| 22 頁下段 | 村山源兵衛版 | 東京芸術大学附属図書館 | 768.52/N24/2 |
| | 無刊記版 | 松浦史料博物館 | |
| 23 頁上段 | 無刊記版 | 明治大学図書館 | |
| | 無刊記版 | 早稲田大学演劇博物館 | 特イ 11-1212-12H |

『梅笑粧くさずり』（長唄の薄物）本文終丁裏の最後の二行部分

- | | | | |
|--------|--------|-------------|------------|
| 23 頁下段 | 村山源兵衛版 | 東京国立博物館 | 035 と 5924 |
| | 無刊記版 | 東京芸術大学附属図書館 | 768.52/E24 |

『京鹿子娘道成寺』表紙

- | | | | |
|--------|--------------|---------------------|--------|
| 24 頁上段 | 本屋儀兵衛版（表紙破損） | 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫 | 07-400 |
|--------|--------------|---------------------|--------|

『衣かつき思破車』（長唄の薄物）表紙

- | | | | |
|--------|--------|------------|----------------|
| 24 頁下段 | 村山源兵衛版 | 早稲田大学演劇博物館 | 特イ 11-1212-11J |
| | 無刊記版 | 早稲田大学演劇博物館 | 特イ 11-1212-93D |

『弾的准系図』表紙と本文初丁裏の七～十行目、第二丁表の最初の四行部分

25 頁上段 ア 村山源兵衛版 上田市立上田図書館花月文庫 335
下段 イ 村山源兵衛版 早稲田大学演劇博物館 特ト 13-427-9

『常盤友』(長唄詞章集)本文の二十四丁表、「おもひ川」の始めの半丁部分

27 頁下段 吉文字屋治郎兵衛・和泉屋庄次郎版 東京女子大学図書館
吉文字屋治郎兵衛・和泉屋庄次郎増補版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫
07-4001

『相生獅子』(長唄正本)本文終丁裏の末行部分

29 頁上段 伊賀屋版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-1D

『狂乱 須磨友千鳥』(長唄の薄物)本文終丁裏の末行部分

29 頁下段 村山源兵衛版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-16C
無刊記版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-100H

『早咲賤女乱拍子』

31 頁上段 ① 村山源兵衛版 抱谷文庫
② 無刊記版 明治大学図書館
③ 無刊記版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-93K

『めりやす 時雨月』表紙

34 頁上段 板元 村山源兵衛・賣所 本屋儀兵衛 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫
07-2414

『華筵千種の丹前』表紙

34 頁下段 村山源兵衛・本屋儀兵衛相版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫 07-2419

『琴柱のかり』表紙

35 頁上段 村山源兵衛・松本屋万吉相版 松浦史料博物館

『かみすき 雪花月』表紙

35 頁下段 本屋儀兵衛版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-22I

『狂乱岸姫松』表紙

36 頁上段 村山源兵衛・沢村庄五郎相版 透写本 東京芸術大学附属図書館 W768.52/E

『めりやす うわ帯』表紙

36 頁下段 沢村屋利兵衛・村山源兵衛相版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-26B

『八朔梅月の霜月』表紙と本文終丁裏

- 37 頁上段 村山源兵衛・沢村庄五郎相版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-25C
37 頁下段 無刊記版（版元削除） 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫 07-3021
38 頁上段 沢村屋利兵衛版 明治大学図書館
38 頁下段 沢村屋利兵衛版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-107D
39 頁上段 沢村屋利兵衛・森田屋金蔵相版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫 07-1092

第一章 第二節

『柳雛諸鳥囀』のうち『〔笠踊り〕』下冊の表紙

- 45 頁上段 泉屋権四郎版 フランス国立図書館 Dd-3263
下段 泉屋権四郎版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-6Ga

『初昔文の仲立』表紙

- 48 頁下段 泉屋権四郎版 抱谷文庫蔵
49 頁上段 無刊記版 東京芸術大学附属図書館 W768.53/N/11

『大津絵姿花』表紙

- 52 頁上段 泉屋権四郎版 松浦史料博物館

『教草吉原雀』表紙

- 53 頁上段 泉屋権四郎版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-13A
泉屋権四郎版 明治大学図書館

『狂乱雲井袖』表紙

- 54 頁上段 富士屋小十郎版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-23D

『拍子舞 写絵雲井弓』表紙と本文終丁裏

- 55 頁上段 ア 富士屋小十郎版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫 07-107
中段 イ 富士屋小十郎版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫 07-108
下段 ウ 富士屋小十郎版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫蔵 07-111
56 頁上段 エ 富士屋小十郎・伊賀屋勘右衛門相版 明治大学図書館

『寿萬歳』表紙

- 57 頁上段 市村茂兵衛・山本・富士屋相版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-24M

『劇場年浪草』所収の紋番付終丁部分

- 57 頁下段 東京芸術大学附属図書館蔵 774.45-Ka-2-9

『浪爰須磨濡衣』（長唄正本）終丁裏の末二行と刊記部分

61 頁上段 山本重五郎版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-54G

第一章 第三節

『雪花縁狩衣』表紙と、本文の初丁表と終丁裏

69 頁下段 板元 金井半兵衛版・賣所 上村吉右衛門 東京芸術大学附属図書館 W768.53/N/11

70 頁上段 本屋義兵衛版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫 07-1635

『琴歌 廻逢世』

70 頁下段 金井半兵衛・上村吉右衛門相版 日吉小三八氏

71 頁上段 無刊記版 東京芸術大学附属図書館 N24/1

寛保二年の役割番付

73 頁上段 小川伴助版 『享保天明江戸三芝居紋番付』所収 国立国会図書館 別 7/534

『月顔最中名取種』表紙と本文終丁裏

74 頁上段 ア 小川半助版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫 07-893

中段 イ 小川半助版 明治大学図書館

下段 ウ 小川半助版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫 07-897

75 頁上段 エ 小川半助弘化三年再版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫 07-901

『唄上るり 縁糸調笛竹』（長唄正本）本文の終丁裏

77 頁上段 小川半助版 東京芸術大学附属図書館 768.52/N/10

第二章 第一節

享保十四年七月 佐野川万菊座 役割番付

86 頁上段 『〔古歌舞伎番付〕』所収 東京大学総合図書館霞亭文庫蔵 974

『けいせいむけんのかね 哥の出は』表紙

87 頁上段 鱗形屋版 『江戸時代音楽通解』（古曲保存会編・発行、1920 年）に掲載

『むけんの鐘新道成寺』表紙と本文初丁表

88 頁上段 中嶋屋 『江戸時代音楽通解』（前出書）に掲載

下段 伊賀屋版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-1C

享保十六年十一月 都万太夫座 顔見世番付

92 頁下段 『〔古歌舞伎番付〕』所収 東京大学総合図書館霞亭文庫 974

第二章 第二節

『二の替り／小哥 恋ばなし』上方版一枚摺

111 頁上段 天理大学附属天理図書館 771-19

『八百や／お七 哥祭文』表紙

114 頁上段 土佐屋版 抱谷文庫

『菅原／伝授 手習鑑』表紙

114 頁下段 伊賀屋版 フランス国立図書館 Dd3261

第三章

『相生獅子』表紙と本文初丁表

130 頁上段 ア 村山源兵衛版 上田市立上田図書館花月文庫 335

下段 イ 無刊記版 松浦史料博物館

131 頁上段 ウ 富士屋小十郎版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫蔵 07-0005

下段 エ 沢村屋利兵衛版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫蔵 07-0018

132 頁上段 オ 森田屋金蔵版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫蔵 07-0015

下段 カ 伊賀屋勘右衛門版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫蔵 07-0011

133 頁上段 キ 濱松屋幸助版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫蔵 07-0014

下段 ク 薦屋重三郎版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫蔵 07-0013

『江戸桜五人男掛合文七節』表紙と本文の終丁裏

134 頁下段 泉屋権四郎版 早稲田大学演劇博物館 特ト 13-417-1

『衣かつき思破車』表紙と本文の初丁表

135 頁下段～136 頁上段 コー a 村山源兵衛版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-11J

136 頁上段～下段 コー b 本屋儀兵衛版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-93E

[対面花春駒の図版]『対面花春駒』表紙と本文の終丁裏

140 頁上段 サ 村山源兵衛・沢村屋利兵衛相版 早稲田大学演劇博物館 特イ 11-1212-26C

下段 シ 沢村屋利兵衛版 早稲田大学演劇博物館 特ト 13-443-92

141 頁上段 ス 沢村屋利兵衛版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫 07-0803

下段 セ 沢村屋利兵衛版 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫 07-0808

142 頁上段 ソ 原板沢村屋・求版丸屋鉄次郎 国立音楽大学附属図書館竹内道敬寄託文庫 07-0811

『五月菊名大津絵』表紙と本文の終丁裏

142 頁下段 タ 沢村屋利兵衛版 早稲田大学演劇博物館蔵 特イ 11-1212-26D

『唄浄瑠璃 松竹梅』表紙と本文初丁表（初めの四行部分）

149 頁下段 チ 丸屋鉄次郎版 「杵屋治郷 蔵板」 明治大学図書館蔵